
作品集 2

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作品集2

【コード】

N3400E

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

既出の短い作品をまとめたものです。

岩山

他人から見れば、私も人間嫌いの一人ということになるのかもしれません。東京や大阪のような都会で暮らすことなど想像もつかないし、そうしたいとも思いません。

かといって、田舎の小さな町というのも、あまりぞっとしません。人口が少ないということは、それだけ住民同士の接触が濃くなるということですから。ああしろこうしろと言われなくても、昨日は何をしていたかの、今日はどんな服を着ているだの、興味を持った目で見られること自体が嫌いなのです。

だから私が住まいとして選んだのがここです。ええ、すごい場所でしょう？

見てごらんなさい。黒々とした山脈がどこまでも続き、カミソリの刃のように鋭く割れ、あのあらゆるさは自然のきびしさ、なさけ容赦やじやうのなさそのものようではありませんか。こんな場所に住みたがるのは、私のような変わり者だけでしょうよ。隣家など一軒もなく、一番近い村でも歩いて半日かかりますから。

でもこんな場所にも、いい点はあるのです。何年前か前、私の住まいから歩いてさらに何キロか奥地でしたが、金の鉱脈が発見されたのです。狩をしていた男が偶然に見つけたのだそうですが、すぐに鉱山が開かれ、人々が住み着きました。今からお話するのは、そのころの出来事です。

私はまだ若く、この山中に小さな小屋を建てて、一人で暮らしていたわけです。本当に気楽な毎日でした。人からあれこれとさしず

されることもなく、好きなときに寝て、好きな時間に起きる。夜ふかしをする理由もないから、自然に早起きをする習慣がついてしましますがね。

小屋の背後には岩山がそびえていました。目を覚ましてすぐ、小川へ顔を洗いに出て、それを見上げる瞬間がとても好きでした。黒々とし、頂上がペン先のようにとがった岩山です。

畑を耕したり、薬草を集めたりするのが私の日課でした。畑の作物は自分で食べるためでしたが、薬草は売るためでした。オオカミ草といいまして、岩陰などにときどき生えています。細いヒモのような形の植物で、秋の終わりごろに葉が紫色に変わり、これが虫よけ剤として有効だったのです。

山中を歩き、私はこの薬草を探したものでした。見つけると葉を集めてまわります。これを乾かしたものが薬草です。火をつけるとぶすぶすと煙を上げて燃えます。その匂いをかぐと、どんな虫もすぐに逃げ出してしまいます。効果が高いので、町では結構な値段のつくものでした。

秋の終わり、もうすぐ冬がやってくるといふ日のことでしたが、小屋の外からガヤガヤと騒がしい話し声が聞こえてくることに私は気がつきました。窓の外を見ると、見慣れない男たちがいるではありませんか。それも二人や三人ではなく、十人近くです。

いかにも気が荒そうで、うさんくさくて怪しげな連中です。ボスと思われる一人が先頭に立ち、他の連中が後ろにしたがつているところなど、いかにもまっとうでない集団という感じでした。早い話が強盗団というところでしょう。小屋の前を流れる小川に目をつけただよつで、しばらく休憩しようとしているように見えました。

ここまで長い距離を歩き続けてきたのでしょうか。かついできた荷物を地面に降ろし始めました。その中には銃も見えていたではありませんか。私が緊張を感じないわけがありません。すぐに小屋の外へ出ました。

あちらも気がついたようで、ボスが近寄ってきました。肩をいやらせ、どすどすという感じでした。覆面をしているので顔はわかりませんが、ひどく鋭い目つきではありませんでした。

「おまえはここに一人で住んでいるのか？ 他には誰もいないのか？」

ボスは、都会風のなまりのある声で話しかけてきました。もう私にも事情が飲み込めていました。見かけ通りこれは強盗団で、金塊めあてにあの金鉱山を襲うつもりなのでしょう。

どう返事をしようか迷っていると、ボスは繰り返しました。

「おまえは、ここに一人で住んでいるのか？」

私が黙ってうなずくと、ボスにはやりと笑いました。

「オレたちは明日の朝までここで休ませてもらうが、文句はなからうな」

どう答えてよいかわかりませんでした。もちろん胸の中には怒りが煮えたぎっていました。私は大した人間ではありませんが、少なくともまっとうに生きてきたつもりです。

私は唇をかみしめ、ボスをにらみつけていたに違いありません。相手はにやりと笑い、ふところからピストルを取り出し、ちらりと見せました。古びたものでしたが、よく手入れされているように見えました。戦争が終わって何年もたっているとはいえ、まだまだ市中には残っていたのでしょうか。

「文句はねえよな？」

ボスはうれしそうに笑っていました。

私は、再び首を縦に振るしかありませんでした。手の中にも小屋の中にも、武器らしいものは何一つなかったのです。

満足そうな顔で、ボスは私を解放してくれました。

私は小屋の中に戻りましたが、なんとかあの連中に思い知らせてやれないものかと頭をしばり続けました。そして、あることを思いついたので。

日が暮れるまで、私は小屋から出ることはできませんでした。彼らはゴザに寝転んで休息していましたが、見張りをつねに私の小屋のそばに立たせていました。

夜になりました。雨戸のすきまから、私は彼らの様子を観察していました。見張りはまだいましたが、私は樂觀していました。思っていたとおり、仲間が寝静まり、二時間もたつころには、その見張りも舟をこぎ始めたのです。

荷物をかつぎ、音を立てないように私はそつと小屋の外に出ました。見張りは目を覚ます気配も見せず、私は簡単にその場を離れることができました。黒くとがった岩山へ向かって、私は歩き始めま

した。

小屋の前を離れると、道は何度も折れ曲がりながら、ぎざぎざに登っていくようになります。足音を立てないように気をつけながら私は歩いていきました。ときどき振り返ったのですが、そのたびに小屋は小さく遠くなっていきました。

月の出た明るい夜で、雲も少なく、遠くまで見渡すことができました。月光を受けて、岩山は輝きながら私を見下ろしています。

目的地に着くには、一時間以上かかってしまいました。岩だらけのきつい山道を登っていくのですから当然です。

このあたりも、私が薬草を探して歩く場所の一つでした。どこに何があるかはよく知っています。私は洞窟の入口の前に立つことができました。

天然の洞窟ですが、入口は大きくはありませんでした。でも中に入ると急に広くなり、すぐに幅も高さも二十メートルを超えるようになります。

教会の大聖堂の中に入って、真下から見上げているときのような気分を味わうことになります。あのくらからする感じです。洞窟の中に入っても、私は休憩せずに歩き続けました。さらに奥へとむかいます。

左右の壁は黒い岩でできていましたが、あるところをすぎると突然色が変わりました。ランプの光に照らされると、どんなものでも多少は黄色っぽく見えるようになるものですが、そんな影響すら受けないほど、いきなり真っ白に変わってしまったのです。

私は立ち止まって見上げました。本当に雪のように真っ白です。ランプをかがげ、近づけて照らしてみましたが、蝶たちはピクリともしませんでした。

大きな羽根を広げて、ざらざらした岩の表面にとまっています。何十万匹も、それこそ無数にいます。すべてが同じ形、同じ色の蝶たちです。岩壁が真っ白に見えるのは、この蝶たちがとまっているせいだったのです。

大きさは大人の手のひらと同じくらいでしょう。一匹でその大きさなのだから、それが岩壁をおおっているところを想像してみてください。息をのむような眺めではありませんが、不気味というのではなく、ただ単純に美しく、それどころか神々しいともいいたい眺めでした。蝶たちはほとんど動かず、羽根はもちろん、触覚や足をピクリとさせることさえありませんでした。

このあたりならどこでも見かける蝶で、珍しい種類ではありませんでした。でも変わっているのは、こうやって成虫のまま冬を越すということでしょうか。風のあたらない温かい場所に何十万匹も集まり、じっと春を待つのです。

そして春になったある日、いつせいにここを出ていくのです。太陽の光をキラキラ反射しながら、何十万匹もが一列になって洞窟から飛び出ていくさまは、この世のものとは思えない美しいものでした。

私は洞窟の中を進みつづけました。そのまま百メートル以上行き、終点まで来たところで背中の荷物を降ろしました。重くはないのですが、大量なのとかさばるのとで、かなりへたばっていましたが、

降ろすことができず、せいでいじまりました。

しばっていたヒモをほどいて、平らにならして地面に広げました。独特の匂いが鼻をつきます。虫よけ剤として使われるあの薬草でした。小屋の屋根裏に積み上げて乾かしていたのを、運べるかぎり持ってきたのです。

マッチを取り出し、私は火をつけました。薬草のあちこちに点火してまわったのです。からからに乾いていたから、すぐにぶすぶすと煙を上げはじめました。でも炎を上げることはなく、オレンジ色に光りながら、線香のようにゆっくりと燃えていくのです。

その煙が鼻に届くと、とたんにゲホゲホとセキが出そうになりました。私は駆け出しました。ハンカチで鼻を押さえ、洞窟の出口を目ざして急いだのです。

小屋には、無事に帰りつくことができました。強盗団のイビキがかすかに聞こえてきます。見張りがまだ眠りこけたままにいるのも見えました。すぐに服を脱いで、私はふとんにもぐりこみました。

翌朝、目が覚めたのは、ボスのどなり声が小屋の中まで聞こえてきたからでした。ふとんの中で頭を振り、私は昨日起こったことを思い出そうとしました。そして自分の計略を思い出し、にんまりとほくそえんだのです。ふとんからはい出し、雨戸のすきまから、そと外の様子をうかがいました。

私の小屋は、いつも濃い霧に包まれて朝をむかえました。すべてが白いベールをかぶり、百メートル先を見通すことも難しいほどで、まるで牛乳の海の底にでも沈んでいるような気分です。

私は耳をすませました。ボスはある若い男をどなりつけているのですが、その声はこつ聞こえました。

「どついうことだ？ あと半月は雪が降らないはずではなかったのか？」

ボスは真つ赤な顔をして、ある方向を指さしています。どなられている若い男は、目になっている光景が信じられないという様子で頭を振るばかりでした。

首を伸ばし、ボスが指さしている方向を私も眺めました。

小屋の背後には黒い岩山がそびえているということとは、すでにお話ししましたね。このときも濃い霧の中に、その岩山だけは姿を見せていました。朝日を受け、まるで幻のように浮かび上がっているのです。いつもならインクのように黒く輝いているはずなのですが、でもこの朝、この岩山は真つ白だったのです。

どなりつけられるだけでなく、数発ぶんなぐられても、若い男は首をかしげることしかできない様子でした。十一月の半ばに雪が降るなど予想外だったのでしょうか。

鉱山を襲撃する計画を立てるにあたって、彼らも過去の気象データはもちろん調べたでしょう。この地域の降雪は、いくら早くてもあと二週間は先のはずでした。でも現実にああなっているのだから仕方ありません。鉱山へ向けて今からあの岩山を越えていこうとするなど、わざわざ遭難しに行くようなものです。

あわただしく荷物をまとめ、もちろんあいさつなどもなく、強盗たちはそそくさと山を降りていきました。雨戸のすきまから、私は

黙って見送りました。

いつものとおり、霧はすぐに晴れてしまいました。山々は太陽をいっぱいにあびて、空気は極限まですみきって、身ぶるいがしてくるような美しさでした。あの岩山も、すでにその全身を見せていました。

数分後、岩山をおおいつくすようにとまって、日光を十分にあびて身体をあたためた蝶たちはいつせいに飛び上がり、不思議な秩序でもって一列になり、洞窟の中へと戻っていきました。そのまま、翌春まで姿をあらわすことはありませんでした。そのあとには、いつもと同じように黒々とした岩山がそびえているばかりでした。

(終)

消えた線路

ああ、あの山道のことかい？ 君も気がついたのだね。たしかに奇妙な道ではあるよね。木と森以外は何もない石村山地の真ん中をただ一本だけ、どこにも通じていない幅の広い道がまっすぐに走っているのだからね。あの険しい山中なのに坂道でもないしね。

あの道のことを、地元の人中は『汽車道』と呼んでいるのだよ。汽車道というのは、鉄道の線路の古い呼び名さ。昔々の言い方だよ。

あの道になぜそんな呼び名がついたのか、村人に質問しても無駄だよ。ニヤニヤするばかりで、何も答えてはくれないさ。ひよんなことから僕はその理由を知ったのだけだね。興味があるなら話してあげるよ。

昭和20年ごろのことだから、ずいぶんの昔の話だよ。戦争に負けて、日本はアメリカ軍によって占領されていた。米兵が我が物顔で歩く姿は、あのころ国中のあちこちで見られたものさ。そういう米兵は何万人として、まじめな兵ももちろんいたが、中には悪さや乱暴を働く者も少なくなかった。

石村にも20人ばかりの米兵がやってきていた。村はずれに旅館が一つあるのだが、そこを宿舎にして滞在していたんだ。これがそろいもそろって悪い兵ばかりで、果樹園に入り込んで勝手に実を食べるわ、家々に忍び込んで金品を盗むわ、あげくは銃を持ち出して、面白半分に牛を撃つたりした。それを止めるどころか、上官も一緒になって笑っているほどだった。

村人はひどく腹を立てていた。だが我慢するしかなかった。日本は戦争に負けたのだから。

しかしその我慢も、とうとう限界に達する日がやってきた。乱暴な運転をするジープが、こともあるうに村の子供を二人もはねころしてしまったんだ。運転していた兵は肩をすくめるばかりで、そのまま立ち去ってしまった。まったくひどい話だろう？ 子供に何の罪があるというのだね。

その夜、米兵たちの目を盗んで一カ所に集まり、村の男たちは計画をねった。何とかしてアメリカに仕返しをしてやろうというんだ。そして話がまとまった。

地図には描かれていないし、どの資料にもものっていないはずだが、石村から少し入った山奥には鉄鉱石が眠っていたんだ。鉄の原料だよ。そういう鉱脈があったんだ。だが埋蔵量が知れていることもあって、わざわざ費用をかけて掘り出そうという話にはならなかった。

しかし戦争が始まり、鉄が不足するようになると、さつそく開発が計画された。山中に鉱山が開かれ、鉱石を運び出すために、石村駅へ通じる鉄道が建設された。それがあの自動車道という山道の由来なんだ。名前だけでなく、あそこは本当に線路だったんだよ。

もちろんこれは軍の最高機密であり、村人以外に知る者はなかった。外部の人間にしゃべることは固く禁止されていたんだ。

戦争が終わっても、その線路はまだ残っていた。使われなくなつて何年もたち、草や木におおわれて、ちょっと見ただけでは線路とはわからない姿になっていたがね。もちろん米軍は、そんな線路の存在など夢にも知らなかった。

村人たちはそれに目をつけたのさ。週に一度、米兵を乗せた専用列車が真夜中に石村駅を通過する。豪華な車内設備を持ち、ものすごいスピードで疾走してゆく特急列車だ。日本人が乗車することはもちろん許されてはいない。乗客だけでなく、機関士から車掌まですべてアメリカ人で固めていたんだ。

次にその列車が石村駅を通過するのが月のない暗い夜であることも、村人たちは計算に入れていた。その準備のために、村人たちは非常によく働いた。木を切り、草をかり、何年も捨てられたままだった線路をたった数日で元通りによみがえらせたんだ。

この線路の終点は、もとの鉱山だった。だが途中に大きな湖があり、それを長い鉄橋で渡っていた。村人たちも、この鉄橋まで修理したわけではなかった。それどころか真ん中あたりで破壊してしまいい、鉄橋が湖の中央部で突然プツンと終わる形にしてしまったのさ。

村人たちだけでは、この計画を実行するのは不可能だったろう。鉄道の内部にも共犯者がいたに違いない。米軍の列車がやってくる直前に線路を切り替え、本来行くべき本線はずれて、山の奥へと方向を変えさせるわけだからね。だがあの時代、米軍を快く思っていない者などいくらでもいたから、共犯者を得るのは難しい仕事ではなかっただろう。

専用列車が走る夜が来て、翌朝になって、米軍は大騒ぎを始めた。列車が一本まるまる行方不明になってしまったのだからね。何時間待っても目的の駅に着かなかったんだ。これは何かが起こったに違いない。

米軍は警察を総動員して行方を探させたが、何の手がかりもなか

った。列車は文字通り蒸発してしまったかのようだった。真夜中の列車だから目撃者もなく、どの駅のあたりで消えたのかすらわからないまままで終わってしまったんだ。

これは本当に大きな事件になった。だが何が起こったのかすらわからないのだから、さすがの米軍も日本人の責任を問うことはできなかった。調査は半年以上続いたが、結局何もかも不明のまま終了してしまったよ。

ほとぼりが冷めたころ、村人たちは総出で証拠の隠滅に取りかかっていた。山の中の線路をすべて取り除き、ただのさら地に変えてしまった。あの汽公道という道は、そうやってできたのさ。

えっ？ 列車に乗っていた米兵たちはその後どうなったのかわかって？ それはもちろん決まっているさ。人がおとずれることのない湖の底深く、今でも列車と一緒に眠っているはずだよ。

(終)

恋文

彼は死に場所を探していました。まだ30歳と若いのですが、すでに自殺することに決めていたのです。ただその実行方法と場所が問題で、まだ決めることができないでいるのでした。

職をやめ、アパートを引き払い、家具も何もかもみな処分した後で、貯金をすべておろし、彼は電車に乗りました。

行くあてがあつたわけではありません。ふさわしい死に場所を求めてのことでした。

富士の樹海へ行ってみましたが、着いたのが午後遅くだったこともあつて、樹海の中は暗く、木の幹や枝がぐねぐねした怪物の触手のように思えて、とても足を踏み入れる気にはなりませんでした。樹海の入口に2時間以上たたずみ、結局バスに乗ってまた町へ戻ってきてしまいました。

自殺する人が多いことで知られた海岸の崖の上にも行ってみましたが、やはり実行できませんでした。遠足なのか小学生の群れがいて、いま自分が目の前で海に飛び込んだら、この子たちの遠足を台無しにしてしまうと思えたのです。

そばの自動販売機で飲み物を買ひ、飲みながら彼は子供たちを眺めていました。その中の一人の女の子が目につきました。生まれつきわずかに栗色がかつた髪を伸ばし、愛らしいリボンで留めています。彼はふと、従姉妹いとこのマリ子のことを思い出しました。

マリ子は同じ年で、近所に住んでいて彼とも仲が良かったのです

が、10歳のときに病気にかかり、死んでしまったのです。それ以来もちろん会っていないわけだし、この時まで思い出すこともなかったのです。でも遠足に来ていたりボンの女の子は、マリ子のことを思い出させるほどよく似ていたのです。

マリ子とよく二人で遊んだり、ピクニックに出かけたりしたことを彼は思い出しました。

彼は突然、マリ子に会いたいと思いはじめました。でもそれは不可能なことです。マリ子は20年も前に死んでいるのです。

自分も死ねばマリ子に会うことができるとは、彼は思いませんでした。死後の世界など信じてはいなかったからです。

何年も忘れていた古い記憶が、彼の心の中に突然よみがえってきました。

小学3年ぐらいのとき、マリ子と二人で町の中をぶらついたことがあったのです。といっても子供のことだからせいぜい2、3時間のこと、二人でキップを買い、路面電車に乗って猫坂の町の中を一めぐりしたのです。とても楽しい経験だった記憶があります。

マリ子は白いワンピースを着て、あの女の子と同じように髪をリボンで留めていました。きれいな赤い靴をはいていたことも思い出しました。

「猫坂へ行ってみよう」と彼は思いつきました。子供のころ住んでいた町であり、人生の最後に立ち寄る場所としてふさわしい気がしたので。それに何よりもマリ子との思い出があります。

猫坂の人々は古いものをいつまでも大切にし、なかなか捨ててしまわないので、あの町を今でも路面電車が走っていることを彼は知っていました。古い電車がまだ現役で働いているそうでした。行けば、マリ子とともに見たのと同じ風景を目にすることができるとしよう。

彼はさっそく駅へ行き、キップを買いました。

翌日の昼前には、彼は猫坂の駅前に立っていました。町の様子はもちろんだいぶ変わってはいますが、それでも古めかしい建物を所々見つけることができます。きつと20年前にも建っていたことでしょう。

彼がはつと息をのんだのは、駅前に路面電車が停車していたからでした。とても古めかしい型で、ドアを開けて乗客を待っています。あの古さなら、車内の床やイスも木でできているに違いありません。マリ子と一緒に乗ったのもあんな電車でした。

もちろん彼はすぐに乗り込みました。ニス塗られた木材の甘いような匂いが、すぐに彼を包み込んでくれました。すいていたので、彼はすみっこに腰かけました。電車が動き始めました。

電車の揺れに身をまかせながら、彼は再びマリ子のことを考えていました。そして、20年前にこの車内で起こったことを不意に思い出したのでした。

いかにもおしとやかそうな見かけにも関わらず、マリ子は少しませた女の子だったのかもしれない。何を書き込むためののか知りませんが、いつも小さな手帳と鉛筆を手にしていました。

その手帳のページを、彼は一度もみせてもらったことがありませんでした。「だめ」と言っつて、いつもマリ子は彼の目から隠したのです。

20年前にも、この車内でマリ子はその手帳を手にしていました。そして鉛筆を取り出し、いつものように何かを書き込み始めたのです。

気にもとめず、彼は窓の外を眺めていました。だけどビリツという音が聞こえたので振り返ると、マリ子が手帳のページを一枚破り取ったところだったのです。彼は見つめました、マリ子は何も言わずに首を横に振るばかりです。ちぎりと取ったページを、マリ子は小さく折りたたみ始めました。すぐに紙は、10円玉ぐらいの大きさになりました。

マリ子はそれを、電車のイスと壁の間の狭い隙間にそっと差し込んだのです。古い電車だからガタがきていて、そんな隙間なんかいくらでもあります。その中へ押し込まれ、紙はすぐに見えなくなっていました。

なぜそんなことをしたのか、その紙には何が書いてあるのか、彼は質問してみることはしませんでした。そして20年がたち、彼は今この電車の中にいるわけでした。

自分でも気がつかないうちに、彼は手近な壁の隙間をのぞき込み始めていました。何かを期待してのことではありませんでした。でもあることを発見し、彼はもう少しで息が止まってしまつたところでした。その隙間の奥の暗がり、彼は小さな白いものを見つけていたのです。白い紙を小さく折りたたんだものに違いありません。

苦労して、彼はそれを引つ張り出すことに成功しました。すいた車内だったからよかったのですが、もし混雑していたら、「この人は何をしているのだろう」と他の乗客たちが不審に思ったかもしれません。

彼は紙を取り出し、手のひらに乗せました。後は広げて確かめるだけです。

もちろん彼はそうしました。間違いなくマリ子の手で書かれたものでした。子供っぽい文字と文章だからというだけではなく、文末にはきちんと署名までされていたからです。マリ子から彼にむけて書かれた手紙、いえラブレターでした。

それに何が書かれていたのか、詳しいことは述べないでおきます。ただ彼がその後自殺するのをやめ、アパートを借り、新しい職を手に入れたということだけは書き添えておきましょう。

(終)

蝶が選ぶ鼻

米吉は、裕福とはいえない事務員だった。

50歳を過ぎていたが結婚したことはなく、両親が死んでからは小さなアパートでのんびりと一人暮らしをしていた。日曜の午後などは窓を大きく開け、外の風をあびながら読書をするのが趣味だった。

この日もそうやって本を読んでいたのだが、いつの間にかうたたねをしてしまったらしい。目を覚まして本を閉じ、机の上に戻したのだが、鼻の上に違和感を感じたのはそのときだった。かすかにむずかゆいような、何かが張り付いているような感じが鼻の頭にあるのだ。

とっさに鏡をのぞき込んだ。そこにあるものを発見して、米吉は息をのんだ。

季節がちょうどよかったのだろう。開いたままの窓から、知らぬ間にイモムシが入り込んでいたに違いない。米吉の身体によじ登り、鼻の上で脱皮していたのだ。蝶の幼虫が、米吉の鼻の上でサナギになっていたのだ。

驚いて米吉は声を上げた。だが心優しい男であるから、むやみにむしりとりたりはしなかった。鏡に顔を近づけ、まじまじと眺めた。

サナギは小指ほどの大きさしかない。よく見ると、とがった頭がおとぎ話の妖精の帽子のようでかわいらしいではないか。米吉の鼻に細い糸をピンとかけ、しがみついている。

その様子に、米吉は心を打たれないではいられなかった。このように小さな生き物でさえ、一生懸命に生きようとしているのだ。それをどうして妨害できよう。蝶がかえるまでの間、米吉はサナギをそっとしておくことにした。

友人の頼みで、米吉はある結婚式の司会をすることになっていた。物静かな男ではあるが、人の前に出て話をするには慣れていないのだ。その式のことを少し気にはなったが、まだ何週間か先のことだからまあよかろうと思うことにした。きつとそれまでにはこのサナギも羽化して、鼻の上から出ていつていることだろう。

翌朝、アパートの外へ一歩出た瞬間から、米吉は人々の注目を集めてしまうことになった。いつものようにきちんと身支度をして会社へ出かけたのだが、廊下で出会った大家の妻が最初に大きな声を上げた。真ん丸い目をして丸々と太った女だが、その目をもっと丸くしたのだ。

「まあ米吉さん、その鼻はいったいどうなさったのです？」

米吉は立ち止まり、にっこり笑って説明したが、「まあ」と言うきり、大家の妻はそれ以上言う言葉を思いつくことさえできない様子だった。

道行く人すべてが米吉に注目した。ほとんどの者は驚いた顔をするだけだったが、気味悪げにまゆをしかめる者、失礼にも指さして声を上げて笑う者までいた。だが気にせず、米吉は歩き続けた。

顔見知りの駅員も、大家の妻と同じ質問をした。米吉はまたしんぼう強く事情を説明した。今日はこれを20回は繰り返すことにな

るだろうと覚悟していた。

会社に着いても、午前中はまともに仕事にならなかった。会社中から見物人が集まり、米吉の鼻をまじまじと見つめるのだ。いちいち説明するのが面倒になり、事情を紙に書き、米吉は机の上に置いておくことにした。好奇心いっぱいの新たな見物人があらわれるたびに米吉はそれを手渡し、静かに仕事を続けた。

おせつかいなやつがいて、新聞社に知らせたようだった。翌朝米吉が出社すると、新聞記者とカメラマンが待ちかまえているではないか。不愉快ではあったが、断るわけにもいかず、米吉は取材を受けた。記事とともに、米吉の顔写真はその日の夕刊に大きく掲載された。おかげでその翌日には、見物人の数がさらに増えた。

米吉の周辺はにわか騒がしくなったのだが、それも日がたつにつれて静かになっていき、週が変わるころには誰も話題にしくなくなった。同僚たちですら、顔を合わせてももはや何も感じない様子だった。慣れの力というのは恐ろしいものだね。

さらに日が過ぎて、結婚式の司会をする日がとうとうあと数日に迫った。だがサナギのカラーはまだ固く閉じたままで、羽化する気配はなかった。さすがにこの鼻で結婚式を司会するのはためらわれ、米吉を気をもみ始めていた。「これはかなりガンコな蝶だぞ」

米吉は昆虫の専門家をたずねることにした。いつになったら羽化してくれるのか、質問してみようと思ったのだ。

「おお」

一目見るなり、昆虫学者は感心した声を出した。「これは珍しい。

イチゴアゲハのサナギですな」

「イチゴアゲハ？」

「ええ、羽化すると見ごたえがあまりでしょう。子供の手のひらほどもあり、光を受けて羽根がキラキラと輝くのです」

昆虫学者はその他にもいろいろなことを教えてくれたが、「いつ羽化するのか」というかんじんな質問には、「正確な日にちはわからない」と答えるばかりだった。米吉は肩を落としてアパートへ帰った。

とうとう結婚式の朝がやってきたが、サナギはまだ米吉の鼻の上にあつた。ため息をつきながら、米吉は着替え始めた。前の夜には「この鼻のままで司会をしても本当によいのか？」と友人には電報を打ってあつた。友人はこころよく、「それでかまわない」と返事をくれていた。

きちんとした礼服に着替え、米吉が式場に顔を出すと、待ちかまえていたカメラマンたちがフラッシュをたいた。ひどく迷惑に思つたが、社会の注目を集めることができ、新郎新婦はまんざらでもなさそうだったので、米吉は何も言わないことにした。

結婚式の最大の見せ場は、ケーキにナイフを入れる瞬間かもしれない。特にこの町ではそうで、ケーキは年々大きく背が高く、豪華になっていった。見栄っ張りな人間が多いのか、この町の結婚式はより派手で見栄えのするケーキを披露する場のようになりつつあつたのだ。

様々なデザインのケーキが考案され、出席者たちを感心させたり

喜ばせたり、あきれさせたりした。私もよく覚えているが、あるカップルの式に出てきたケーキは、豆電球が何百個も全体にちりばめてあり、ナイフを入れると同時にスイッチが入られ、キラキラと光り始めたではないか。ウェディングケーキというよりは、まるでクリスマスツリーのような雰囲気だった。その後、切り分けられて私のところにも一切れ運ばれてきたが、あろうことか電線の切れはしがまぎれ込んでいて、もう少しで飲み込んでしまうところだった。

だがさいわいなことに、米吉が司会をしたカップルはちゃんとした常識を備えた人たちだったようだ。ケーキもこじんまりとしており、大きすぎず好ましかった。砂糖でできた小さな塔のようなものが中央に立ててあり、少し地味ではあったが、十分受け入れることができるものだった。

欲を言えば、あの塔の頂上に何か飾ってあれば、よいアクセントになったかもしれない。新鮮なクリームに包まれた真っ白なケーキであるから、ルビーのように赤い輝きでもあればとは思った。

結婚式は順調に進んだ。カメラマンたちももう邪魔をせず、部屋のすみでおとなしくしていた。式の最後に全員で写真を撮り、それを新聞に掲載するつもりだったらしい。まだ会場に残っていた。

ケーキにナイフを入れるときがきた。花嫁と花婿が並び、長いナイフを手にケーキの前に立とうとした。「あっ」と大きな声が聞こえたのは、その瞬間だった。司会をするのに夢中で、米吉もこのときまで気がつかなかっただけらしい。

知らないうちにサナギにヒビが入り、羽化が始まっていたのだ。米吉が声を上げたのは、その蝶が羽ばたき、サナギを離れていったからだだった。

式場を飾るロウソクの光をはね返しながら、蝶は部屋を横切っていった。あの昆虫学者が言ったとおりの姿だった。人々の視線が集まり、小さくどよめきが上がった。人々の頭の上を蝶は飛び続けた。小さな蝶によくあるチラチラした目ざわりな飛び方ではなく、まるで鳥のようなゆうゆうとした飛び方だったのだ。あの大きさの羽根であれば、巻き起こす風がほおに感じられても不思議はない気まですした。

蝶は高度を下げ、花嫁の頭の上にとまるかと思われた。だが直前に気を変え、別の方向へ飛んでいった。しかし羽根を休めるつもりではあるらしい。蝶は着陸した。ウェディングケーキの中央を飾る小さな塔の頂上に。

それを目にして、人々は思わずため息をついた。まるですべてがあつらえたかのようにだったのだ。あれほど愛らしい光景は私も見たことがない。

カメラマンがそつと近寄り、写真を撮った。花嫁と花婿を入れ、ちゃんと構図を決めてシャッターが押されるまで、蝶は動かさずその場にとどまり続けた。フラッシュが光り、フィルムを巻き上げて、カメラマンが念のためにもう一枚撮影するまで、蝶は動きを見せなかった。

だが人々が「ああっ」とため息をつく中、蝶は再び羽ばたき、部屋を横切り、風を入れるために開かれたままになっていた窓を通って、6月の空へ消えていった。空のあなたに小さくなってゆく赤い点を私たちはいつまでも見送っていた。

結婚式はうまくいった。友人から何度も礼を言われ、米吉はいい

気分アパートへ帰ることができた。空っぽのサナギはすでに取り去ってあったが、鼻の上には特に何の跡も残らなかった。

米吉の生活はまた以前と同じ平和なものに戻ったが、ただ一つ変わったのは、見知らぬ人々から結婚式の司会をときどき依頼されるようになったことだ。日曜を一人でゆつくりと過ごすことが少なくなつて、米吉はそれだけが少し不満なのだそうだ。

(終)

呪いの言葉

猫坂第二女学校というのは、実に国際色豊かな学校だった。各国からやってきた外交官や企業の社員たちが娘を通わせていたため、アメリカ、ドイツ、ブラジル、インド、中国、ロシア、エジプトとそれこそ何でもありだったのだ。

この娘たちの間で、あるとき議論が起こった。彼女たちは日本語以外にそれぞれ母国語をじょうずに話すことができたのだが、『どこの国の言葉がもっとも強い言語なのか』という論争だった。

昼休みや放課後だけでなく、登下校のときにも歩きながら議論は続けられた。もちろん『言語の強さとは何か?』ということが第一に議題に上った。

「それは美しい詩をつむぐ能力のことだ」と一人が言った。

別の一人は「論理的に物事を述べ、考える能力のことである」と言った。

一人が笑いながら、「ロゲンカに勝てる力じゃない?」と言った。

その後も議論が続いたが、最も強い言語とは『相手を呪うときに最も強い力を発揮できる言語のことである』という結論に落ち着いたときには、私もあきれてしまった。私は日本人だったが、父がこの学校の教師をしていたので、特別に入学を許されていた。

家に帰って、私は兄にこの話をした。兄は大いにおもしろがり、さっそく悪だくみに取りかかった。兄と私は計画を練り、その夜は

わくわくしながら眠りについた。

父の書斎には、カラスのはく製が飾られていた。かなり大きな鳥で、色は真っ黒でクチバシも太く、二本の足をしっかりと踏ん張って立ち、ガラスのケースの中に収まっている。私たちはこれをこっそり持ち出したのだ。

その日の授業が終わり、女生徒たちは下校し始めた。様々な国籍の娘たちがさんざめきながら通りを歩いていくというのは、なかなかの眺めだったと思う。やがて道は、小さな川を渡る橋の上に差しかった。

「あら」私は立ち止まって指さした。「あそこにカラスがいるわ。見える？」

娘たちは立ち止まった。三十メートルほど離れたところにコンクリートの高い塀があり、閉鎖された工場跡のようだが、その上にカラスが一羽とまって、何を考えているのか、われ関せずという様子でよそ見をしているのだ。

「ねえみんな」私は娘たちを振り返った。「どこの国の言葉が一番強いのか、ここでちゃんと結論を出しましょうよ」

「どうするの？」ドイツ人の少女が、青い眼で私を見つめ返した。

「実験をするのよ。この橋の上から、あのカラスに向かって呪いの言葉をかけるの。一人一人が順番に、それぞれの母国語で言うのよ。そうすればわかるんじゃない？」

「面白そうね」大柄なアメリカ人の娘が言った。黄色い髪とそばか

すだらけの顔をしているが、何かあるといつも自分が一番にやりたかった。カバンを置き、手すりに身を乗り出し、叫んだ。

「カラスよカラス、悪魔の名においておまえに命じる。今すぐ死んでその塀から落ちよ」

彼女の声は大きく太く、あたりに響いた。カラスはほんの少し身じろぎをしたようだったが、平気な顔でまだそこにとまったままだ。

次にドイツ人の少女が前に出た。アメリカ人と同じことをドイツ語で叫んだ。だが何も起きなかった。次にロシア人が前に出た。でも結果は同じだった。

そうやって私たちは一人ずつ同じことをしていった。インド人、ブラジル人、中国人、エジプト人ときたが、結果はやはりまったく同じだった。カラスは居心地悪そうにときどき身じろぎをするが、死ぬ気配はもちろん、声の大きさに驚いて飛び去る様子も見せないのだ。そして最後が私の番だった。

私は身を乗り出し、他の娘たちと同じことを日本語で言った。

「カラスよカラス、悪魔の名においておまえに命じる。今すぐ死んでその塀から落ちよ」

するとどうだろう。カラスは突然身体をびくびくと震わせたかと思うと、足をよろめかせ、塀からポトリと落ちてしまったではないか。地面に落ちて、もう身動きもしない。それこそ一瞬で凍りついたかのように、そのあまりにも動かないさまはまるでく製の鳥のようだ。

娘たちの驚きようときたら、大変なものだった。私は鼻が高かったが、笑い出さないように我慢するのが苦しかった。もちろんあのカラスは、父の書斎から持ち出してきたものであり、塀の向こうには兄が隠れていたのだ。私と兄は示し合わせ、芝居を打ったのだ。

だが少女たちは本気にし、私と日本語をほめそやし、それまでは馬鹿にして授業中も身が入らない様子だった娘までが、翌日からはまじめに日本語を勉強するようになったではないか。日本語の授業を受け持っていた父も突然の変化に驚き、喜んでくれているようだった。

兄と私は、もちろん秘密を守り通した。二人だけで思い出して話をしては、笑いあつたものだった。

これだけならいい。だが後日談があるのだ。

はく製を使ったトリックの部分は抜きにして、『世界で最も強い言語は日本語である』という結論が実験の結果得られたという話を私は父にしてしまったのだ。父は大変驚き、喜んだ。父は愛国者で、『日本国は、他国の上に立つべき特別の存在である』という信念をかねてから抱いていた。私のこの与太話が、父の信念をさらに強化してしまつたようなのだ。

父には友人知人が多かった。その中には政府の高官や軍の高級将校などもいた。父は得意な顔で、この話を彼らにもしたことだろう。そのうちの何人かはまじめに信じたに違いない。その数年後、第二次世界大戦が始まつたのだ。

私は、自分のした小さないたずらが日本という国の進路と運命を大きく変えてしまつたような気がして仕方がないのだ。

(終)

ガソリン蒸発事件

これは祖父から聞いた話さ。僕の先祖にもこういうタイプの人間がいたということだね。

今では没落してしまっただけで見る影もないが、数十年前までは僕の一族もかなり羽振りが良かったのだよ。猫坂でも十本の指に入る金持ちだったのさ。今でも石井通りという道があるじゃないか。屋敷の前を通っている通りに名がつくぐらいの家ではあったのさ。

当時祖父はまだ若く、大学を卒業したら石井石油という会社の経営を引き継ぐことが決まっていた。明治の初めから続く会社で、この会社が石井家の名声と財産を築いてきたのさ。第二次世界大戦が終わった直後で、まだ町の中では米兵の姿をいくらでも見かけることができた。ほら、猫坂の北にはちよつとした平地があるだろう？ あそこには米軍の飛行場があったのだよ。猫坂基地と呼ばれていた。

飛行場なのだから、当然飛行機が何十機という。それに補給するためのガソリンも必要になる。このガソリンの供給を一手に引き受けていたのが石井石油だったのさ。

だが米軍が使うガソリンは上等な品だ。そこらの町中で自動車が使っているものとはわけが違う。不純物が少なく、熱量が高くよく燃えるいいガソリンなんだ。値段も高く、手に入れることができるルートも限られている。米軍は海外から自分の手で直接運び入れていたのだよ。それを石井石油に預け、石井石油は定期的に、決まった量を猫坂基地に届けていたんだ。

東京の大学を卒業して、祖父は猫坂に帰ってきた。と同時に、なぜか番頭が姿を消した。祖父が東京にいた間はこの番頭が経営のすべてを取り仕切っていたのだがね。番頭の失踪を聞かされ、不審に思つて、祖父は会社の帳簿を調べてみたんだ。そして愕然としたそうだ。なんと米軍のガソリンが三十トンばかり横流しされて、闇市へ売られてしまつていたんだ。番頭はまじめな男だったが、ただ一つ欠点があり、博打ごとがとても好きだったから、それで借金を作つて怖い連中に脅かされ、仕方なくやつたことだったのかもしれない。

だが、それですむ話ではもちろんない。警察に届け出て、米軍に事情を説明するという選択肢もあるが、あのころの米軍が日本人を見る目は本当に厳しかった。番頭が失踪したのをいいことに、祖父が罪をなすりつけようとしていると思われてしまふ可能性も高かった。

それにもう一つ別のこともある。妹の結婚式が迫つていたので。嫁入り先は近所の旧家で、花婿も祖父の幼なじみだったが、厳格な家だから、こういう不祥事が明るみになれば、間違いなく破談にされてしまつだろう。嫁入りの日を指折り数えて楽しみにしている妹の姿を毎日見ている祖父としては、それはどうしても避けたかったのだ。

だから祖父は、何とかしてこの窮地から脱出する方法を考え出さなくてはならなかった。高くつくことになるが、闇市場でガソリンを買つてタンクに戻し、それを知らん顔で米軍に引き渡すということも考えはした。だがそれは不可能だとすぐに気がついた。

米軍のガソリンには、普通のガソリンと区別するために特別な染料が加えてあり、一目見ただけで偽物とばれてしまつだろう。米軍

の側でも、受け取ったガソリンはもちろん品質検査に回す。何とか色をごまかすことに成功したとしても、質の悪い闇市場のガソリンでは、その検査ですぐに見破られてしまうだろう。もちろん正規品のガソリンを手に入れる方法もない。あれは米軍専用のものだ。

祖父は悩み続けたが、時間の余裕はなかった。次にガソリンを届けなくてはならない日まで、もう一週間もなかったのだ。その日には三百トンのガソリンを貨車に積み込み、きつちり基地に届けなくてはならない。だが石井石油のガソリンタンクの中には二百七十トンしか入っていないのだ。祖父は夜も眠らず考え続けた。そしてある作戦を考え付いたのだ。

三百トンのガソリンは、十両の貨車に分けて積まれることになっていた。一両あたり三十トンずつだ。積み込み作業は夕方前から始まった。ポンプを使って一両ずつ積み込んでゆくのだから、結構時間がかかる。九両目がすむころには、あたりはすっかり暗くなっていた。タンクの中のあるガソリンの残量のことを考えて、祖父ははらはらしどおしだったそうだよ。きつちり九両分しか残っていないわけだから。

九両目の積み込みが終わり、最後の二両に取りかかろうかというとき、祖父はうまく言いくるめて、作業員たちを夕食に行かせた。「最後の二両は僕がやっておくから、あんたたちは飯を食いに行っていいよ」

奇妙に思った者もいたかもしれないが、若社長が言うことだ。首を縦に振り、作業員たちはタンクの前を離れていった。

作業員たちの姿が見えなくなると、祖父はがぜん忙しくなった。ガソリンを注入するパイプを貨車から外し、代わりに水道のホース

を貨車の口に突っ込んだのだ。蛇口を全開にし、貨車の内部に水をじゃんじゃん流し込んだ。そして何とか、食事を終えた作業員たちが戻ってくる前にホースを外し、何食わぬ顔で貨車の給油口をロツクすることに成功したんだ。

ガソリンの積み込みが終わると、貨車は専用のはかりの上に運ばれる。正しい量のガソリンが積み込まれているかどうか、一両ずつ重さを測るのだ。祖父もはかりの前へ行き、はらはらしながら見ていたらしいが、水を積んだ貨車もちゃんと検査をパスすることができた。あとは機関車を連結し、貨物列車として発車時刻を待つだけだった。

だが祖父の仕事は、これで終わったわけではなかった。その場を離れ、タクシーに乗って次の駅へ先回りしたのだ。もう真夜中近くで、町の通りも真っ暗で人通りもほとんどなかった。駅の正面に着き、金を払って祖父はタクシーから降りた。

最終列車はもうすんでいたから、駅も明かりが消されて真っ暗だった。壊れた柵の隙間を通り抜け、祖父は駅の中に忍び込んだ。信号がぼつんと一つ、赤く光っている。物陰に身を隠して、祖父は貨物列車が到着するのを待ったんだ。

やがて遠くにヘッドライトの光が見えてきた。線路もキンキンと鳴り始めている。ガソリンをつんだ貨物列車がやってきたのだ。祖父は腕時計をのぞき込んだ。時間通りだった。

ほんの数分間だが、貨物列車がこの駅に停車することを祖父は知っていたのだ。貨物列車が停車し、機関士がこちらを向く前にさつと飛び出し、祖父は貨車に乗り移ることに成功した。冷たい鉄の手すりをつかみ、暗がりに身を潜めた。だがこんな真夜中のことだ。

機関士は気づく気配も見せなかった。

信号が青に変わり、貨物列車はゆっくりと動き始めた。祖父は一番後ろの十両目の貨車に身を潜めていた。列車が速度を上げ、町を外れて人家の少ないあたりに差しかかるのを祖父は待ち続けた。そのまま列車は市街地を抜けた。ここからは数キロの間、田や畑だけが広がるようになる。祖父は行動を始めた。目立ちにくいように、あらかじめ黒い服を着ていた。

祖父はもともとすばしっこい人ではあったが、それでもハラハラものだったそうだ。貨車の車体に片手でしがみつき、もう一方の手を精一杯伸ばして、車体の下部にあるガソリン排出口に触ろうというのだ。水道の蛇口の大きなやつだと思ってもらえばいいが、走行中の列車の上でそれを開いてやるうというのだ。

バランスを崩して何度も振り落とされそうになったが、祖父は何とか排出口を開くことに成功した。レバーをぐいと動かすと透明な液体が流れ出し、最初はチョロチョロと漏れるだけだったが、すぐに消火栓のような太く強い流れになった。貨車はそれを線路わきに撒き散らしていったのだ。これはもちろん水だった。ガソリンではない。

いくらもたたないうちに、貨車の内部は空っぽになってしまった。もう一滴も流れ出さなくなったことを確かめて、祖父は排出口をしつかりと閉じた。

前方遠くに次の駅の明かりが見え始めた。田や畑はもうすぐ終わってしまっただろう。だがその前に、列車は川を渡ることになる。猫坂川という大きな川で、川幅は数百メートルあり、線路はそれを鉄橋で渡っている。本当に長い鉄橋なので、列車をその上に一本すっ

ぼりと停車させることができるほどだ。祖父は前を向き、目をこらした。

畑が切れて、さざなみの立つ水面が月光を跳ね返しているのが遠くに目に入った。あれが川だ。祖父は非常ブレーキのレバーに手を伸ばした。これを引くと強いブレーキがかかり、列車は急停止する。列車の先頭が鉄橋にさしかかった瞬間を見計らって、祖父はレバーを引いた。パシュツという大きな音が聞こえ、車体がガクンと揺れた。急ブレーキがかかったのだ。車輪がこすれる大きな音を立てながら、列車は鉄橋の上に停車した。はかったように鉄橋の中央に停車してしまったそうだよ。

祖父は線路に飛び降りた。機関士に見つからないように注意して線路の上を走り、橋脚をつたって川原に飛び降りた。草むらに身を隠し、貨物列車の様子を見ていた。

不満そうな顔で機関士が運転台から降りてくるのが目に入った。非常ブレーキが働いたことは知っていても、その原因がわからないのだろう。貨車を一両ずつ点検し始めた。

とうとう、祖父が乗っていた貨車の非常ブレーキのレバーが引かれていることに機関士は気がついた。いかにも腹立たしそうに、機関士はレバーを元に戻した。誰かのいたはずだと思ったのだろう。すべての貨車をもう一度点検し、貨物列車が動き始めたのは二十分ほどたってからのことだった。遠く小さくなっていく貨物列車を祖父は満足そうに見送り、草むらからはい出して家に帰った。やるべきことは、これですべて済んだわけだった。

その後はどうなったのかって？

もちろん石井石油の責任が問われることはなかったし、妹の結婚式も滞りなく行われたよ。貨車一両分のガソリンがこつぜんと消えたことは大きな新聞記事になったし、事件の翌朝には機嫌の悪い顔をした米軍の担当者と警察官が祖父の前に姿を見せたが、石井石油に疑惑の目が向けられることはなかった。

ガソリンは列車が鉄橋の上に停車していた二十分間に密かに抜き取られ、川に停泊していた船に積みかえられたと警察は考えていて、不審な船が目撃されなかったかとか、ドラム缶を何十本も買い込んだ者はいないかとか、ガソリンを闇市で売りさばこうとしている者がいないかなどと見当違いの捜査をしていたが、何も見つかるはずはなかったし、実際見つけ方はしなかったのさ。

(終)

空母小学校

子供のころならたいがい誰だって小学校へ行くものだろうが、僕が通ったような小学校を経験した人はあまりいないのではないかと思う。僕が生まれて育ったのは猫坂市内の水上线と呼ばれる地帯だった。文字通り港の画で、倉庫街に混じるようにして小さな木造の住宅が立ち並び、ごみごみした狭いところだった。

用地不足や住宅不足が慢性化していたのさ。空き地などまるでなく、造船所の使われていないドックが僕たちの唯一の遊び場所だったりしたからね。道は狭く常に人だらけで、風がぴたりとやんでしまふ夏の午後などには、空気の中で真つ赤にゆで上がってしまうような気がしたものさ。それでも人口は容赦なく増え続けた。

僕が六歳になるころには、小学校はもう超満員で、狭い教室の中に六十人もの子供がひしめき合っている有様だった。クラスも午前と午後に別れていて、午前の連中は朝登校し、昼前には帰宅してしまふ。そのあと午後の児童たちが登校してきて、同じ教室と机を使って夕方まで授業が行われるという状態だったのだ。

校内は常にバタバタして、ケンカやつかみあい絶えず、限界に達しているのは誰が見ても明らかだった。どうあつても小学校をもう一つ作らなくてはならない。だが、そんな土地がどこにある？

そんなおり校内で小さな火事が起こって、教室が二つばかり使用不能になってしまうと、もうぐずぐずしてはおれなかった。学校を増やすために、市は相当思い切ったことをやる気になったのだ。

時代は昭和の恐慌と呼ばれるころだった。ありとあらゆる産業が

冷え込み、工場の閉鎖や労働者の解雇があいついでいた。海軍も例外ではなく、予算が大幅に減らされ、建造中の軍艦の工事が中断されるということまで起こっていた。あの航空母艦もその一隻だった。水上区にある造船所で建造が始められ、大体の形ができて海に浮かべられたのは良かったが、そこで中断されてしまったのだ。いつ工事が再開されるのかメドすら立たず、今はただ大きな身体で港のすみにプカプカ浮いているだけの存在だった。市はこれに目をつけたのだ。

もちろん海軍は反対した。猛反対した。しかし「来るべき日本の未来をになう国民の教育のためである」と大見得を切られてしまえば、言い返す言葉はなかった。空母の巨大な船体は莫大な係留費を発生させ、海軍は毎月かなりの金額を市に収めており、これをゼロにしてやるどころか、毎月の賃料まで払ってやるといわれれば、頭の固い軍人たちも首を縦に振らざるをえなかった。

翌週から、空母を小学校に改造する工事が始まった。『水上区第七小学校』と命名されたが、一般には『空母小学校』というほうがよっぽどよく通じた。

春が来て、僕は空母小学校に入学した。鉄製の階段を上がり、初めて校庭に立った瞬間のことをとてもよく覚えている。校庭はもちろんもとの飛行甲板だが、とてつもなく広く思えた。その遙かかなたに、司令塔を改造した校舎がぼつんと立っている。もちろんそれだけでは足りず、プレハブ式の校舎もいくつか追加されていた。

授業の内容は普通の小学校と同じだったろうが、休み時間にやる遊びは少し違っていたかもしれない。校庭を走り回ることとはともかく、ボール遊びはあまり勧められなかった。校庭のまわりにフェンスがあるにはあったが背が低すぎ、ボールは簡単に飛び越えて、海

に落ちてしまうのだ。そうになると、まず引き上げることはできなかつた。

僕たちにとってもっともおもしろかった遊びは、やはりなんといつても艦内の探検だった。一応鍵をかけて扉は閉じてあったが、そんなものは数週間しかもたなかつた。誰かが鍵を壊し、子供らはすぐに自由に出入りするようになった。

空母の艦内というのは、本当に驚異に満ちていた。二段式のベッドが何百と並ぶ兵員区画、戦闘機を入れるための格納庫、巨人のために設計されたと思えない機関室などだ。僕たちは何時間探検しても飽きることはなかつた。

船の一番深い部分はどうなっているのだろうかと思ひ、数人で連れ立って、降りられる限り降りていったことがある。船底の分厚い鋼板と本当に竜の背骨を思わせる形の竜骨に手を触れることができて、僕たちは感無量だった。

だがそついう学校生活も終わるときがきた。長い不況が終わり、空母の工事を再開するための予算がとうとうついたのだ。同じころアメリカとの間で戦争が始まり、空母の必要性が増大していた。そのことも工事再開を後押しした。

六年生になつていたが、工事は僕たちがまだ在学しているときに始められた。だから僕たちは、クレーンがうなりを上げ、溶接やりベット打ちの騒音の中で授業を受けなくてはならなかつたのだよ。

だがそれも終わり、卒業式の日が来た。同時に工事も完了し、空母も陸地を離れることが決まった。卒業式の翌日、エンジンをかけられ、八十機の戦闘機と数百人の兵員を乗せ、『軍艦マーチ』を派

手に響かせながら、空母は岸壁を離れていった。船は『猫坂』と命名されていた。そのまま帝国海軍の艦艇リストに乗せられたが、数年後の海戦で撃沈された。だから僕が通った小学校は、今でも南海のどこかに横たわっているはずだよ。

（終）

渡し舟

猫坂の町には運河があり、あるところに橋のない場所があつて、渡し舟が運行されていた。

通行人もそれなりに多く、超えなくてはならない幅も狭いことから、なぜ橋が建設されないのかみな不思議に思っていたが、渡し舟を動かしている業者にも生活があり、市の側にも、橋を作ることによってそれを脅かすことにはためらいがあつたのだらう。橋を建設する計画は、持ち上がっては消え、持ち上がっては消えということは何度も繰り返していた。

この渡し舟だが、流れのない静かな水面だからエンジンつきの船ではなく、三人の船頭がいて、それぞれが数メートルある長い竹ざおを持って、人力で操っているのだ。この三人は兄弟で、父親の代からこの仕事を引き継いでいた。三人の名はそれぞれ一郎、二郎、三郎といった。

この三人はまだ若く、みな一人身だつた。そしてこの三人が同時に恋をした。話をややこしくしたのは、三人が恋した相手が同一の娘であつたということだ。ある女学校の生徒で、対岸にある家から毎日船に乗って通っていた。そのときに三人の目に留まつたらしい。

仲の良い兄弟だつたのだが、いつぺんに険悪になつてしまった。それまでは三人して合図を送りあい、声を合わせて歌いながら船を操っていたものだが、仲違いしてからは黙りこくり、まるで葬式のように船を動かすようになった。

といつても純朴な連中であるから、まだ誰一人娘に声をかけるこ

とすらできずにいた。これを見かねてある日、叔父の一人が三人を集め、話し合いをさせた。その結果、三人のうち誰を選ぶか、娘に決めてもらおうということになった。「誰に決まっても、一切恨みっこはなし」とし、また仲の良い兄弟に戻ることができた。

だが、互いの間に緊張がまったくなかったというわけではない。いつ誰が抜け駆けをして、彼女のハートを射止めてしまうかもしれないという心配は常にあったわけだ。しかしそれでも、三人は正直者であったとは言えるのかもしれない。ある日三人そろって船上で娘の前に進み出、それぞれが求婚を行ったのだ。

一郎はこう言った。

「お嬢さん。あなたのためでしたら、私はどんなことでもいたしましよう」

娘はにっこりと微笑み、こう答えた。

「では、このコインを運河の底から拾ってきて下さるかしら」ポケットから取り出したコインを、娘は水の中にぽんと放り投げた。

「もちろんですとも」一郎は息を大きく吸い込むと、船べりを飛び越え、水の中へ姿を消した。

「お嬢さん。私は何をすればよろしいのでしょうか」二郎が言った。

娘は二郎を見つめ返した。船の上の乗客たちは、どうなることかと見守っている。

「あなたには、これを取ってきていただきたいわ」娘は、そばにあ

る鉄橋を指さした。今しも貨物列車がごうごうと音を立てながら通り過ぎていくところだった。娘は帽子を脱ぎ、ぽんと投げ上げた。帽子は風に乗って高く飛び、貨車の車体に引っかかり、そのまま走り去ってしまった。

「よろしいですとも」二郎は急いで船を岸につけ、さおをほつり出し、貨物列車を追って走っていった。

「お嬢さん、私は何をいたしましょう」三郎が言った。

船は岸についており、そこは通りに面していた。小さな銀行の支店が目の前にあり、そのドアが突然勢いよく開いて、覆面をした一人の男が飛び出してきたところだった。片方の手には重そうにふくらんだ革カバンをかかえ、もう一方の手にはぎらぎら光る短刀を持っている。

「あなたには」娘は指さした。「あの男を捕まえていただきたいわ」

「よしてきた」三郎は船を飛び降り、銀行強盗めがけて飛びかかった。いった。

この運河は水深が深く、底には泥が厚く堆積し、からみつきやすい藻も大量に生えている。一郎はとうとう浮かび上がることはなかった。貨物列車を追いかけていった二郎は、全速力を出して国道に飛び出してきたところを大型トラックにはねられた。三郎はあつという間に腹を刺され、そのまま死んだ。

三人の葬式は、同じ日に同じ家の中で行われた。ただし、一郎の棺おけだけは空のままだった。死体がどうしても上がらなかったからである。跡取りを三人とも一度に失った渡し舟は、そのまま廃業

するしかなかった。翌日から、橋の建設工事が始まった。すぐにかかったことだが、あの娘の父親は建設会社を経営しており、橋の建設を請け負ったのもその会社だったということである。

(終)

ときめき

妙子は若いビジネスガールだった。

ビジネスガールというのは近ごろ猫坂の町でもはやっているもので、大きな会社などに雇われ、綺麗な事務所で事務を取る女たちのことだ。仕事はそれほどきつくない、給料もいいので、多くの娘たちがあこがれたが、競争率は高かった。それなりの推薦を得た娘でないと雇われることはなく、しかも求人条件の中には若さや美貌も含まれているというのが公然の秘密であつてみれば、その職を得たときに妙子がどれだけ鼻高々であつたかは、簡単に想像がつくだろう。

そうやって、妙子はビジネスガールとして働き始めた。身なりに気を配り、最新の流行にそつて、しかし派手過ぎない洋服を苦労して見つけ出して身につけた。通勤列車の車内や駅、街を歩いているときでも常に注目を浴びている存在だということは、自分でもよく承知していた。

だが妙子にも悩みがあつた。男に縁がなかつたのだ。そろそろ結婚を考えなくてはならない年齢だつたし、ボーイフレンドを持つということにも関心がなかつたわけではない。しかし妙子にはボーイフレンドがいなかつたのだ。就職すればふさわしい出会いがあるかもしれないと密かに期待してはいたが、妙子のオフィスは女ばかりで、そういう機会はおとずれそうになかつた。

そうやって妙子は、「自分にはボーイフレンドがない」という感覚を心にぼつかりと開いた穴のように感じながら、職場へ通い続けた。だがある日、その生活に変化が現れたのだ。

それは若い男だった。若いといっても妙子よりは年上で、つりあいはよさそうに思えた。とてもハンサムで、すぐに妙子はその指に指輪を探した。この男とは毎朝列車の中で一緒になったのだが、その機会を利用して、妙子は目を走らせた。妙子は満足し、ほっと息をつくことができた。彼の指には指輪など影もなかったのだ。

どついう男だろうと妙子が興味を持ったのは言うまでもない。だがそれを知る手がかりはなかなかなかった。髪型にも服装にも特徴がなく、職業を探る手がかりは何もなかったのだ。

妙子と彼は、毎朝同じ列車に乗り合わせた。彼がどの駅から乗り込み、どの駅で降りるかも妙子は覚えてしまった。彼は背が高く、すっきりとやせていて、物腰もやわらかかった。瞳はあくまでも透明で、常に遠くを見つめているような風貌だ。

あの瞳の奥にはどのような思考が隠されているのだろうかと妙子は思った。きつと哲学者のように深く、芸術家のように美しいものであるに違いない。なんとかして話しかける機会はないだろうか。妙子は一日中、そんなことばかり考えるようになった。

その機会は突然訪れた。それだけではない。妙子は彼の職業や勤め先まで知ることができたのだ。

それは列車の中で起こった。乗客たちはそれぞれ座席に座って本や新聞を呼んだり、窓の外を眺めていたりした。その列車が突然ガタンと揺れたのだ。読みかけていた本が彼の手からポトンと床に落ちたではないか。

もちろん妙子はすかさず拾い上げた。できるだけ愛らしく見える

ように努力して微笑み、彼の手に返してやったのだ。彼は少しはにかんだ表情で受け取ったが、そのすきに書名を確かめることを妙子が忘れるはずはなかった。

『電子回路理論』

妙子は大きな満足を感じていた。彼は電気技師なのだ。彼がいつも下車する駅のそばには大きな電気機器メーカーがあることをすぐに思い出した。彼はあそこで働いているのだ。なんと立派なことだろう。いつの間にか妙子は、結婚式場で彼と並び、真っ白なドレスを身につけた自分の姿を空想し始めていた。

翌朝、妙子は彼と顔をあわせるのが楽しみで仕方がなかった。前日の件で、少なくとも赤の他人ではなくなっている気がしたのだ。彼と目が合ったときには、押し付けがましくならない程度に会釈をするつもりでいた。きっと彼も会釈を返してくれるだろう。視線を交わし、もしかしたら互いにこころよく微笑み合うことだってできるかもしれない。

そう考えて、この日の妙子は特に念入りに身支度を整えていた。ブレーキをかけ、彼が乗り込んでくるはずの駅へ列車が滑り込んでゆくときには、胸がどきどきした。今日の彼は、いったいどんな服装をしているのだろう。

列車が停車し、彼を含めて数人の乗客が乗り込んできた。もちろん妙子は彼を目ざとく見つけていた。空いた席を探して、彼はキョロキョロしているようだ。妙子はこれを予想していた。中身は空なのだが、かさばる紙箱を一つ用意し、大げさに風呂敷に包んで家からたずさえてきていたのだ。

こんなものを持って出勤する姿などエレガントとは言いがたいが、作戦のためにはやむをえなかった。

妙子はこの風呂敷包みを自分の隣に置き、その席が誰にも取られないことがないよう防御していたのだ。そしてその作戦は成功していた。もうこんなものには用はない。

あつと驚く早業で妙子は風呂敷をほどき、紙箱をパタンとたたんだ。もともと空なのだから、完全にぺちゃんこにすることができた。風呂敷と一緒に、それを自分の背中後ろに隠したのだ。

今や車内で唯一残った空席は、妙子の隣のもの一つきりだった。それを見つければ、彼の顔が輝いた。だがそれが妙子の隣であることに気づき、その表情が曇ったようだった。だがとうとう意を決し、やってきて彼は腰かけた。

列車が走り続けている間、妙子が感じていた幸福感がどれほど大きなものであったことか。いとしの彼が隣にいるのだ。妙子には自信があったのだが、彼もまた妙子と同じように感じている様子だった。そわそわして落ちつかないで、いつものように技術の専門書を広げようとはせず、ただ座っているのだ。

「彼も私に好意を持っているに違いないわ」と妙子は確信した。

列車が走り続け、彼が降りる駅が近づくにつれ、妙子は自分の中の幸福感が薄れてゆくのを感じないではいられなかった。もうすぐ彼とお別れなのだ。

だが妙子は気を取り直した。何も彼と会うことがもう二度とないというわけではないか。また明日も、このようにして会う

ことができるのだ。そして明日こそ口を開き、何か語り合うことができるかもしれない。列車がブレーキをかける音を聞きながら、妙子はそんなことを考えていた。

とうとう列車が停車した。彼は立ち上がるうとした。だがここで、妙子が想像もしていなかったことが起こったのだ。立ち上がりざま、彼はポケットから封筒のようなものを取り出し、妙子に向けて差し出した。

「あとで読んでください」

それだけ言ってさっと下車していく彼の背中を、妙子はぼうぜんとして見送ることしかできなかった。だがすぐに、幸福感が大きな波のように押し寄せてくるのを感じた。片思いではなかったのだ。私と同じように、彼も私に、以前から好意以上のものを感じていたのだ。なんとということだろう。

まわりの乗客たちから注目されているような気がして、妙子は急いで手紙をハンドバッグにしまった。そしらぬ顔で窓の外を眺めているふりをしようとしたが、思いを顔に出さないでいることがこれほど難しいことだと、生まれてはじめて発見したような気がした。

列車が終点の駅に着くのももどかしく、妙子はプラットフォームに飛び降りた。トイレに駆け込み、急いで鍵をかけた。手紙を取り出し、封を切った。中身はいかにも几帳面な文字で、ていねいにわかりやすく書かれていた。彼はこの文字で難しい工学の論文を書いたりするのかしらと思った。妙子は読み始めた。

このようなお手紙を差し上げるのはぶしつけであり、礼儀にもも

とすることは重々承知しております。しかし他に方法がなかったのだとお許しください。これは私一人の意思ではなく、同じ列車に毎朝乗り合わせる通勤者たちの共通の思いであるのご理解ください。

長々と前書きはせず、結論を単刀直入に申しましよう。

どこの会社にお勤めの方は存じませんが、あなたの化粧は濃すぎます。ことに香水は匂いがきつすぎます。これまでずっとこらえてきましたが、もう耐え切れません。我々は鼻が曲がってしまいました。うです。

悪意を持っているわけではありません。まじめなお願いとしてお聞きください。どうか明日からは、もう少し化粧を控えてお出かけください。

読み終わると目の前が真っ暗になり、明日からどうやって生きればよいのか、妙子は見当もつかなくなってしまうた。

(終)

カップの中の海

あれ、コーヒーをいれてくれたんですか？ どうもありがとう。

うん、砂糖もミルクもなしでいいです。ブラックコーヒーが好き
な子供というのも、変わっているかもしれませんが。

あつ、今のに気がつきました？ スプーンを入れてもいないのに、
カップの中のコーヒーが動いたでしょう？ まるで中で小さな魚で
も泳いでいるみたいに。ほらまた動いた。ちゃんと見えました？

でも驚く必要はなくて、これは普段のことなんです。僕が飲むコ
ーヒーはいつもこうなります。始まったのは2ヶ月ぐらい前のこと
でした。

学校の遠足で博物館へ行ったのですが、展示品の潜水艦が突然話
しかけてきたときには、とても驚きました。でもその声は僕一人に
しか聞こえないようでした。引率の先生も同級生たちも何も気がつ
かないで、おしゃべりをしたり他の展示品を眺めたりしています。

話しかけてきたのは旧日本海軍のイ700という潜水艦で、スク
ールバスぐらいの大きさしかない小型のものだけけど、スクリユー
ヤセイル、魚雷発射口もあって、ちゃんと潜水艦の格好をしていま
す。緑色に塗られ、ピカピカに磨かれて、船体は少し誇らしそうで
す。

「何だって？」僕は小さな声でささやき返しました。

「私の言葉が理解できる人間というのはとても珍しいわ」潜水艦は言いました。やわらかい女の人の声で、展示室の中に大きく響いたけれど、やはり僕以外の誰の耳にも聞こえないようでした。

「何だつて？」

「あなたに話があるの。明日は日曜だわ。一人でまたここに来てくださらないかしら。そうすればゆっくりお話ができるでしょう？ ちよつと相談したいことがあるのよ」

「何の相談？」

潜水艦はかすかに笑いました。「明日来ればわかるわ。お願い」

僕と潜水艦の会話はこれだけでした。引率の先生が合図をし、同級生たちと一緒に、僕もそろそろと隣の展示室へ移動していききました。

翌日の日曜日、もちろん僕は再び博物館へ足を運んでいました。電車に乗ることに慣れていなくて、途中で少し道にも迷ったので、たどり着いたのは閉館の30分前のことでした。もう少して入場できなくなるところだったのだけど、入ってみるとお客さんは少なく、潜水艦と落ち着いて話すことができました。相談はすぐにまとまり、僕は家に帰って準備を始めました。

といつても、難しい準備ではありませんでした。数日して、計画を実行する夜がとうとうやってきました。夕食をすませ、両親の目を盗んで、僕はそつと家を抜け出しました。駅へ急ぎます。

夜の博物館はひとけがなく、ひっそりしていました。建物と建物
の間に広い中庭のようなところがあり、潜水艦はそこに展示してあ
りました。でも屋根が作られ、雨には当たらないようになっていま
す。鍵がかかっているのももちろん入ることはできないけれど、フェン
ス越しに姿を見ることはできました。歩道のわきの花壇の中に入り
込んで、僕は水道を探しました。

すぐに見つけることができました。花に水をやるための長いホー
スがついています。ホースを伸ばしてフェンスの中に差し入れ、僕
は水道の蛇口を開きました。

ホースの先から、すぐに水が流れ出しはじめます。中庭のコンク
リートの床をぬらしていきます。水たまりのようになって、ゆっく
りと広がっていきました。

広い場所なので、水たまりが潜水艦に達するまで少し時間がかか
ってしまいました。けどどうとう、潜水艦のへさきをぬらし始め
ました。

この瞬間を、潜水艦は何十年も待っていたに違いありません。突
然ブルブルと船体をふるわせるのが見えました。次にガリガリと大
きな音がして、乗せられていたコンクリート製のしっかりした台の
上から離れるのが見えました。

すでにその足元はすっかりぬれていたわけですが、ただの水にす
ぎないはずなのに、まるでぬるぬるした油の上にいるかのように、
潜水艦がするりと数メートル前進したではありませんか。目を丸く
して、僕はフェンス越しに見つめていました。

次に起こったことは、僕をもっと驚かせました。夜だということ

もあって、ぬれた床は真っ黒に見え、言われなければコンクリートとは気がつかないかもしれせん。波一つないまっ平らな海面だと言われれば、そう信じることだつてできそうです。僕の目の前で、その想像上の海の中へ、潜水艦はゆっくりと潜航を始めたのです。

船体はゆっくりと沈み、小さくなつてゆきます。まわりにかすかな波が立っているのまで見えます。やがて水の上には、甲板より上の部分が見えているだけになりました。スクリューを動かしているのか船尾に白い泡が立ち、へさきも水をかき分け始めています。

そのうちに甲板もすっかり姿を消し、四角い塔のようなセイルが残るだけになりました。そのセイルもゆっくりと水面下に消えてゆきます。とうとう最後はパイプのような形の潜望鏡が残るだけになり、それも姿を消してしまつと後にはもう何もなく、ただぬれたコンクリートの床が残っているだけでした。

長い間僕は、水道の栓を閉めることすら思いつけないまま、突っ立っているしかありませんでした。けどはつとわれに戻つて水を止め、最終電車がなくなる前に駅へ行き、家に帰りつくことができました。両親はすでに寝ていて、何も気づかれることはありませんでした。

こうやって、潜水艦は自由の身になることができたわけでした。してあげたことに対してお礼をしてほしいとは、僕は特に思いませんでした。ぬれた真っ黒なコンクリートの中へ潜水艦が沈んでゆくところなど、普通なら一生に一度も見ることのないシーンだったからです。

でも潜水艦は潜水艦なりに恩義を感じているようで、ときどき僕の顔を見に来るようになりました。だけどいくら不思議な力のある

船でも、僕の目の前に自由自在に姿を現すことはできないようです。それにふさわしい都合のよいものが手近にないことには。

それはもちろん水気を含んでいて、表面は夜の海面と同じように真っ暗でないといけません。そういう場所であれば、潜水艦が浮上することはできなくても、潜望鏡の先端を突き出して、僕の顔を見ることがぐらいはできます。

ほら来た。もう一度僕のコーヒークップを見てごらん下さい。潜望鏡の先が出てきたでしょ？ もう高さ30センチぐらいある。見ていると高くなって、いつも50センチぐらいにはなります。てっぺんにレンズがあつて、僕をじつと見つめているでしょう？

あのレンズの向こうに誰がいるのかは知らないけれど、きっと僕に恋をしているのだと思います。

(終)

漂流船

子供のころから私は読書が好きだったが、中でも印象に残っている本がある。タイトルは『世界の七不思議』といい、実録風の体裁を取ってはいたが、内容の正確さはあまり期待できないだろう。「アレキサンドリアの大灯台」や「古代エジプトのファラオの呪い」といった話が並んでいた。その中に「漂流船の謎」という一章があったわけだ。

漂流船とは、なんと魅力的な響きを持った言葉だろう。フライング・ダッチマンやマリー・セレスト号が有名だが、人間が一人も乗っていないまま海上を漂い続けている船のことだ。操る者もなく、風と波のなすがまま、場合によっては数世紀も漂い続けると書かれていたのだ。

不思議な話ではないか。例えばマリー・セレスト号は、発見されたとき、つい今しがたまで人がいたとしか思えない状態だったそうだ。食堂のテーブルの上には朝食が用意され、コーヒークップは湯気まで立てていた。海は荒れてもおらず、船内にも積荷にも異常はまったく見られず、船を離れなくてはならない理由は何一つ見当たらないにもかかわらず、乗組員たちの姿はなかった。そしてその後も、マリー・セレスト号に乗っていた者たちの姿が見かけられることは二度となかったのだ。

十歳の少年にとって、これほど心躍らせる物語はそうそうはないだろう。私なりにいろいろと空想を働かせたりしたものだったが、何年もたつて自分がそれと同じ経験をするとは、まったく想像もしていなかった。大人になり、気がつくとは私は船乗りになっていた。そしてある船に乗り組むことになったのだが、北大西洋でのある夜、

この船は氷山に衝突し、あっという間に沈没してしまっただのだ。

事故が起こったのは真夜中のことだったが、夜が明けてみると私はただ一人、小さな救命ボートに乗り、ぬれた身体で毛布にくるまってふるえていたのだ。仲間たちはみなすでに海の底にいたのだろう。沈没の混乱の中で荷物が失われ、救命ボートの上には食料も水もほとんどない状態だった。仲間が呼んでいるということなのかもしれないと、なかば死を覚悟したことを覚えている。

だがそのとき、水平線のかなたにあの船の姿が見えてきたのだ。そのときの私の喜びが想像できるだろうか。震える手でオールをつかみ、ほとんど残っていない体力を振り絞って、その船に向かって私はボートをこぎ始めたのだ。

運良く船べりに縄ばしごが垂れ下がっていたので、私は甲板に立つことができた。そして耳をすませたのだ。

最初に気がついたのは、あまりの静けさだった。動くもの一つなく、人影一つ見えなかった。中型の漁船で、風がないので帆はだらしとしていいる。

「おい」私は声を上げた。だが私の声は甲板や青い空に吸い込まれてゆくばかりで、返事はなかった。

私は船内を探検してみた。船のサイズから見て、乗組員は7、8人というところだろう。港を出て日が浅いのか、水も食料も十分積み込まれている。だが誰もいないのだ。室内が荒らされた様子もなく、私物や備品類もすべてあるべき場所に収まっている。船長室へ行って航海日誌を読んでみようとしたが、きちんとした几帳面な文字でつづられていたが、外国語なので一行も理解することはできな

かった。

私は無線室を見つけ出した。だめかもしれないと思いつつスイッチに手を伸ばしたのだが、なんと無線機はちゃんと使える状態にあるではないか。暖かいオレンジ色に光る電源ランプがなんと美しく思えたことか。私がすぐに救難信号を送り始めたことは言うまでもない。

いくつの中継局を経て、私は運良く海軍司令部と話すことができた。自分が航路を大きくはずれた場所にいることはわかっていたから、一般商船の手で救助されることは望み薄だったのだ。海軍の司令官は、私のためにすぐに船を派遣すると約束してくれた。

無線機のスイッチを切るとあまりにほっとして、私はイスの上へへたり込んでしまった。長い間身体を動かすことさえできなかった。かなりの時間がすぎてからやっと、昨夜の事故と空腹のせいで体力が失われてしまっているのだと気がつくことができた。机に手を置いて、私はゆっくりと立ち上がった。

キッチンへ降りてゆき、すぐに食事の用意をはじめた。パンを切り、コーヒーを沸かしたのだ。新鮮なハムと卵があったので、フライパンの上でいためた。

胃袋を満たしたところで、自分でも気がつかないまま、私はイスの上で居眠りを始めてしまったようだ。突然目が覚めて、やっとそのことに気がついたのだ。気分はよく、立ち上がって私は大きく伸びをした。窓から差し込む太陽はもうかなり水平線に近づいている。

このまま日が暮れるのだろう。だが海軍司令官は、迎えの船が到着するのは明日の明け方近くのことだろうと言っていた。それまで

は何もすることがない。

私だって、もちろんこの船が無人になるに到った理由に関心がなかったわけではない。だがすでに船内は調べつくし、手がかりが何も無いことはわかりきっている。これ以上やれることはないではないか。だが、自分を取り囲んでいる空気がひどく冷たくなっていることに突然気がついたのは、このときのことだった。

部屋を出て、私は甲板の上に立った。そして、驚きのあまり声を上げたのだ。

キッチンで眠りに落ちたときまで、たしかにこの船は何もない大洋の真ん中にぽつんと浮かんでいた。だがそれが今は巨大な氷山が船に寄り添い、夕暮れが近いので赤くなりかけた太陽の光を受けて、宝石のように輝いているではないか。

意味がわからず、私は長い間呆然と立っていたに違いない。氷山は船尾に触れ、ギシギシと音を立てている。ほとんど風のない日だった。船も氷山も同じ海流に乗って流されているのだが、両者は大人と子供ほども大きさが違う。何かの理由で速度に差がつき、先行していたこの船に氷山が追いついてきたのだらうかという気がした。

だがとにかく、追突するような形で、氷山は船に身体を押し付けているのだ。本当に大きな氷山で、小さな丘ほどもあるだらう。もっと詳しく見てやろうと、私は船べりに近寄った。そして気がついたのだ。

氷の内側から、彼女は私をまっすぐに見つめ、見下ろしていた。すらりと美しい身体を金色に輝くヨロイで包み、右手には長い剣を

持っている。なめらかな髪をカブトの下に隠している。瞳は冬の空のようなブルーだが、優しさなどカケラも感じられず、視線は私をまっすぐに突き刺すかのようだ。

彼女に見つめられ、私は身体を動かすことができなくなってしまった。こういう姿で、彼女は氷山の氷の中にたたずんでいたのだ。

彼女が何を考えているのか、もちろん私にはわからなかった。氷を断ち割り、今にも氷山の中から飛び出してきそうな気がした。そして船に乗り移り、私の目の前に立ち、その剣をきらめかせるのだらう。

だがその瞬間、私は奇妙なことに気がついた。ずっと以前、まだ子供だったころだが、私は彼女の姿を見たことがあるような気がし始めたのだ。

心の中を探り、私は思い出すことができた。たしかに子供のころ、私は彼女の姿を何十回も目にしていたのだ。それはあるビスケットメーカーのことだ。ある会社が自社のシンボルマークとして『いくさの女神』の姿を用いていたことがあるのだ。

それはまったく、いま私の目の前で氷に閉ざされているこれと同じ姿だった。顔の形や表情、カブトやヨロイの装飾までそっくり同じだということに気がついた。彼女はこの姿で何百万枚も印刷され、ビスケットを詰めた箱の表を飾っていたのだ。

私は自然に、あの飛行船のことを思い出すことになった。これも私が子供だった時代の話だ。『いくさの女神』印のビスケットメーカーがスポンサーになって、ある探検旅行が企画されたことがあったのだ。飛行船に乗って北極海を横断し、ヨーロッパから北アメリカ

カへ到るといふもので、人類が史上初めて北極点の上空を飛行するということで人々は興奮し、かなりの期待が集まったことを覚えている。

数人の若い冒険家たちを乗せ、飛行船はロンドンを飛び立った。大西洋を北西に進み、アイスランドを通過したことは確認されたのだが、彼らが北アメリカへ姿を現すことはいになかった。もう三十年も前のことだ。捜索隊が派遣されたが成果はなく、飛行船は北極のどこかで遭難したものと結論付けられた。そして月日が流れ、今ではほとんど忘れられてしまっている。

飛行船に何が起こったのかは、今の私には簡単に想像がつく。機体に致命的な故障が起こったか、予想外の強い嵐に出会って墜落してしまっただろう。それが北極の氷原のどこかで、冒険家たちは全員死亡し、機体の上にはゆっくりと雪が降り積もっていったのだろう。

やがて雪は機体を完全にうずめ、全体が一つの巨大な氷塊になる。海からほど遠からぬ場所ではあったのだろう。ある日その氷が割れ、冰山となって海へただよい出たのだ。

もう想像がついたことだろうが、この飛行船の表面にはビスケットメーカーのシンボルマークが大きく描かれていたのだ。三十年たってもその色が失われることはなく、当時のままの姿で私を見下ろすことになったのだ。

私だから、これがビスケットメーカーのシンボルマークだと理解することができた。だがもし何も知らない人であれば、本物の女神のような超自然の存在が氷の中に閉じ込められている姿だと感じて、も仕方のないことだろう。外国人であるこの船の乗組員たちには、

まさにそのことが起こったのだ。洋上で冰山を見つけ、彼女の姿に驚き、畏敬と崇拜に似た気持ちを感じて、船を離れてボートをこぎだしたのだらう。その乗組員たちの姿も、私は冰山の上に見ることができた。

彼らはすべて死に、今では冷たい氷の上に横たわっていた。全員がのどを鋭く切り裂かれ、血が流れ出しているのが見える。彼らに死をもたらした者の姿も、私は氷の上に見つけることができた。

あの船員たちの最大の失敗は、全員が一度に船を離れ、冰山の上へ乗り移ってしまったことだらう。いくさの女神の姿がそれだけの美しさと異様さを備えていたことの証明でもあるのだらうが。

だが船の上に一人でも残っておれば、狼に襲われてあつという間に全滅してしまうことも、無人になった船がいつしか冰山を離れ、ひとりでに漂流を始めるということも起きなかつただらう。

だが私も、いつまでも彼らの不運に思いをはせているわけにはいかなかった。ガラガラと大きな音を立てて冰山の一部が崩れ、小規模な崖崩れのようなものが突然起こり、船べりの一部をうずめたのだ。

もちろんこれだけでは大した出来事ではない。甲板の一部がへこんだというだけのことだ。だがすぐに私は、別の意味にも気がついたのだ。これで冰山と船の間には橋がかかった形になり、あの狼はいつでも好きなときに氷の上を離れ、こちらに乗り移ってくることをできるようになったということなのだ。そして狼も、同時にそのことに思い至ったようだった。

彼の目には、私も憎むべき敵の一人であるように見えていたのだ

ろう。氷の上に長々と身体を休めていたのが起き上がり、弾かれたゴムボールのように飛び上がって、氷の斜面をあっという間に駆け上がり、私からいくらも離れていない場所までやってきたのだ。

もちろん私にはどうすることもできなかった。ただ一つ実行できたのは、手近にあったマストにつかまり、よじ登り始めるということとでしかなかった。垂直なマストで、簡単なハシゴがついてはいる。だが四足の動物に登ることができるようなものではない。すぐに私はマストの支柱の一つに身体を落ち着け、こわごわと見下ろすことになった。

狼は真下におり、声を出してはいないが、私にキバを向けている。いかにも口惜しげにしっぽを振り、イライラと歩き始めた。数歩行つては振り返り、数歩行つては振り返りを繰り返し、そこを離れようとはしないのだ。私はマストの上に釘付けにされるしかなかった。

太陽は水平線の下に沈み、わずかに空の輝きだけでまわりを見ることができ。狼は私の真下で腹ばいになり、身体を休めるつもりになったようだった。あせることはない。時間はいくらでもあるということなのだろう。

やがて月が昇ったが、目を閉じて、狼は身動き一つしなかった。前足の上にあごを乗せ、両耳を伏せ、しっぽは甲板にそってだらりとさせている。だが私にはわかっていて、やつは眠っているふりをしているだけだろう。私かわずかでも降りるそぶりを見せれば、すぐに目を開くだろう。

こうやって、私と狼の我慢比べが始まったのだ。だが私は、それほど深刻な気分ではなかった。食事をすませ、睡眠をしっかりとつた直後なのだ。疲れてなどおらず、明日の朝までここががんばり続

けることができるだろう。夜が明ければ、海軍の船が迎えにきてくれる。

タヌキ寝入りをしている狼の真上で、私もできるだけリラックスすることにした。あせっても何もよいことはない。身体力を抜き、支柱に座り続けた。だがリラックスするといっても、私はいささか度を過ぎていたのかもしれない。キッチンで一眠りしたといっても、そんなものではまだまだ不十分だったのかもしれない。自分でも気がつかないうちに、私は居眠りをはじめていたのだ。

気がついたのは、奇妙な夢を見たからだだった。自分がどこか高い場所において、機嫌よくまわりの風景を眺めていたのが不意に足をすべらせ、身体のバランスを崩して転落しそうになるのだ。ずいぶんと不安な夢だったが、体中の筋肉をピクンと緊張させながら、私は一瞬で目を覚ました。そしてまわりで起こっていることに気がついたのだ。

私の身体は大きく斜めに傾き、支柱からずり落ちかけていた。手の力が抜け、眠っている間にそうなっていたらしい。私の身体は、もうその半分以上が何も無い空中にあったのだ。一カ所だけでぶら下げられた布袋のように落ちかけていたのだ。

狼は起き上がり、期待を込めて見上げている。口を大きく開き、舌とキバを見せている。腕に力を込め、私は身体を引き上げようとした。だが不可能だった。それほどバランスを崩してしまっていたのだ。うめきつつ再び力を込めたが、やはりだめだった。悲鳴を上げ、私は甲板の上に落下してしまった。

足から落ちたということもあるし、ケガをするほどの高さではなかった。だが狼が歓迎してくれるというわけではなかった。4本の

足をバネのように使い、もちろん飛びかかってきたのだ。

私はさつとよけるのが精一杯だった。何とか一撃目をかわし、全速力で走り始めた。

狼から身を隠すには小さすぎる船だった。結局私は船首へ逃げ、へさきのマストによじ登るしかなくなってしまったのだ。このマストは前を向いて船首から生えていて、垂直とはとても言えず、ピノキオの鼻のように斜めに突き出している。登るとその下には何もなく、海面がそのまま広がっているのだ。狼に追いかけられているのでなければ、誰も足を向けない場所だ。

手足を巻きつけて私はつかまっていることができたが、狼にはそんなことはできない。私まであと3メートルというところで立ち止まってしまった。マストは電柱のように丸く、その上に立つのは難しい。

私に飛びかかりたくて、狼はうずうずしていたことだろう。だがそんなことをすれば、一緒に海に転落するのはわかりきっている。そこまでバカな動物ではないのだ。

夜明けが近づき、あたりは明るくなり始めていた。水平線のむこうに太陽の最初の丸い弧が顔をのぞかせ始めている。昨日西の水平線の下に消えてから、地球の下をぐるりと一周して戻ってきてくれたのだ。うれしさのあまり、私は投げキスをしたような気分になった。そして次の瞬間、待ちに待ったものが私の耳に届いたのだ。拡声器を通して割れた人間の声だったが、はつきりところ聞こえた。

「伏せろ。弾に当たるな」

もちろん私は言われたとおりにした。腹ばいになったまま身体をできるだけ小さくし、すべての筋肉の力を使ってマストにしがみついたのだ。すぐに大きな銃声が響いた。

ダン、ダンという二発だった。狼が小さな悲鳴を上げ、さっと身をひるがえらせる気配があったが、一瞬遅かったようだ。一発が命中し、私がおそろおそろマストの上から身を乗り出したときには、すでに甲板の上で事切れていた。海の上に汽笛が響いたので、その方向を向いて私は手を振った。

漂流船にそつて、海軍の魚雷艇が航行していた。全長30メートルもない小さな船だが、その姿がいかにかに心強く思えたことか。軍艦というよりも大型の高速ボートという風情で、いくつかの機関銃と魚雷発射装置を備えているだけだ。甲板に腹ばいになって狙撃銃を構えていた水兵が身体を起こすのが見えた。銃身の長い命中率の高い銃で、これで狼を狙撃してくれたのだ。

エンジンをゆるめ、水兵たちはすぐに漂流船へ乗り込んできた。私は礼を言い、一人一人と握手をした。艇長は30歳にもならない若い男だったが、いくさの女神と氷山の上の死者たちの姿を見て、それなりに心を打たれている様子だった。港へ持ち帰るために漂流船をロープでつなぐ用意を水兵たちに命じ、死者を水葬する準備も進めた。

すべてはとどこおりなくすんだのだが、次に問題になったのは、狼の死体をどうするかということだった。物問いたげに艇長が見つめるので、私は提案した。

「命をかけて守ろうとしたんです。ずっと彼女のそばにいさせてやろうじゃありませんか」

甲板に横たわる狼を、私たちは見下ろしていた。今は目を閉じて、穏やかな顔つきをしている。手を伸ばし、私は毛皮をそつとなでてやった。

狼が人間の娘に恋をすることがあるのかどうか、もちろん私にはわからない。だがこの漂流船の上での一連の出来事は、そう考えるしか解釈のしようがないではないか。北極の氷原で狼は偶然彼女を見つけ、恋をし、自らその守護者たろうとしたのだらう。氷が割れて海の上を漂い始めたときにも、彼女のそばを離れることはなかったのだ。

冰山の中に姿を見つけ、ボートをこいで近寄ってきた船員たちも、彼の目には彼女を迫害する敵に見えたのだらう。だから彼なりに全力を尽くし、彼女を守ろうとしたのだ。

私たちは狼を冰山の上へ移し、いくさの女神のすぐそばに横たえてやった。近くから見上げると、神々しく輝く氷壁の向こうにたたずむ彼女の姿は本当にこの世のものとは思えず、狼が命をささげる気になったのも理解できるような気がした。血なまぐささや乾燥した軍の秩序に慣れきっているはずの艇長や水兵たちですら、彼女を見上げてため息をつくのを私は聞き逃さなかった。それは彼らの魂が一瞬で肉体を離れ、この女神に導かれるままどこかへ行ってしまうが、いたがっているかのように聞こえた。

これで私の物語は終わることになる。漂流船は港までけん引され、私は無事に本国へ帰ることができた。その後あの冰山がどうなったかは、誰も知らないことだ。だが何が起こったのか、ある程度の想像はつく。

ずっと南へ流されてゆき、氷山は溶け、次第に小さくなっていった。その途中、何かの拍子に氷が大きく割れ、女神と狼は海へ落ちていったことだろう。今はどちらも海底に眠っているはずだ。願わくば、彼らが互いに遠からぬ場所に横たわっていますことを。

(終)

禁煙席にて

井上梅五郎といえ、猫坂あたりで知らぬものはなかつただろうよ。大工の親方でな、背が高くしかも太っていたから、目方は普通の倍、もしかしたら二倍半はあろうと人々は噂しあつたもんさ。

この梅五郎はタバコが好きでな、いつもスパスパやっておつた。だから停留所でバスを待つ間もそうだった。匂いの強い独特の銘柄が好きでな、白いヒゲが黄色がかっておつたよ。

知つての通り、あの路線のバスは一時間に一本しか来ない。そうであれば、乗客はほとんど毎日同じ連中が顔をあわせることになる。半月もすれば互いに顔見知りになり、会釈ぐらひは交わすようになる。その中に佐藤女史というのがいたと思つてくれ。女学校の教師でな、たいそう厳しい女だったという話だ。

車内は禁煙だから、もちろん梅五郎もタバコを捨ててから乗り込んだが、こういう男のことだから、何もせずに立っているだけで匂うのさ。それである日、車内で佐藤女史が一言ご忠告申し上げたというわけさ。

「あなた、もう少しタバコはお控えになつたほうがよろしいんじゃないですか？」

この無遠慮には車内にいた全員があきれてしまったが、梅五郎はそれにどう答えたと思う？

「あんたのしなびた顔のしわの奥にもぐりこんだ三年半前のおしろいの匂いよりは、何ほかましじゃないですかい？」

車内が爆笑の渦に包まれたのは言うまでもない。佐藤女史は顔を真っ赤にし、すでに座っていた若い娘を押しつけるようにして、狭い隙間にむりやり身体を押し込んで座席に腰かけた。梅五郎は、まわりの乗客たちと目配せを交し合っていた。

だが、騒ぎはこれだけではすまなかった。翌朝から梅五郎は、バスがやってきて停車するぎりぎりの瞬間までタバコを吸い続け、煙を肺の中いっぱい貯めて、一息も吐き出さずに車内に乗り込んでくるようになったのだ。そして佐藤女史の姿を見つけてニンマリ笑い、すたすたと歩いていく。彼女の真横に立ち、当たり前のような顔をして話しかけるのだ。

「やあ、佐藤先生。今日はまた一段とお美しいですなあ」

その息が煙たいこと煙たいこと。佐藤女史はうつつとなり、ハンカチを鼻に当てて下を向く。一言も返事はしない。梅五郎は顔を上げ、まわりの男たちとニヤリと笑い合う。佐藤女史だけでなく、まわりの乗客たちも匂いを感じたが、窓を開けて換気することはできなかった。季節は真冬で、このバスは暖房のききが悪いのだ。

同じことが何日か続くと、「この車内ではタバコは禁止されているはずではないか」と佐藤女史は車掌に苦情を言った。車掌は苦笑いしながら注意をしたが、梅五郎はおどけた顔で「おいらは車内じや一本も吸っちゃいませんぜ」と答えるばかりだった。

翌日から、梅五郎と佐藤女史の我慢比べが始まった。佐藤女史は車内ではできるだけすみに場所を取り、梅五郎が近づくのが難しくなるようにした。だが梅五郎も、身体は大きいがひどく身軽なので、ちよっとした隙間を見つけては、ひょいひょいと入ってきてしまう

のだ。これには佐藤女史もどうすることもできない様子だった。

そうこうするうちに、梅五郎はさらに新しい作戦を思いついた。タバコを二本まとめて火をつけて口にくわえ、二倍の煙を体内に蓄えてからバスに乗るようになったのだ。これには佐藤女史もほとほと参ってしまったようだった。このころから、タバコを吸っていないときでも、三メートル離れて通り過ぎるだけで、梅五郎の身体からはタバコの匂いが感じ取れるようになった。佐藤女史はますます車内で小さく縮こまるようになった。

梅五郎は調子に乗り、一度にくわえるタバコの数を増やしていった。三本になり四本になり、五本になった。火のついた五本のタバコをくわえてスパスパやっているというのはなかなかの見ものではあったが、それが梅五郎の最高記録となった。

その朝も梅五郎は、五本のタバコに火をつけた。遠くにバスの姿が見えてきた。肺をふいごのように忙しく動かし、梅五郎は煙を吸い込み始めた。まわりにいた者の耳には、古びたバンドがこすれるときのような音がその身体から聞こえてくるような気がしたそうだ。

バスが停車した。息を吐かないために口を閉じ、顔を真っ赤にして、梅五郎は踏み段を上がり始めた。一段、もう一段。なんだか今日はひどく苦しそうだ。それでも三段目を登りきり、バスの床に立つことができた。

だが突然、梅五郎はうつと叫び声をあげ、白目をむいてしまった。そのまま意識を失い、前のめりに倒れた。突き出た腹部が床でバウンドしたが、自分で起き上がる気配はなかった。梅五郎は気を失っていたのだ。大きな身体ゆえ、何人も力をあわせて車外に運び出し、すぐに病院に運ばれたが、そのまま二度と目を覚ますことはな

かった。

翌日からはバスの乗客が一人減ってしまったが、佐藤女史は今でも元気に通勤しているそうだ。なんでも何かの難しい資格試験に合格したとかで、ちかぢかもっと給料のよい別の学校へ転勤することが決まっているそうである。

氷づめ娘

ある日太郎と次郎は、道ばたで猫が死んでいるのを見つけた。自動車にはねられて、首の骨がぶらぶらになっている。立ち止まり、しっぽでぶら下げて持ち上げながら二人は考えた。これを何かに利用できないかな？ 用途を思いつき、相談をし、実行に移すことにした。

太郎は以前から、「桜の木の下には死体が埋まっている」のが本当かどうか気になっていた。でもまさか、全部の木の根元に埋まっているとは思えなかった。だけど埋めると栄養がよくなって、そのおかげで花がきれいに咲くということはあるし、そうない気がしていた。

日曜の朝早く、二人は自転車で乗って猫の死体を取りにいき、紙袋の中に入れた。ハンドルに引っかけて走ると、猫はゆらゆら揺れた。小学校に着いた。桜の木が二本あるが、一本はもう一本よりも小ぶりで、ひ弱な感じがする。これに栄養を与えることにした。

スコップを持ち出して、二人は仕事に取りかかった。ところが掘り始めていくらかもいかないうちに、土の中からおかしなものがでてきたのだ。分厚い木の板で作られた箱で、がっしりとしている。泥だらけで、何十年前前から埋めてあった感じがする。フタは簡単には開きそうになかった。中に何が入っているのかはわからない。

でもその箱のことは、猫を埋めてから考えることにした。仕事を終え、箱を手に二人は学校を離れ、近所の丘の上へと出かけた。線路と海を見下ろすことができる二人のお気に入りの場所で、自転車で降りて腰を落ち着け、二人は箱を調べはじめたのだ。

片手で簡単に持ち上げることができるとの大きさ。南京錠がついている。鍵穴には泥が詰まっている。結局、箱を壊すしかないということになった。石を拾い上げ、二人は何回もたたいた。箱はとうとう壊れた。

外側は泥まみれだったけれど、内部はきれいだった。何か防水紙にくるまれた状態で入っていた。防水紙を開けてみると、小指ほどの大きさのかわいらしいキーが一つ、コロんと地面に転がり落ちた。もちろん拾い上げて眺めたが、古いキーだということ以外は何もわからなかった。ドアのキーかもしれないが、どこのドアなのか、二人には見当もつかなかった。

数日後の新聞に、ある記事が載った。ごく小さな記事だったが、二人が通っている小学校に関係のある話だった。

何年も使われていない倉庫が校舎の裏手にあるのだが、教室を増築するためにこれが解体されることになった。するとなんと、高さ1メートルぐらいある大型の金庫がその地下室で発見されたのだ。だが鍵がかかっていて、ドアを開くことはできなかった。誰にきいてもこの金庫のことを知っている人は一人もおらず、中身を確認するために職人が手配され、数日中にはドアが開かれることになるであろうという内容だった。太郎はぴんと来て、すぐに次郎と相談した。

次の日曜の朝早く、二人は倉庫の中に忍び込んだ。地下室から出され、金庫は広い部屋の中央にどかんと置かれていた。二人はさっそく例のキーを試したが、それが鍵穴にぴたりとあつたときに感じたぞくぞくするような興奮は、おそらく経験した人でないと理解で

きないだろう。

二人がすぐさま扉を開いたのはいうまでもない。だが残念なことに、金庫の内部は空っぽだったのだ。棚や引き出しがいくつもあるけれど、本当にそれだけだった。でもあちこち探して、折りたたんだ紙切れを一枚、とうとう見つけることができた。一番奥の目立たない場所に押し込んであったのだ。何十年ここにあったのか、紙は古びて黄色くなりかかっている。手にとって広げると、文字が書いてあるのを読むことができた。時代がかった古めかしい文字だが、誰かの手書きのようだ。

『正一位　イカズチのウロ　セコイアに向かって3間半』

「なにこれ？」

「さあ？」

この暗号のようなものをノートに書き写し、紙と金庫は元通りにして、二人は倉庫を出た。

「正一位ってなんだろうね？」図書館へ行ってみることにした。本棚から辞書を取り出して、二人は調べ始めた。

「なんかの位のこと？」

「この本は漢字が多すぎてよくわからん」

「イカズチって？」

これはすぐにわかった。雷のことだ。それに『ウロ』とは穴のこ

と。セコイアもすぐにわかった。杉のようにまっすぐで、とても背の高い種類の樹木だ。原産地は北アメリカ。『3間半』が物の長さをあらわしていることもわかった。古い時代の単位で、現在の約4・13メートルにあたる。

「この暗号は、何かの場所を示してるんだらうけど」

「宝のありかかな？」と次郎はうれしそうに言ったのだが、太郎は少し不安になった。宝どころか、死体でも埋めてあったらどうする？ だがとにかく、正一位の意味がわからないとどうしようもない。太郎は辞書を本棚に戻した。伸びをしながら、次郎は退屈そうに窓の外を眺めている。

「あつ」突然次郎が言った。

「なんだい？」

「あれだよ」

太郎は、次郎が指さしている方向を見た。図書館の隣には神社があり、祭りが近いのか、砂利を敷きつめた境内には派手な色のノボリがいくつも立てられていた。その一つにこう書かれていたのだ。

『正一位猫坂神社』

「正一位って、神社のことなんだ！」二人は同時に叫んだ。

「でもまさか、あそこに見えている神社のことじゃないよな」

「まさか。セコイアの木がないもん」

二人は、このあたりにある神社のことを片っ端から調べてみることにした。「郷土の神社のことを書いた本はありますか」と質問すると、司書は驚いたような顔をした。次郎と太郎は、そういう本を読みたがるタイプには見えなかったのだろう。

本を借りて、二人は調べはじめた。まず最初に、このあたりにある神社をすべてノートに書き出した。再び司書のところへ行き、郷土の博物誌について書かれた本を借り出した。そしてとうとう、その一ページにこんなことが書かれているのを見つけたのだ。

『昭和初期、米国から多数輸入された杉の苗の中にセコイアが一本だけ混じっているのが発見された。何かの手違いによる混入であるうが、珍しいものであるから、この苗はフシキ神社の境内に植えられることになった。フシキは「節木」と書き、内部が空洞になっている木を意味する。フシキ神社では、雷に打たれて空洞になった巨木を御神体としている』

フシキ神社？ この名には見覚えがあった。さっきノートに書いたりストに含まれていたのだ。図書館を走り出て、二人は自転車に飛び乗った。次郎の家に立ち寄り、シャベルや必要な道具類を持ち出したのはいうまでもない。

地図を頼りに、フシキ神社はすぐに見つけることができた。山の中にぽつんとあるひとけのないさびしい神社で、イカズチのウ口もすぐに見つかった。境内にある大きな木で、たしかに雷に打たれて、幹の左半分が黒くこげていた。えぐれて穴のようにもなっている。セコイアの木もすぐに見つけることができた。植えられてからまだ

数十年しかたつていないので、期待していたほど巨大な木ではなかった。それでも4階建てのビルほどの高さがあるだろう。幹の直径はドラム缶と同じくらいだ。

巻尺を取り出し、御神木からセコイアにむかって、二人は距離を計ろうとした。しかしその必要はなかったのかもしれない。目的地には三角形の石が埋めこまれていて、とがった頭を土の上に見せていたのだ。もちろん二人はそこを掘り始めた。石をどけ、掘り進んで50センチぐらいいったところで、大きな箱が出てきた。木の箱だが鍵も何もなく、フタを開けると、今度はブリキでできた中箱が姿を現したではないか。だが、これはフタをハンダ付けして密封してあった。どうやって開ければいいのか、二人にはわからなかった。とりあえず持ち帰り、次郎の家に隠しておくことにした。

翌日、二人は一日中このブリキ箱の話をしていた。だが結局いいアイデアは浮かばず、ノコギリを使ってブリキの表面に切れ目を入れて、ペンチで少しずつ引きはがしていくしかないということになった。放課後、次郎の家で落ち合い、二人は仕事を始めた。

フタが開いたのは、30分もたったころだった。内部にはさらに木の箱があったが、これにも鍵はなかった。開けてみたが、密閉されていたせいで湿気はまったく浸入しておらず、中身を包んでいる布袋は完全に乾いていた。ちょうど人間の頭ぐらいの大きさがあり、形もそんな感じだ。片手で持つには少し重い。

袋の中身を取り出したとき、二人は息をのまないではいられなかった。石膏でできた仮面が出てきたのだ。「こりゃあなんだい？」

若い女の顔で、穏やかに両目を閉じている。落とさないように気をつけながら、次郎は裏返してみた。何か文字が書いてある。

「きれいな死に顔だな」太郎はつぶやいた。

「なんだって？」次郎が顔を上げる。

「デスマスクだもん」

「デスマスクって何だい？」

「死んだ人の顔に石膏を押し付けて、ハンコを押すみたいにして本物そっくりに作ったマスクのことだよ」

驚いて次郎が落としてしまいそうになったので、太郎はあわてて受け止めた。ずっしりと重い。石膏ってこんなに重かったかなという気がした。「入っているのはこれだけかい？」次郎は顔をしかめた。

「そつらしい」

二人はもう一度マスクを眺めた。年齢は20歳ぐらいか。見たことがないほどきれいな顔だと太郎は思ったが、次郎は気味悪そうに顔をしかめ続けている。

マスクの女は細面で、鼻筋はとても細いが、鼻がとがっていると、いうほどではない。唇は、夜になったのでちよつと閉じて休憩している花のような形で、眉はやわらかいカーブを描いている。デスマスクではなく実物を目にするのができたらどんなに素敵だろうと太郎は思った。当然のことながら次郎はほしがらなかった。こ

れは太郎の所有物になった。カバンの中に隠して持ち帰り、押入れの奥にしまっておいた。

デスマスクを目にしたときの次郎の表情をよく覚えていたから、調べものをするために図書館へ行くときには、太郎は次郎をさそわないことにした。自転車に乗って一人で出かけた。いろいろ本を調べて、2605年が昭和20年を意味することはすぐにわかった。第二次世界大戦前には、年数の数え方も現在とは違っていたのだ。『弥生』とは3月のことだった。

この町の歴史を調べはじめると、いつも必ず出くわす名前があった。岩田十郎といい、とんでもない大金持ちで、一時は町内の私有地の半分はこの男の持ち物だったこともあるそうだ。太郎たちが通っている小学校も、元は岩田が建てたものだった。

だが昭和10年ごろ、岩田は貨幣を偽造しているという疑いをかかれ、警察に逮捕されてしまった。時代は戦争が始まる前夜であり、世界中がきな臭くなりかけていた。特にアジア諸国はそうで、政治的に不安定になった国々では政府の力が失われ、貨幣の偽造を防止したり、取り締まったりする力が非常に弱くなっていた。そこに目をつけて偽造品のコインを大量に輸出し、莫大な利益を上げているという疑いを岩田はかけられてしまったのだ。

岩田の屋敷は、もちろん警察の手で搜索された。だが何も発見されなかった。岩田は釈放された。数年後、岩田の妻が病死した。失意の岩田は所有地のほとんどを売却し、どこか他の土地へ移住していったということだった。

家に帰り、押入れを明けて、太郎はデスマスクを取り出した。机の引き出しから彫刻刀も探し出してきた。裏返しにしてひざの上に

置き、きれいな顔のある表側を傷つけないように注意しながら、太郎はマスクの裏側を少しずつ削り始めたのだ。

だがしばらくの間は何も現れず、ズボンの上に落ちる石膏の粉が増えるばかりだった。思い違いなのかなあといい気がしたが、石膏で出来ているにしてはこのマスクは重たすぎるということそのたびに思い出して、太郎は作業を続けた。

刃先が何かに触れたのは、何分かたったときのことだった。石膏の小さなカケラがポロリとはずれ、銀色に光るものがわずかに顔を見せたのだ。それでも太郎は慎重に作業を続けた。結局、完全に掘り出すのには1時間近くかかってしまった。

姿を現したのは、さかずきほどの大きさの機械部品のようなものだった。どういう材質なのかサビの気配も見えない丈夫な金属でできていて、同じような形のもが二つ出てきた。この二つは本当によく似た形をしていたが、よく見ると互いに対称形をしていて、二枚貝のようにパチンと組み合わせることができると思われる。きれいに掃除して石膏を落とし、手の中でいじくり回し、眺めていて太郎は気がついたのだ。彼がさっそく試してみたことは言うまでもない。そしてすぐにわかったことだが、二つの部品は隙間なくしっかりと組み合わせることができるように見えるが、その状態でも実は内部に小さな空間が残るのだ。

すぐにまた思いつき、やわらかい粘土を持ってきて太郎はその間にはさみ、もう一度二枚貝のように組み合わせしてみた。するとどうだろう。部品を取り去ったあとに残った粘土には、ある形が写し取られていたのだ。太郎はため息をつかないではいられなかった。粘土はコインの形をしていたのだ。いかにも古めかしく、しかも見慣れない外国のものだが、たしかにコインに違いない。この道具を使

って、岩田十郎は外国の貨幣を偽造していたのだろう。

太郎には叔父がいて、新聞記者をしているのだが、なかなか気持ちのよい人物で、事情を話すと喜んで協力してくれた。だから一週間後には、太郎は岩田の現在の住所を知ることができた。貨幣の偽造に使う道具とデスマスクの写真を添えて、太郎はその住所へあてて手紙を書いた。返事は数日後に届いた。いかにも老人が書いたふうな几帳面な手書きの文字だった。

『君がお持ちの機械部品やデスマスクについては、小生は特に興味を感じません。しかしながらもしお望みであれば、事情をご説明しましょう。小生には、いかなる法律にも違反していない自信があります。いつでも屋敷の内部をお目にかけてみましょう』

数日後、太郎は一人で岩田を訪ねることにした。叔父にあてた置手紙を念のために家に残してはきたが、不必要な警戒だとはなんとなくわかっていた。夕方になれば無事に帰ってきて、丸めて自分の手でゴミ箱に放り込むことになるだろう。

岩田の屋敷は電車に乗って30分ほど走った隣町にあり、太郎が住んでいる町のようにごみごみしたところではなく、背の高い門と長い塀のある大きな屋敷がいくつも並んでいた。商店も少なく、けばけばしい看板などは目に入らなかった。駅前からバスに乗り、太郎はある停留所で下車したのだが、バスが行ってしまうとひとけがなく、通り過ぎる自動車の姿もなかった。広い道路がまっすぐに伸びている。

岩田の屋敷は、びっくりするほど大きなものだった。木造だが3

階建ての洋館で、とがった屋根の上には風見鶏が立っている。広いベランダやテラスもある。門の前に立って呼び鈴を押すと、少したつてメイドが現れ、太郎を家の中へ入れてくれた。広い庭を横切り、気がつくと太郎は居間に通され、目の前に出されたカップからコーヒーをすすっていた。向かい合わせに岩田が腰かけ、おもしろそうな表情でそれを眺めている。

岩田は思っていたよりも高齢だったが、まだまだ元気そうだった。頭はほとんどはげ、ピンク色の肌がむき出しになっている。顔はしわだらけだが、上唇の左右には白いヒゲをナイフのようにぴんと長く伸ばしている。「それを飲み終えたら」岩田が口を開いた。「妻に会わせてあげよう」

「奥さん？」太郎は顔を上げた。「あのデスマスクの人の後、再婚したの？」

岩田は首を横に振った。「再婚などしてはおらんよ」

「じゃあどうして？」

「いいからついておいで」

につこりして岩田は立ち上がった。コーヒーカップを置き、太郎も同じようにした。部屋を出て、長い廊下を進むと廊下の突き当りにドアがあり、それを開くと地下へ続く広い階段が顔を出した。機械室の前に着くまで、長い時間はかからなかった。ポケットからキーを取り出して岩田は入口を開け、振り返って太郎を招きいれた。お静かになつて身振りをし、岩田がある方向を指さしたとき、太郎は思わずドキドキしないではいられなかった。

広い部屋だが、古めかしい機械がいくつも並んで、少し窮屈ではある。機械の立てる低い音がブーンと聞こえている。部屋の中央には鉄でできた四角い箱のようなものがあり、その正面にはガラスでできたのぞき窓がある。箱の大きさは小型のスクールバスほどで、窓は縦横一メートルぐらい。

太郎は近寄り、窓の中をのぞき込んだ。鉄箱の内部は空洞になっていて、氷で満たされていた。まるで水族館の水槽のような眺めだが、中身は水ではなく氷なのだ。箱の内部をいっぱい満たし、カチンコチンに凍っている。しかしくもってはおらず、ガラスのように完全に透き通っている。

彼女はその中心にいて、顔を軽くうつむかせ、髪は風になびくように長く舞っていた。鮮やかな色の着物を身につけ、振袖と一緒に腕を軽く左右に開いている。ほっそりした小さな手はまるで子供のようだ。太郎はじっと見つめた。彼女の顔は、もちろんあのデスマスクとまったく同じだった。

「どう思っね？」岩田の声が聞こえたので、太郎は振り返った。ガラスはとても冷たく、表面に触れて、太郎の吐いた息は白く凍った。「どつって?」

岩田はにんまりと笑った。「デスマスクを見て彼女に興味を持ったからこそ、君はここまでやってきたのだろうか?」

「あれが奥さんなの?」

岩田はうなずいた。「もう60年になる。私の目がかすむせいなのか、年ごとに美しくなってゆく気がする」

もう何秒間か窓の中を見つめていたが、太郎は岩田を振り返った。「あの人形の内部には何が隠してあるの？」

「なんだって？」岩田は少し大きな声を出した。

「あなたは、デスマスクの内部に偽コイン作りの道具を隠していた。だからあの人形の内部にも何かがあるんじゃないかと思ってさ」

「ふん」岩田は鼻で笑った。「近ごろの子供ときたら」

「そう？ 図書館へ行っているいろいろ調べてみたんだ。戦争中、あなたは軍と仲が良かったんだってね。コインの偽造だって、南方の占領地の経済を支配するために、本当は軍の命令でやったことなんですよ？ 警察にかぎつけられて、面倒なことになりかけたようだけど」

「だったらどうだといふのかね？」楽しそうな顔をして、岩田は太郎を見つめた。

「あなたはかつて大きな製薬会社を経営していて、最大のお得意先は日本陸軍だった。その会社は医学研究所を持っていて、そこでは軍の指示でいろんな研究が行われていたけれど、もちろん細菌兵器の開発も行われていた。」

それでもまだ研究は始まったばかりだったらしいけどね。そして成果を生む前に終戦を迎えてしまった。終戦後、日本を占領にやってきたアメリカ軍は、研究中だったり開発中だったりした兵器を探し出し、徹底的に破壊してまわった。戦車や戦闘機はもちろん、核兵器の開発を恐れて、物理学の研究設備だって破壊したぐらいだから

らね。細菌兵器の研究に必要な資料などは真つ先に目をつけられるはずだった」

「それで？」岩田はニヤニヤ笑い始めている。

「あなたは資料を破棄するのがおしくて、アメリカ軍に渡す気もささらさなくて、よい時期が来るまで隠して、持っておくことにした。でもその保管方法が問題だった。生きた細菌なんだから、冷凍保存しなくちゃならない。だけど昭和20年代のことだよ。大規模な冷凍設備なんかを作ったら、すぐアメリカ軍にかぎつけられてしまう。だからあなたは、奇妙な言い訳をでっち上げた」

「どんな？」

「妻の死体を若く美しいまま永久に残すための設備であると。変人のやることだからと、アメリカ軍もお目こぼししてくれた」

岩田はくすりと笑った。「おもしろい話だが、何か証拠があるかね？ あそこに見えているのは間違いない私の妻の死体だよ。昭和20年に19歳の若さで亡くなったのだ」

「胴体内部に細菌を隠し、鉄箱の中で冷凍するための人形の製作をあなたは誰かに依頼した。それが誰で、あなたがいくら払ったのかは知らないけど、かなりいいかげんな人形師だったみたいだね」

「どついうことなんだね？」

「本当ならその人形師は、すべてを自分でデザインしなくちゃならなかった。ただど面倒くさがって、すでにある顔からかたどってコピーして、そのまま自分の人形に使ったんだよ。県庁のそばにあっ

た第一大橋って橋を覚えてる？ 去年解体されて、新しい橋に架け替えられてしまったけれど」

「ああ、覚えているよ」岩田はうなずいた。

「明治時代にドイツ人技師の設計で作られた橋でね。たもとは大理石でできた飾りが取り付けられていた」

「そういえば何かあったな」岩田は天井を見上げた。「昔のことなので、よく覚えてはいないが」

「それが女神アテナをかたどった石像だったんだよ。実物大の大きなものでね。あまりにもきれいな顔だから、完成当時かなり話題になった有名なものらしい。橋が解体されたあとも、アテナ像だけは記念に残されてね。今でも市立博物館に展示してある。先週行つて見てきたよ」

「まさか…」

「そうだよ」太郎は氷の内部を指さした。「あの人形の顔は、アテナの石像をそのままコピーしたものなんだ。ドイツの有名な彫刻家の作品らしいから、美しい顔なのはあたりまえだよ」

「あの人形師め、そんな手抜きをしておったのか」

「デスマスクを眺めていて、どこかで見た顔だと思った。それで調べ始めた」

「ふん」岩田は機嫌よさそうに笑った。「60年間も守られた秘密が、子供一人のせいで暴かれるとはな」

「それであんたは、この冷凍装置をいつまで動かし続けるつもりなの？ もう60年もたってるのに」

「日本がもう一度羽ばたき、世界へむかって出てゆくときまでさ」

「そんな日が来るまでにあんたは死んでいるに違いないと思うけど」

岩田は笑った。「そうなれば、そうなったときのことさ。私は気にしていないよ」

「じゃあ僕も気にしない。まあ、がんばってよ」握手をするために、太郎は片手を差し出した。

岩田も手を差し出し、握手を返した。「おまえさんも元気でな」

そのまま太郎は、岩田の屋敷をあとにした。無事に家に帰り着き、置手紙はゴミ箱に放り込むことができた。翌年の春のことだが、太郎と次郎の期待は裏切られなかった。二人が通う小学校の桜の木があまりにも見事な咲きぶりを見せたので、新聞に記事が出たほどだ。校庭は桜の名所になり、春になると花見の連中が弁当を持ってやって来るようにまでなった。満開の木の根元で、みんなとても楽しそうだった。

もちろん太郎と次郎は、もっと楽しそうににやにやしながらその様子を眺めている。花見客たちは、自分たちがゴザを敷いて座っているその下に何が埋まっているのか、何も知らないのだ。

(終)

兄妹

兄と私は双子だったが、子供のころから折り合いが悪かった。とても仲が悪かったのだ。

兄が中学生で、私が女学校へ行き始めたばかりのところだったが、夕方の電車の中で偶然出会い、といってもならみ付け合うだけで言葉をかわしうしなかつたのだが、そのうち電車が揺れた拍子に私のカバンが兄の身体にぶつかってしまい、口ゲンカが始まってしまった。

まわりの乗客たちは笑っていたに違いないが、頭に血が上っている私たちは気にもしなかつた。そのままエスカレーターしていき、つかみ合いにまで発展しかけたとき、見かねた車掌がやっと仲裁に入り、私たちを引き離した。

乗客たちも手伝い、私たちのどちらかを下車させ、次の電車に乗り換えさせようということになったが、どちらが降りるかで、またもめた。結局私が降ろされてしまったが、そのことでも気を失うほど腹が立ち、道すがら見かけた何の関係もない犬を思いつきりけとばしたものだ。犬はキャンと鳴き、全速力で逃げていった。

何年たっても、兄と私の不仲は直らなかつた。家族も最初は心配していたが、そのうちにあきらめたのか、何も言われなくなつた。数年後両親が相次いで亡くなつたが、兄と私はまだ成年に達していなかつたので、遺産を受け取ることはできなかつた。遺産は管財人が管理することになった。

21歳になれば黙っていても受け取ることができるので、私は気

にはしていなかった。だが我慢ならなかったのは、同時に兄も同じ金額を受け取るということだった。用事を装って管財人の事務所を訪れたとき、私は質問してみた。

「もし私が死んだら、私の取り分は誰のものになるのかしら？」

管財人はすぐに答えてくれた。「お兄さんのものですよ。あなたが亡くなった場合、ご両親の遺産はすべてお兄さんのものとなります」

私は納得して家に帰った。一言も口はきかないが、兄とはまだ同居していた。使用人たちもいて、広くて快適なこの屋敷を離れる気にはどちらでもならなかったのだ。ある光景を目撃し、私が計画を練り始めたのはちょうどこのころだった。

兄は動物好きだった。並外れて好きだったのだ。ケガをした子犬や子猫を町で見かけて、拾ってかえたのは一度や二度ではなかったし、気味の悪いイモムシを捕まえてきて、ビンの中で飼い、けばけばしい水色の巨大なガになるまで育てたことだってある。それがかえったとき、なぜかビンの中から逃げ出してしまい、私の寝室に迷い込んで、ベッドの枕カバーにとまってこちらを見上げているのと出会って、私は気絶しかけたことがある。

もちろん私は文句を言ったが、鼻で笑うだけで、兄はまったく取り合わなかった。だが、兄のこの性質を利用してやろうと思いついたのはそのときだったというのは、なんと皮肉なことだろう。

近所の家に、一匹の犬が飼われていた。太郎丸という名で、グレートデンという種類で、私などは近寄る気にもならぬほど巨大な体だ。元は狩猟犬だったらしいが、門を入ってすぐのところ、番犬

がわりにいつもつながっていた。

どうにも気の荒い犬で、飼い主なども気をつかって、エサをやるにもこわごわ近寄っていたが、兄だけは平気だった。その家の主人とは知り合いでも何でもなかったが、前を通りかかるたびに兄は近寄り、門の鉄格子越しに手を伸ばして、太郎丸をなでてやるのだった。

するとどうだろう。あれほど凶暴な犬なのに、太郎丸も兄にだけは心を許すのだ。大きな声でほえるでもなく、それどころかクウンと甘えた声を出して体をすり寄せるのだ。地面に仰向けになって腹を見せることだってある。それを兄は、またうれしそうになでてやるのだ。

離れた場所から気づかれないように観察しながら、兄が手をなめさせてやるのまで私は見たことがある。その瞬間に、私の計画がすべて出来上がったのだ。

太郎丸が怖いのと、ほえる声があまりにもうるさいのとで、普段から私は、あの家の前は通らないようにしていた。だがこの日から習慣を変え、一日に一度は必ず通るようにした。

生まれつき疑い深い犬なのか、飼い主がそういう性格でそれがうつったのか、誰が通りかかっても、太郎丸はうなり声を上げ、大きくほえるのだった。例外は兄と、エサの皿を持っているときの飼い主だけだった。手ぶらのときには飼い主自身でさえ、あのほえ声に向けられるのを私は何度も目撃していた。

だが私は、太郎丸の前をただ毎日通るようになったわけではない。いつも私は、ポケットの中にひそかに小石を忍ばせていたのだ。小

指の先ほどの小さなものだ。誰に見つかっても、怪しまれるようなものではない。「何かの拍子に入り込んだのだろう」と言い訳ができるようなものだ。

あの家の門が近づき、ほえ声が聞こえてくると、私はポケットに手を伸ばす。そしてまん前を通りぬけながら、小石を太郎丸めがけて投げつけるのだ。

もちろんいつも命中させることができるわけではない。むしろ、はずれることのほうが多かった。だが毎日毎日、通りぬけざまに小石を投げつけられて、いい気分でいることができるものはいない。ときどきは、かすることもあるのだし、運がよければ命中することだってある。一度だけだが鼻の真ん中に命中させることができて、太郎丸がそれこそ爆発でもするようにほえ立てたことがある。何事かと、家人が庭に飛び出してきたほどだ。

そうやって、私と太郎丸は敵になっていった。いくらもたたないうちに、私の足音を耳にするだけで太郎丸は猛烈にほえ、興奮し、鉄の門の向こうではね回るようになった。

やつは私にかみつき、八つ裂きにしたいのだろうが、門は大きく高く、翼でもない限り飛び越えることはできない。それ以前に、やつは太い鎖でつながれているのだ。私の顔を見ているときのやつの怒り、憎しみは想像もつかないほどだ。

そろそろよいころだろうと、私は最終的な作戦を実行することにした。数日の間、兄を観察し、何曜日は何時に家を出、何時ごろに帰ってくるということ予測できるようになった。兄は大学生で、経済学を学んでいた。

そういうある日のことだ。今夜、兄は夜の八時ごろ帰ってくるであろうと私は見当をつけた。そして家の近所で待ちかまえていたのだ。人通りの少ない物影だったが、太郎丸のいる家から遠くはなく、かといって近すぎもせずという都合のよい場所だった。ここからは私の足音も届かず、太郎丸が騒ぎ出すことはない。

数分待つだけで、兄が近寄ってくる姿を遠くに見つけることができた。私は身を隠し、兄をやり過ごした。兄は気づきもせず、私を追い越していった。十分距離をとって、私はついていくことにした。

足音をできるだけ消し、息までつめて私はあとをつけた。やがて兄は、太郎丸がいる門の前にさしかかった。兄は立ち止まりかけ、太郎丸に目を走らせた。太郎丸も気づき、立ち上がって尾を振り始めている。兄は一瞬ためらい、今日は太郎丸の相手をしたものかどうか、迷っている様子だった。学科の試験が近いので、余分な時間はないという気持ちなのだろう。

兄がそのまま歩き続ける気配を見せたとき、私がどれだけ落胆したことがか。だがあの太郎丸。あれはなんと愛らしい犬であろうか。クウンと甘える声を出し、もう一度兄の注意を引いたのだ。

顔をほころばせ、兄は門へ近寄っていった。期待に満ちた太郎丸の息づかいまで聞こえてくる。兄はかがみ、門のすきまから手を差し入れ、太郎丸の頭をなでてやり始めた。太郎丸は目を細め、兄の指をなめようとす。

兄は太郎丸ののどに手を伸ばした。首輪がきつすぎないか確かめようとしたのだろう。飼い主が間違えたのか、首輪がきつすぎて食い込みかけていたことが一度あり、兄は親切にも治してやったのだ。私はそんなことまで目撃していた。首輪とのどのすきまに兄は指を

入れ、ちゃんと余裕があることを確かめたようだった。これこそが、私が待っていた瞬間だった。

パタパタと足音を立て、私は歩き始めた。遠慮も何もない歩き方だ。太郎丸の耳が一瞬でピンと立つのが感じられた。門の前まで行き、私は太郎丸に顔も見せてやった。

犬の脳の中で、怒りと憎しみのスイッチが入ったのだろう。息を吸い込み、筋肉を震わせ、全身を緊張させるのが見えた。怒りに乗っ取られているときの犬には、まわりなど何も見えてはいないのだろう。そういう瞬間には、すぐそばにあるもの、自分の体に触れているものはただ邪魔でいらだたしい存在にすぎないのだろう。それが味方であるか敵であるか、判断も何もつかなくなっているに違いない。

この何日かの経験で、太郎丸の内部には怒りが何十センチも厚く積もっていたに違いない。私にかみつき、全身の力をアゴに込め、牙を突き立てることだけしか、あの瞬間のあいつの頭の中にはなかっただろう。八つ当たりでも何でもかまわない。私への攻撃心を満たすためなら、手近なものになら何でもかみついてしまうだろう。そしてこのとき、太郎丸の目の前には兄の手首があったのだ。

人間の手首には、太い血管が通っているではないか。あのサイズの犬のアゴであれば、骨もへし折ってしまうような強い力が出せることだろう。

兄の悲鳴は夜の空気をつんざき、町内の全員を飛び上がらせた。家々の窓や扉がガラガラと開き、人々が姿を見せた。

人々はすぐに兄に気がついた。あっという間に人だかりができた

に違いないが、そのときには私は姿を消し、家とは反対の方角へ歩き始めていた。まわりの注意を引かないように、できるだけ平靜な足取りを保ちながら。

町へ出て、喫茶店でコーヒーを飲んで少し時間をつぶし、家にはゆっくりと帰った。玄関を開けると、メイドがすぐに飛んできた。彼女の顔は紙のように真っ白だったが、それは予想していたことだ。

「お嬢様、お兄様が事故でなくなりました」

死因は出血多量だったそう。あのあとすぐに病院へ運ばれたが、間に合わなかったらしい。

明日は兄の葬儀だ。実に面倒なことだが、あいつのために何かをさせられるのはこれが最後だから、せめて妹らしい演技を心がけてやろうではないか。それにだ。あのことを思い出すたびに、私はうれしくてたまらず、思わず笑いが浮かんできそうになるのだ。まわりの人々の目からそれを隠すのに、どれだけ苦労していることが。

私の誕生日のことだ。あと一週間で、私は21歳になる。

6年1組の卒業式について

6年1組の卒業式については、参加していた卒業生や在校生、父兄の誰にだって質問してみるがいい。「最高に面白い経験だった」という答えが返ってくるはずだから。だが同じ質問を、教師たちや来賓の教育委員会の連中にむかつてするのは賢明ではないかもしれない。彼らはきつと、にが虫をかみつぶしたような顔をするころう。

意見はいろいろあるだろうが、あの小学校があのような卒業式を経験するにいたったのは、ある少女の誘拐事件に遠因があるような気がしてならない。なぜなら、友人同士とはいえなかったとはいえ、誘拐事件が二人の少年たちの結びつきを強めたというのは間違いないことだろうから。その誘拐事件の話から、まず始めようと思う。

ある日、藤田友子という少女が何者かの手によって誘拐された。警察は極秘に捜査を始めたから、もちろん太郎は知りもしなかった。だが夕方になって、なんと太郎の家に刑事がやってきたのだ。太郎は両親と一緒に夕食を食べていたのだが、とても驚いた。部屋に上げられ、刑事は太郎と両親にていねいにお辞儀をした。

「突然で驚かれたらどうと思います」身分証明書を見せた後で、刑事は言った。「実は、ご近所の藤田さんのお嬢さんが誘拐されました」

「本当ですか？」太郎の母が言った。

「はい」刑事はうなずいた。「今朝、ピアノ教室へ向かう途中に行方不明になりました。昼過ぎに犯人から電話があり、身代金が要求されました」

「あの家は金持ちだから、簡単に払えるでしょ？」と太郎が言うと、両親がにらんだ。

刑事は太郎を見てにっこりした。「そうだね。二千万円払えと言ってるんだ。犯人は、君にそのお金を運んでもらいたいとも言ってるんだよ」

「なぜですか？」と母。

「わかりません」刑事は首を横に振った。「きつと登下校のときにおたくの坊ちゃんと被害者が一緒にいるのを見たのでしょうか」

「友子とは友だちなんかじゃないよ」太郎は言った。

「でも家が近くだから、一緒になることもあったんじゃないのかい？」

「そりゃあね」

「だから犯人は、君に身代金を運んでもらいたいと言ってるんだ。君の顔を知っているのだろう。いうことを聞かないと、お嬢さんを殺してしまうそうだよ」

もう少しで万歳をしまいそうだったが、太郎はなんとか我慢した。しかし喜びが顔に出っていたので、また両親からにらまれた。翌朝早く、大きなカバンを肩にかけ、目立つ赤い帽子をかぶって、

太郎は駅前の人ごみの中に立っていた。ポケットには小型の送信機が入っていて、少し離れたところで刑事たちがイヤホンをはめた耳をすませている。太郎はときどき腕時計を見た。八時になるのを待っていたのだ。

八時ちようどになった。太郎は歩いていき、郵便ポストに近寄った。かがんで、その下をのぞき込んだのだ。犯人が予告していたとおり、セロテープを使って白い封筒が底の部分にとめてあるのが見えた。セロテープをはがして封筒を開くと、白い紙が出てきた。へたくそな字でこう書いてあった。

『210円の切符を買って、下り電車に乗れ。XX駅前のポストを見ろ』

「あんたに命令されるいわれはないんだけどね」と太郎は思ったが、書かれている通りにすることにした。命令という言葉から、刑事たちから言われていたことを太郎は思い出した。だから少し大きな声を出して、手紙の内容を読み上げはじめたのだ。無線機を通して刑事たちに聞かせるためだった。

「二百十円のキ、キ、キリ、セツ？ …をかって、した、したり？ さがり電車に乗る。乗れ。XX駅前のバ、ボ、ポストを出す」

本を読むことが好きだったから、太郎はたいがいの漢字をきちんとして読むことができた。でもだからって、こういうおふざげができるチャンスをふいにするつもりはなかったのだ。駅の中へ入り、太郎は自動販売機でキップを買った。大きなサイフを渡されていて、コインやら紙幣やら、お金がたくさん入っていた。それを手に持ったり中身を見たりするたびに、太郎はうつとりした。

キップを買い終え、太郎はプラットホームへ行こうとした。いいタイミングで電車がやってくるのが見えた。だがわざとゆっくり歩いて、太郎は一本見送ることにした。刑事たちが追いつく時間を稼ぐために、できるだけゆっくり行動するように言われていたのだ。

プラットホームにやってきて、太郎は次の電車を待った。まわりは少し混雑していた。日曜だから遊びに出かける連中だろうが、太郎はその中にぼつんと立っていた。「どいつが犯人なんだろう」と太郎は思った。犯人はどこから太郎を見張っているに違いなかった。今もおそらくこのプラットホームの上にいるのだろう。ちらりと見回したが、太郎には見当もつかなかった。うまくカモフラージュしているらしくて、どれが刑事なのかもさっぱりわからなかった。

電車がやってきて、他の客たちと一緒に太郎も乗り込んだ。電車が走り始めて何分かのおち、指定された駅で太郎は電車を降りた。郵便ポストはすぐに見つかった。また封筒に入った手紙があった。それに次の行き先が書いてあるのだ。そういうふうにして、太郎は何度も電車を乗り換えた。地下鉄や路面電車、バスにも乗った。ほんの短い距離だが、タクシーに乗ったりもした。

最後に乗った電車は郊外から出て、山のほうへ向かう私鉄だった。ぐるぐるカーブを曲がりながら坂を上っていった。田舎の電車だから終点が近づくと乗客が減って、あちこちにはらばらといるだけになってしまった。「どれが犯人で、どれが警察官なんだろう」太郎は再び見回した。

電車が終点に着いた。ドアが開いて、乗客たちがプラットホームに降りると、もちろん太郎も一緒に下車した。山の中の小さな駅で、町の中よりも少し涼しい気がした。森に囲まれて空気が少し湿っぽ

く、すぐ近くにセミの声が聞こえる。太郎は日陰に入って、しばらく見回していた。だが気がつくやうとプラットホームは空っぽになっていない。警察官たちはどこにいるんだろう？ それに犯人も。

太郎は歩き始めた。改札口を抜けて駅の外に出たのだが、驚いたことに駅前には何もなかった。家も店もない。ただ停留所があってバスが一台止まっているだけだったのだ。だがすぐに郵便ポストを見つげることができた。近寄ってかかんで、太郎が手を伸ばしたのはいうまでもない。もちろんまた封筒が貼り付けてあり、封を切る。今度は手書きの地図が入っていた。線の曲がったへたくそな地図で、この駅から山道を登って、どこかへ行けという指示が書かれていた。

「地図だ」無線機のマイクロフォンによく聞こえるように大きな声でつぶやいてから、太郎は歩き始めた。日なたに出て暑くなったので汗をふいていると、駅前を発車したバスが追い越さずま風を浴びせていった。その少し先で太郎はバス道はずれ、わき道へ入ることになった。犯人からの地図にそう書かれていたからだ。舗装のない道で、木々が頭の上をトンネルのようにおおって、日が当たらず涼しくなった。

太郎は歩き続けた。道はだんだんと細くなり、とうとう自動車も通れない幅になってしまった。太郎はときどき振り返ったが、誰の姿も見ることにはなかった。警察官たちは本当にじょうずに僕のあとをつけているのだな、と太郎も感心しないではいられなかった。曲がり角の影から突然姿を現した古いつり橋を渡り、捨てられた村の跡を太郎は通り抜けた。家々は全部腐って倒れてしまっているが、なんとなくまだ形だけはわかる。

廃村をぬけて少し行くと、とつぜん踏み切りに出た。だがこれも捨てられたもので、廃止になった線路の跡だった。枯葉のように赤くさびたレールが左右に伸びている。そこに小さなトロツコが置いてあることに太郎は気がついた。リヤカーほどの大きさしかないものだが、車輪はちゃんと4つついている。平べつたい車体の上に白い封筒が置いてあるのも見える。風で飛んでいかないように、石を乗せて押さえてある。太郎は手にして開いた。

『このトロツコに乗って、坂を下っていけ。その先にあるトンネルの中へ入れ』

太郎はもう一度トロツコを眺めた。犯人が整備しておいたのだろう。車輪はさび付いてはいないし、軸受けには油もさしてある。自転車と変わらない簡単な仕掛けだが、ブレーキも取り付けてある。勝手に動き出さないように、車輪の下に小石をはさんで止めてあった。

小石をどけて、太郎はトロツコの上に座った。長さ1メートルぐらゐの木の棒がそえてあったので、それで地面をつくるとトロツコはゆっくりと動き始め、坂を下っていった。涼しい風が吹いてとても気持ちよかった。コトンコトンと車輪が鳴る。スピードが出過ぎないようにときどきブレーキを使ったが、それほどきつい坂ではなかった。二分もたたないうちに、本当にトンネルの入口が見えてきた。ほんの少しスピードを落としたが、太郎はそのまま中へ入っていった。

真つ暗になり、空気がさつと湿つぱくなった。振り返ると、入口を通して外の世界が丸く見えている。少し行くと、突然さつと前方に光が見えてきた。だが出口の光ではない。トンネルの中央部だが、誰かがあそこにおいて懐中電灯をこちらに向けているのだ。警察官だ

ろうか、と太郎は思った。

その人物が懐中電灯をグルグル振り回し始めたことに気がついた。ブレーキをかけながらそのそばまで行き、太郎はトロツコを停車させた。驚いたのは、その人物が真っ黒な覆面で顔を隠していることだった。同じように真っ黒な服を着て、しかもこの暗闇の中だから体格もわからない。懐中電灯の光を向け、太郎の顔をまっすぐに照らした。

明るさのあまりまばたきをしないでいられなかったが、男が片手を差し出していることに太郎は気がついた。その手の中にはボール紙が握られ、そこには『金を渡せ』と太いサインペンで大きく書いてある。肩からはずして、太郎はカバンを手渡した。

だが男はカバンを開けようとしなかった。すぐに自分の肩にかけ、ポケットから別の紙を取り出して、太郎の手に押し付けようとしたのだ。もちろん太郎は受け取った。男は太郎に向かって、「行け」というしぐさをした。そしてさっと身体をひるがえらせ、真っ暗なコンクリート壁の中へと姿を消してしまったのだ。男が懐中電灯のスイッチを切ってしまったせいもあったが、本当にまるで忍者のようにその姿が一瞬で消えてしまったのだ。ほんの何秒間か、足音だけはまだかすかに聞こえていた。

「たぶんあそこには小さな横穴があるんだな」と太郎は気がついたが、もちろん追いかけていったりはしなかった。もう一度棒で地面を突いて、トロツコを発車させたのだ。

少し走るだけで、太郎はトンネルから出ることができた。不意に明るい場所に出たのでびっくりしたが、ブレーキをかけてトロツコを止めた。ここもやはりさっきと同じような山の中で、好奇心に駆

られて、太郎は手渡された紙を眺めた。ポストに貼り付けてあったのと同じような白い封筒で、封を切ると次のような手紙が出てきた。

『XX市XX町1丁目3番地の古いアパートの1号室』

トロツコから降り、太郎は歩き始めた。1分も歩かないうちに道路を見つけることができた。線路から出て道路に足を踏み入れ、キヨロキヨロしたが誰の姿も見えないことに驚きを感じ、警察官たちがちゃんと仕事をしているのか、太郎が疑問に思い始めたのはこの瞬間のことだった。だがこんな場所に立っただけでも仕方がない。太郎は再び歩き始めることにした。方角も何もわからなかったが、坂道になっていたから、とりあえず下っていけばどこかに出るだろうと考えたのだ。そしてその考えは正しかった。20分もたたないうちに、太郎はまたさっきの駅に戻ることができたのだ。

ある場所まで来ると山道が突然終わって交差点になり、のぞき込むとまっすぐ向こう、200メートルほどのところに駅の建物を見ることができたのだが、そこにつくまでは本当にひとけがなく、さびしい道だったのだ。通行人どころか、通り過ぎる自動車も一台しかなかった。だがその自動車が、太郎の印象に深く残ることになった。

勢いよく坂を下ってきたのに、太郎を追い越す段になってもブレーキなど踏まず、それどころかかえってアクセルを踏んだのではなくかと思えるほど乱暴な運転ぶりだったのだ。小型トラックで、すぐ先の急カーブでもスピードなど落とさず、強引に通り返っていくのを太郎はあきれた顔で見送ることになった。

とうとう心を決め、太郎は駅前の公衆電話から警察へ連絡を入れることにした。姿を隠しつつ太郎を追跡するその様子が、まるで忍

者のようというか、あまりにも完璧すぎる気がしてきたのだ。「もしかしたら…」という不信感が芽生えたからだが、太郎の予想は正しかった。それなりの準備をし、人数も確保していたのだが、何回も電車を乗り換えるうちに警察官たちはとうとう太郎の姿を見失ってしまった、捜査本部は大騒ぎをしていたのだ。制服を着ている着ていないに関係なく、非番の者や休暇届を出して親戚の葬儀に出席中の警察官までありつたけ動員して、大規模な捜索が開始されようとしていた。友子の身柄の確保や安全はもう半ばあきらめられ、勇敢にも協力してくれた太郎の安全だけでもという気分だったのかもしれない。これで太郎までが犠牲者の仲間入りをしてしまった日には、明日の朝刊の見出しがもう目に浮かぶではないか。

だが県警の本部長は辞表を提出せずすんだわけだ。太郎の無事が確認され、犯人から渡された紙に書かれていた住所で友子も無事に発見された。山の中のトンネルももちろん搜索されたが、手がかりらしいものは何一つ得られなかった。太郎の想像通り、トンネルを建設する際に使われた古い横道を犯人がうまく利用したということがわかっただけだった。友子も犯人の顔を見てはいなかった。ひとけのない細い道を歩いているときに突然後ろからつかまえられ、麻酔薬をかがされたのだそうだ。友子が目を覚ましたのは、警察官がアパートの部屋へやってきたときだった。

数日後の午後、学校が終わって家へ帰りながら、太郎は次郎と話していた。「あのトラック、事件の前はどこかで見たことがあるよ。うな気がするんだ」と太郎は言った。

「どこで？」気のなさそうに、あくびをしながら次郎は言った。二人は同級生で、友人同士とはいえたが、特に共通点があるわけでも

共通の興味や趣味があるわけでもなかった。ただなんとなくというか、他に友人のいない者同士がくつき合っているということだったのかもしれない。

「さあ？」太郎は首をかしげることになった。このとき二人は狭い通りを歩いていて、この町は道が狭く、おまけにどこもかしこもぐねぐね曲がっていた。背後から不意にトラックが一台近づいてきて、スピードもゆるめずに二人を追い抜いていった。「ああいう感じだったよ」「トラックを見送りながら太郎は言った。

「山田酒店のトラックだ」次郎が鼻を鳴らした。「いつものように乱暴な運転だな。そのうちきつと事故を起こすぞ」

「もう起こしてるよ」

「何が？」

「あのオヤジ、少し前に友子の家の外車に追突したんだって。派手に壊したから、かなりの修理費用を請求されたいらしいよ」

「保険で払ったんじゃないのか？」

「それがさ」太郎は笑った。「保険には入ってなかったんだって」

「ふうん」次郎はしばらく黙って、何かを考えているようだった。

「どづしたんだい？」

「誘拐事件のときにおまえが山の中で見たトラックって、山田酒店のじゃなかったのか？」

「違うよ。僕がナンバーを覚えていたから警察が捜して、隣の町で乗り捨てられているのが見つかった。トンネルのそばで見つかったタイヤの跡とも一致したから、犯人が使ったトラックに違いなかったけど、盗難車だから逮捕にはつながらなかった」

「そうかい？ でもおまえが見たトラックも、山田酒店のオヤジと同じような乱暴な運転だったんだろ？」

「それどころか、色は違うけどたぶん同じ型のトラックだよ。おしりの形に見覚えがあるもん」

「ははあ」次郎はうれしそうに笑った。

「なにさ？」

「トラックを盗むときに、犯人はきつといつも乗り慣れているのと同じ型の車を選んだんだ」

立ち止まり、太郎は次郎を振り返って見つめた。「じゃあ犯人は山田酒店かい？」

「あそこのオヤジだ。考えてみるよ。あのオヤジは友子の家に借金があるんだぜ。その金を友子をさらうことで調達したんだ。友子の家の金で、友子の家への借金を払ったんだ」

山田酒店のオヤジの顔を太郎は思い浮かべた。眉毛の濃い愛想の悪い男だ。背が低く、いつもがにまたで歩く。「本当にあいつが犯人だと思ukai？」

「おまえこそトンネルの中で犯人に会ったんだろっ？」

「暗くて何もわからなかったよ。犯人は声も出さなかった」

「あのがらがら声では、すぐにばれるもんな」

「なんとか証拠がつかめないかな」

二人は山田酒店へ立ち寄ってみることにした。二人のサイフはどちらもほとんど空だったが、小銭を合わせれば、なんとかコーラを一本買うことができそうだったのだ。店の前につき、ガラス戸をガラガラと開けて中へ入っていくと、古い家や店に独特のあの匂いに鼻をくすぐられることになった。おそらくはここで調理された何千回分もの料理や食事によっても少し出される物なのだろうし、当の住人たちは鼻が慣れきってしまった、そんな匂いが存在することすら気がつかないだろう。外部の誰かに指摘されても、やはり気がつかないに違いない。

古い形の店舗によくある構造で、店の床は土間になった台所からそのまま一続きになっていた。何回も洗濯を繰り返したせいで色の抜けかけたエプロンをし、つつかけをはいたばあさんが店の奥からゆっくりと姿を現した。あのオヤジの母親だ。「なんだい？」二人をじろりとにらみつけ、ばあさんは口を開いた。

「ええと、コーラをください」太郎は言った。

「一本かい？」

「うん」

冷蔵ケースに近寄り、ばあさんはコーラを取り出した。それでも何本かビンに触って、よく冷えているものを選んだようで、それを太郎に手渡した。太郎はコインを渡した。目を近づけてコインを数え、ばあさんはポケットに入れた。

「栓抜きはどこ？」太郎は見回した。

ばあさんが指さした。「その戸棚にあるよ」

それまでは静かだった次郎が不意に口を開いたとき、その声の大きさと内容のとつぴさで、ばあさんだけでなく太郎もひどく驚き、ビンと栓抜きを手から落としかけたほどだった。「あなたの息子は、藤田の娘にいたずらはしなかったのかい？」

「なんだって？」ばあさんが振り向いた。

「あの日オレは、この店の裏手を通りかかったんだよ。ツバメの子をつかまえてやろうと思って巣を探してたんだ。こここの裏にある松の木の枝には、去年は二つも巣があつたんでな」

「なんだと」ばあさんの顔色が変わった。

「木に登ろうとしたとき、この店の倉庫の中の様子が窓越しに見えるんだ。ビールびんの箱が積み上げてある真ん中に、小学生の女の子がしばらく寝かされた。眠っているみたいだったけどな。そこへ庭のほうからあなたの息子がしのび足でやってきて、こっそり倉庫の中へ入っていったんだぜ」

「そんなはずはねえ」ばあさんは大きな声を出した。「せがれが変な気を起こさねえように、わしがずっと見張ってたんだ。藤田の娘

は今でも生娘だあ」

不意に腕をつかまれ、太郎はもう一度驚いた。次郎を振り返り、「なに？」と声を上げるのが精一杯だった。

「いいから来い」まるで綱引きでもするように太郎の腕を引いて、次郎は店を出ていこうとするではないか。

「栓抜きがまだ…」

「後にしろ」

道路に出ても、次郎は太郎を引つ張りつづけた。振り返るとばあさんは店の外に顔を出してこつちをにらんでいたが、しわだらけの手を振り上げてどなった。「ばかガキどもがあ」

角を曲がり、ばあさんの姿がもう見えないところまで来てから、やっと太郎は口をきくことができた。「どこへ行くんだい？」

「わからないのか？」太郎の手をまだ引きながら、次郎はずんずん歩き続ける。「さっきのは犯罪の告白だぞ」

「物的証拠じゃないよ」

「わかってるさ。でも通報してみる値打ちはある」

とつとつ交番の前まで来てしまった。「本当にこの中に入るのかい？」不安そうに、金色をした警察署のマークを太郎は見上げるこ
とになった。

「当たり前だ」ドアに手をかけ、次郎はガラガラと入っていった。

大きな交番ではないから内部は狭く、机が一つ置いてあるだけだ。若い警察官がいて、イスに座って新聞を読んでいたが、すぐに気づいて顔を上げた。「なんだ、おまえら？」

「おまわりさん」次郎が話し始めた。「この間、この町で誘拐事件があったことは知ってるよね。藤田の家の娘がさらわれた」

面倒くさそうに、警察官は新聞を机の上に置いた。「それがどうした？」

次郎は太郎を指さした。「こいつがああの身代金を運んだんだ」

「ほう」警察官は少し感心した顔をしたが、それも長くは続かなかった。「それで？」

「犯人がわかったんだ。山田酒店のオヤジだよ。あそこのババアが白状したんだ」

「なんだって？」

次郎は事情を説明しはじめると、太郎は黙って聞いていた。警察官も黙っていたが、いかにも信用していない様子だった。「言いたいことはそれだけか？」次郎が話し終わると、警察官は言った。

「だから本署に知らせて、山田酒店を今すぐ捜索しないと」

警察官は鼻を鳴らした。「話は聞いてやったんだから、もう帰れ。仕事の邪魔をするな」

「本署に知らせないと…」

「もつと証拠が出たら知らせてやるよ。いいから帰れ。宿題をして寝ろ」

再び新聞紙を手に取り、顔の前にかざして、警察官は太郎たちをもう見ないですむようにした。さすがの次郎も、舌打ちをして交番を後にするしかなかった。もちろん太郎もそれに続き、二人は道を歩き始めた。行くところがないので近所の公園へ行き、並んでベンチに腰かけた。太郎はまだコーラのビンを抱いている。「どうするのさ？」次郎が長い間黙ったままだいるので、とうとう太郎は口を開いた。

「オレの家へ来いよ」次郎は立ち上がった。

「どうして？」

「いいから」

二人は次郎の家に着いた。いつもと同じように今日も次郎の母は留守をしていたので、自由に電話を使うことができた。電話局に電話をかけて、次郎が新聞社の番号を調べ始めたときには、太郎は本当にびつくりした。「どうするの？」

受話器を置いて、次郎は太郎を見た。「おまえの叔父さんって、新聞記者だったよな」

「そつだよ」

「その人に話をして、調べてもらうんだ」

こいつはなんてことを言うんだと太郎は思ったが、そんなに悪いアイデアではないかもしれないとすぐに思い直した。叔父さんなら、おもしろがって話を聞いてくれるかもしれない。だから受話器を手にして、太郎は新聞社に電話をかけることにした。うまい具合に叔父をつかまえることができ、事情も話すことができた。子供の言うことだからと無視したりせず、叔父はちゃんと聞いてくれた。それどころか、もっと詳しいことを話し合うために、夕方太郎の家で落ち合おうとまで言ってくれたのだ。受話器を置き、次郎と太郎はいい気分で家の外に出てくることができた。二人とも本当にスキップでも始めたいような気持ちだった。「夕方まで、どうやって過ごす？」太郎が言った。

次郎はウインクをした。「もちろん証拠探しさ」

それぞれ自転車を持ち出し、再び山田酒店へ行つて、様子をさぐることになった。ペダルをこぎながら、二人とも戦争の最前線で働く偵察兵になつたような気がしていた。

敵の要塞が次第に近づいてきた。白と黒のペンキを使って手書きされた『山田酒店』という看板が出ている。敵に見つからないように、偵察兵たちは裏手へ回ることにした。店の裏は川になって、高い土手がある。土手のわきの路地に二人は自転車をとめた。

塀に耳を押し当て、二人は息を殺した。だが何も聞こえてはこなかった。耳に届くのは、遠くを行く電車と横丁の工場のプレス機の音だけだ。二人はがっかりした顔をした。だが突然、顔を輝かせた。人の話し声が聞こえてきたのだ。

誰かが怒鳴っている声だ。たしかに店の中から聞こえてくる。太い男の声で、年を取った女がいいわけをしている声も聞こえる。どちらとも激しい口調だが、特に女のほうで、何かを思いとどまらせようと必死になっている感じだ。扉を不意にガラリと乱暴に開く音がそこに加わった。そしてまた女の声。「あの子供らは気づいてやしないよ。警察になんか行きやしないよ」

「そんなことわかるもんか」男が振り返って、怒鳴り返したようだった。「あいつらはとんでもないガキだ。今ごろは警察に駆け込んでいるに違いねえ」

「だからって、警察が本気にするはずはないよ」

「うるせえ、バカ女」

玄関の戸を乱暴に閉める音がし、塀の向こうからはあさんの泣き声が聞こえはじめた。続いて自動車のドアを開け閉めする音。エンジンがかかる音が聞こえ、安田酒店のトラックが駐車場から飛び出してきたので、二人はあわてて身を隠すことになった。それでもトラックの運転席にあの男が座っていることだけは確かめることができた。トラックはそのまま走り去ってしまい、もう少しの間家の中から泣き声が聞こえていたが、しばらくするとそれも静かになつてしまった。

「どこへ行ったのかな？」と太郎は口を開いたが、次郎は黙って何かを考えている様子だ。

「来い」突然次郎が言って、自転車にまたがるうとした。

「どこへ行くの？」

「あいつの行き先がわかった」

「どう?」

「ついてこいよ」

自転車をこぎ始め、二人は路地から大きな道に出た。次郎が思いつきりとばすものだから、太郎は一生懸命ついていかなくてはならなかった。どうやら次郎は町はずれの造成地へ向かっているようだった。

太郎もよく知っている場所だったが、あのあたりは家が少なく、普段からひとけもなかった。ある業者が山を切り開いて宅地を造成したのだが、交通の便が悪くて売れ行きが悪く、もう何年も放置されていた。「なぜあんなところへ行くのさ?」自転車を走らせながら太郎は言った。ちゃんと相手の耳に届くように大きな声を出した。

「前に一度」次郎も大きな声で返事をした。「あいつがあそこでトラックを止めて、仕事をサボってタバコを吸っているのを見たことがあるんだ。時間をつぶすためにいつも行く場所なのかもしれない」

そんなことわかるもんかと太郎は思ったが、口には出さないことにした。

二人は造成地に着いたが、記憶の通りがらんとして何もな場所だった。ブルドーザーで山を崩して平らにしてあるが、ところどころ木がぽつんぽつんと植えてあるほかは赤土がむき出しになっている。次郎はもう自転車を止め、あたりを見回していた。「いないよ」と太郎は言ったが、次郎は何も答えず、何を思ったか不意にまた自

転車をこぎ始めるではないか。しかし太郎はついて行かなかった。息が切れていたので自転車から降り、地面に座って休憩することにしたのだ。

造成地の中を走り回って、次郎はいろんな方向を調べているようだった。広い場所だから、ここからでは見えない死角はいくらでもある。次郎はそういう場所を一つずつ確かめているようだ。突然ブレーキをかけて、次郎が自転車から飛び降りるのが見えた。それだけではなく、まるで身を隠すようにかがんだではないか。太郎のほうを向いて、次郎は手招きをはじめた。次郎は赤土の小山の影に隠れていたが、太郎がそばへ行くとある方向を指さした。ずっと遠くだが、あのトラックが止まっているのが見えた。「前にもあの場所に止めてたんだ」次郎は自慢そうに言った。

「でもオヤジはいないみたいだよ」

首を伸ばし、次郎はもう一度そっちを見た。たしかに太郎の言うとおりで、トラックの運転席は空っぽで、そのまわりにも人影はない。「本当だ」

「どうするの？」

「もう少し様子を見よう」

だが十五分待っても何も起きなかった。さらに十分待っても何も変わらなかった。オヤジは現れないのだ。「何か変なんじゃない？」とうとう太郎は言った。

「そうだな」二人は近くへ行ってみることにした。小山の影から出て、ゆっくり歩いていったのだ。だがいくらかも進まないうちに、ト

ラックのエンジンがかかったままになっていることがわかった。ドアまで開いたままではないか。

「サイドブレーキも引いてないや」運転席をのぞきこみ、太郎は口を開いた。

振り返ると、次郎はまわりを見回しているところだった。そしてある方向を指さしたのだ。「オヤジはあそこにいるぞ」

その方向を見ると、造成地は100メートルほど先で終わり、その向こうは昔ながらの森のままで木々が濃く茂っている。その一本の枝に縄をかけて、山田酒店のオヤジは首をつっていたのだ。少し風があるので、その身体がぶらぶら揺れているのがここからでもわかる。「風鈴みたいだな」自分でも気がつかないうちに、太郎はつぶやいていた。

突然次郎が笑い始めた。あまりに大きな声なので太郎は思わず振り返ったが、腹を抱え、次郎は身体を二つに折り曲げているではないか。太郎は目を丸くしたが、ひとけのない造成地に次郎の声はおかまいなく響いた。その間もオヤジの身体はゆらゆらと揺れ続けた。警察に電話しないといけないよ」太郎は言った。

涙をふきながら、次郎が顔を上げた。「だめだ」

「どうして?」

「交番へ直接知らせに行くほうがよっぽど親切さ」

自転車にまたがり次郎が走り始めると、太郎も同じようにした。

次郎は自転車をこぐのがとても速く、やっと太郎が追いついたとき

にはもう自転車を降り、次郎は交番の入口の戸をガラガラと開けようとしているところだった。さつきと同じ警察官がまだいて書類仕事をしていたが、すぐに顔を上げ、「またおまえらか」という表情をした。

「山田酒店のオヤジが、造成地の木で首をつつたよ。さつき見つけた」次郎が言った。そして、もちろんこう付け足すことも忘れなかった。「風鈴みたいにゆれてた」

「そうかい。それはよかつたな」警察官は書類仕事をやめようと思わない。忙しそうにボールペンを動かし続けている。

「じゃあ、ちゃんと通報したからね」

「ああ、ご苦労さん」

くるりと後ろを向き、次郎はそのまま交番から出ていくではないか。太郎は口をぽかんと開けていたが、気がつくや次郎は外に出てもう西の空を眺めているところだった。太郎が何か言う前に次郎が口を開いた。「もうすぐ日が暮れる。おまえの家へ行こうぜ。そろそろ叔父さんが来るころだろう？」

「そうだけど…」

「特ダネを聞いたら喜ぶぞ」

叔父の運転する自動車に乗せられ、太郎と次郎が再び造成地へ戻ってきたときには、もうあたりは真っ暗になっていた。ガソリンがなくなつて、トラックのエンジンは止まってしまっている。三人は、月光に浮かび上がる死体を並んで見上げることになった。風が吹い

てまた死体が揺れると、次郎は再び大きな声で笑い始めた。

特に珍しいことではなかったが、この日の授業中にも黒板の前に立たされ、次郎は担任の教師からなぐられていた。教師は田中という体格のいい男で、怒りで顔を真っ赤にしている。

怒っている理由は、次郎が今日もまた宿題をやつてこなかったということでしかなかったが、「サボリ屋の児童は勉強が遅れ、成績が下がることで、進学や就職などで将来困ることになるかもしれない。だがそれだけのこと。そのときになって、ただ本人が苦しめばよいだけのこと」という境地に達することは、あの若さではまだ期待できなかったということなのだろう。顔をゆがめ、野球のグローブのような手を上げ、田中は次郎のほおをなぐり続けたのだ。

後で何かの参考になるかもしれないと、田中がなぐる回数を太郎はノートのすみにメモしていった。『正』という字が二つ並んだところで、やっと田中も手に疲労を感じ始めたようだった。次郎は黙って耐えていたが、その忍耐力をもつてしても、鼻の中の血管までは補強できなかったのだろう。次郎の鼻の穴から血がゆっくりと流れ出すのが見えた。血のあざやかな赤さには人の心を静める力があるのかもしれないと、太郎も不意に思いはじめないではいられなかった。田中がわれに返り、顔色を変えたのだ。「次郎君、大丈夫かい?」

次郎はうなずいた。血がこぼれ、床に数滴落ちた。

「本当に大丈夫かい?」気味の悪い猫なで声を出し、田中は次郎の肩に腕を回した。教室のドアを開け、いかにも心配している風な表

情で顔をのぞき込みながら、次郎を廊下へ連れ出そうとしたのだ。

そのまま二人は姿を消したのだが、次郎は放課後まで姿を見せることはなかった。なんだかこそとした様子で田中一人が戻り、次郎の荷物をまとめ、カバンにつめて持ち出す姿が見られたから、きつと次郎は早退したのだろうと子供たちは噂しあった。だが、その翌日にも次郎は姿を見せなかった。気にならないわけではなかったが、家を訪ねてやるほど太郎も親しいわけではなかった。何もなかったかのような顔で、田中は授業を続けている。教室の中に空っぽの机が一つあることをのぞけば、まるで次郎などはじめから存在しなかったのだといわれても信用できそうな気までしてくるほどだ。一日が終わり、放課後になった。

校舎を出て校庭を横切り、太郎は近道をしようとしていた。この学校には裏門はなかったが塀が壊れかけている場所があり、そこを通り抜けることができたのだ。校舎の裏側にあたり、ひとけのない場所だが、教師たちが通勤に使う自転車の置き場にもなっている。そこを通り抜けようとして、少し離れた場所に田中の姿が見えることに太郎は気がついた。田中はかがんで、自転車の鍵をはずそうとしているようだった。

顔を合わせたくないのに、太郎は物影に身を隠すことにした。そのあと様子をつかがい続けたが、さび付いて動きにくくなっているのか、田中はまだ鍵をいじっている。だがやがてパチンという小さな音が聞こえ、ロックをはずすことができたようだった。田中の背後に次郎が突然姿を見せたのは、このときのことだった。まだ少し距離があるが、まるで偵察兵のように腰をかがめ、体を低くしている。明らかに足音を消そうとしているが、そんなことをしなくてもカバンを荷台にくくりつけることに夢中で、田中が気づく可能性はまずなかった。

次郎の手にナイフが握られていることに気がついたとき、太郎は本当に息が止まってしまいそうな気がした。次郎が何をしようとしているかは明らかだった。リングをむくのには使えないような小さなナイフだが、こんな状況で他の用途は考えられないではないか。

すばやい動きだったので、田中は気配を感じることもなかっただろう。太郎にだって、飛び出して行って制止するどころか、声を上げることさえできなかった。次郎のナイフの先端は、田中の背中にすうっと消えていった。だがこの次に何が起こったのか、後になっても太郎は思い出すことができなかった。気がついたときには息を切らし、校内を完全に横切った校庭の反対側のはしにいたのだ。足が痛く棒のようになり、かなりの距離を全力疾走してきたのは間違いなかった。ランドセルが背中から外れかけ、水彩絵の具の箱を両手で強く抱きしめていることにも気がついた。帽子も脱げ、数メートル背後に落ちてしまっている。

それはひどく奇妙な眺めだったのだろう。まわりを歩き過ぎる生徒たちが不思議そうな表情で自分を見ていることに気づき、太郎も緊張を感じないではいられなかった。顔見知りの女の子が親切にも拾い上げ、帽子を手渡してくれた。すべてが夢のような気がした。帽子をかぶりなおし、生徒の群れに混じって太郎は歩き始めた。

翌朝は、登校するのがとても怖かった。だが家を出発しないわけにはいかなかった。ランドセルをかつぎ、太郎は歩き始めた。しかし学校はまるで何事もなかったかのように昨日と同じ様子で立っているではないか。なんだかたまさかのような気持ちになって太郎は一瞬立ち止まったが、結局は他の生徒たちと一緒に校門の中へと入っていった。

始業ベルが鳴っても、田中は姿を見せなかった。代わりに副担任の教師が姿を見せたのだが、心配していたことが現実になり始めているような気がして、太郎は胸が苦しくなるような思いを感じないではいられなかった。だが病欠であるということ以上は田中のことは何一つ口にせず、副担任は授業を始めるではないか。そのまま時間がすぎ、昼休みになった。

昼食を急いでもせ、気がつくとも太郎は職員室の前に来てしまっていた。ここなら何かわかるかもしれないと思ったからだが、やはり何の手がかりもなかった。職員室の中はひっそりとし、出入りする教師の数も少ない。あれはやはりただの夢だったのだろうかという気がし始めていたのだが、突然肩をたたかれ、太郎は驚いて飛び上がることになった。振り返ると次郎がいて、太郎の顔を見て笑っているではないか。次郎は元氣そうで、なぐられてはれたほおももうほとんど元通りになっている。なんだか不自然にポケットに両手を突っ込んだままだったが、次郎は口を開いた。「ちょっと職員室に用事があるので、おまえも一緒に来てくれないか？」

「なんだい？」

ポケットの中にあるものをちらりと見せ、次郎はにやりと笑った。「ふふふ」と太郎も思わず含み笑いをしないではいられなかった。こぶしほどの大きさしかないが、表面に筋の入った不恰好なパイナップルのような形をした物体だ。現物を見たことのある人は少ないだろうが、映画などで形はよく知っているに違いない。手榴弾だ。

次郎は言った。「警察は、なぜかオレのことをすぐにかぎつけてきた。今朝だって、家から校門までずっと刑事につけられながら登校したんだぜ」

「へえ」

「もうすぐオレは逮捕されるだろう」

「ああ」 太郎はうなずいた。

「だから、その前にこちらから先手を打とうと思う」

「いい考えかもな」 その手榴弾がおもちゃだということは、太郎にもわかっていた。模型屋で売っている実物大のプラモデルだ。爆発なんかしつこくない。でもほとんどの大人は、こういうプラモデルが存在することを知らないだろう。

相談を終え、二人は作戦に取りかかった。まず二人は前後に並んだ。太郎が前で次郎が後ろだ。まるで電車ごっこでもしているような平和な眺めだったが、次郎が手榴弾を片手に持ち、もう一方の手で太郎のえりを強くつかんでいるところが違っていた。職員室のドアを開け、二人はゆっくりと中へ入っていった。

学校の職員室は独特の匂いに満ちている、と太郎はかねてから思っていた。書類と赤インクと教師たちが吸うタバコと、それからぶん殴られて鼻血を出した子供を治療したあとの消毒薬の匂いだ。二人はその中を進み、次郎は手榴弾を高くかかげ続けた。だが口を開こうとしたところで、思わぬ邪魔が入った。机から顔を上げ、若い男の教師がじろりとらんだのだ。「君たち、何をしているんだ？」

「これが目に入らないか？」と次郎が言ったが、テレビの時代劇を思い出して、太郎はもう少しで笑ってしまうところだった。

「何だそれは？」 教師は目をこらそうとした。

「手榴弾さ」次郎は答えた。「職員室ごとぶつとばすぞ」

ズズズズと大きな音がした。その教師がよろめいてそばのイスにもたれかかったからだだが、その音が他の教師たちの注意を引くことになった。それまではざわざわしていたのが、あつという間に職員室の中は静かになってしまった。まるでアナウンサーの試験でも受ける時のように、はっきりした大きな声を出すように太郎はつとめた。「次郎君は手榴弾を持っています。言うとおりにしないと、職員室をぶつとばしてしまうと言ってますよ」

この次の瞬間に何が起るのか、二人ともきちんと予想していたわけではない。「おまえら、早くここから逃げた方がいいぞ。警察を呼べ」次郎が叫んだ。

次郎のこのセリフが引き起こした効果については、その後も太郎は思い出すたびに笑いが浮かんでしまうがなかった。男も女も若いのも定年間近なものも、教科書やら出席簿やら採点しかけのテストやらを置いたまま、教師たちはガタガタと大あわてで職員室を出ていったのだ。それこそ本当に「しりに帆かけて」という感じで、いつもの威張りくさった表情や威厳とやらがまるでうそのようだった。座席が奥まった場所にあつたせいですがよく動くことができなかつたのか、最後に残つたのは教頭だった。それを氣の毒に感じたわけではもちろんなかったが、その背中に向かって太郎は言葉をかけてやることにした。「教頭先生、僕をここに一人で残していくんですか？」

液体窒素につけられて瞬間冷凍にでもされたかのように、教頭の体はそのまま動きを止めてしまった。両足はまるで床に釘付けでもされたかのように、閉めようとしていたドアには、手もハエのよう

に張り付いたままだ。飼い主にしかられ、二、三発けり飛ばされたあとの犬のような顔をして、「出ていけと次郎君が言うんだ」と教頭は答えた。

「いや、おまえにはここにいてもらおうかな」次郎はにつこりし、手榴弾を楽しそうに振った。

「ねえ教頭先生」太郎は言った。「ロッカーの中にある重要書類を持ち出さなくていいんですか？ 大切なものなんでしょう？ 手榴弾が爆発したら、みんな燃えちゃいますよ。教育委員会の人たちがなんて言うか」

「そうだった。持ち出すから少し時間をくれるかい？」

「くだらない書類は助け出して、こいつは見殺しかよ」鼻を鳴らし、次郎は太郎を指さした。

「そうだった」教頭ははつとした顔をした。

「あんたが僕の命よりも書類を大事にしたってことを、あとでみんなに話してやるからね」太郎は言った。

だが子供たちは、すぐに教頭を解放してやった。「おまえは行っていい」と次郎から言われ、はつとした顔で教頭は姿を消した。校庭にはすでにパトカーが姿を現し始めていた。1台や2台ではなく、署内の車をすべてかき集めてきたのではないかと思えるほどで、それがすべて警察官を満載しているのだが、まだ警察は他の生徒たちを避難させているばかりで、手を出してはこないようだった。子供たちは、カーテンのかけに隠れてそれを観察していた。「次はどうするんだい？」太郎は言った。

「これだ」ポケットからナイフを取り出し、次郎は見せた。だが自
転車置き場で使ったようなものではなく、大きいことは大きいがプ
ラスティック製のおもちゃだった。刃の部分はゴムでできていて、
指で押すとグニヤリと曲がる。「これで人を殺すのは難しいぜ」と
次郎は笑った。協力してカーテンを大きく開き、職員室の中の様子
が外からもよく見えるようにして、二人は行動を始めたのだ。

それはおっかけっこというか、鬼ごっこのようなもので、一見し
たところは平和なものでしかなかった。太郎が部屋の中を逃げ回り、
次郎がそれを追うのだ。ただ普通の遊びと少し違うのは、次郎が手
にナイフを握っていることで、精一杯の演技力を駆使して、逃げる
太郎も引きつった表情を作っている。もう爆発の危険はないとわか
るように、手榴弾は外からもよく見える教頭の机の上にぽつんと立
てて置かれていた。

この鬼ごっこが始まったのは、二人が立てこもりを始めて1時間
ほどたったときのことだった。一時間あれば、警察も狙撃兵を準備
することができただろう。もっとも警察にも、小学生を相手に本気
で狙撃兵を使う気はなかっただろう。念のために用意したのにすぎ
ないだろうが、次郎はやらせる気だったのだ。彼らが引き金を引か
ざるをえないようにしたのだ。

二人は鬼ごっこを続けた。笑い顔を隠しながら次郎めがけて、室
内のいろいろなものを太郎は投げつけてやった。だから出席簿やエ
ンマ帳、採点の終わった算数のテストの束などが空中を飛ぶこと
になった。とじていた紙ヒモが切れ、テストなどは紙ふぶきのように
舞った。その中の一枚がなぜか目に留まり、太郎は声を上げないで
はいられなくなった。小さな声ではなかったが、距離があるから外
部には聞こえなかったに違いない。「見るよ次郎、こいつは0点を

取ってるぞ」

だが次郎は何も言わなかった。何の返事も返ってこないのだ。なぜだろうと思ひ、立ち止まって太郎は振り返ることになった。次郎が床に崩れ落ちる姿が目に入ったのは、その瞬間のことだった。同時にバシツと音がして、窓ガラスの一枚が大きくはじけたことにも気がついた。銃声が耳に届いたのは、そのあとのことだった。

もう次郎は0点のテストのことを笑うことはできないのだな、と太郎は思った。次郎はうつぶせのまま動かず、床の上には赤い血が小さな池を作り始めていた。

次郎の一件が学校の評判にどれだけ大きなキズをつけたかを想像するのは難しいことではないし、校長や教頭たちにはそれが我慢できなかつたのだろう。ある日の放課後、太郎は校長室に呼び出しを受けたのだ。「君に頼みたいことがあるのだけどね」太郎の顔を見て、校長は猫なで声を出した。

「なんですか？」その声の調子がひどく不快だったが、太郎は感情を見せずに答えた。

「卒業式のとくに、君にスピーチをしてほしいんだ」

驚いて、太郎は校長の顔を見つめた。校長は鼻がとがっていて、丸いメガネのむこうからフクロウのように見つめ返してくる。校長が何を考えているのか、太郎は想像してみようとした。「やっつくれるね？」校長がまた言った。

「何をしゃべればいいんですか？」

「担任の先生が指導してくださるよ。君は心配しなくていい」

だがすでに太郎は気づいていた。あの事件の直後だから、卒業式は世間の注目を集めるに違いない。新聞記者だって取材にやってくるだろう。もしその場で太郎が立派なスピーチをやってみせれば、それはそれで何がしかのものではないか。この学校がいかに復活したかを世間にアピールするよい機会になる。ここ半年、職を失うのではないかと恐れて、校長も教頭も夜も眠れないような気持ちでいたに違いない。心を決め、短く「わかりました」とだけ答えて、太郎は校長室をあとにした。

翌日からスピーチの練習が始まったのはいうまでもない。原稿を渡され、それを暗記するように言われたのだ。それがどのような原稿だったのかをここに引用する誘惑には、僕としてもなかなか抗しきれないというのが正直なところだ。

「たしかに僕たちの学校では、ちよつとした行き違いや偶然の不幸なできごともありました。それでも今日、こうして立派な卒業式を迎えることができました。これはみんな校長先生を始め、それぞれの先生方のご指導のおかげであると僕たちは感謝しています。思い起こせば入学式、遠足、運動会といろんな楽しいことがあります。しかし、今日でこの懐かしい校舎ともお別れかと思うと……」

とうとう卒業式の当日がやってきた。この日のために両親が特別に新調したスーツを身につけ、太郎も講堂へやってきていた。過去に一度もないことだったが、髪にはクシまで入って、左右に分けてポマードで整えてあったが、それを笑うのは気の毒かもしれない。講堂の中は満員で、そなえつけのイスだけではとても足りず、折り

たたみ式のイスが何十も外部から持ち込まれていた。新聞記者らしい姿がちらほらあることにも、もちろん太郎は気づいていた。

式は予定の時間に始まり、プログラムどおりに進み、校長やら教頭やら、来賓の誰やらのスピーチのあとで太郎の順番がやってきた。名を呼ばれて歩き始め、ステージの中央に立ち、コホンとせき払いをして、太郎は話し始めた。「僕は、ここにいる誰にとっても最も興味のある話題について話そうと思います。同級生の次郎君が職員室の中で射殺された事件です」

校長たちの顔色がさつと変わるのにはステージの上からでもよくわかったが、もう誰にも太郎を止めることはできなかった。

「次郎君はあのとおり射殺されましたが、まったく報道されてはいないことですが、あの前日に田中先生は彼の顔を10発ぶん殴っていたのです。いささか稚拙なやり方ではありますが、次郎君には復讐する正当な権利があったと思います。あのような暴力教師を野放しにしていたのは、今そこにいらっしやる校長や教頭先生、来賓の教育委員会の人たちですが、この人たちはどういう面での場に來ているのでしょうか。きいてみたい気がします。」

あれは起こるべくして起こった事件であり、偶然でも何でもありません。田中先生のクラスに入った時から、遠からずああいうことが起きるだろうと僕は思っていましたし、実際起きたわけです。田中先生がどういう人物なのかを校長先生たちが知らなかったはずはありませんし、もし本当に知らなかったというのなら、ただの職務怠慢でしょう。

五年生の時、僕は鈴木先生のクラスでした。その二学期の中ごろ、石を投げて女子トイレの窓ガラスを壊した犯人だと決めつけて、鈴

木先生は僕をぶん殴りました。ちゃんとしたアリバイがあったのに、言い分なんか聞いてもくれませんでした。被疑者の権利なんて言葉は、きつと耳にしたこともないのでしよう。僕はその後、独力で犯人を捜し出しました。事件の目撃者がいることがわかり、それが手がかりになったんですが、犯人の正体を知っても、僕は特に驚きを感じませんでした。犯人は隣のクラスの谷川君だったんですね。

姓は違うんですが、谷川君は鈴木先生の姉の子、つまり実の甥というわけです。小さいころから甘やかされて、粗暴でどうしようもないクソガキですが、血のつながりがあるとかわいく思えるのかもしれない。甥っ子を助けるためには、別の誰かを犯人に仕立て上げる必要があったわけですね。鈴木先生、そんなことをして恥ずかしくありませんか。

米本先生。老眼で目がかすむという理由で、字を読むふりをして胸の名札に手を伸ばし、どさくさまぎれに女子児童の胸にさわるのはあまり感心できません。

教頭先生。ロッカーの中にある書類を人命よりも大切に思うというのは、教育者としてまずいんじゃないですかね。人の命は地球より重いつて、いつかの朝礼のときに偉そうに言ってますでしたか。

村上先生。体罰をして杉山君の歯をへし折っておきながら、階段で転んだのだとウソを言わせるのは気がとがめませんでしたか。治療費として、彼の両親はかなりの額を支出したはずですよ。今からでも遅くはないからお払いになったらどうです？

この学校で僕は、こういうさまざまな出来事を経験しました。でもありがたいことに、今日でおさらばできるわけです。もうしばらくいなくてはならない在校生諸君には贈る言葉もありませんが、ど

うか希望を捨てず、齒を食いしばってがんばってくださいね」

ぺこりとお辞儀をして、太郎はステージを降りていった。通路をそのまま歩き始めたのだが、止めるどころか誰も言葉をかけようとさえしなかった。歩きながら太郎は、今この瞬間も次郎が自分のすぐ隣にいるような気がしていた。あきれたような感心したような顔で、次郎ならきつとこう言うだろう。「まったく、おまえが通り過ぎたあとには雑草も生えないな」

講堂の外へ出たところにつこりと微笑み、太郎は想像上の次郎を振り返った。「そうさ」

この瞬間の自分がどういう表情をしているのか、もちろん太郎には見ることはできなかったが、とてもすっきりした気持ちのいい顔をしているに違いないということだけはよくわかっていた。

(終)

猫のいる夜

清介の家には猫がいました。特に大きくもない猫なのですが、物心ついたころにはすでにいたから、もしかしたら清介よりも年上だったかもしれません。白い身体に黒い顔をしたシャムネコですが、いつも見慣れているはずなのにある日ものすごく驚いたのは、しっぽが二本あることでした。清介はそれまで気がつかなかったのです。おしりの先からヒュツと松の葉のように飛び出しています。猫の名前はハナコといいました。

「いま気がついたんだけど、あんたってしっぽが二本あるの？」

「知らなかったのですか？ 私はネコマタなのですよ」「毛づくろいをしていたのを途中でやめ、顔を上げてハナコはうれしそうに笑いました。

「ネコマタって何？」

「どう説明すればいいでしょう。猫のオバケのようなものです」

「あなたはシャム猫だから、シャムネコマタなの？」清介がそう言うのと、ハナコはまたくすくす笑いました。

「要するに、あなたは化け猫なんだね」清介は続けました。

「それに近いものかもしれません」

「ふっん」

「ところでぼっちゃん、散歩に行きませんか？」

「散歩？」

「ええ、いいお天気ですから」

「うん」

清介はハナコと一緒に外へ出ました。犬の散歩というのはよく聞くけれど、猫と散歩に行くのは初めてでした。明るい昼下がりで、道路には人の姿はほとんどありません。二本あるしっぽをピンと伸ばしたシャム猫の後ろをついていきながら、「どこへ行くの？」と清介は口を開きました。

「お宮へ行きましょう」

「お宮？ 神社のこと？」

「ええ、ちょっとおもしろいものをお目にかけますよ」

お宮に着きました。でもやっぱり人はいなくて、ガランとしていきます。「そのドングリを少し拾っておいて下さい。必要ですから」とハナコが言いました。

「これ？」かがみこむと、まわりの木々から落ちてきたドングリが地面にたくさん散らばっているのを見ることが出来ます。清介は数え始めました。「いくつ拾うの？」

「10個もあれば十分です。ええ、それで十分」

「まさかこれ、食べるんじゃないだろうね」

ハナコは笑います。「まさか食べられっこありませんよ。リスじやあるまいし」

「知らなかったの？ 僕はリス年生まれだよ」

「リス年って、十二支にそんなものがあるのですか？」

「あるよ。去年できた」

「そうですか」ハナコは楽しそうに声を上げました。「それは知りませんでした」

ハナコと一緒に清介は神社の奥、鎮守の森へと入っていきました。木がたくさん茂って少し薄暗い場所です。「こんなところにいったい何があるの？」

「そこの木の幹に大きく焼けこげた跡があるでしょう？」

「うん」ハナコの言うとおり、一本の木の幹が炭のように真っ黒にこげているのを見ることができました。縦横50センチぐらいの四角い形です。「雷が落ちた跡だね」

「でもただのこげ跡ではありませんよ。これは地下への入口でもあるのです」

「地下？」

「迷子にならないように、ちゃんとついて来て下さい」あっと思っ

たときには、ハナコはそのこげ跡の中へスルリと入り込んでしまっていました。まるで黒く深い穴の中へもぐりこむような感じで、その姿が魔法のように見えなくなってしまったのです。

「ねえ、どこ？」気がつくとき清介は森の中に一人きりで、木のこげ跡をのぞき込んでいました。もし人が見ていたら、あんなところで何をしてるのだろうと思ったかもしれません。

「こつちですよ」こげ跡からハナコが顔を出しました。

「本当にそんなところに入るの？」

「心配しないでついていらっしやい。怖いことは何もありませんから」

木の内部に入ると、地下へ続く階段をすぐに見つけることができました。想像していたよりも広く、まるで地下鉄の駅へ降りていくときのようといえばいいかもしれません。ところが驚いたことに、それは本当に地下鉄だったのです。ちよつと長い階段だったけれど、30メートルも降りると改札口が見えてきました。

「さあ、ここへさっきのドングリを入れて下さい」なんとここには自動改札機まであって、ちょうどドングリと同じぐらいの直径の穴があり、その中へコロンと入れるようになっていました。

「いくつ入れるの？」

「三個半です。それが一人分の料金ですから」

「でも僕、半分のドングリなんて持ってないよ。ドングリ半個なん

て、どうやるの？ 半分に切るの？」

「大きいドングリをそのまま四個入れて下さい。お釣りが出ますから」

言われたとおりにすると、本当にお釣りが出てきました。半分ぐらいの大きさの小さくてかわいらしいドングリが一個、少し下にある出口から顔を出したのです。「さあ、行きましょう」ハナコがしっぽを振りました。

「あなたはどうするの？ ドングリを払わないの？」

「猫は無料なのですよ」

通路を進んで、すぐにプラットホームに出ることができました。「神社の地下にこんな駅があるなんて、ぜんぜん知らなかった」立ち止まって見回しながら、清介は口をぽかんと開けていました。

「そうでしょうね。でも神社の地下だから駅があるというのではないのですよ。人間たちが知らないだけで、本当はあちこちに秘密の駅があるのです。入口がわかりにくいから誰も知らないだけなのです」

「ふうん」

少しして電車がやって来ました。レンガに似た赤茶色の車体で、清介たちの目の前に止まり、ドアを開きました。「乗りましょう」

電車はすぐに動き始めたのですが、車内の様子には特に奇妙なところはありませんでした。床があってイスがあって、普通の電車と

同じです。でも清介たちのほかにはお客さんは一人も見えません。
「誰もいないね」

「もともとお客さんの多い電車ではないのです。物を運ぶ貨物列車の方が主な仕事ですから」

「貨物？ 荷物のこと？ 何を運ぶの？」

「物と言えば物ですよ。いろいろです」清介の隣にチョココンと腰かけて、ハナコは笑っています。

電車はときどき駅に止まりました。でもやっぱり誰も乗ってきません。そしてある駅で止まったとき、ドアを開けて、電車はずっと止まったままになってしまいました。「発車しないの？」と清介は言いました。

「ここで貨物列車とすれ違うようです。それまでは発車しませんから、プラットホームに出てみましょう」

立ち上がって、ハナコに連れられて清介もプラットホームへ出ました。別にどうということのないプラットホームで、人が全然いないことを除けば普通の地下鉄と同じです。だけど清介はおかしなことに気がつきました。初めは目の錯覚かと思ったのですが。「このプラットホーム、どんどん長くなってる！」

まるでゴムひものようにプラットホームが伸びて、見る見る長くなっていくのです。向こうに見えている突き当たりの壁もゆっくりと遠くなくなっていきます。今ではもうさっきの二倍ぐらいの距離があります。

「そうですね」けれどハナコは当たり前のような顔をしています。「きつととても長い貨物列車が着くのでしょうか。それに合わせてプラットフォームも長くなるのです」

とつとつ貨物列車がやって来ました。ハナコがいう通りとても長く、真つ黒な機関車が引つ張り、その後ろには黒い貨車がいくつもつながっています。貨車はみな箱のように四角い形をし、機関車の車体には白いペンキで大きく『真夜中電鉄』と書いてあるのが見えます。

「この電車は真夜中電鉄ってどういうの？ どういう意味なの？」

ハナコは不思議な表情でにっこりしました。「そのことは、もう少しあとでお話ししましょう。ほらご覧なさい。貨物列車が停車しますよ」

ブレーキの音をさせて、貨物列車は清介たちの目の前に止まりました。行儀よく一列に並んでいる黒い貨車たちが何を運んでいるのかはわかりません。でもそのうちの一台から何やら音が聞こえてくることに気がつきました。ごとごとガタガタいう音で、内部に何か大きく重いものが入っていて、それが暴れてでもいるような感じですよ。「あの貨車の中から音がしてるよ」

「近くへ行ってみましょう」

近寄ってみると音だけではなく、車体もわずかに揺れていることがわかりました。「中には何が入ってるんだらうね」

「何でしょうね」

その隣の貨車に清介は目を向けました。これは音を立てていないし、揺れてもいけないけれど、何だかひどく熱くなっているようです。近寄って手をかざすと、本当に熱気を感じることができません。「この貨車は熱いよ。中が火事になってるんじゃない？」

「火事ではないでしょう。もしそうなら警報装置が作動するはずですから。何か本当に熱いものを積んでいるのでしょうか？」

「ふうん」

清介はその次の貨車のところまで行ってみました。これは冷たい貨車でした。でもただの冷蔵貨車ではないようで、何だか知らないけど、表面に霜やツララが付くぐらい冷たくなっています。「これは何が入ってるの？ ドライアイス？」

「さあ何でしょうね」

また清介たちは歩いて、さらに次の貨車のところまで行きました。でもこの貨車は普通です。熱くも冷たくもなっていないし、音もしません。「これは静かだよ」

「そうですね」

「何が入ってるの？」

「のぞいてみたらどうですか？ そこにのぞき窓がありますよ」

ハナコがしつぽで指さすとおり、貨車の側面にはまるで郵便ポストのような小さな窓があり、中を見ることができるようになっています。「見てもいいの？ 怒られない？」

「大丈夫ですよ。秘密になっているわけではありませんから」

清介は近づき、顔を寄せて、窓の小さなフタを押し開けてみました。暗いので初めは何も分からなかったけれど、だんだん目が慣れてきました。積みまれているのは何かの石像のようでした。うずくまったような形の黒いもので、まったく動きません。

だけど突然、そいつがぴくりと動きました。驚いて、清介は思わず後ずさりをしないではいられませんでした。それまでは清介に背中を向けていたのが、顔を上げてこちらを見たのです。ゴリラ？
恐竜？

うつん、よくわかりません。でも怪物には違いありません。ヨロイのような肌をして、ワニのようにでかい口があつて。清介が飛びのいたので、ぞき窓が落ち、ガチャンと大きな音をたてました。

「中身は何でした？」

振り返るとハナコが微笑んで見上げているので清介はほっとすることができましたが、声を出す前に少し息を整えなくてはならないほどでした。「なんだか知らないけど怪獣みたいだった」

「怖い怪獣でしたか？」

「わからない。一瞬見えたただだから」

突然、機関車が汽笛を鳴らすのが聞こえてきました。貨物列車が発車するでしょう。ごとん、ごとんとゆっくり動き始め、駅を離れていくのを清介とハナコは見送ることになりました。そのあと座

席に戻るとドアが閉まり、電車はまた動き始めました。「変な貨物列車だったね」ハナコの背中をなでてやりながら、清介は話しかけました。

「でも真夜中電鉄の本社では、あのような貨物列車を全部管理しているのですよ」

「全部？ ああいうのがいくつも走ってるの？」

「はい。つねに2000本ぐらいが世界中の地下を走り回っています」

「2000本！」

「駅は200万ヶ所以上あるそうですよ」

「そんなにたくさん？」

「ええ、人間たちはまったく知らないことです」

「でもそんなことをなぜ僕に教えてくれるの？ 秘密なんじゃないの？」

清介を見つめ、ハナコはにっこりしました。「だって私はあなたの猫なのですから。私の主人であるあなたは、特別な存在なのですから」

「でも『教えてやったのだから、お礼に何かよこせ』なんて言うんじゃないだろうね」

ハナコは小さく声を立てて笑いました。「誰がそんなことを言う
ものですか」

電車は走り続け、いくつもの駅に止まったけれど、やはり誰も乗
つてきません。ハナコが言いました。「次の駅は貨物の操車場です
から、ちよつと降りて見にいきましょう」

「操車場？ さっきみたいな怪獣がいるところ？」

「怪獣もいるでしょう。でもそれだけではありませんよ」

「怖いことはない？」

「大丈夫です。安全な場所ですから」

操車場は次の駅で下車して、プラットホームから地下道を通って、
5分ほど歩いたところにありました。二本のしっぽをピンと立て、
ハナコは清介の前を楽しそうに歩いていきます。天井の低い四角い
地下道を抜け出たと思ったら、もう清介たちは操車場に出てしまし
た。気がつくとも幅は狭いけれど長い橋の上において、その橋が広い操
車場を左右に横切っているのです。目の下には線路が広がり、3
階か4階ほどの高さから見下ろしている感じがです。これなら下にど
んな怪獣がいても安全でしょう。

とても広い場所でした。地下だから薄暗いんだけど、目をこらし
ても終点が見えないほどののです。天井も高く、見上げても真っ暗
で何一つ見ることができません。おまけに見回しても柱の一本もな
くて、これでどうやって天井の重さを支えているのか見当もつきま
せん。手すりに寄りかかり、清介は下の様子を眺めはじめました。

貨物列車がいくつも止まっています。さつきと同じような黒い貨車が無数に停車しているわけです。でもさつきとは違うのは、ここではそのドアが全部開き、ちやうど荷物の積み込みが行われているところだということでした。これから積み込まれる荷物が地面に並べられて順番を待っています。

それは生きているものも、そうでないものもいたけれど、それでもみんな制服を着た係員に手招きをされるまで、おとなしく並んで待っているようでした。手招きをされると動物だったら歩くし、物だったら係員の手にかつがれるか、大型のフォークリフトに乗せられるかして、どんどん貨車の中に積み込まれていきました。それがあまりにも奇妙で、さまざまな種類の物たちなので、清介は目を丸くしていました。

見たことがないようなおかしな形をした戦車。ボヨンボヨンとひとりでに飛びはねている元気のいい木のタル。電話帳ぐらいの大きさの古い本。

3本の足で器用に歩いているピアノ。下に車輪がついていてゴロゴロ押しして持ち運びのできる便利なギロチン。背中に蝶の羽が生えた女の子。

バターのようになつとりとした得体の知れない黒い物体。ヤリと盾をもったガイコツ兵士の三人組。一匹だけで貨車がいっぱいになっってしまうそうなほど巨大なカタツムリ。

だけど見回しているうちに、その中に場違いな小さなネズミが一匹いることに気がつき、清介は指さしました。「ねえハナコ、あのネズミはあんたにはとてもおいしそうに見えるんじゃない？」

「とんでもない。あいつはバカにできませんよ」

「どうして？」

「一度私も、あのネズミに鼻をかじられたことがあります。今でもそのときのキズ跡がありますよ」

かがみこんで、ハナコの鼻のわきに清介は軽く触れてみました。ごく小さいけれど、たしかに白いキズのようなものが残っています。「あなたにケガをさせるなんて、大したやつなんだね」

「あいつは本当に油断できません。体はあんなに小さいのですが」不意に清介は声を上げました。「あれね、あそこにいる女の子は一度見たことがあるよ。いま思い出した。ほら、背中に蝶の羽があるあの女の子」

「どこで会ったのですか？」首をかしげ、ちよつと興味を持ったふうにハナコは言いました。

「どこでだったかな？」清介は少し考えました。「寝てる時だったと思う。夢の中だった。とても怖い夢だったよ」

「そうでしょうね。この鉄道が運んでいるのは、人間たちが見る悪夢ですから」

「え？」

「この鉄道は、人間たちの心に悪夢を送り届けるのが仕事なのです。ただそれだけが役目なのです」

「悪夢？」

「それが私たちの仕事です。良い夢や楽しい夢は運びません。うなされて目が覚めてしまつような、とびつきりの悪夢だけを運びます」

「そんなことをあんたたちはしてるの？」

「私たちだけではありませんよ。今日からはあなたもこの仕事に加わるのです」

「僕も？」

「そうですね。これから毎晩、あなたは夢の中でここへやって来て、これらの貨物列車を管理する仕事につくのです。さつき乗ってきた電車は、夢の中であなたが通勤するためのものなのです。朝になったら、また帰って行くためのものでもあるのですが。私はあなたの秘書です。あなたがベッドに入って目を閉じるたびに、私がお迎えにまいります。そしてここまでお連れします」

「なぜ僕がそんなことをしなくちゃならないの？」

その質問には答えてくれず、ハナコはニヤリと笑いました。「実のところ夢というものは、人間たちの世界に意外に大きな影響を与えているのです。もちろん明日すぐに結果が出るというような直接的な影響ではないけれど。でも夢は、人間たちの心に確実に刻まれています。人間たちが好む、好まないに関係なく」

「どづいことなの？」

「暴力や恐怖で世界を支配することはできません。世界は広いし、人口も多いですから。また、経済で世界を支配することもできません。どんな大企業にしても、ある分野のシェアを独占することは可能ですが、でもそれはその分野一つのことには過ぎません。あなたがもし世界で一番大きな自動車メーカーの社長になつたとしても、ただそれだけのことです。『世界で一番たくさん自動車を作っている』というだけのことです。」

政治だつてそうです。あなたがどこかの国の大統領になつたとしても同じことです。あなたは政策を決定することはできますが、それだけのことです。でも悪夢は違います。誰だつて、眠っているときには夢を見ます。目が覚めた後は覚えていないことが多いようですが、実はその大部分は悪夢です。その悪夢を私たちが支配しているのです。」

悪夢をあやつるといふのは、まどろっこしいようですが、唯一可能で確実な方法です。人間たちの行動は、本人たちはまったく気づいてはいませんが、実は夢の影響を相当強く受けているのです。今日は何を食べるか、どんな洋服を着るかといった小さなことから、どんな仕事につくか、誰と結婚するかといったことまで。政治家なら、戦争を始めるか終わらせるかといったこともすべてです。人間たちは、そんな夢を見たことさえ覚えてはいませんが」

「ふうん」清介はなんだか胸がドキドキしてきました。

「私のお話はこれだけです。こちらへどうぞ。あなたのオフィスへご案内します」ハナコが歩き始めるので、もちろん清介はついていきました。歩きながら口を開きました。

「だけど、あんたはいつたい誰なの？ 怪物の一味？」

ハナコは振り返って笑いました。「もちろん私も怪物ですよ。そして今、私はあなたの悪夢の中にいるのです。ほら、あそこに見えるではありませんか」

ハナコは立ち止まり、操車場を見下ろしました。清介たちの真下にはちょうど一台の貨車がいて、ドアはまだ開いたままで、車内から何かが顔を出し、こちらを見上げて笑っているのがわかります。

しつぽが二本あるシャム猫でした。ここからでは見えないけれど、鼻のところには、ネズミにかまれてできた小さな白いキズがあるに違いありません。橋の上を歩き続け、清介とハナコはオフィスに着きました。小さな事務室に過ぎないけれど、塔のようなとても高い場所の頂上にあり、操車場全体を一目で見渡すことができます。

部屋の中には机があり、今日からは清介の机になるのですが、その上には書類が一山置かれています。印刷した書類ではなく、一枚一枚ペンで手書きしたものです。紙の一番上の部分には、目にするのはこれが初めてなのだけれど、でもどことなく懐かしい感じのする紋章が印刷されています。「これは何の書類？」清介は机の前に座りました。

「どこの誰にどんな悪夢を送り込むかという計画書です。一枚ずつ目を通して、サインをして下さい。どのような悪夢を見せるか、誰に見せるかは、あなたが自由に決めることができます。あなたが真夜中電鉄の社長、この世の悪夢の総元締めなのですから」

書類を手にして、清介は目を通し始めました。それをハナコが見つめています。いかにも誇りを持って見つめている感じがします。ぞくぞくするような興奮を感じるのと同時に、顔に微笑が浮かんで

くるのを清介はどうしても我慢することができませんでした。両親や友人をはじめ、知っているすべての人の顔を思い描きながら、誰にどんな悪夢を見せてやるうかと考えはじめました。

世界をどのように作り替えることになるのか、清介自身にもまださっぱり見当がつかないのだけど、だからってとんでもない地獄のような世界を作ってしまったりはしないだろうということには、ハナコも自信があるようです。だからああやって、清介を誇らしく見つけることができるのでしょうか。今夜も清介は、世界中の人々に悪夢を送り届けています。だからあなたがゆづべ見たあの夢も、実は清介が届けたものなのです。おもしろい？

(終)

サンタクロースの家

『トナカイ号』は、世界最初の旅客用潜水艦だった。全長数百メートルある巨大な船で、120人の乗客を乗せてイギリスの港を出港し、北極海にもぐり、氷の下を何千キロもくぐりぬけ、たった4日でカナダに達してしまうのだ。

そういう船だから、姉と二人でカナダへ旅行することが決まったとき、新しいものの好きの私が、この船を利用することを主張しないはずがなかったのだ。

だが姉は嫌がり、なかなか首を縦に振らなかった。私は腹を立て、三日間一言も口をきいてやらなかった。とうとう姉は折れた。だからあの日、私たちはあの棧橋に立つことになったのだ。

横付けされている巨大な船体を目にして、姉はまゆをひそめた。窓一つない中に閉じ込められるのが不愉快だったのかもしれない。だが私は一目見ただけで興奮し、息もできないほどだった。

船体はソーセイジのような形で、明るい灰色に塗られ、長く広く海を押さえつけている。波ですら、こっそり遠慮して船腹を洗っているという感じだ。船尾からは、羽根の一枚一枚がスクールバスほどもあるスクリューがぐいと突き出している。これほど大きな潜水艦はかつて存在したことがないし、今後も作られることはないかもしれない。

デッキの上で、艦長はもう待つていた。乗客一人一人を温かく迎え、握手をした。決して若くはないが、制服を着てきりりとした姿を見て、姉がほおを赤くするのがわかった。海軍を退役したばかり

の人物で、戦争中にも潜水艦に乗り、敵艦隊をきりきり舞いさせたのだそうだ。そういう話は私も聞いていたから、会うことができても光栄な気がした。

私たちは船内へ案内された。鉄の長い階段を降りてゆくと、かすかなブンブンという音が聞こえてくるようになった。姉は再びまゆをひそめたが、「原子炉の音だよ」と艦長から教えられ、私はまたわくわくした。

出港のときが来て、トナカイ号は港を離れ、ハッチが閉じられ、潜水が始まった。だが非常にゆっくりとしたものだったから、船内においてもほとんど何も感じられなかった。あれほど巨大な船体は、波ですら揺り動かすことができなのだろう。原子炉の音がわずかに高くなったことはわかったが、本当にそれだけで、私は少しがっかりした。あまりにも揺れないので、船に乗っているという感じがしないのだ。

潜水艦なのだから窓は一つもなく、風景を楽しむことはできないが、そのぶん船内の設備は充実していた。ラウンジやバーや劇場があり、映画を上映していないときには、専属の劇団が客たちの目を楽しませていた。小さなものだがプールやテニスコートもあり、私たちは時々出かけた。二日ほどたつうちには姉も、船内での生活を楽しみ始めたようだった。

トナカイ号は今、北極の分厚い氷の下、百メートルのところを航行していた。艦長が話してくれたことだが、北極の氷は板のように平らで、それこそ無限に続く天井のように、どこまでも青白く伸びているそうだった。ベッドに入ったときなど私は天井を見上げ、このはるか上に氷の平原があり、白熊やペンギンたちが遊んでいるのだろうかと思ったりした。

(北極にはペンギンなどいないということを私は知らなかったのだ)

だがこの航海も、いつまでも平穩というわけにはいかなかった。ある夜の真夜中すぎに、名を呼ばれて私はそっと起こされたのだ。

姉の声だとすぐにわかった。目を開くと寝室のドアが開いていて、居間の明かりがうつすらと差し込んで、姉が顔をのぞかせていた。

「何なの、姉さん」私は口を開いた。

「ジュリエット、ちょっと起きてくれる？」

姉の声がいつもより固い気がして、ちらりと不安になったが、私は毛布をはねのけた。カーディガンを着込んで、寝室を出た。時計に目を走らせると、午前一時を過ぎたところだった。

驚いたことに、居間にいるのは姉だけではなかった。艦長までいたのだ。いつものとおり制服姿だったが、ひじや肩のあたりにしわが寄り、あちこちに黒い油のシミまでついていることに気がついた。何があったのだろうかという気がした。

「起こして悪かったね、ジュリエット」

艦長は口を開いた。帽子を脱いで、わきのテーブルに置いた。初めて気がついたのだが、艦長の頭のとっぺんは丸くはげていた。

腰かけるようにと艦長が合図をしたので、私はソファアに座った。姉が隣にやってきて、私の手を取った。

「ジュリエット、よく聞いてほしいんだ」艦長は言った。しゃがんで高さをあわせ、私の目をまっすぐに見つめた。

「ええ」

「ちょっとした事故が起こってね。船は停止してしまっているんだ」

「そうね」私は見返し、原子炉の音が聞こえないことに気がついた。スクリューは止まってしまっているだろう。

「この船は何かに衝突したのよ」姉が言った。

「氷の下で？ どうして？」

「ドスンといって、船全体が揺れる大きなショックがあったわ」姉はあきれたような声を出した。「もう2時間にもなるわ。あんたは何も気づかずにぐうぐう眠っていたけどね」

「何と衝突したの？ 冰山？」

「違うな」艦長はゆっくりと首を振った。「何かもう少しやわらかいものだ」

「クジラ？」

艦長は弱々しく笑った。

「それもたぶん違うだろう。だが正直なところ、何と衝突したのかさっぱりわからないんだ。潜水艦には窓がないからね。外の様子を見ることできない。船をバツクさせようと何度もやってみたが、だめだった。なんだか知らないが、衝突した相手にしっかりとはま

り込んでしまっているんだ」

「誰かが外に出て調べてみたら？」

艦長はつらそうな顔をした。「それもだめなんだ。気密室が使えなくなっている。衝突のショックで故障してしまって、どうやってモドアを開くことができないんだ」

「じゃあ、どうするの？」

「私たちは完全に閉じ込められてしまっているのよ」姉は突然大きな声を出した。「船は引つかかっただまま動けない。気密室も使えなくて、何に衝突したのか、外で何が起こっているのかもわからないのよ！」

両手をあげ、艦長は何とか姉を黙らせることに成功した。手をそえてソファアの背に寄りかからせたが、まるで空気が足りないともいうように、姉は肩を大きく動かして息をしている。私は、水の上に飛び出ってしまった魚を連想した。

「それで？」私は艦長を見上げた。

「これをごらん」ポケットから出してきた紙を広げ、艦長は私に見せた。

トナカイ号の設計図だった。きちんと印刷された紙の上に、文字や数字が赤インクでいくつも書きたされているのが見える。その書き方の乱雑さから、事態がいかに絶望的なのか伝わってくるような気がした。

「私は何をすればいいの？」

艦長は大きくため息をついた。「ここを見るんだ」

艦長の指先は、図上のある場所を指さしていた。

十分後には艦長に連れられ、私は中央廊下を歩いていた。艦長の話は承知したのだ。それ以外にやりようのない絶望的な状況であることは私にも理解できたからだ。部屋を出るとき、姉は私を抱きしめ、ほおにキスをしてくれたが、何も言わなかった。

長い距離を歩いて、まだ一度も足を踏み入れたことのない区画へ私は連れていかれた。鉄板で囲まれただけの飾りのない部屋だが、学校の教室を二つあわせたぐらいの広さがある。明かりも少なくひどく暗いが、ごたごたいろいろなものが置かれているのはわかる。まるで倉庫のような場所だ。

「ここは部品置き場だよ」艦長が言った。

「部品？」

私は見回した。木箱に入れられたり、布で包んであったり、そのままむき出しだったりするが、何百もの部品が、戸だなに収められていたり、そのまま床に置かれていたりする。

「ずいぶんたくさんあるのね」

「大きな船だからね。必要となる部品は何千とあるのさ」

「へえ」

「そういう部品をどうやって積み込むかわかるかい？」

「ううん」私は首を横に振った。

「港に停泊しているときには、クレーンでつり上げて、甲板にあるハッチから乗せる。だが何かの事情で、潜水中に部品を受け取らなくてはならないとしたら？ そのときのために、部品をやり取りするための気密室がもう一つ用意してあるのさ。部品専用だから、ものすごく小さなやつだがね」

「どのくらい小さいの？」

「このくらいかな？」艦長は手でやってみせた。本当に小さく、幅数十センチしかない。

「そんなに小さな気密室だから、子供じゃないと通り抜けることができないのね」私はため息をついた。

部品用気密室の前まで行くと数人の船員があらわれ、見慣れない人形のようなものを運んできたところだった。ゴムでできていて中身はなく、しぼんだ風船のようにぺちゃんこになっている。私を着る潜水服だと気がついた。最も小さなサイズのものを調節して、それでもブカブカだが何とか私に合わせようというのだろう。

私がかぶるヘルメットをかかえた二人の船員が、その後ろを歩いてくる。きらきら光る金属製のもので、丸いガラス窓がついている。後頭部からは、長い空気パイプをしっぽのように引きずっている。

艦長がふたたび私の意思を確認し、船員たちが取り付いて、私に潜水服を着せ始めた。つま先から肩のところまですっぽりとおおうものだが、ごわごわして動きにくく、驚くほど重かった。私の手足に合わせてたくし上げ、金属のバンドでとめてある。

ヘルメットをかぶると、歩くどころか、立っていることだって不可能になった。船員たちがかかえあげ、気密室の中へ運んでくれた。空気パイプがしっかりと接続されていることをもう一度確かめてから、艦長はOKのサインを出した。すでに私は、ポンプから送られてくる空気を吸い始めていた。潜水服には断熱材が分厚く入れてあり、寒さは感じなかった。

私は、身長ぎりぎりの大きさしかない気密室に身を横たえていた。艦長が心配そうにのぞき込んだので、私は歯を見せて笑った。ヘルメットをとんとんとたたき、艦長が何かを言ったが、私には聞こえなかった。艦長は船員たちに合図を送り、気密室の扉がゆっくりと閉まり始めた。

扉が閉まると、私は小さな箱の中に閉じ込められる形になった。光一つない真っ暗な場所だ。

カチンと音がして、扉が完全にロックされたようだった。何秒もたたないうちにカチンという音がまた聞こえ、モーターのうなりとともに、反対側の壁がドアのように開き始めた。海へ直接通じる外側の扉だ。

すきまから外の明かりがもれてきた。猛烈な勢いで飛び込んでくる海水に追いついて立てられて、空気が外へ逃げ出していった。一瞬のうちに、私は水に全身を包まれてしまっていた。強くではないが、水

圧で締め付けられるような感じがある。だが潜水服の内部には空気がちゃんと送られてきている。大丈夫、問題はない。

扉が開ききるとそつと手を伸ばし、私は船体のへりに指をかけた。分厚い氷を通して差し込む青白い光の中へ、私はゆっくりと出ていった。

まわりは薄青く、すべてが蛍光灯の光で照らされているかのような眺めだった。頭上には氷がおおいかぶさり、まるで天井のようだ。この天井は、見渡す限りどこまでも広がっている。港で見たときは違って、トナカイ号はなんだか縮こまって、おもちゃのようにちやちにしか見えない。

手すりにそつて身体を引き寄せ、私はゆっくりと気密室から離れていった。

へさきの方向へ顔を向けた。トナカイ号が何に衝突したのかわかるためだ。海水はガラスのように透き通っているので、はつきりと見ることができた。驚きのあまり、私は口をぽかんと開けていたに違いない。私の目の前には町が広がっていたのだ。

あれは本当に町と呼ぶのがふさわしかった。それ以外の呼び名は思いつかない。もちろん地面の上に建物が立っていたわけではない。そういう普通の町ではない。何千トンかの木材を使って四角い部屋を何百と作り、それが一つに集まって、ブドウの房のように大きな塊を作っているのだ。それぞれの部屋は地上の普通の家ほどの大きさがあり、すべてを合わせると数百メートルはあるだろう。そういう巨大なものが水中にたたずんでいるのだ。

その横腹にトナカイ号は衝突しているのだった。壁を突き破ってへさきをめり込ませ、まったく身動きが取れなくなっているのだ。この町に比べればトナカイ号など、木の幹にとまったセミのようではない。

町はずいぶんと古めかしく、作られたのは1世紀や2世紀の昔ではなく、もっと古いもののように見える。もちろん人影はなかった。ずっと昔に捨てられてしまった町なのだろう。何のためにここへやってきたのかも忘れて、私は見上げ続けた。

だが、やるべき仕事があることを思い出した。艦長たちに報告するために、船内へ帰ることにした。気密室へ向かって戻り始めたのだが、扉まであと1メートルというところまで来たとき、最後の見おさめということで、私はもう一度振り返って見上げた。そして真相に気がついて、ヘルメットの中であつと声を上げてしまった。

あの町全体が空気で満たされていることに私は気がついたのだ。町は空気、つまり泡の内側にあつたのだ。おそらく地球上に存在する最大の泡だろう。あの中なら、潜水服などなくても自由に息ができるに違いない。

わかつてもらえるだろうか。あなたが北極の氷の下にいて、息をふうつとはき出したときのことを想像してみしてほしい。あなたの口を離れた息は丸い泡になって、水の中を昇っていくだろう。そして最後は氷に邪魔をされ、へしゃげた『だ円』のような形になって、そこに張り付くだろう。波に押されて少しぐらい左右に移動することはあるかもしれないが、北極は広く、夏でも氷原は何千キロも広がっているのだ。もしかしたら泡は、永久にそこにとどまり続けるかもしれない。

その泡が、いま私の目の前に存在するこれと同じぐらい巨大であったとしたら？ もしそうなら、その内部に町を作り、人々が生活することだって可能ではないか。

トナカイ号の中に戻って、ヘルメットをはずしてもらった後で、見てきたことを報告しても、艦長たちはすぐには信じてくれなかった。ポンプから送った空気の調整の仕方が悪くて幻覚を見たのではないかと、船医とこそこそ相談を始めるほどだった。

「ウソじゃないわ。本当に見たのよ」私はとうとう大きな声を出した。

「それで、船の様子はどうなっていたのだね？」議論するのが面倒になったのか、艦長は言った。

紙とペンを持ってきてもらって、私は図を描いて説明した。

「トナカイ号は、この町の横腹に突き刺さっているのよ。まるでナイフを突き刺すみたいにしてね。あれでは船がバツクできないのも無理はないわ」

「どうすればいいと思う？」船員の一人が言った。

「町を壊して、はまり込んでいる穴を広げるしかないわ」

「爆破か？」船医がつばやいた。

「少しならダイナマイトを積んでいますよ」機関長が言った。

「信管は？」と艦長。

「あります」

潜水服を脱がされ、私は木箱に腰かけて休憩することになった。船医はつきつきりで、私の血圧や体温を図っていた。温かい茶を飲ませ、チヨコレートを食べさせてくれた。私の目の前では、ダイナマイトの準備が始まっていた。

だがトナカイ号は戦争に使う船ではない。積んでいるダイナマイトの量など知れている。しかし、これで何とかやるしかなかった。

爆薬は15分ほどで完成したのだが、できればは、がっかりするようなものでしかなかった。ダイナマイトと信管を組み合わせ、それを防水テープでぐるぐる巻きにしてあるだけなのだ。そこから長い電線が伸びて、点火スイッチにつながっている。

だがこの電線が問題だった。船内のどこを探しても、十分な長さの電線を見つけないことができなかったのだ。何とか見つけたものを何本かつなぎ合わせても、やっと百メートルにしかならなかった。つまり私は、海中で爆薬を仕かけ、そこから百メートル以内のどこかに身を隠す場所を見つけないならならぬわけだった。そして点火スイッチを押し、爆破が行われる。

再び潜水服を身につけ、私は船外に出た。手の中に爆薬をかかえている。邪魔になるので、電線はぐるぐる巻いてある。

爆薬の仕かけ方については、機関長が説明してくれていた。若いころは軍人をしていて、そういうことには詳しい人だった。トナカイ号のへさきがめり込んでいるあたりのことを私はできるだけ正確に記憶し、紙に描いて説明したつもりだった。それをもとにして機

関長は、爆薬を仕かける場所を決めたのだ。

だが今だから言えることだが、機関長の考えは完全に間違っていた。地上の作業であれば、あれでよかっただろう。建物の壁は崩れ落ち、トナカイ号は自由になることができただろう。だがここは水中なのだ。物体は重力ではなく、浮力によって支配されている。支えを失った部分は下へ崩れ落ちるのではなく、水面へ向かって『崩れ上がる』のだ。

爆薬を仕かけるのに時間はかからなかった。甲板にそってこわごわと近寄り、手をかけて数メートルはい上がり、私は仕かけた。衝突によってできた建物のすきまに、そと差し込んだのだ。電線を伸ばしながら、私はゆっくりと後ずさりを始めた。

身を隠す場所はすぐに見つけることができた。ちょうどいい場所にトナカイ号のかじがあったのだ。板のように平らな形のものだが、私が身を隠すことができるだけの分厚さがあった。

私はそこに身体を落ち着けた。手の中には小さなスイッチがあり、指でちょっとはじかれるのを待っている。スイッチからは長い電線が生え、水中を伸びてゆき、黒い裂け目の中へ消えている。私は深呼吸をし、人差し指を伸ばし、スイッチをしつかりと押した。

水中というのは、予想以上に音をよく伝える場所だった。爆発音はとても大きく、一足飛びにやってきて、私を強く揺さぶった。一瞬だったが、何が何やらわからなくなったといったもよいほどだ。トナカイ号も激しく揺さぶられ、振動するのが感じられた。

爆薬を仕かけたあたりは無数の泡に包まれ、何も見えなくなった。だがかじの影から身を乗り出し、私は見つめ続けた。

やがて泡が消え、水のにごりも薄れ始めたようだった。船体の揺れもおさまり、目をこらすと、爆薬を差し込んだあたりに大きな穴が開いているのを見ることができた。トナカイ号がつかまっていた裂け目は、二倍ほどに大きくなっている。船体に傷がついた様子もない。

喜びのあまり、私は声を上げかけた。だが突然どこから別の音が聞こえ、船体が再び振動を始めたのはそのときのことだった。クジラが集団でほえているような大きな音だ。音に合わせて手すりもびりびりふるえ、しかも一秒ごとにそれが激しくなってくるようなのだ。

何が起きているのかわからず、私はキョロキョロし続けるしかなかった。もう揺れはあまりにも激しく、立っていることができないくて、力いっぱい手すりにつかまらなくてはならなかった。

音と振動が船の下からやってきていることに気がついた。首を伸ばしてのぞき込み、何が起きているのか気がついて、私はぞつとした。

トナカイ号が衝突したことで、想像以上に長い裂け目が町の壁面を走っていたらしい。下を向いて長く伸び、何十メートルも先まで達していた。そこへ爆薬が爆発したのだ。建物の一部がガレキとなつて引きはがされ、本体から離れていった。だがその大きさが問題だったのだ。学校の校舎ほどもあり、突然姿をあらわし、魚雷のようにならへ向かってくるのが見えた。

ガレキに衝突され、強くたたかれて、トナカイ号の船体にヒビが入った。気密が破れ、そこから空気が噴き出しはじめた。私の身体

ほどもある大きな泡が、ものすごい勢いで上へ昇っていく。船は荒馬のように揺れつづけた。手が離れてしまい、私は水中にほうり出されてしまった。

空気パイプがピンと伸び、首の後ろが強く引き戻されるのを感じた。次の瞬間には引きちぎられ、空気パイプがゴムひものようにビヨンと縮むのが見えた。ムチのようにしなりながら遠ざかっていった。

巨大な泡の群れに押され、私の身体は水面へむかって押し上げられていった。まるでロケットのように上昇していったのだ。その後、何かが激しく背中に衝突したのだらう。鋭い痛みとともに、何もわからなくなった。

目が覚めたとき、私のヘルメットはすではずされていた。私は薄暗い場所において、木でできた天井を眺めながら、床の上に寝かされていた。そばの壁には窓があり、氷ごしのあの青っぽい光が差し込んでいる。

物音がしたので首を曲げると私のヘルメットがあり、一人の男がそれを調べているところだった。おもしろそうな表情であちこち向きを変え、ひっくり返して裏側をのぞき込んだりしている。私は男を見つめた。もちろん知らない顔だった。

男も私に気づき、見つめ返してきた。白いヒゲを伸ばし放題にした老人だ。背は高くはない。目玉はぎよろりと大きく、ピンク色の肌はしわだらけだが、嫌な感じはない。眺めていると、なんとなく笑い出したくなるような雰囲気がある。

「やあ、お嬢ちゃん」老人は言った。

「ここはどこ？ あなた一人しかいないの？」私は再び部屋の中を見回した。だが部屋の中は空っぽで、壁や天井以外は何も目に入らなかった。

「そうだよ。わし一人しかおらん」

「ここはどこ？」

老人はにっこりした。「あんたも見たらどう？ あの町の中さ。あんたは今、あの泡の内側にいるのさ」

思わず空気の匂いをかいでみたが、何もおかしなところはない。特に何の匂いもしないし、酸素もきちんと含まれているようだ。「もちろんこの空気はちゃんとしとるよ」老人は言った。「外からは見えなかつただろうが、この町の内部には植物園のような場所があり、海草が大量に栽培されている。それが酸素を出すから、息がでなくなることはないのさ」

「あなたは誰？」

「わしの名はクリス。れっきとしたイギリス人さ。三十年前のことだが、首相の命令で北極探検隊が組織されたことを知っておるかね？」

「ううん」私は首を横に振った。

「そうだろうな。あんたが生まれるずっと前のことだ。ところであんたは、その潜水服を脱ぎたくはないかね？ そのほうが楽だろう？」

クリスに手伝わってもらって、重い潜水服を脱ぐことができた。ずいぶん楽になり、立ち上がって歩き回ることができるようになった。クリスも立ち上がった。部屋の外へ出るそぶりを見せたので、私もついていった。

部屋を一步出ると広い廊下になっていたが、なかば水没していた。この町は全体が少し斜めになっているので、半分が水に洗われているのだ。クリスはその水面を指さした。

「あんたはあそこに浮いていたのだよ。それを引っ張りあげたのさ」

「そうなの」私は少しの間口を閉じていたが、突然思いついて大きな声を出した。「トナカイ号はどうなったの？」

「あの潜水艦のことか？ わしはすべてを見ておつたよ。衝突したときには本当にびっくりした。ここの床もぐらぐら揺れたよ。鉄のドアが開いてあんたが出てきたときにも、またびっくりした。しかもその次は『塔』に爆薬を仕かけようとするじゃないか」

「塔？」

「本当の名は知らんよ。今となっては誰も知らないことだろう。だがわしは、この町のことをそう呼んでいるのさ。形が似ているからね。とにかくあんたは塔に爆薬を仕かけた。大胆なことをするもんじゃな。この塔は古びて、ガタガタになっておるのに」

「この塔はいつからここにがあるの？」

「それは誰も知らんことだろうよ。わしが三十年前にやってきたときには、すでにこういう無人の状態だった。それはともかく、あんたが仕かけた爆薬のせいで塔の一部が崩壊し、ガレキが潜水艦をおそった」

「ええ」

「だが潜水艦は沈没することはなかった。エンジンをフル回転させ、何とかバツクしてガレキの外に出たよ。あちこちへこんだひどい姿だったが」

「人が死んだりしたと思う？」

「それはどうかな」クリスは首を振った。「そのあとしばらく、潜水艦はじつと動かなかつた。船の外には誰も姿を見せなかつたな。だが再びスクリューを動かし、斜めに傾いたかなり危なっかしい姿だったが、何とか走り始めたよ。よたよたしながらゆっくりとだったが、どこかへ姿を消した。来た道に戻っていったようだったな」

「私はおいてけぼりにされてしまったの？」私は、両目に涙がたまってくるのをどうしようもなかつた。

「それは仕方がないさ」クリスは私の肩にそつと触れた。「わしが艦長だったとしても、同じ判断をくだしただろうよ。空気パイプが切れてしまったのなら、あんたが生きている可能性はまずないと見るべきだろうね。それに船は傷だらけだ。生きている可能性がひどく薄いあんたのことよりも、他の乗組員たちのことを考えるべきだ。あの船にはたくさん乗っているのだろう？」

「トナカイ号は客船なの。お客さんが120人乗っているわ」

クリスは目を丸くした。「それならなおさらだ。一刻も早く浮上し、港へ送り届けるべきだよ」

「そうね」クリスの言うことは、私にもよく理解できた。

私は、部屋の中をある音が満たしていることに気がついた。私が見回し始めると、クリスも気がついたようだった。塔を作っている木と木がたがいを押し付け合い、きしみあうギーギーという音だ。

大きな音ではないが、まわり中から聞こえてくる。まるで壁の向こうやそこらの物影に何十人も妖精が身を隠し、私たちの様子を探りながらこそこそささやきあい、さんざめいてでもいるかのようだ。

「この音かい？」クリスが言った。

「ええ」

「氷の下にもかすかな海流があるらしい。それに押されて、一日にほんの数メートルというペースだが、この塔はゆっくりと移動しているのさ。どこから来て、どこへ行くのかは知らんがね。だがとにかく、その海流を受けて塔がきしみ、この音が聞こえるらしいが、まるで目に見えない小人たちがおしゃべりをしているかのようだろう？ わしはこれを『塔が歌っている』と表現しているのだよ」

「そうね。確かにそんな感じだわ」

クリスは私を連れ、廊下を歩き始めた。曲がり角をいくつも曲がり、交差点を何回も通り抜けた。幅の狭い急な階段を登っていった。

どこまで歩いてても、塔の歌声はギーギーと聞こえつづけた。決して不愉快な音ではなかった。曲がり角を曲がっても、何かの物影に入っても、追いかけるように聞こえてくる。本当に妖精たちがさんざめき、姿を隠したままずっとついてきているかのようだ。ここで三十年間も一人で暮らしてきたクリスが孤独に押しつぶされてしまうことがなかったのは、このおかげだったのかもしれないという気がした。

私たちは歩き続けた。あちこちに窓があり、外の光が差し込んで明るかった。

窓にはガラスも何もなかったが、顔をつき出してみると、外にもちゃんと空気がある。少し潮くさく湿っぽいのが、息苦しくはない。そういう空気が塔を取り囲んでいて、何メートルか先には水の膜まくが垂直に立っているのだ。それが空気と水の境目で、自分が泡の内側にいるということをはっきり納得することができる。

窓から顔を引っ込め、私たちは再び歩き始めた。クリスはしつかりとした足取りで、さっさと歩くことができた。だがある階段を登りきったところで、私はとうとう立ち止まってしまった。息が切れたからではない。広い場所に出て、景色に圧倒されてしまったからだ。クリスも立ち止まり、振り返って満足そうになっまりこりした。

「この部屋のことを、わしは大聖堂と呼んでいるのだよ」

その名は本当にふさわしいと私も思った。見上げると頭の中が空っぽになってしまいそうなほど天井が高く、地方の小さなラジオ放

送局なら、屋根の上の電波塔まで含めてすっぽりとおさまってしまいそうな高さがある。

六本の大黒柱に囲まれた部屋の形は、巨大な蜂の巣の中にあるようにもある。橋のような渡り廊下が頭上はるかを横切っているが、本当は数メートルの幅があるはずが、まるで小枝のように小さくしか見えない。近寄ってそっと触れてみたが、壁から突き出しているクギの頭は私のこぶしよりも大きかった。

何分かの間、私は大聖堂の中を見回していた。目の前には大きく長い階段が待ち構えていて、さらに上へむかって伸びている。「もういいかね？」とクリスが言った。

「ええ」

クリスのあとをついて、私は再び歩き始めた。

塔の内部は複雑で、まるで高層ビルディングのようだった。クリスが大聖堂と呼んでいた部屋がその中心にあり、かつては人が集まる広場のようなものだったのかもしれない。

家々はアパートの部屋のようにずらりと並んでいるが、いくつかはドアが開いたままになっていたので、内部をのぞき見る事ができた。壁には明かり窓があり、外の光を取り入れるようになっていた。一つのアパートはいくつかの部屋で仕切られ、小さいが居間や寝室、台所などがちゃんとある。

マーケットの跡も見つける事ができた。たなはすべて空っぽだったが、かつては様々な商品が並べられていたのだろう。幅の広い階段をいくつも上り下りし、私たちは歩き続けた。かつては何百人もの人々がここで生活していたのだろうという気がした。

とうとう私たちは、クリスが住居にしている部屋に着いた。といっても何か特徴があるわけではなく、他の何百の部屋と違うところはなかっただろう。ただこの部屋だけはがらんとした感じがなく、家具や日常の道具類がせいとんして置かれていて、いかにも人が住んでいるらしい感じがした。

部屋のすみには小さなベッドがあり、イスやテーブルもある。鉄でできたストーブもあり、その中で木切れがちよろちよると燃えている。その上にはナベを置くことができるようになっていて、クリスはさっそく湯をわかし始めた。

「海草のスープを気に入ってくるといいがね」クリスはうれしそうに私を振り返った。

私は部屋の中を見回し続けた。ここにも窓があり、光がふんだんに降りそそいでいる。

「ここは寒くはないのね。氷の下なのに」

「氷が温室のような働きをしているからさ。塔を包んでいる空気の層も、しっかりとした断熱材になる。この塔は、暖かい毛皮のコートでくるまれているようなものさ。もちろんそれも白夜になっている夏の間だけで、冬になると猛烈に寒いが」

「白夜って?」

「北極の近くでは、夏の間は一日中太陽が沈まないから、真夜中でも明るいのだ。それを白夜という。逆に冬の間は一日中日がささず、夜が続くんだが」

「へえ、知らなかったわ」

「今は真夏だ。冬になるまで、暗闇を目にすることは当分ないよ」

「こんなところに、あなたは本当に一人で三十年間も住んでいるの？」私は感心した声を出さないではいられなかった。

「そうだよ。まあおかけ」クリスはイスを指さした。湯がわくのを待つ間、自分もベッドに腰かける気になったようだ。

「三十年前にはイギリス人だったって言ったわね」

「今でもそうさ」クリスは笑った。「首相の命令で北極探検隊が組織され、わしもその隊員に選ばれた。飛行船を使った探検隊だね。氷の厚さを測ったり、海底の地質を調査したりするのが目的だった」

「飛行船って？」

「お嬢ちゃんは見たことがないのかな？ 水素ガスのつまった細長い形の風船だよ。エンジンの力でプロペラを回して動くようになっている。ところで、あんたの名はなんというのかね？」

「ジュリエット」立ち上がって、私は握手をしにいった。クリスは照れたような顔をしていたが、しっかりと握手を返してくれた。私は口を開いた。

「その探検隊員が、なぜ今こんなところにいるの？」

「探検隊はときどき氷の上に着陸し、ドリルで穴を開けて氷の厚さを測り、地質調査をおこなった。はじめ真っ白だった氷原の地図は、ゆっくりと着実に埋まっていった。だがあるとき、思いがけない事

故が起こったのさ」

「どんな？」

私は思わず身を乗り出してしまったと思う。クリスが笑った。

「ドリルの操作係として、わしは氷の上にいた。自動車ぐらいの大きさがあって、モーターのついた巨大なドリルさ。ガーガーと大きな音を立てながら回転するんだ。

ドリルは氷の上にすえつけられ、わしはスイッチを入れた。ドリルの刃先が、氷の中へすばやく食い込んでいったよ。だがそのときそれが起こった。何の前触れもなく、突然氷に大きなヒビが入ったのだ。ピシピシと音がし、足元がぐらぐら揺れた。ヒビは一本ではなく、クモの巣のように何本も走るのが見えた。わしはその真ん中にいたのさ。あっと思ったときには、わしは氷の中へ落ちていくところだった。

何メートル落下したのかはわからない。気がつくところの塔の屋上でいて、目を回しておった」

その様子を想像して、私はクスクス笑ってしまった。クリスも笑い、気を悪くしたふうもなく続けた。

「すぐに立ち上がり、上を見上げたが、あるのは氷の天井だけだった。くずれた穴の跡はもちろんあったが、すでに氷のカケラでふさがってしまった。天井は何メートルも上にあり、手が届くはずもなかった。外へ出るのは不可能だと一瞬でさੱつたよ。その日以来、わしはここにいるのだよ」

「探検隊の他の人たちはどうなったの？ 助けてはくれなかったの？」

クリスは首を横に振った。

「氷が割れた瞬間に電気のケーブルが引きちぎられ、火花がはでに散った。それが引火したらしい。氷の上で巨大な炎があがるのが見えたよ。飛行船に使われている水素ガスはとても燃えやすいからね」

「じゃあ、助かったのはあなた一人だけなの？」

「皮肉にもそういうことになるね」

「でも何を食べて、どうやって生きてきたの？」知りたがりだとは自分でも思ったが、私は質問しないではいられなかった。

クリスはにつこりした。「ついておいで。その目で見せてあげよう」

ナベを火の上から降ろし、クリスは立ち上がった。私を連れて部屋を出、階段を降りていった。

ずっと下ってゆくと、広い場所に出た。さっきの大聖堂ほどではないが、ここも本当に広々としていたのだ。丸い形をして、大きさは町の体育館ほどはあっただろう。壁には明かり窓がいくつもあり、とても明るい。

私たちはベランダのような場所について、手すり越しに、すぐ下の水面を見下ろすことができた。だがそれが、海草で一面におおいつくされていたのだ。私の腕ほどもある茎は百メートル以上に育ち、無数の葉を生やしている。その表面には小さな泡がびっしりと張り

付き、それが大量の酸素を含んでいるということだった。クリスが言っていた植物園とは、このことだったのだ。

胸がつまるようなときどきする思いで、私は海草の森を見下ろし続けた。水底を見通すことなど絶対に不可能なほど濃く生え、からまりあって、薄気味悪く感じなかったと言えはウソになる。だがクリスはいかにもいとおしそうにしているので、悪口は言わないことにした。

「海藻ばかり食べて、あきてしまわないの？」私は口を開いた。

「そりゃそうさ」クリスはウインクをした。「ついておいで。水族館を見せてあげるよ」

クリスと私はドアを通り抜け、別の部屋へ入っていった。

こちらは植物園ほど広くはなかった。明かり窓も少なかったが、水面は十分に見渡すことができた。ガラスのように透き通った水にはまったく波がない。底まで五十メートルはありそうだが、魚たちの姿を見ることができた。黒い色をして体長六十センチほどのものだが、中にはニメートル近くに成長したものもいるし、すみのほうには数センチしかない小魚たちが群れているのも目に入る。

「これは何の魚なの？」

「イワシだよ」

「イワシ？ あの大きなやつも？」

クリスは笑った。「缶詰にするのとは少し種類が違うがね。あと

で「ごちそうしてあげるよ」

「ええ」

私たちはクリスの部屋へ戻ってきた。すぐにしたくを始め、クリスは食事をごちそうしてくれた。食べながら話を聞きたがったので、両親のことや姉のこと、カナダへ旅行に出かける途中だったことなどを話した。

だが海草のスープを飲み終え、二匹目のイワシを平らげるころには私は眠くなり、何度もアクビをくり返した。手で隠しもせず、私が遠慮なく口を開けるものだから、クリスはとうとう笑い始めた。

「疲れたのだろう。もうお休み。わしのベッドを使うがいい」

「あなたはどうするの?」

「そこらを片付けて適当に休むさ。気にすることはないよ。明日は早く起きて、ボールを見にいこう」

「ボールって?」

「わしだって、いつまでも氷の下にいるつもりはない。脱出する方法は考えてある。そのために必要なものさ」

「どんなもの? どうやって使うの?」

「今夜はもうお休み。目が半分閉じかかっているよ」

言われたとおりに行き、立ち上がって、私はベッドま

で歩いていった。ドスンと倒れこんで、海藻をあんで作った毛布にもぐりこむと、十秒もたたないうちに眠り込んでしまった。だがその間も、姿の見えない音だけの妖精たちは、私のまわりをぐるりと取り囲み、さんざめきながら楽しそうに踊り続けていた。

なぜ目が覚めたのか、自分でもよくわからなかった。床の上を行くクリスの静かな足音のせいだったかもしれない。顔を向けるとクリスが窓のそばに立ち、外の様子を眺めているのが見えた。私がベツドに入ってから何時間か過ぎているのに違いなかったが、部屋の中には何も変わった様子はなかった。

「何をしているの？」私はそつと話しかけた。

「ここへきてごらん」クリスは窓の外を指さした。私はベッドからすべり出て、隣に並んだ。

窓の外の風景にも、寝つく前と変わったところはないようだった。私たちは泡の内側にいて、少し離れたところに水の膜があり、その向こうには北極の海底が広がっている。だがすぐに気がついた。海中を小さな泡が一つただよっているのだ。

小さいといっても、直径１メートルはあっただろう。海底からすうと立ち昇ってくるのだ。近寄ってきて、塔を包む膜にぶつかり、一瞬は丸い形のままがんばるが、すぐにパチンとはじけて消えてしまった。

あの泡は何だろう。眺めているとすぐにもう一つ昇ってきて、同じように膜にぶつかり、飲み込まれて消えてしまうのが見えた。

「あれは何の泡なの？」私は言った。

「困ったことになったよ」

「あれはどこからやってくるの？」同じような泡がもう一つ下から昇ってきて、やはり同じように膜にぶつかり、飲み込まれて消えてしまふのが見えた。

「もちろん海底からさ」

「それがどうして困るの？」

「ジュリエット」クリスはとうとう振り返った。「地質学の本ならどれにだって書いてあることだろうが、北極の海底にはメタンが大量に存在しているんだ」

「メタン？」

「ガスの一種さ。火をつけるとよく燃える。古代の生物の死がいが海底にうずまり、何億年もかかって変化したものらしい」

「知らなかったわ」

「メタンが北極のどのあたりに、どのくらいの量うずまっているのか調べることも、あの探検隊の目的の一つだった。掘り出すことができるば、燃料として有望だからね」

「そうね」私はうなずいた。

「この塔の真下にも、きつとそのメタンガスが何千トンも眠っているんだ。あの泡がそうだよ」

「それが困ったことなの？」

「この塔で三十年間暮らしてきたが、メタンが昇ってくるのを見たのは今日が初めてだ。もしもこのまま大量に昇ってきたりすれば、こここの空気は汚染されてしまう。人間はメタンガスの中では息をすることができないのだよ」

「死んじゃうの？」

クリスは黙ってうなずいた。

「そんなものが、どうして突然昇ってくるようになったのかしら？」
私は言った。

「昨日の爆破のせいだろうな。大きな爆発だったから、その影響で海底にヒビが入ったのだろう」

「でも…」

「気にすることはない」クリスは微笑んだ。「あの爆破がやむをえないものだったことは、わしもよくわかっているよ。爆破しなければ、トナカイ号は今でも塔に突き刺さったままだったろう」

涙が出て、私は鼻をすすり上げ始めた。クリスは私の肩にそっと触れた。「気にすることはない。今にもあの泡は止まってしまうかもしれないのだから。そうなれば何も心配はない」

窓のそばに腰かけ、私たちは外を見つめ続けた。その後も泡は、一分間に一つぐらいの割合で、ポツンポツンと姿を見せた。泡が一つあられ、膜にぶつかってパチンとはじけるたびに、塔の空気は汚染されていくのだ。クリスと私が生きていられる時間をきざむ砂時計であるかのように恐ろしく思えた。

だがクリスの肩に寄りかかったまま、私はいつの間にかうたたねをしてしまったらしい。突然に揺り起こされた。

顔を上げるとクリスが指さしたが、そんな必要はまったくなかった。メタンの泡はさっきの倍ほどの直径があり、しかも一つずつではなく、クサリのようにつながって昇ってくるようになっていたのだ。もう数を数えることさえできなかった。まるで機関銃のように、塔を包む膜に合流を続けている。

「クリス」私は振り返った。

クリスは返事をしなかった。私の手をつかみ、駆け出したのだ。

部屋を出ようとしながら、クリスは荷物やカバンをひつつかみ、肩に乗せ、わきの下にはさんだ。いくつかは私にも持たせた。意味はわからなかったが、私はしたがった。荷物を持ったまま、クリスのあとについて廊下へ飛び出した。

二人とも口をきかずに走り続けた。曲がり角をいくつも曲がり、階段を何階も駆け上って、やっと目的の場所に着くことができた。私は息を切らしていたがクリスは平気な様子で、もうまわりを見回している。いつの間にか塔の頂上に出ていて、ビルの屋上のような場所だが、見上げれば氷の天井がすぐそこに見える。ミルクを混ぜたガラスのような、透き通る美しい物体だ。

「こつちへ来るんだ」

思わず立ち止まってしまっていたので、クリスに強く腕を引かれた。

屋上のすみに、球形をしたボールのようなものが置かれていることに気がついた。本当にボールのように丸く、根元にはクサビをいくつか押し込んでとめてあるが、それがなければゴロンゴロンと転がっていても不思議はないだろう。

直径は三メートルほどある。全体は木でできているが、手のひらほどの大きさしかないが、ガラスのはまった小さな窓がいくつもある。どうやら人が乗るもののようなのだ。昨夜クリスが言っていたボールとは、これのことなのだ気がついた。

「これは何なの？」

クリスは返事をせず、ボールの一部に手をかけ、強く引いた。驚いたことにそこはドアで、はっついていかなくはならないようなせまいものだが、入口が口を開けた。クリスはその中にカバンや荷物を放り込み始め、私の手からも受け取って、ぼんぼん投げ込んでいった。

「どつするつもりなの？」

「この中に入るんだ」クリスは私の背中に手を当て、乱暴に押し込もうとした。

「どつして？」

「早くするんだ」

とうとう私は中へ押し込まれてしまった。入口を通り抜けるときにわかったのだが、壁が分厚く作られているので、思ったよりも中はせまかった。投げ込まれた荷物が足元に転がっている。つまりいて転びそうになった。振り返るとクリスも入ってきて、内側からドアをばたんと強く閉めたところだった。

「何をしようというの？」

だかクリスは答えなかった。壁ぎわにある大きなレバーを回して、ドアをガチンとロックしたのだ。見るからにがっしりしたレバーだから、ボールは完全に密閉されたのだろう。荷物を片付けてスペースを作り、私たちは床に座った。壁がデコボコして背中が痛く、小さな窓から差し込んでくる光しかないから、ひどく暗かった。

私はボールの内部を眺めた。いかにも手作り風のものだ。材料は塔の一部を解体して手に入れたものだろう。全体はクギで接合され、ところどころ鉄板で補強してある。

「これはあなたが作ったの？」

「そうさ」クリスは少し自慢そうな顔をした。「十五年かかったよ。その前の十五年は塔の中で生き延びることに必死で、とてもそんな余裕はなかった」

「こういうときが来ると、あらかじめわかっていたの？」私は不思議そうな顔をしていたに違いない。クリスは微笑んだ。

「わかっていたわけじゃない。だが、来るかもしれないとは思って

いた。こうも突然やってくるとは、予想していなかったがね」

「しまった」私が突然大きな声を出したので、クリスはひどく驚いた顔をした。

「どうした？」

「ストーブの火を消すのを忘れたわ。ついたままよ。メタンガスは燃えるんでしょう？ 火事になるわ」

「いいんだ」クリスは笑った。「わざと消さないできたのだよ」

「どうして？ メタンガスに引火するわ」

「ああ、すればいいさ」

「でも…」

だが私は、その先を続けることができなかった。このときまでには、メタンが塔の内部を満たしていたのだろう。塔の中の空気は酸素を十分に含んでいた。そしてクリスの部屋では、小さいとはいえストーブがちろちろと炎を上げていたのだ。

その瞬間のことは、とてもよく覚えている。ドンという大きな音とともに塔が激しく震え、ボールの外がまばゆい光でいっぱいに満たされたのだ。あまりにもまぶしく、目を開けていることもできなかった。爆風に押され、あっと思う間もなくボールは宙を舞い始めていた。

メタンガスの爆発とは、それほど強力なものだったのだ。衝撃波は、氷の天井を一瞬で吹き飛ばした。氷のカケラが何百も北極の空へ飛び出し、放物線を描いたのだろうが、私たちのボールもその中に含まれていたわけだ。

一瞬は大きな力を受けて、私たちはいやというほど強く床に押し付けられたが、すぐにふわりとした無重力の感覚に変わり、身体が空中をただよっていきそうになった。だがそれも長くは続かず、ドスンと大きな音がして、ボールがどこかにたたきつけられると同時に、また強く押し付けられた。力まかせに背中を踏みつけられたような気がした。ボールは激しく揺れ、荷物がぶつかってきて、思わず悲鳴が出た。

そのあとボールはくるくるとまわり続け、外からはガサガサと音が聞こえていたが、そのうちに静かになった。

私たちはおそるおそる顔を上げた。ボールが停止したのだと気がついた。

「ふうっ」

私は大きなため息をついた。その表情がおかしかったのか、クリスが笑った。私たちの身体は上下逆さまになり、荷物と荷物の上にサンドイッチになっていたから、まずはい出して体勢を立て直すなくてはならなかった。

レバーを動かし、クリスはドアを開いた。私たちは、顔をそつと外に突き出した。

空気は驚くほど冷たく、まるで肌をたたかれているような気がした。私に続いてクリスもはい出してきたが、すぐに震え上がった。クリスは荷物を開き、服をいくつも取り出して、私に着せてくれた。もちろん自分も同じようにした。海草の繊維をほぐして作ったものだったが、見た目はごわごわと固そうだが、着てみると驚くほど暖かかった。私が目を丸くしていると、クリスはにっこりした。

「子供のころ、祖母が家で機はたを織っていてね。記憶を頼りに、見よう見まねでやってみただよ。三十年といえば長い時間だ。ひまはたっぷりあったよ」

寒さを感じなくなると、落ち着いてまわりを見渡すことができるようになった。私たちは真っ青な空の下、どこまでも続く平らな氷原にいた。どの方向を向いても、まったくデコボコなく続いている。

だが一カ所だけ、なぜか氷が少し盛り上がり、その影に雪が深くたまっていた。ボールがそこへうまく落ちてくれたのは、幸運としかいいようがないだろう。分厚い雪がクッションの役目を果たし、ブレーキにもなってボールを受け止め、停止させてくれたのだ。

振り返ると、自分たちがどこから飛んできたのか知ることができた。二百メートルほど先で氷が大きく割れ、海面が濃い青色の姿を見せているのだ。氷の断面はギザギザにとがり、小さなカケラがスチロールのように浮かんでいる。

そつと手をつなぎ、私たちはそこへ向かって歩き始めた。あしもとの氷は分厚くがんじょうで、まるでコンクリートの床のようだ。薄い雪がその表面をサラサラとおおっている。足跡をつけながら、私たちは歩いていった。

氷のへりに立つと、深い崖をのぞき込んでいるような気分になった。割れ目は、それほど直角にストンと落ち込んでいたのだ。波はなく、水面はとても静かで、青いガラスのような輝きだ。ゆっくりと吹き渡っていく風以外は何の音も聞こえない。

だがそこへ、突然それが起こったのだ。驚いて飛び上がったが、あまりのことで、私は逃げることも駆け出すこともできなくなってしまった。身体が石のように固まってしまったのだ。

しかしクリスはそうではなかった。とつさに私をかかえあげ、後ろを向いて、あとも見ずに駆け出したのだ。

ボールのそばへ戻って物陰に身を隠すまで、クリスは立ち止まらなかった。荷物のようにかつき上げられ、私はクリスの肩越しに見ることができた。だからあの光景を目にしたのは、この世で私一人だけだろう。

常に浮力を受けて浮かび上がろうとしていたが、塔は氷によって頭を押さえられていた。その氷が、メタンの爆発によって吹き飛ばされてしまったのだ。浮力というのは、どんなに巨大な戦艦でも浮かべることができるといえるほど強いものだ。塔が水中で受けていた浮力は、それこそ想像を絶する大きさだったことだろう。それが一気に解放され、バネ仕かけのおもちやのようににはじけたのだ。

突然姿をあらわし、静かな水面を突き破りながら、塔はとてつもなく大きな水音を立てた。氷をけずり取るバリバリという音がそこに加わった。まわりつく海水を、塔はシャワーのようにまき散らした。氷のへりに何十ものヒビが入るのが見えた。はねあげられて空中を舞った家ほどもある氷塊が落ちてきて、私たちからほんの少ししか離れていないところでバラバラにくだけた。目を開いて、私

はそれをすべて見ていたのだ。

クリスは私をかかえ込み、守ろうとしていたが、私は首を伸ばして見つめ続けた。衝撃は氷を伝わり、足元でも感じる事ができた。塔の動きが完全に止まり、木と木、氷と氷が押しつぶしあう音が聞こえなくなつてから、やっとクリスは私を放してくれた。自分も立ち上がり、振り返つて眺めた。

塔は巨人の腕のように氷上に突き出し、ありとあらゆる窓から海水が流れ落ちていた。何十もの滝が一つに寄せ集まつたかのような眺めだ。大量の水滴が空中を舞い、虹を作った。北極の透明な空気の中にできた虹だ。あれほど濃く、鮮やかで美しい虹を、私は一度も見ることがない。

やがて水はすべて落ちきってしまったようだった。流れが止まり、虹は消え、ポタンポタンとしずくが落ちてくるだけになった。氷の下で見たときよりも、塔はうんと黒々としていた。もちろんこれは頂上の部分、つまりほんの一部分に過ぎなかったのだが、それでもこんなに巨大なものだったのかと、あらためて思わないではいられなかった。

飛行機が姿を見せるまで、一時間もかからなかった。ボールの中から取り出した道具を使って火を起こし、スープを飲みながら、クリスと私は待っていたのだ。

この飛行機はメタンの爆発音を聞きつけたのだと思っていたのだが、そうではないと後になってわかった。彼らはあの虹を見つけていたのだ。あの虹は空高くかかり、50キロ離れた場所からでも見ることができたそうだ。あまりにも色が濃く鮮やかなものだったのだ、何が起こつたのだらうと確かめに來たらしい。

それはともかく、飛行機がやってきてくれたのだ。エンジンの音は早くから聞こえていたが、やっと見えてきたのは空のかなたに浮かぶ小さな黒い点で、はじめは八工ほどの大きさでしかなかったが、みるみる大きくなってきた。塔の姿に気づき、すでに高度を下げ始めている。

「何だね、ありやあ？」クリスが声を上げた。「近ごろの飛行機には屋根があり、窓にはガラスもあるのかね？ それにあの大きさはどうだい」

思わず微笑まないではいられなかった。三十年前の飛行機は、これこそ屋根のない竹とんぼのようなものばかりだったのだらう。せいぜい二人しか乗れない操縦席はむき出しで、エンジンは一つしかなく、機体は木で作られ、翼には布が張られていた。だが現代の飛行機は違う。エンジンを複数装備し、銀色に光る軽金属でできている。

ぼんぼんと飛びはねながら、飛行機は氷の上に着陸した。機体に描かれているマークから、空軍の偵察機だということはすぐにわかったが、幸運だったのはイギリス空軍の所属だったことだ。飛行機が停止するとすぐにそばへ駆けていったのだが、二人いるパイロットたちは、私たちの顔を見てもわけがわからない様子で、ピントのはずれた質問を繰り返すばかりだった。

「おまえたちは誰だ？」

「どこから来た？ そのでかい建物は何だ？」

「あの虹は何だったんだ？」

「おまえたちはロシア人か？」

クリスと顔を見合わせ、私は大きな声を出した。
「何でもいいから早く乗せてよ。寒くてかなわないわ」

パイロットたちも顔を見合わせていたが、機内へ入れてくれた。私たちを座らせ、暖房を強くし、熱いコーヒーを飲ませてくれたが、話を聞いても、とても信じられないという顔をした。

身体が温まってから、もう一度外に出てボールのところへ戻り、パイロットたちにも手伝ってもらって、荷物やカバンを飛行機に積み込んだ。それからシートベルトを締め、エンジンがうなりを上げ、飛行機は滑走を始めた。気がつくと、シートに頭をもたせかけ、クリスはもういびきをかき始めていた。

空軍基地までは、ほんの数十分の道のりでしかなかった。念のためクリスは基地内にとどまり、一週間ほど医師が様子を見ることになったが、私はいても立ってもいられなかった。司令官に頼み込んで、その翌日の定期便に乗せてもらえることになった。北極とイギリス本土を結んでいる大型の輸送機だ。

搭乗する直前、もう一度クリスに会いに出かけ、あいさつをすませた。「またすぐ会えるさ」とクリスは機嫌よく送り出してくれた。座席に身体を落ち着け、シートベルトを締めるころには、私はもううきうきし始めていた。

定期便は、昨日の偵察機よりもずっと乗り心地がよかった。みんなが私の話を聞きたがり、パイロットなどは私を操縦室へ招待してくれた。話し疲れると窓のそばに座り、私は外を眺めた。真っ青な北海が広がっている。ほんの何日か前、私はあの波の下をトナカイ号に乗って航海したのだ。

だが気になることもあった。基地の司令官が教えてくれたのだが、トナカイ号はまだイギリスに帰港してはおらず、カナダ側にも姿を見せていなかったのだ。

だが考えてみれば、あの衝突事故が起こったのはほんの三日前のことでしかない。トナカイ号は、まだどこかの氷の下を走り続けているのだろう。浮上しないと無線機は使えない。

穏やかな日だったので、順調に飛行を続けることができた。北海が突然終わり、海岸線が目に入ってきたとき、私は思わず声を上げた。イギリスの大地なのだ。

空港に着陸した三十分後には、私は自動車の後部座席にいた。空軍の司令官が気をきかせて、秘書ごと自動車を貸してくれたのだ。自動車はハイウェイに乗り入れ、秘書はぐいとアクセルを踏んだ。

自動車はある港へむかっていた。ニュースを知らされ、飛び上がるほどうれしかったのだが、数時間前、トナカイ号がここへむかっている姿が海上で目撃されていたのだ。だがトナカイ号は、無線機が使えなくなっているらしかった。浮上してはいるが、沈黙を保ったまま航行を続けていた。

栈橋に着き、自動車がブレーキを鳴らして停車すると、私はドアを開けて飛び出した。噂を聞きつけて集まっていた見物人たちをかき分けて、一番前に出た。急いでエンジンを止め、サイドブレーキを引いて、秘書が追いかけてきた。私がどこかへ行ってしまうないように、しっかり手をつないでおく気になったようだ。

少し霧が出ていたが、やがてトナカイ号がゆっくりと姿をあらわした。タグボートがスクリューを精一杯まわして、接岸させようと

している。だが両者は大きさが違いすぎる。タグボートの姿は、丸太に張り付いたカエルのようでしかなかった。

トナカイ号の姿を見て、私は息をのんだ。損傷のひどさが想像以上だったのだ。へさは完全につぶれ、脱ぎ捨てた靴下のようにしわが寄っている。側面は、あちこちが、けとばされたかのようにへこんでいる。スクリューはひん曲がり、羽根の一枚はブーメランのように別の方向を向いている。

船尾に目を走らせたとき、小さな四角い出入口のようなものを見つけて、私は胸がいっぱいになった。船体の大きさに目を奪われてぼんやりしていると見逃してしまいそうなものだ。だが、あれが部品用気密室なのだ。私はあれを通って船外へ出たのだ。

甲板の上に艦長がいることに気がついた。ひどく疲れた様子だ。北極の氷の下からここまで、本当にやっとやっと帰ってきたのだらう。

船と栈橋をつなぐ橋の固定が終わるのを、私は待つてなどいられなかった。気がついたときには秘書の手を振りきり、駆け出していた。船員たちをかき分け、飛ぶようにして橋を渡っていった。足音に気づき、艦長が顔を上げた。

このときの艦長の顔を、私は一生忘れることはないだろう。疲れきってもいたのだろうが、たった数日でとても年を取ったように見えた。もちろん船と乗客を無事に連れかえる責任感もあったのだろうが、彼のやつれ具合の何割かには私が直接関係していたことだろう。彼は私の命について責任を感じていたのだろう。私は胸がふさがりそうになった。

私の顔を見ても、艦長には意味がわからない様子だった。一瞬間、疲れきった表情のままだったが、それはすぐに破れ、私が誰なのか気がついたようだった。

「ジュリエットか？」艦長はかすれた声を出した。

「そうよ」駆け寄りながら、私は大きな声で答えた。そのまま彼の腕の中に飛び込んだ。艦長は少しよろめいたが、すぐに力を取り戻し、私をしっかりとかかえあげた。

艦長が次の言葉を発することができたのは、何秒もたってからだった。信じられないという表情で、長い間私を見つめていた。

「ジュリエット、どうしてここにいるんだい？」

ヒゲだらけの顔を押し付けてくるものだから、くすぐったくて返事もできなかった。艦長の帽子が落ち、はげた頭がむき出しになった。船員たちも気づいて、まわりに集まり始めていた。その中の一人が気をきかせて、呼びにいつてくれたのだらう。ハッチから飛び出すようにして、姉が姿を見せた。

「ジュリエット、ジュリエット！」

船員たちを押し分け、姉は艦長の手から私を奪い取った。息がでないほど強く私を抱きしめた。

子供っぽいと言われるかもしれないが、ブランコに乗ることが私にとっても好きになった。父に頼んで、庭に一つ作ってもらったほど

だ。大きなリンゴの木があり、その枝からロープでつり下げている。

一人になると、私はいつもそれに腰かける。考えごとをしながら、ゆっくりと時間を過ごすためだ。ロープと枝がこすれあう音を聞きながら目を閉じると、まるであの塔の中にいるような気持ちになる。塔の内部でつねに耳にしていた音。クリスが「塔が歌っている」と表現していた音が耳の底によみがえってくるのだ。

私たちが救出された後、塔にはもちろん調査隊が派遣された。考古学者も含むかなり大規模なものだったらしいが、驚くべきことにそのときにはもう何も残っていなかったらしい。氷に開いた巨大な穴は見つけることができたが、塔は影も形もなかったのだ。いつの間にか沈み、氷の下へ姿を消してしまっていた。

すぐに潜水夫が呼ばれ、氷の下の調査がされたが、そこにも何も見つけることはできなかった。つまり塔は、海底に沈没してしまっただけではないのだ。ふわふわとただよいながら、氷の下を再びどこかへ行ってしまったのだ。

あの塔はそうやって、何世紀も旅を続けてきたのだろう。クリスと私は、その長い旅の途中、ほんの一瞬をあそこで過ごしたただの客に過ぎないのだろう。

調査隊は、氷の上に残されていたポールを持ち帰ることしかできなかった。これについてはいろいろと調査が行われたらしいが、大した結果は得られなかったらしい。『クリスのポール』と呼ばれ、今でも博物館へ行くと見ることができるといわれる。

そういえばクリスのことだ。私はクリスを北極の基地に残してきた。その後もずっと待っていたのだが、2週間たっても3週間たつ

ても連絡はなかった。しびれを切らし、私は空軍に問い合わせた。

返ってきた答えは、私をひどく驚かせた。私のあとを追うようにして、数日後クリスも北極を離れ、イギリスへ向かったのだが、そのあとどこへ行ったのかは誰も知らないのだった。飛行機に乗せられ、イギリスの空港に着いたのはたしかだったが。

空軍の人々は、しばらくの間滞在できる場所を用意してやろうとしたらしいが、クリスは断り、徒歩で町の中へ姿を消した。近くの町に親戚の一族があり、そこをたずねると言っていたらしいが、親戚の姓も町の名も誰も聞いてはいなかった。塔と同じように、クリスも行方不明になってしまったのだ。

空軍の調査官は、もう一つニュースを知らせてくれた。クリスが話していた三十年前の北極探検隊のことだ。いくら調べても、そんなものは存在しないのだそうだった。

納得できず、調査官自身が何度も調べなおしたらしい。イギリスだけではなく、外国にも対象を広げたが、結果は同じだった。30年前であろうがいつであろうが、イギリスであろうがこの国であろうが、飛行船を使った探検隊を北極へ送り出したことなどないということが確かめられただけだった。

ブランコに座り、枝のきしみに耳を傾けながら、私は考え続ける。

あの塔に住んでいたのがどんな人々だったのか、どんな肌の色をしていたのかは、もちろんわからない。ある規模の建物を建造できる人々ではあったのだろう。だが必要以上に感心することはない。何世紀も昔には、高さが百メートルを越える樹木など珍しくはなか

つただろう。それを何本かつなぎ合わせるだけで、塔の大黒柱はもう完成してしまう。あとはそれを6組並べ、床を張り、部屋を付け足してゆくだけだ。

もちろん、北極に近い海で暮らす人々であつたのだろう。それがある日、大津波におそわれ、陸地にあつた家ごと、港につながれていた船ごと、背後の森林に生えていた木々ごと押し流され、氷の下へ押し込まれてしまったのだろう。だが同時に、かなりの量の空気も氷の下に閉じ込められることになった。人々は何とか生き延び、自分たちの手で町を作つて暮らし続けたのだ。

その人々がどこへ行つてしまつたのかも、もちろんわからない。いつか地上へ戻ることができる日を夢見て、生き続けたのかもしれない。その夢はかなえられたのだろうか。あの町が無人間になつたのは、みなが地上へ戻つてしまつたからなのだろうか。

それとも人々は、あそこで死んでいったのだろうか。最後の一人が死に、塔は無人のまま忘れ去られるにいたつたのだろうか。あるいは氷の下で何世代にもわたつて生き続け、子孫たちは、自分たちは氷の下に閉じ込められているのだという事実さえ忘れてしまったかもしれない。あの町を世界のすべてであると考え、それなりに幸せな日々をすごしたのかもしれない。

だがそれも、今となつては知りようのないことだ。

目を閉じると、私は塔の姿をはつきりと思い浮かべることができ。今もきしみ、さんざめき、あの歌を口ずさみながら、氷の下の旅を続けていることだろう。

どこから来たのか、どこへ行くのかは誰も知らない。何世紀も前

からそうしているのだろうし、きっとこの世が終わるときまで、誰にも見つけられることなく氷の下に存在し続けるのだろう。クリスと私は、信じられないような幸運でたまたま出会うことができただけなのだろう。白夜が輝く海の下で、あの塔は私たちの誰よりも長く生き続けるのだ。

(終)

魔王の約束（上）

1

私があのとナカイをはじめて見かけたのは、船着場から修道院へと向かう馬車の上からだ。ひとけのない岩だらけの細い山道で、ハンナという若い修道女がたづなをとっていたのだが、そのハンナが不意に岩山を指さしたのだ。「ケイト、あれをこらん」

「なに？」私には何もわからなかった。岩山はひび割れてごつごつした岩の塊にすぎず、ときどき樹木がかたまって生えているが、森といえるほどではない。日が暮れかけているから太陽の光が長く伸び、あちこちに無数の暗がりを作っている。

「あそこにトナカイがいるでしょう？」ハンナは馬車を止め、もう一度指さした。「あの大きな木のちょうど右下あたり。やっこさんも立ち止まって、こつちを見ているわ」

やっと私にもわかった。岩の色に溶け込んでわかりにくかったのだ。まっすぐに立って、こちらを見ていた。茶色い毛皮に包まれた大きな身体だ。頭の上には、複雑に枝分かれした角が王冠のように乗っている。ハンナはにつこりした。「あなたは運がいいわ。ここへ来た最初の日にあれを見ることができたなんてね」

「どうして？」

「あれはとても不思議なトナカイなのよ」

「不思議？」

「トナカイというのは、渡り鳥のように季節によってあちこちを移動するものなの。でもあのトナカイは違う。あの一頭だけは一年中このあたりにいるの。理由は誰にもわからないのだけどね」

私はもう一度トナカイを眺めた。茶色い大きな瞳と目が合ったような気がした。だがすぐにトナカイは動き始め、岩山のどこか向こう側へと下っていき始めた。岩陰に隠れて、やがて姿は見えなくなってしまうた。たづなを取り、「はいっ」と声をかけ、ハンナは再び馬車を進ませ始めた。「そうだわ、ケイト」

それが内緒話でもするような声だったので、私は振り返って見つけた。ハンナも見つめ返し、困ったような顔をした。話を切り出したのはよいが、続けてよいものかどうか迷っている顔に見えた。「どうしたの、ハンナ」

「あまり大げさに取らないでね」

「ええ」

「私たちの修道院には、幽霊の話があるのよ」

「幽霊？」

「でもただの噂よ」ハンナは微笑みかけた。口を開いたことをやはり少し後悔している様子だ。だが私は好奇心を感じていた。

「どんな噂？」

「私も見たことがあるわけじゃないのよ。誰も見た人はいない。足

音を聞いた人がいるだけなの。私は聞いたことはないけど。古株の修道女たちはあると言っているわ」

「どんな足音なの？」

顔を近づけ、ハンナは声を小さくした。「人の足音じゃないのよ」

「でも幽霊の足音なんですよ？」

「馬の足音なのよ。大きくて重々しくて、いかにもヨロイを着て長いやりを持った騎士が乗っているという感じなんですって。ひづめがコツコツいいながら、真夜中、修道院の廊下を歩いているのが聞こえるの。ドア越しに聞こえてくるのよ」

「それだけなの？」

「聞いた人は何人もいるのよ。ドアを開けて正体を確かめる勇氣のある人は一人もいないけど。私だつてごめんだわ。だからあなたも耳にすることがあるかもしれないけど、あまり驚かないでね。害を受けた人はいないのだから」

馬車は進み続けた。道がもっと細く、坂もきつくなり、身体を前に傾けて、馬は一步一步上っていくという感じになった。日が暮れて暗くなる前に修道院に着くことができた。何も無い山の中にぽつんとあって、この修道院は本当に孤立していた。四角く削った岩を積み上げて作った建物は背が低くずんぐりして、塀に囲まれて、遠くから見たところは古くさい不恰好な戦艦に似ていなくもなかった。石の表面は風化して、崩れかけている。

私はすぐに食堂へ連れて行かれた。薄暗かったが、足もとが見え

なくなるほどではなかった。まわりの森の木々もまだはつきりと見ることができた。夕食はもう始まっていて、ハンナがドアを開けると、修道女たちがいつせいにこちらを向いた。みんな驚いたような顔をしている。だがハンナが「新しいお仲間ですよ」と声をかけた。とたん、緊張は一瞬で解けた。修道女たちは声を上げ、息をついた。とたんにざわざわ言い始める。とても広い部屋で天井は高く、あばら骨のような丸い形で屋根を支えている。中央には大きなテーブルが置かれ、修道女たちはそれに向かって座っていた。彼女たちのおしりの下には、ベンチのように長い腰かけがある。

「あなたがケイトね」振り向くと中年の女が立ち上がって、私に向かって歩いてこようとするとところだった。会うのははじめてだったが、伯母だとすぐにわかった。伯母は母の姉だ。伯母は軽く私の手をとった。微笑みながら見つめている。頭巾で隠しているから髪の色はわからないが、私と同じように眉はとても黒く、やわらかくカーブしている。

私は修道女たちに紹介され、一緒にテーブルについた。私の前にも皿が置かれ、夕食が始まった。メニューは想像していた通りのもので、薄いシチューとコーヒートパンだけだった。パンにはバターを塗ることができた。イチゴのジャムでもないかとテーブルの上をきよろきよろしたのだが、もちろんあるはずはなかった。

夕食がすむと、伯母は私を部屋へ案内してくれた。食堂を抜けると広い廊下があり、その先が修道女たちの部屋になっていた。全員が個室を持っていて、私も一つもらえることになっていた。廊下を歩きながら、ここを足音だけの幽霊が歩いていくのかなあと思ったのだが、特に怖いとも恐ろしいとも感じなかった。私がもらったのは一番端の部屋で、大きさも作りも他の部屋とまったく同じだった。古めかしいベッドと小さな戸棚がある。正方形の窓があつて、今は

カーテンが引かれていた。窓の下には、小さな机とイスがあった。それを見たたん、明日から学校が始まるのだということを出して、気が重くなった。

母は、私がまだ小さかったころに死んでいた。それ以来、父と二人で暮らしていたのだが、その父が一年間、仕事の都合で外国へ行くことになったので、私は伯母に預けられることになったのだ。旅立つ父を見送った後で、教科書や着替えを詰めた大きなトランクを抱えて船に乗り、川をずっとさかのぼって、私はこの修道院へやってきたのだった。

「一年間、ここがあなたの家になるのですよ」と伯母が言った。私はベッドに腰かけた。かすかな音を立てて、スプリングがきしんだ。伯母はにっこりして私を見つめた。「あなたは都会生まれだから、とまどうこともいろいろあるかもしれないけれど、慣れれば田舎もいいものですよ」

「でもここは、田舎というよりも僻地という感じね」

「修道院だから、ある程度不便な場所に建てられるのは仕方がないわ。俗世を離れるためだから」

「だけど少し離れすぎじゃない？」

伯母は再びにっこりした。「今夜はもう休みなさい。遠くからやってきたのだから、お話はまた明日にしましょう。明日からは学校へも行くのでしょうか？」

学校のことなど持ち出さなくてもよいのにと私は思ったが、口には出さなかった。この日から、私はここで寝起きするようになった。

修道女たちは祈りと畑仕事で忙しそうにしていたが、朝だけは町まで馬車で送ってもらえた。ハンナの仕事と決まっただけで、いつも彼女がたづなを取った。

町の名はスリムタウンといったのだが、町につくと、ハンナはいつも同じ店の前で馬車を止めて買い物始めた。『クーパーの店』と大きな看板が出ていたが、商店と呼べそうなものはこの一軒しかなくて、私も店内をのぞいてみたが、薄暗く天井は低く、いくつか戸棚があつて、品数は少ないが、それでもありつただけの食料品や日用品が並べてある。店の主人は中年の男で、明るい灰色のエプロンをして、いつもカウンターの向こうにいた。この人には娘がいて、同じ年だったから、私は学校で親しくなった。この店は郵便局も兼ねていて、切手なども販売していた。僻地だから特別料金が加算されるが、電報を打つこともできた。

学校は店の隣にあつたが、校舎はとても小さく、教室は一つしかなかった。教師も一人しかおらず、この人がすべての教科を教えていた。カーター先生という名で、四十歳ぐらいの男だった。生徒の年齢もばらばらで、十二歳から十六歳までがごっちゃになっている。男の子の一人がさつそく教えてくれたのだが、カーター先生はあんなにやせているが、実はものすごい大食漢で、普通の食事だけではとても足りなくて、新しい死人が出るたびに、夜中に墓地に忍び込んでバリバリと死体を食べているのだそうで、「修道院の裏の墓地にも出没するらしいから、おまえも気をつける」と言われたが、バカらしくて、私は鼻を鳴らしただけだった。

午後になって学校を終えて、私は一人で山道を歩いていた。スリムタウンの町が見えなくなつて、岩と森しかない上り坂にかかるあたりだった。天気の良い日で、雲は空のすみほんの少し、小さいものがいくつか浮かんでいるだけだった。歩き続けて、ふと前を見

たとき、遠くに何かがあることに気がついた。ここでは道が何百メートルか直線になっていて、まるで天国へでも上っていくみたいに、空に向かって駆け上がっていた。私はその一番下において、ずっと先にその何かが見えているわけだった。

立ち止まって目をこらした。茶色をしたものだった。このあたりの地面は、どこもかしこも白く、岩がごろごろして砂っぽかった。だから道の上では、茶色の物体はともよく目立ったのだ。それが何なのかは、長い間わからなかった。でも首を少し動かしたので、突然わかった。あの茶色は毛皮で、動物が一匹、あそこに立ってこちらを見ているのだ。その頭の上に王冠のような角が乗っていることにも気がついた。トナカイだ。それがあそこに立ち止まったまま、じっと私を見つめているのだ。

どうしたのだろうと思った。どうして私を見つめているのだろう。どうすればいいのだろう。このまま歩き続けてもいいのだろうか。だが心配し続ける必要はなかった。トナカイは不意に動き始め、ぴよんと飛ぶように道を離れ、茂みの中へと見えなくなってしまったのだ。

翌日の昼休み、このトナカイのことを思い出し、私はアリシアに話しかけた。店をやっているクーパーさんの娘で、長い金髪がきれいで、淡い色の瞳をいつもきらきらさせていた。父親の手伝いをさせられることがあるのか、ときどきベーコンや塩漬け魚の匂いをさせていることがあった。「あのトナカイの名前はロビンというのよ」とアリシアは教えてくれた。

「ロビン？」私は目を丸くしていたに違いない。アリシアが笑った。

「トナカイにしては変な名前よね。でもみんなそう呼んでいるわ」

「ロビン」私はもう一度つぶやいた。なぜそう名づけられたのだろうという気がしたが、午後の授業の始まりを告げるベルがそのとき鳴り始めたので、これ以上を考え事を続けることはできなかった。

学校がすんでから、私はわくわくしながら山道にさしかかったが、ロビンに出会うことはなかった。修道院に着いて、私はすぐに伯母の部屋へ行った。伯母は院長だから、書類仕事をするための部屋を一つ持っていた。ノックを試してみたが返事はなく、鍵のかかっていないドアを押し開けてみると誰もいなかった。私は中に入って待つことにした。

伯母はすぐに戻ってきた。鶏小屋の掃除でもしていたのかもしれない。そでに白い羽根がくつついていた。手を伸ばしてそれをとってやりながら、私は話しかけた。「ねえ伯母さん。ロビンって、ずっと前からこのあたりにいるの？」

伯母は小さくありがとつぶやき、にっこりしてイスに座った。私をまっすぐに見つめ、口を開いた。「どうしてそんなことをきくのです？」

私は説明した。ここへ来た最初の日に馬車の上から見かけたこと、昨日の山道でも出会ったこと、今日アリシアから教えられたことなどを話した。私を見つめたまま、伯母は黙って聞いていた。

「あれがロビンという名だというのは本当です」伯母は言った。「いいわ。あなたも気になるだろうから、いま話しておきましょう。でも、あれは危険な動物ではないのですよ。いつもは森の奥深くに潜んでいて、人前にはめったに姿を見せません」

伯母はいったん口を閉じ、どこから話し始めたものか迷っている様子だったが、とうとう心を決めたようだった。「十年以上も前のことだけれど、スリムタウンの町外れにブロンズという女が住んでいたのです。事情があって家族から離れて、山の中で一人で暮らしていました」

「どんな事情？」

伯母はにっこりした。「それは、あなたのような子供には話せないことよ」

私は不満だったが、続きを聞きたかったので、それ以上は言わないことにした。伯母は続けた。「ある日ブロンズは、森の中で一頭のトナカイを見つけました。乳離れもしていない子供で、群れからはぐれてしまい、一人ぼっちで取り残されていたのです。ブロンズの姿を見ても、怖がる様子はありませんでした。疲れきって、そこどころではなかったのかもしれませんが。母親を求めて鳴き続け、何日間もさまよっていたのでしょう。ブロンズが頭をなでてやっても嫌がる様子はなく、小川の水をくんでやると、ごくごくと飲んだそうです。」

ブロンズは、そのトナカイを家へ連れてかえることにしました。誰かが面倒を見てやらねば、すぐに死んでしまいます。ブロンズはロビンと名づけました。ロビンは牛のミルクを与えられ、実の子供のようになつきながら成長していきました」

「それがあのトナカイなの？」

「ええ」伯母はにっこりした。「でもその一年後、ブロンズは死んでしまいました。病死だったようです。ロビンは森に放されました。」

それ以来森の奥深くで、一頭きりで暮らすようになったのです」

「ブロンズはどういう病気で死んだの？」

伯母は、ゆっくりと首を横に振った。「それは知りません」

「その人、本当はどういう名前だったの？ ブロンズはあだ名なんですよ？」

伯母は、ひどく困ったような顔をした。「もちろんあだ名です。でも私も、本当の名前は知らないのですよ。会ったこともないので。緑がかった黒髪をしていたことから、そうあだ名されたそうですよ」

2

この修道院は山の奥も奥、これよりも先へ行く道は存在しないという場所にあった。すぐ北には丘があり、これが数百メートル続いて、本格的に山岳地帯に入ることになる。標高が高く、茂みや孤立した木がばらばらあるほかは、森もできない場所だ。修道院の中庭から、その丘や山を眺めるのが私は好きだった。丘の中腹にある小さな小屋のことには、もちろんすぐに気がついた。あまりにも小さくて、まるでマツチ箱のようにちやちに見えた。よく見ると、修道院の裏門から細い道が、くねくね曲がりながらその小屋へ向かって伸びているのがわかった。

私は学校から帰ってきた直後だったが、夕食まではまだ時間があつたので、ちよつと行ってみることにした。庭を横切つて、小さな畑や古めかしい井戸のわきを通つて、裏門に近寄つた。裏門を通り抜け、私は山道を歩き始めた。真っ白な土の道で、思っていたより

も急な坂だったが、私は登っていった。ぐねぐね曲がりながら、道は高度を稼いでいった。何度か振り返って、私は景色を眺めた。修道院はそのたびに小さくなっていた。城壁に囲まれて、ミニチュアのようにかわいらしい。ハンナが庭を歩いているのが目に入ったので、私は大きく手を振った。ハンナもすぐに気づいて、振りかえしてきた。また前を向き、私はずんずん坂を登っていった。

小屋の前には五分ぐらいでついた。下から見ていたよりも大きなものだった。だが住むとしても、せいぜい一人しか暮らせない大きさだ。形はほぼ正方形で、その上に三角形の屋根が乗っている。入口はドアが一つ、窓は両側に一つずつしかない。だがよく見るとただの粗末な小屋ではなく、本職の大工がちゃんと手間をかけて作ったものようだ。小さな家というほうが正しい。でも誰が、何のためにこんな場所に建てたのだろう。物置としても立派すぎるし、修道院からこんなに離れていては、ずいぶん不便ではないか。

私は窓からのぞき込もうとした。だが白いカーテンがびっちらりと引かれていて、何一つ見えなかった。あきらめて修道院へ戻ることにして、坂道を下っていった。翌朝、馬車の上で私はハンナに言った。「あの丘の上の小さな小屋は、何のためにあるの？」

ハンナは若く、修道院がかかえている秘密については何も知らされていなかったのだろう。今から思えば、私を馬車に乗せて学校へ送るといふ仕事をあてがわれたのもそれが理由だったのだろう。知らない秘密は漏らしようがない。「ああ、あの小屋」たづなを持つたまま、ハンナはのんきそうに答えた。「十年ぐらい前に女の人が一人で住んでいたそうよ。私は会ったことはないけれど」

「どんな人だったの？」

「知らないわ」ハンナは歯を見せて笑った。「それより学校の調子はどう？」

ハンナは親切な人だったと思う。だがこのときの私にとってはまったく役に立たない人だった。適当に話をあわせながら、頭の中で私はまったく別のことを考えていた。ゴトゴト揺れながら、馬車はゆっくりと走り続けた。馬はときどき振り返って、座っているだけで自分たちは何もしない二人の女たちを恨めしそうに眺めていた。この馬の名はヒマワリといった。だが名前とは違って、明るくからつとしたところのないじめじめした性格の馬だった。私はあまり好きではなかったが、ハンナは気にならないのか、よく世話をし、かわいがってやっていた。でもヒマワリは、たてがみをなでられても迷惑そうに見つめ返すだけだった。

馬車がスリムタウンについた。私は学校へ向かって駆けていった。アリシアは校門に寄りかかって、友だちとおしゃべりをしていた。だが私の姿を見ると、すぐにかげよってきた。「おはよう」

「うん、おはよう」私はアリシアの顔を見つめた。あの馬とは逆で、アリシアは底抜けに明るい子だった。ハンナと似ているといえるかもしれない。並んで庭を横切りながら、どう切り出したものかと私は言葉を探していた。

「どうかしたの？」アリシアが不思議そうな顔をした。

「ねえあんた、ブロンズって女のこと、聞いたことある？」

「ブロンズ？」

私は黙ってうなずいた。私の真剣な顔が珍しいのか、アリシアは

笑い始めた。「それは苗字なの？ 名前なの？」

「あだ名らしいわ」

そりゃそうよねというように、アリシアは大きくうなずいた。だがアリシアの答えは、私をひどくがっかりさせた。「聞いたこともないわ。どこに住んでた人？」

もちろん私には、アリシアを責める気はなかった。アリシアは私と同じ年だ。十年前といえば、まだ二歳かそこらだ。何も知らなくて不思議はない。

「それがどうかしたの？ あんた変よ」アリシアは言った。

「ううん、なんでもないの」私は首を振って、アリシアの手をとって駆け出し、校舎の中へ飛び込んでいった。廊下の角を曲がるとき、控室にいるカーター先生の姿がちりと目に入った。私はアリシアを振り返った。「カーター先生って、いつからこの学校にいるの？」

アリシアは、鼻の頭に軽くしわを寄せた。考えごとをするとき、いつも彼女はそうした。そうやるとかわいらしさが台無しになって、昔話に出てくる悪い魔女のような顔になる。目にするたびに、あんな表情をしなければいいのにと私は思ったが、口に出したことはなかった。アリシアは明るい声で答えた。「五年ぐらい前だと思うよ」

「それは確かなの？」

自信に満ちた表情で、アリシアはにっこり笑った。「間違いないわ。私が小学校へ行き始めて、少したったころだったもの」

私は再びがっかりした。心の中で、カーター先生の名をリストから消した。その日は一日中、私は勉強に身が入らなかった。ぼんやりしていて、しからはしなかったが、何回かカーター先生からにらまれた。だがにらまれても、私は反抗的な気持ちがあった。たった五年前にやってきた役立たずのくせに一人前の顔をするんじゃないという気分だった。学校から帰ると、すぐに執務室へ行って伯母に話しかけた。「ねえ、伯母さん。その丘の上にある小さな小屋は、誰が管理してるの？」

「どういう意味なの？」不審そうな顔をして、伯母は私を見つめ返した。ぎこちない表情に見えるに違いないと自分でもわかっていたが、私は微笑みかけた。

「だって、存在する以上は誰かの所有物なのでしょ？」

「あの小屋はこの修道院の一部なのです。私が管理しているので」

「私、あの中が見たいわ」

伯母は目を見開き、とんでもないという顔をした。「なぜあんなものを見たがるのか、私には理解できないわ」

「見られては困るものが置いてあるの？」

「そんなものはありませんよ。何を言うのです」

「じゃあ中を見せて」

伯母は大きなため息をつき、机の引き出しを開けて、キーを取り

出した。金色に光る古めかしい形のキーで、古い書類の下に押し込んであった。伯母はキーを差し出しかけたが、私が手を伸ばすと引っ込め、触らせないようにした。私を見つめ返し、強い調子で言った。「小屋の中を見てもいいけれど、一人ではだめですよ。ハンナを呼んできなさい」

「はい、伯母さん」おとなしく言うことをきくことにして、私は部屋を出ていった。ハンナはすぐに見つかった。礼拝堂で、夕べの祈りのための準備を手伝っていた。私は話しかけ、伯母の部屋へ連れて戻った。目を丸くしていたが、ハンナは一緒に来てくれた。

「ハンナ」すぐに伯母は言った。「あの小屋の内部をケイトに見せてやりなさい。危ないことなどないけれど、念のため、あなたがずっとそばについていなさい。終わったら鍵をかけて、キーはあなたが私のところへ返しにくること。いいですね？」

伯母の声の調子に驚いている様子だったが、手を伸ばし、ひざを軽く曲げてキーを受け取りながら「はい」とハンナは答え、一分後には私と一緒に庭を歩いていた。裏門を出て坂道を登っていきながら、私はうれしくて仕方がなかった。自分でも理由がわからなかったのだが、なぜ踊りだしたいほどだったのだ。ハンナの手を引いて、ずんずん上っていった。小屋は、前るときとまったく変わらないうちで立っていた。まるでずっと私を待っていてくれたかのようだった。ハンナが鍵を開ける間も、私は待ち遠しくて仕方がなかった。いかにも慣れない手つきで南京錠をいじくっているの、私は少しいらした。

やっとドアが開き、私は小屋の中へ飛び込むことができた。小屋は私を待っていたのだという思いは、やはり中に入っても消えることはなかった。部屋の中のすべて、壁や床や天井や、並んでいる粗

未な家具のすべてがさつと私を包み込み、歓迎してくれているような気がしたのだ。まるでコートを手にしたメイドが、若い女主人の肩にさつと着せかけてやるときのように。

もちろんお世辞にも豪華と言える部屋ではなかった。壁も床も木の板がむき出しで、ペンキも塗っていない。天井は低く、屋根の裏側が丸見えになっている。カーテンを開けてみたが窓ガラスは薄く、軽くちよつとたたきただけでも割れてしまいそうだ。家具類もあかぬけない古くさいものだ。いかにも田舎の職人が手作りしたという感じがする。

イスに座ってみた。ベッドに腰かけてもみた。手の届きそうなところに天井があるというのが、くすくす笑い始めたいような感じだ。少し遅れてハンナも入ってきたが、おもしろがるというよりも、びっくりした表情で見回している。ベッドの上に私はごろんと横になった。部屋がもう一度、腕の中に優しく包み込んでくれたような気がした。うっとりしながら、私は目を閉じた。

何分間ぐらいそうしていたのか、私にはわからない。目を開くとハンナはもう小屋の外に出て、修道院の方向を眺めていた。しなくではならない仕事があつて、それが気になつているのだろうかという気がした。ベッドから起き上がり、私も小屋の外に出た。ハンナは振り返り、ほつとした様子で私を迎えた。「もういい？」とハンナが言うので、私は黙つてうなずいた。ハンナはまた不器用に、南京錠をかけ始めた。

翌日も私はなぜかとても楽しく、気分がよかつた。学校からの帰り道にも、スキップを始めたいような気持ちがした。雲のない明るい日で、真新しいジーンズのような色の空が広がっている。大きな声で歌を歌ってみたくなつた。だが私の歌は唇を離れることはなか

った。声を出そうと息を吸い込みかけた瞬間だったが、再びロビンの姿が目に残ったのだ。彼は道の中央に立って私を待っていた。ちょうど曲がり角で、その姿が突然見えてきたのだ。

近づきながら、私は目を輝かせていたに違いない。あまりにも大きな相手なので、目を合わせるためには真上を向かなくてはならなかった。私は角をほればれと眺めた。何百年も生きている古木のように複雑に枝分かれし、こぶやデコボコでゴツゴツしている。

彼のまわりをぐるりと一回りしてみた。首を動かさず、ロビンは視線だけで追いかけてくる。そつと胸に触れても、嫌がる様子はなかった。気がつく私たちとは並んで歩き始めていた。ロビンの脚は長く、機関車の巨大な車輪を思わせた。とても幸福な気分では横顔を見つめ続けたが、ロビンも同じようにしているのに違いなかった。

いたずら心というやつなのか、ロビンの角にハンカチを結び付けてみようと思いついた。高い場所に結わえ付けて、旗のようにはためかせるのだ。ハンカチを口にくわえ、毛をつかみ、私はロビンの背中にはい上がろうとした。ロビンは逃げも暴れもしなかった。足をじたばたさせて、私はなんとか乗ることができた。馬乗りになり、角に向かって手を伸ばそうとした。だがロビンは、この瞬間を待っていたに違いない。突然身体をゆすって私に小さな悲鳴を上げさせ、首にしがみつくように仕向けたのだ。

あつと思つたときには、ロビンは全力で駆け出していた。斜面を駆け下り、獣道へと入っていくことに気がついたが、どうすることもできなかった。森の中は日が差さず、思っていた以上に暗かった。あまりにも恐ろしく、ぎゅっと目を閉じて、首にしがみつき続けるしかなかった。タタツ、タタツとひづめが土を踏む音が響いている。「バカ、止まれ。バカ」と私は叫んだが、ロビンは聞く耳を持たな

いようだった。木の葉が身体をこすっていくほど狭い獣道を駆け続けた。腕を通してロビンの呼吸や、どくどくと流れている血流が感じられる。ロビンが立ち止まるまで、私は目を開くことができなかった。ずいぶん長く走り続けたような気がしたが、とうとう立ち止まってくれた。

目を開いて少し驚いた。いつの間にか私たちは巨大な岩の上にいるのだ。テーブルのように広く四角い岩で、そのむこうには水面が広がっているが波はほとんどなく、ガラスのように真つ平らなのだ。クレーターのような丸い形をしているが、直径は数百メートルあるから、湖と呼ぶべきかもしれない。もちろんまわりは深い森に囲まれている。その水の上に、この岩はまるで突堤のようにぐいと突き出しているのだ。私は地面に降りることにした。ロビンが足を踏ん張ってくれたので、ぴよんと飛び降りることができた。

もう一度まわりを見回したが、ひとけのまったくない森の中だ。こずえの向こう、ごく遠くにぼんやりした山地が見えているほかは本当に何もなかった。人工のものは何一つ目に入らない。岩のへりに近寄り、私はこわごわとのぞき込んだ。水面までは三メートルほどもあり、水は信じられないほど透き通っている。水底の小石の一個一個まで数えることができそうな気がする。身体の力が抜け、岩の上に座り込んでしまった。振り返るとロビンがいて、茶色い瞳で私をまっすぐに見つめていた。

「もう少し色が薄かったら、あなたの瞳はトフィーにそっくりよ」半ばやけくそだったのかもしれないが、気がつくとはそんなことを口にしていた。トフィーというのはキャンディーの一種だ。小さいころから私はとても好きで、よく食べていた。小さいころすぎて意味がわからず、いまだに名も知らないのだが、大きな箱いっぱいトフィーを誕生日ごとに送ってくれる人がいたのだ。何があった

のか、もう何年も届かなくなっていたが。

夕方前には、私は修道院に帰り着いていた。自分の部屋へ入り、ほっと息をついた。壁にかけてある小さな鏡をのぞき込んだ。私の瞳は、鏡の中から遠慮なく見つめ返してくる。この顔が母に似ているのかどうか、誰も教えてくれなかった。父と結婚して、私を生んで数年で死んでしまったこと以外、母のことはほとんど何も教えてもらっていなかったのだ。何を考えてロビンが私をあの手へ連れていったのか、もちろんわからなかった。あのあとロビンはまた私を背中に乗せ、運んでくれたのだ。今度はゆっくり歩いてくれたから、必死になつてしがみつくな必要も、ぎゅっと目を閉じている必要もなかった。のんびりと森の風景を眺めていることができた。そうやって私を修道院の近くまで送り届け、ロビンは森の奥にさつと姿を消した。

3

次の日曜には、こんなことがあった。礼拝は九時から始まるのだが、近在の村々から馬車や古めかしい自動車は何十台も集まってくるのはちょっとした眺めで、修道院の庭はすぐにいっぱいになってしまう。礼拝は十一時すぎまで続き、終わると人々はいっせいに帰り始める。馬のいななきやエンジン音が庭を満たす。修道女たちは門のわきに並び、人々を見送っている。その中に混じって、人々が帰っていくのを私も眺めていた。そこへアイス夫人が現れたわけだった。

アイスは小柄な老女で、もう八十歳近かった。それが礼拝直後の喧騒の中を、私に向かって歩いてくるのが見えたのだ。アイスは金持ちで、町外れに大きな屋敷を持っているということだった。アイス一族の最後の生き残りで、跡継ぎもいないまま、何人もの使用人

に囲まれて、人生最後の数年間を過ごしているところだった。

まるで磁石に吸い寄せられでもするように、アイスは私のところへまっすぐに歩いてきた。上等な服を着ていたが、身なりにはかわない人のようだった。髪はすっかり銀色になっているが、帽子の下でヘビのように踊っている。手足は木の枝のように細く、肌は灰色をしている。歩調をゆるめ、アイスは手の中の杖をぎゅっと握りしめた。伯母の隣に立ち、話しかけた。「ケイトを昼食に招待したいのだが、かまわないだろうね」

アイスの声は見かけよりもしつかりして、力強かった。伯母は驚いた様子で見つめ返した。「どういふことなのでしょう？」

「どうもこうもないよ。そのつもりで、もう仕度も言いつけてある。何も困ることはなかるう？」

「それはそうですが、あまり突然のことですから……」伯母は口ごもった。

「悩むことは何もなかるう？ 行きたいか行きたくないか、ケイトに直接きいてみればよい」アイスは私を見た。あまり好意的な目つきとは思えなかった。だが私は、アイスの屋敷へ行きたいと思った。本物の金持ちの屋敷など、まだ一度も見たことがなかったのだ。

参列者たちはすでにほとんどが帰ってしまい、庭は空っぽになっていた。修道女たちが聞き耳を立てていることに私は気がついた。ハンナも、ちらちらこちらを見ている。伯母のどがくんと動き、つばを飲み込んだ。伯母は微笑み、唇が動いた。「ええ。ケイトさえよければ、私は異存ありません」

すぐに馬車に乗せられ、私は修道院をあとにした。アイスの馬車は大きくて立派なものだった。車体はつやつやと光っていて、いかにも手入れがよさそうだ。イスはふかふかで、まるで応接間のようなだ。バネはとてもやわらかく、私がステップに足を乗せるだけで車体が大きく傾いた。馬は二頭つないであり、御者に鼻面をなでられながら、機嫌よく長いしっぽを揺らしていた。乗り込んでアイスと並んで腰かけたのだが、動き始めるとすぐに、修道院の馬車とはまるで乗り心地が違うことに気がついた。私の表情を見て、アイスが口を開いた。「どうしたね？」

アイスがもうさっきのような緊張した顔をしていないことに私は気がついた。いたずらっ子のように笑っているような気がした。「乗り心地がともいいのね」石ころを踏みしめて、坂道を下っていくのを感じながら、私は答えた。

「そりゃあね、荷物用の馬車とは違うさ」

「私にお話でもあるの？」

「なぜそう思う？」

「あなたはそんな顔をしているわ」

アイスは、ふふふと笑い始めた。だがすぐに、いたずらっ子のような表情に戻った。「ただどき、それは屋敷についてからにしようじゃないか」

「はい」なぜか反抗する気持ちにはならず、私は身体をまっすぐ前に向けた。馬車は急坂を下り終え、長い直線にさしかかっていた。スリムタウンを通り過ぎ、アイス家の私道へと入っていった。幅が

広く、平らによくならされている。五分ほど走り、小さな丘を回り込んだところで屋敷が見えてきた。古めかしいデザインではあったが、どこか真新しい建物だという感じがする。石の角はどれもまだきつちりとしていて、風化した形跡はない。三階建てだが、北の端に小さな塔がある。

門はもう開かれ、召使いがそのそばに立って待っていた。馬車が通り過ぎると、この男がすぐに門を閉じはじめるのが見えた。馬車はそのまま庭に入って止まったが、ここにもきちんと手入れのされた花壇が広がっていた。アイスの機嫌のいい声が聞こえた。「さあ、お降り。おなががすいたろう?」

メイドがドアを開け、手をとって降ろしてくれた。アイスにうながされて、私は建物の中へ入っていった。中は薄暗く、ひんやりしていた。廊下の幅もたつぷりとっており、あちこちにちよつとしたスペースを見つけては、名前もわからない外国の神像や、私と同じぐらいの高さのある花瓶が置かれていた。高価そうなものばかりなので、絶対に近寄らないようにしようとして心に決めた。

裏のテラスへ連れていかれた。大きなひさしが建物から張り出し、その下に木の床が張られている。白く塗られたテーブルとイスがそこに並べてある。かすかな水音が聞こえることに気がついた。見回すと、幅の狭い人工の川がテラスのすぐわきを流れていた。手すり越しにのぞき込むと透明な水が流れていて、私の影におびえて小さな魚が岩陰にさつと飛び込むのが見えた。

アイスがイスに腰かける音が聞こえたので、私は振り返った。アイスは私を見つめ、手招きをしているところだった。向かい合って腰かけるとメイドたちが現れ、テーブルの上に料理を並べ始めた。食べながらいろいろな話をしたが、父のことや首都での以前の生活

や学校の様子などで、私もお付き合いしていたが、たいした内容ではなかった。アイスが本題に入る気になるのを、私はじっと待っていた。

「それでさ」やっとアイスもその気になったらしかった。「あんたに来てもらったのは、ロビンのことが話したかったからさ」

「ロビン？」

アイスは満足そうにうなずいた。「伯母さんの前では話しくいことだからね」

どう答えていいかわからなかったので、私はまっすぐに見つめ返した。アイスが続けた。「私は家の中に花を飾るのが好きでね、常に切らさないようにしている。ときどきメイドを森へやって、野生の花を取ってこさせることがある。そのときメイドが目撃したのさ。あんたがロビンの背に乗っているところをね」

「あれを見ていたの？」

「そうさ。あんたたちは森の中で何をしてたんだい？」

「森の奥に湖があるの。丸い形をした湖よ。知ってる？」

アイスは首を横に振った。「知らないね。あの森には人が入るとはほとんどない。内部の詳しい地図が作られたことだってないのね」

「そうなの？ ロビンは私をそこへ連れて行ってくれたのよ」

「楽しかったかい？」

「ええ」私はにっこりした。「でも、それがどうかしたの？」

「あんたは、ブロンズって女のことを聞いたことがあるかい？」

「あるわ。伯母さんが話してくれた」

「おや、そうかい」アイスは目を丸くした。「伯母さんはどう話してくれたね？」

「十年ぐらい前、町外れにブロンズというあだ名の女が住んでいてある日、山の中で迷子の子トナカイを見つけ、ロビンと名づけて育てていたのだけど、ブロンズはそのうちに病死してしまった。ロビンは森に返された」

「ふうん」アイスは意地悪そうに笑った。

「どうしたの？」

「町外れ？ あの修道院のすぐそばというのは、そう表現できるのかねえ」

「やっぱりあの小屋だったの？」

「あの小屋は、ブロンズのために私が建ててやったのさ。伯母さんは最初、修道院の中に住ませようとしたが、ブロンズが嫌がつてね。その妥協の産物ということさ。ブロンズは修道女たちが世話をしてたんだよ」

「あなたはブロンズを知っているのね」

「親戚だったのさ。遠い親戚ではあるが、付き合いはあってね」

「どういう関係なの？」

「私とブロンズの家系は、もとは同じ家だったのが、何代か前に分かれたのさ。姓が違うから、見かけだけではわからないが」

「だけどブロンズは、なぜあそこで一人暮らしをしなくてはならなかったの？ なぜ家族から離れたの？」

アイスは、ふうとため息をついた。「その質問は覚悟していたが、いざきかれると困るものだねえ。どう説明してよいのやら」

黙ったまま、私はアイスの次の言葉を待っていた。だがそれは、期待していたものとはまったく違っていった。「私が送ってやったトフィーはおいしかったかい？」

「えっ？ あれはあなたが送ってくれたものだったの？」

「あなたが四歳になるころまでだけだね。そのあと引越したきり、あなたの父親は住所も教えてよこさなかった」

「どうして？」

「知るもんかね」アイスは軽くにらんだ。「おかげで私は、菓子を送って喜ばせてやる相手がいなくなってしまった。あのころは私も首都に住んでいたのだよ。その後いろいろあって、こんな山奥に引っ越してくる気になったというわけさ」

しばらくの間、私たちは黙っていた。小川に行く水音と、風が木の葉を動かすざわざわいう音だけが聞こえている。アイスが顔を上げた。「ブロンズについては、私も一つだけ疑問に思っていることがある」

「なんなの？」

「死ぬ少し前のことだが、ブロンズはここを訪ねてきた。そしてポール紙製の箱を私に手渡そうとするじゃないか」

「何が入っていたの？」

アイスは首を横に振った。「その箱は開けないでくれとブロンズは言った。腕のいいガラス職人を探して、開封せずに、そのままその職人に渡して欲しいと言うんだ。中身を見てよいのはその職人だけで、職人への指示書も箱の中に同封してあるということだった。何か小さく固いものが入っていて、振ると箱はかすかにカタカタいった」

「どのくらいの大きさの箱だったの？」

「このくらいだったよ」箱の大きさをアイスは手でやってみせた。縦横十五センチほど。

「それからどうなったの？」

「ガラス職人を探すのは簡単な仕事だった。すぐに見つけて、私の手でポール箱を届けた」

「もちろん中身は見えていないのね」

「もちろんさ」

「それで？」

「二週間ばかりして、ガラス職人から連絡があった。仕事が終わったということだった。だから私は受け取りに行った。職人はすぐに手渡してくれた」

「何だったの？」

「それがさ」アイスは軽く笑った。「またまたボール箱さ。前の箱の倍ぐらいの大きさがあったが、嚴重に封がされていて、中身はわからない。職人が言うには、『このボール箱も中身を見ずに自分に返して欲しい』とブロンズの指示書に書かれているということだった」

「あんたはその通りにしたの？」

「もちろんさ。持ち帰って、すぐにブロンズに手渡した。その後どうなったかは知らないね」

「でも、どうして私にそんな話をするの？ ブロンズから口止めされてたんじゃないの？」

アイスは、ゆっくりと首を横に振った。「そのあたりのことは、あなたには話せない。でも私は、あなたに頼みたいことがあるのさ。今日はそのために来てもらったのだからね」

「頼み？」

「そうさ。ある理由で、私はそのボール箱の中身が何だったのかを調べなくてはならなくなった。だが私はこんな年だ。自分で調べることもなんかできない。だから若いあんたに、私の代わりに調べて欲しいのさ」

「そんなことをしてもいいの？」

「ブロンズの意味を踏みにじることになるのではと心配しているのかい？」アイスは私の瞳をのぞき込んだ。私はうなずいた。

アイスはにつこりした。「その心配はないよ。『正しい時期が来たら、ボール箱の中身が何だったのかを知ってもらいたい』と本人がはっきり言っていたからね。彼女もそれを望んでいたのさ。そして今が、その正しい時期なんだ」

「ふうん」

「あんたは助手になって、私の代わりに働いてくれるだろう？」

「わかったわ」私はうなずいた。「あんたの助手になる。何をすればいいの？」

一時間後、馬車に乗せられて、私は修道院へ送り返された。修道院へ帰りついたのは、茶の時間がすんだ直後のことだった。廊下で伯母と顔を合わせたか、「おかえり」と言うだけで、何を食べたかなどとまったくきかれぬのが不思議だった。伯母はまっすぐに執務室へ入って行ってしまった。

私が伯母に話しかけたのは、その翌日の夕食後のことだった。執務室へ行つて話しかけたのだが、伯母はずっと不審そうな顔をしていた。「あんたは自分の姪の言うことが信用できないの？」と言つてやりたくなつたが、私もウソをついていたのだから仕方がない。

誕生パーティーの招待状が友達から届いたと言つて、私は伯母に手紙を見せたのだ。ちゃんと封筒に入つていて、それらしい少女の名も差出人として書いてある。もちろん私の文字ではない。アリシアに手伝つてもらつて偽造したものだった。きちんと切手も張つてあり、消印も押されている。長い間説得して、伯母はとうとう納得してくれたようだった。首を縦に振り、私が首都へ旅行することを許可してくれた。

4

その日がやってきて、大きなカバンを抱え、私は修道院の馬車に乗った。ハンナはもう御者台で待っていた。伯母や修道女たちが庭に出て見送つてくれ、馬車は坂道を下つていった。後ろを向き、私は彼女たちに手を振り続けた。スリムタウンの町に入ると、すぐに学校が目に入った。だがもう夏休みに入っていたから、校舎の中はがらんとしていた。船着場にはアリシアが見送りにきてくれた。目を合わせて、私たちが意味ありげなウインクをかわしあつたのはいうまでもない。船はもう棧橋で待つていた。煙突から煙をもくもくとはいている。

乗船口には船員が立つて、客たちの切符を調べていた。私もその列に並んだのだが、持っている切符が一等船室のものであることをハンナに気づかれるのではないかとひやひやした。安い二等船室で行くと伯母には言つてあつたのだが、アイスが一等を用意してくれただ。だがハンナは何も気がつかなかった。汽笛が鳴り、綱がほ

どかれて、船は動き始めた。私は甲板に立ったまま、アリシアとハ
ンナに手を振り続けた。

スリムタウンを離れ、船は川の中央部へと乗り出していった。水
をかき分けながら、スピードを上げた。しばらくの間、甲板の上に
残り、川を下りながら船首が波をかき分ける様子を私は眺めていた。
そのまま日が暮れ、翌朝目が覚めたときには船は平野の真ん中を走
っていた。まわりは目の届く限り小麦畑が広がっている。振り返る
とずっと遠くに、昨日出発した山脈がぼんやりと見えている。

夕方になって、とうとう首都の棧橋についた。斜めになった太陽
光線が、四角いビルの影を長く長く伸ばしている。棧橋に降り立つ
と、制服を着たポーターの姿がすぐに目に入った。私の名を書いた
大きな紙を手に持ち、きよろきよろしながら立っている。お互いが
同時に気がついた。駆け寄ってきて、ポーターは口を開いた。「あ
んたがケイトかい？」

「ええ」私はうなずいた。カバンを持ち、ポーターは私を連れて歩
き始めた。混雑した広いロビーの中央を通り抜けながら、迷子にな
らないように、私は彼の背中を見つめ続けた。エンジンをかけたま
まで待っていたタクシーの前まで行くと、運転手が飛び出してきて
ドアを開けてくれた。チップを渡そうとしたが、ポーターは手を振
って断り、「料金はもうアイス夫人からもらっているよ」と言った。

タクシーが走り始めた。首都の風景を目にするのは三ヶ月ぶりだ
った。人であふれそうな歩道やパークを飛ばす路面電車、クラク
ションを鳴らしながらいがみ合っているバスの姿などがとてもなつ
かしかった。ホテルもアイスが予約しておいてくれた。タクシーか
ら降ろされたのは見上げるような背の高いビルの前で、それがホテ
ルだった。

ポーターと同じように、タクシー運転手も料金を受け取ってはくれなかった。すべてアイスが支払済みにしてきていた。運転手の態度から、チップもかなり弾んであるに違いないと思えた。なぜアイスはこんなによくしてくれるのだろうかという気がした。よくしてもらえろという意味では、ホテルの中に入ってからもそうだった。私の顔を見ると、ホテルマンたちはいかにも待ち構えていたという様子で近づいてきた。ボーイがすぐに荷物を受け取り、私はカウンターの前で宿帳に記入した。客の多い忙しい時間帯だったが、まわりの大人たちがみんな自分を見ているような気がして、子供っぽくへたな字しか書けないことをとても恥ずかしく思った。

私の部屋はとても高い階にあつて、ボーイが開けてくれたドアをくぐりぬけると、びっくりするほど広かった。窓に近寄つてカーテンをいっぱいにかけてみたが、まわりのどのビルよりも高く、町全体を見下ろす感じだった。すでに街灯はすべて灯され、歩道を歩いている人々は黒っぽいスポンジのようなごわごわした塊でしかない。レストランで夕食をとり、ふかふかした大きなベッドでぐっすり眠った。

翌朝、再びレストランで朝食を食べていると、ボーイがやってきてささやいた。「ケイト、もうタクシーが来て君を待っているよ」

玄関に出てみると、昨日と同じタクシーが待っていた。運転手の顔にも見覚えがあつた。似合わないくらい小さな丸い帽子をかぶつた若い男で、ころころ太つてピンク色の肌をしている。あまりにも子供っぽく思えて、本当に運転免許を持っているのだろうかという気がした。

私が乗り込むと、タクシーは走り始めた。通りに出て、スピード

を上げてから気がついたのだが、私はまだ行き先を告げていなかったのだ。ポケットに手を入れ、ごそごそとメモを取り出そうとした。それをバックミラー越しに察したのか、運転手が言った。「行き先はわかっているよ。テルル通り一九八番地だろう?」

メモに書いてあったのもそんな住所だったことを思い出した。「はい」と答えるだけで、私は黙って座っていることにした。

朝のラッシュは終わっていたが、まだどこか通行量の多い道をタクシーは走っていった。窓はすべて開けてあり、やわらかい風が吹き込んでくる。だがもうすぐ、昨日と同じように暑くなるだろう。タクシーは首都の中心部を離れ、西へ向かっているようだった。まわりに行く自動車が目に見えて少なくなり、ビルがなくなり、いかにも郊外らしい住宅地になった。道の幅が狭くなり、そのまま郊外を通り抜けたようだった。少しの間うとうとしたのだが、気がつく。と畑の真ん中の一本道を走っていた。こんなところにガラス工房があるのだろうかと思ったが、運転手が口を開いた。「ほら、あそこに見えてきたよ」

彼が指さす方向を向いたのだが、何も見えなかった。舗装のない田舎道と、かやぶき屋根の農家があるだけだ。「どこ?」

「あそこさ」バックミラー越しに私を見つめ返し、運転手はにっこり笑った。やっと私も、あれは農家にしてはえらく大きく、似つかわしくない倉庫のような建物がその敷地内に立っていることに気がついた。「画家のアトリエのように大きな窓が南に面していて、屋根からは煙突が一本、太く長く突き出している。」

「あれがガラス工房?」

「そつだよ。芸術家気取りの気むずかし屋らしいから、気をつけたほうがいいよ」

「本当に？」

「そうらしいよ。やつこさんのしっぽを踏まないように気をつけな
いと」

少しどきどきしながら、私はタクシーを降りて庭を歩き始めた。
四角いアトリエをのぞけば、普通の農家とまったく変わらない風景
だった。庭は花壇に囲まれ、すみには藤棚がある。その下で猫が一
匹昼寝をしていて、タクシーの音を聞きつけて、退屈そうにこつち
を見ていた。十五、六歳の少年がアトリエのドアを開けて、顔を出
した。私は歩いていき、自分の名を告げた。

少年はすぐに奥へ引つ込んでしまった。「先生」と呼ぶ声が聞こ
え、少しして一人の男が、洗った直後なのか、タオルで手をふきな
がら現れた。ふき終えたタオルをそばのイスの背にぽんと置き、戸
口にいる私に近づいてきた。「失礼だが、もう一度あなたのお名前
を聞かせてもらえるかな？」

「ケイト・ビートルです」

私は運転手からかつがれていたようだった。この男がガラス職人
で、名はクラムというのだが、気むずかし屋という感じはまった
なく、どこにでもいる親切な普通の老人という様子だったのだ。背
は高くはないがやせていて、鼻の下にヒゲがある。頭ははげてはい
ないが、ヒゲと同じようにすっかり白くなっている。整えられてお
らず、髪はジャングルのようにぼさぼさだが、見苦しくはなかった。
眉毛も同じ色で、毛虫のように長く伸びている。瞳は灰色で、私を

まっすぐに見つめている。「おいで。外で話をしよう」

クラムに連れられて、私は再び庭に出た。藤棚の下へ行っただが、もう猫はいなかった。並んでベンチに腰かけた。ゆっくりと風が吹き抜ける涼しい場所だ。向こうの建物の影に、タクシーのおしりがわずかに見えている。

「おまえさんがやってくることは、アイスから手紙で知らされたよ」

私は振り返り、クラムと顔を合わせた。「本当に？」それは意外なことだった。私はこれを、過去の謎を探り出す探偵のような仕事だと思っていたのだが。

「それだけじゃない。おまえさんがやってくることは十年前からわかっていた。あの指示書にそう書いてあったからね」

「何の指示書？」

クラムは微笑んだ。「ゆっくり順番に話をしよう。時間はあるのだろうか？」

「はい」

クラムは満足そうな顔をした。「私はアイスとは古い付き合いだね、若いころからの知り合いだ。クリスマスカードを送りあったりしたよ。それが十年前のことだが、ひょっこりここを訪ねてきてね、私にボール箱を差し出すじゃないか。なんだろうと思ったが、アイスの言うには、『何も言わずにこの箱を開けて、中に入っている指示書に従ってほしい』ということだった。箱は少し重く、軽い音でカラカラいていたが、中に何が入っているのか、その指示書とや

らに何が書いてあるのかはアイスも知らない様子でね。私にボール箱を預けて、すぐに帰っていった。だがひどく緊張していて、いかにもただ事ではない感じがしたね。

それが伝染したのか、私まで胸がどきどきしてきた。すぐにボール箱は人目につかない場所に隠し、夜遅くなつて、家族がみな寝静まつてから中身を開いたものさ。自分の部屋にこもつて、ドアには鍵までかけてね」

「何が入っていたの？」

クラムは私を見つめ、そつと微笑んだ。「それはおまえさんには話せないな。ある小さな品物で、女性らしい文字で書かれた指示書と一緒に添えられていた」

「それには何が書いてあったの？」

「おまえさんは、アイスからどこまで聞かされているんだい？」

私は話し始めた。ロビンやブロンズのこと。あの小屋のこと。ある日、アイスが私を昼食に招いたこと。

「そうかい」クラムはうなずいた。

藤棚は母屋に面していたのだが、勝手口が突然開いて、クラムと同じぐらいの年齢に見える女が顔を出した。クラムの妻だと思えた。腕の中にさつきの猫を抱いている。「あんたたち、お昼ができたよ。こっちへおいで」

タクシー運転手も呼び入れて、食堂で昼食をご馳走になった。き

れいに掃除された田舎風の広い部屋で、高い天井が珍しくて、私は何回も見上げた。何十年もの間に煙でいぶされ、壁なども真っ黒になってしまっている。食べながら、私たちはいろいろな話をした。クラムは私の身の上を聞きたがった。私は、父が外国で働いていることや、首都から修道院へ引越してきたことなどを話した。運転手はシチューを何杯もお代わりして、一人でががつ食べていた。だが、それをまた何杯もついでやるクラムの妻のことも、なんて人だろうと思った。

昼食を終えて、私とクラムは藤棚の下に戻った。クラムの妻が冷たいレモネードを置いていってくれた。猫がひざの上に乗ってきたので、背中をなでてやりながら、クラムが口を開くのを私は待っていた。

「あの指示書だが、十年も前のことなので、もうよく覚えていないのだよ。探してみたのだが、どこへやってしまったのか、現物も見つからなくてね」

「ブロンズが書いた指示書のことね？」

「そうだよ。だから、覚えていることだけ話すことにしよう」

私は黙ってうなずいた。口を開けて、猫が大きくあくびをした。クラムは続けた。「なぜかは知らないが、指示書の中におまえさんの名が書いてあった。どういうぐあいに書かれていたのかは、情けないことにまったく覚えておらんがね」

「本当に私の名前だったの？」

「それは間違いない。ビートルというのは珍しい姓だからね。その

指示書の中で私が依頼されたのは、こういう仕事だった。ボール箱の中には、指示書と一緒にある品物が入っていた。その品物を丈夫なガラスびんの中に入れ、熱で溶かしてビンの口をふさいで、完全に密封してほしいということだった」

「どんな品物？」

クラムは首を横に振った。「それは話せない。ブロンズもそこまでは望んでいなかった気がする。しかしそれは、おまえさんの手の中に簡単に握ることができるほど小さなものだったよ」

指を広げ、私は自分の手のひらを眺めた。何をしているのだろうかという顔で、猫が不思議そうに私を見ていた。「それがボール箱の中でカタカタいつていたのね」

「そうさ。まず私はガラスを使って、ちょうどいいサイズのビンを作った。大きさはこのくらいさ」クラムは両手で、三十センチほどの寸法を示した。

「ええ」

「その品物を入れるために、ビンの口は少し大きく作っておく必要があった。私は石を入れ、再び加熱して……」

「それは石だったのね」思わず大きな声を出してしまった。猫が驚いて飛び上がり、恨めしそうに私を見上げた。クラムはしまったという顔をしていたが、少しして笑った。

「ばれてしまったな。とにかく私は再び加熱してビンの口をふさぎ、中身を……その石をビンの中に完全に密封した。それを新しいボー

ル箱に入れ、アイスに手渡した」

「そのあと、それはどうなったの？」答えはよく知っていたが、私は口にしてみた。

「すぐにブロンズに返されたと思うね。アイスはそうすると言っていたよ」

「指示書には、どうして私の名前が書いてあったのかしら」

「なぜだろうねえ」クラムも首をかしげた。その様子は本当に疑問に思っているようで、ウソをついている感じではなかった。

「それとあの…」

「なんだい？」

「あなたはブロンズに会ったことはないのね？」

「ないよ」クラムは首を横に振った。「アイスからボール箱を渡され、指示書通りに仕事をしたというだけさ」

そのあと一時間ほど、ブロンズともボール箱とも関係のない取り留めのない話をしたあとで、私はガラス工房をあとにした。タクシ―運転手は運転台でぐうぐういびきをかいていて、私が近づいて咳払いをするまで目を覚ましもしなかった。クラムと妻が庭まで見送りに出てくれた。運転手がエンジンをかけ、タクシ―は走り始めた。道路に出て、スピードを出してタイヤが砂ぼこりを立て始めると運転手が言った。「うまい昼飯でしたね」

だが私は短く「そうね」と答えただけだった。今回の旅行で、いたい自分は何を得たのだろうと考えていた。ホテルにもう一泊して、翌朝私は船に乗った。また同じ運転手が港まで乗せていってくれ、同じポーターが荷物を運んでくれた。船内で一泊して、私はスリムタウンに帰ってきた。船着場ではハンナが待っていた。

5

夏休みはまだ始まったばかりだったから、私は学校へは行かなかった。一度アイスの家へ旅行の成果を報告しに行ったが、それ以外は毎朝ハンナの馬車に乗ってスリムタウンへ行き、午前中はアリシアと遊んで過ごした。昼食をご馳走になってから一人で山道を帰り始めるのだが、ある角を曲がってスリムタウンが見えなくなるといつもさつとロビンが現れ、私を乗せて、修道院の近くまで運んでくれた。

そういうある朝のことだったが、珍しくもスリムタウンに用事があるとかで、伯母も一緒に馬車に乗って、坂を下っていったことがある。馬車が止まると、私はアリシアの家に駆け込んだ。ハンナは店で買い物を始め、伯母は一人で通りを東へ歩いていく様子だったから、どこかそっちの方角に用事があったのだろう。だが重要なこととは思えなかったから、私はすぐに忘れてしまった。

この日私は、アリシアと一緒に商店主ごっこをして遊んだ。アリシアの家は本当に商店なのだし、本物の客たちを相手にしていたのだからごっこではないのかもしれないが、私たちは客の求めに応じてベーコンや小麦粉をはかりに乗せたり、新聞や煙草を売ったり、お釣りを数えたりした。

そうやって私たちが遊び始めていた間も、伯母は通りを東へ歩き

続けていたらしい。アイス屋敷まで行ったのだ。そしてアイスに会い、大ゲンカをしたらしい。後になってアイスが話してくれたのだが、居間へ案内された時点で伯母はかなり興奮した様子だったらしい。もちろん暑さで顔を赤くしていたのだから、それだけではないとすぐに見て取れたそう。冷たい飲み物を出してやると伯母は一息に飲み干し、こう言った。「私の姪にくだらないことを吹き込むのは、やめていただきたいものですね」

「なぜそんなことを言うんだい？」もちろんアイスはたずねた。

「私の知り合いが偶然同じ船に乗り合わせていたのです。その人が教えてくれたのですよ。あの子は一等船室に乗っていたそうですね。あの子のどこにそんなお金があるというのです？」

「はっ、ばれてしまったのでは仕方がないね」アイスは言い返した。「確かに全部私がお膳立てしてやったことさ。ケイトにブロンズのことを調べさせているのだよ」

「私たちのことは、もうほっておいていただきたいわ」

「そうはいかないさ。ケイトは正当な後継者だ。あの石は受け継がれなくてはならない。あなたの気弱な妹がどこに隠してしまったのか、どうしても見つけ出さねばならん」

「バカバカしい。ケイトが後継者だなどと、いったい誰が決めたのです？」

伯母は大きな声でそう言ったのだが、アイスが次の言葉を言い放つと、さっと立ち上がり、一言も口をきかずに屋敷を出ていったそう。うだ。「わからないかい？ ロビンだよ。ロビンがそう認めただ。

あの子を丸い湖へ連れていったということが何よりの証拠さ」

同じころ、私はアリシアの家で昼食をご馳走になっていた。アイスの屋敷をあとにした伯母がスリムタウンにさしかかるころ、私はアリシアの家を出ようとしていた。私は何も知らずに通りを歩き、あの曲がり角にさしかかった。ほんのわずかのタイミングのずれだったのか、ロビンに会うのがうれしくて不注意になっていたのか、すぐ後ろを伯母が歩いていることには気がついていなかった。ロビンの背に身体を落ち着けたところで、小さな悲鳴を聞きつけて私は後ろを振り向いた。そこに伯母がいたのだ。

伯母はひきつけを起こしそうなほど固まっていたが、その顔は真っ白だった。それから真っ赤になり、私をにらみつけた。二つの目玉が、消防自動車のランプのように光を放っているような気がした。

伯母は何か言おうとした。だが私はそれを聞くことはなかった。その前にロビンがさっと駆け出し、茂みを飛び越え、森の中へ飛び込んだのだ。両目を閉じ、枝にたたかれないように身体を小さくして、私はロビンにしがみついた。そのあと伯母は何かを叫び続けたのかもしれないが、私の耳には届かなかった。日が暮れるまでロビンと一緒に森の中をあてもなく歩き回り、時間をつぶした。太陽が地平線の向こうに沈んで、どうしようもなく暗くなってからロビンと別れ、私は修道院の敷地へ足を踏み入れた。

もちろん伯母はすぐに私を見つけ、空腹や夕食の心配など一切しなくても、腕を引いて執務室へ引っ張り込んだ。ドアに鍵をかけ、机の前に立って腕を組み、私をにらみつけた。私は、自分が十二歳の少女にすぎないことを感じずにはいられなかった。ありとあらゆる意味で伯母は私よりも大きく、強かった。クレーンのように私を見下ろし、伯母は口を開いた。「今日から数日間、あなたは修道院

の外へ出てはいけません」

「どうして？」

「電報を打って、ハンターたちを呼び寄せました。明日にはスリムタウンに到着するでしょう。ハンターたちが仕事を終えるまで、あなたはずっと修道院の中にいるのです」

「仕事って？」

「あのトナカイを撃ち殺すのですよ。私が何も知らないと思っっているのですか？」

「何を？」意味はよくわかっていたが、かぼそい希望にすぎる思いで、私は何も知らないふりを続けた。

「最初に気がついたのは」鼻の穴を大きく広げ、伯母はドラゴンのように息を吐き出した。「庭で見つけた足跡です。消しても消しても翌朝には新しいものがついていたから、ロビンは毎晩あなたの様子を探りにきていたのでしょう」

「なぜ？」

「知るもんですか。その次はあなたが、あの小屋に興味を持ち始めた」

「それがまずかったの？」

「そして今度は、あんたが私にウソまでついて、首都へ出かけたことだわね」

私は本当に不安そうな顔をしていたのだろう。伯母の表情が少しやわらかくなった。ロビンが殺されることを悲しんでいると思ったのだろう。だがロビンについては、私は何も心配してはいなかった。ハンターであれ誰であれ、ロビンを傷つけたり殺したりできるとはとても思えなかったのだ。森は広く、獣道は複雑だ。ロビンはやすやすと逃げおおせるだろう。

この瞬間から伯母は、文字通り私を自分の目で見張ることにしたようだった。一秒でも目を離せば逃げ出して、ロビンのもとへ行ってしまうと思っていたのだろう。私の荷物は、すでに古い病室へ移されていた。この修道院には何年か前まで小さな診療所が併設されていて、そのころ使われていた部屋だった。石でできた真四角な部屋で、窓は小さなものが高くところに一つあるだけだ。ドアも一つしかなく、しかも隣にある看護人室に通じているだけだ。だから私を病室に入れ、伯母が看護人室で寝起きするようにすれば、もう逃げ出す方法はなかった。私が病室へ移されるのを、修道女たちは気の毒そうに眺めていた。だが伯母が怖いのか、何も言わなかった。ハンナは目を赤くしていた。

私の幽閉生活が始まった。城壁の外に出られないだけで、それ以外には制限はなかったのだが、伯母がいつもそばにいることにはうんざりしてしまった。事情を説明する手紙を私に書かせ、伯母はハンナに持たせてアリシアの元へ届けさせた。ハンナが持って帰ってきてくれた返事には、私への同情があふれていた。だが私あての手紙を届けるメッセンジャーの役をハンナがしてくれたのは、このときだけではなかった。その二日後にもあったのだ。

ハンターたちはスリムタウンに到着し、すでに何度か森に入っているということだった。もちろん何かの成果があったという話は聞

こえてこなかった。ハンナは以前と同じように日に一度、馬車に乗ってスリムタウンへ通っていた。伯母も二十四時間休みなく私を見張ることはできなかった。用事で執務室へ引き上げることもあった。そういうとき伯母は、修道女たちに私を見張らせた。それがあの日、ハンナの役目になったのだ。今から思えばあの日のハンナは、私や伯母のまわりをずっとちよろちよろしていたような気がする。私と二人きりになれるチャンスを待っていたのだろう。そしてとうとう伯母が言った。「ハンナ、私は執務室から書類を取ってこなくてはならないから、あなたがケイトを見張っていなさい。すぐに戻るから」

「はい、院長」

私たちは食堂で昼食を食べていたのだが、伯母が食べ終えても、私はまだぐずぐずしていた。伯母が食堂を出ていくと、ハンナはすぐに私の隣に座った。ハンナがポケットから何かを取り出したことに気がついた。きちんと封をして、切手も張った手紙のようだった。差出人を確かめる暇はなかったが、すぐに受け取って、私は自分のポケットに隠した。伯母が戻ってきた。

食べ終わると伯母は私を立ち上がらせ、手を引いて病室へつれて帰った。ベッドに腰かけ、私が本を手にとって読み始めるのを見て、伯母は看護人室の机の上で書類仕事を始めた。だがドアが閉まると本をそつと置き、ポケットから手紙を取り出して、私は封を切った。差出人はクラムだった。

親愛なるケイト。

先日、ひよんなことから指示書の現物が見つかった。古い書類の

間にまぎれこんでいたんだ。おまえさんの名が出てくるのは追伸の部分で、こう書かれていた。

『いつかケイト・ビートルに会うことがあったら、「泉の底を探してごらん」と伝えてやってください』

これだけだよ。何かの参考になればいいのだが。

私には何のことやらわからなかった。何度も読み返してみたが、やはりわからない。ため息をつき、手紙をわきに置くしかなかった。外から物音が聞こえてきたのは、そのときだった。最初は何の音なのかわからなかった。乾いたような破裂音で、私は耳をすませた。すぐに銃声だと気がついた。誰かが修道院の外で発砲したのだ。

修道院の門は、もちろんこの日は閉じられていただろう。だがあのちゃちな門では、ロビンが身体を一度ぶつけるだけで、簡単にはじけ飛んでしまったに違いない。建物の入口のドアも、そう頑丈なものではない。修道女たちの話では、ロビンは廊下を一直線に私の部屋へ向かって走っていったそうだ。それが私の部屋だと知っていたのだろう。内部の下見も以前からすませてあったわけだ。足音だけの幽霊の話も、まんざらウソではなかったのだ。

私の部屋のドアを押し破り、すぐにロビンは、私がそこにいないことを知ったのだろう。そしてすべての部屋を調べる気になったらしい。そのころには、修道女たちはみな逃げ出してしまっていた。銃を撃ったのはハンターの一人だったのだが、私が聞いた一発で最後の弾丸を撃ちつくしてしまい（もちろんロビンの体をかすめることだつてなかった）、応援を呼ぶために、スリムタウンへ向かって馬のムチを振るっているところだった。

ロビンの足音を聞きつけて私はドアを開け、看護人室に顔を出した。伯母もドアから顔を出して廊下の様子を見ていたが、私に気づいて振り返り、「ドアを閉めて、病室の中にいなさい」と言った。

もちろん私には従う気などなかった。その間もロビンの足音は聞こえ続けていた。ときおりリズムが乱れるので、立ち止まったり、向きを変えたりするのがわかる。どこかのドアが押し破られるドシンという音が、ときどきそこに混じる。伯母は真っ青になっていた。あの大きな身体を震わせ、ドアのわくをぎゅっとつかんでいる。足音がまた大きくなって、ロビンが近づいたようだ。

伯母は、バネにはじかれるようにしてドアを閉めた。ノブをまさぐったが、このドアには鍵などない。伯母は身体をひるがえらせて机のところへ行き、耳障りで大きな音を立てながら、ドアの前まで押していった。ドアにぴったりと押し付け、バリケードにしようというのだろうか、あんなに小さな机では何の役にも立たないだろうというのは、私の目から見ても明らかだった。伯母は私を抱えて病室に飛び込み、ドアを閉めた。このドアにも鍵はない。ロビンの足音がまた少し近くなったようだ。

伯母はベッドに取り付き、ドアのところへ押ししていこうとした。だが大きく重く、思うように動かない。伯母は顔を上げ、私にも手伝えようとしたりした。その瞬間、看護人室のドアが破られる音が聞こえてきた。このときの伯母ほど絶望に満ちた顔つきというもの、私は見たことがない。ロビンが看護人室の中を歩く足音が聞こえた。狙いをつけるために、病室のドアに角を押し当てたようだ。

伯母は飛び上がり、そのドアに取り付いた。背中を押し当て、体中の力を集めて押さえようとしたのだ。ドアの向こうでは、助走距離をとるためにロビンがバックする気配が感じられた。私はあわて

て伯母に飛びつき、手を引いてドアから離れさせようとした。だが、あんな大女を私一人でどうこうできるはずがない。ブルブルとロビンが息を吐き出す音が聞こえてくる。

私は伯母のむこうずねを思い切りけとばした。伯母は悲鳴を上げて、腰をかがめた。そのすきに強く引き、ドアの前からどかせることに成功した。同時に大きな音が聞こえ、ドアが突き破られた。真ん中に大きな穴が開き、ロビンの角がオノのように突き出したのだ。伯母がまた悲鳴を上げた。ひええというような耳障りな声で、なんてつつしみのない声だろうと、こんなときなのに思ったことを覚えている。ドアを押し開け、ロビンが私を見つけた。

「ロビン！」私は駆け寄り、ベッドを踏み台代わりにしてその背にまたがった。すぐにロビンは駆け出し、私たちは修道院を飛び出したのだ。門の外に出たとき、道のずっと遠くにハンターたちの姿が見えたような気がしたが、確かめることはできなかった。すでに私たちは獣道を駆け始めていた。

森の中は文字通りロビンの世界だった。追いつくどころか、近づくことさえ誰にもできなかった。十分後には、私たちは丸い湖のそばにいた。あの岩の上だ。私はほっと息をついたが、ロビンは立ち止まることなく岩の上を進み続けるではないか。水の上に突堤のように突き出した岩なのだ。水面がどんどん近づいてくる。ロビンの首筋に触れ、私は「どうしたの？」と言おうとした。それでも立ち止まる気配はない。そのままロビンは、なんでもない風に空中へ身をおどらせた。

風を受けて髪とスカートがはためき、私は悲鳴を上げた。次の瞬間には私は水中にいた。大きな水音としぶきがたつたが、水は私たちをやわらかく受け止めてくれたのだ。頭まで水につかることにな

ったが、私たちはすぐにそつと水面へと押し上げられた。

だから気がつくと、私はロビンにまたがったまま水面に浮かんでいたのだ。私が首に両腕をまわすと、ロビンは泳ぎ始めた。水の上を行くロビンは、まるで船のようだった。胸で水を押し分け、三角形の波を起こしている。そうやって湖の中央へと近づいていった。波の上に行くことには何の不安も感じなかった。ロビンの様子は自信に満ち、泳ぎ方も上手だったのだ。だが突然、私は奇妙なことに気がついた。理由はわからないが、湖の中央あたりで、なぜかわずかに水面が盛り上がり、まるで生きているかのように絶えず動き、丘のように盛り上がり、まるで生きていくかのように絶えず動き、わらわらと形を変え続けている。何が起こっているのだろうか。私は怖くなった。

ロビンにはあれが見えていないのだろうかという気がした。私は水中に潜む巨大なクラゲのような怪物を連想した。それに飲み込まれ、食べられてしまうのではないかという気がした。だがロビンは泳ぎ続けている。あと少しで彼の胸がそれに触れるというところまで来たとき、やっと私は真相に気がついた。手を伸ばして水に触れ、ひとすくいして口に入れてみたほどだ。冷たくてとてもきれいな水だ。

これは巨大なクラゲでもなんでもない。ただの水の盛り上がりでしかない。この湖底には天然の泉があり、それが噴水のように水を噴き上げているのだ。あれはその形が水面に見えているのにすぎない。ほつとして、私は思わずロビンの首に抱きついた。泉にさしかると、ロビンの身体がゆっくりと揺れ始めた。私はそつと水中をのぞき込んだ。ゆらゆらして見にくいだが、他の部分よりも暗いようだ。たぶん水深が深いのだろう。

だが私たちは押し流され、ゆっくりと後戻りをして、泉の上を外れていった。水の丘のふもとまで押しやられ、湖底がまた明るく見えるようになった。白っぽい砂地だ。私は湖底の様子を想像してみた。皿のようにほぼ平らだが、泉の部分だけが井戸のようにすとんと深くなっているのだろう。私は考えをめぐらせた。ロビンは泳ぐのをやめ、それでも脚をゆっくりと動かしながら、泉から離れすぎてしまわないようにしている。

「OK」私はロビンの背中をぽんとたたいた。靴と靴下を脱ぎ、角に引つ掛けた。服を脱いでこれも引つ掛けると、ロビンはありがたくなさそうな顔で振り返ったが、何も言わなかった。下着だけになって、私は水に飛び込んだ。

水は岸边のあたりよりもさらに冷たかった。息を大きく吸い込み、私は泉に向かって潜っていったが、湧き上がる水が肌をなでいくのがくすぐったかった。思っていたとおり砂地の中央には井戸のように暗い穴があり、水はそこから噴き出しているのだった。ちらりと見上げると、足の生えた飛行船のように浮かんでいるロビンの姿が目に入った。再び下を向き、私は泳ぎ続けた。

泉はほぼ円形をしているとあっていい。黒っぽいごつごつした岩でできているが、人が十分に入っていける大きさがある。私はゆっくりと沈んでいった。とたんにまわりが暗くなる。私の姿に驚いて魚が数匹、さっと走って逃げた。小さな力二が岩陰に隠れるのも見えた。

井戸の底も砂地になっていた。水が湧き出す口までは見えないが、この砂の下にあるのだろう。沸騰した湯の中に入れたパスタのように、砂はゆっくりと踊っている。指先を入れ、私は砂の中を探り始めた。すぐに見つかった。冷たくつるりとしたガラスの手触りだ。

何度か指が滑ったが、つかみ上げることができた。すでに息はつきかけていた。拾い上げたものを胸に抱き、私は身体をひるがえらせた。水面へ向かって、トビウオのように泳ぎ始めたのだ。水面に顔を出したのは少し離れた場所だったが、ロビンがすぐに気づき、こちらへ向けて泳ぎ始めるのが見えた。

ガラスびんは私の手の中にしっかりと握られていた。上下に細長い、首の部分が特に長く、白鳥の首のようによくいと曲げてあるから、指を引つ掛けて持つことができた。ロビンはゆっくりと近づいてくる。我慢しきれず、私も泳ぎ始めた。差し出すと、ビンは口ビンが口にくわえて持つてくれた。毛をつかみ、私は背中にはい上がった。ハアハア息をついたが、もうロビンは泳ぎ始めていた。手を伸ばして、私はビンを受け取った。しっかりとした頑丈なものだ。内部では何かガラガラいつている。目をこらして見透かそうとしたが、何も見えなかった。何年も砂にこすられ続けたせいで細かい傷が無数につき、まるですりガラスのようになってしまっているのだ。

ロビンの身体が突然揺れたので、私は顔を上げた。だがもう岸辺につき、砂浜をざぶざぶと上陸しようとしているところだとわかった。大きな足跡をいくつも残し、ぼたぼたと水をたらしながら、ロビンは立ち止まった。ビンを持ったまま、私はぴょんと飛び降りた。見回すと、ずっと向こうにあの岩が見えていた。ちょうど真向かいだから、私たちは湖をまっすぐに横断してきたことになる。

手を伸ばし、靴や服を角から取ってやろうとした。やれやれという顔で、ロビンは頭を下げてきた。ビンはもう完全に乾いて、石膏のように真っ白になっている。ロビンがごろりと横になった。私もそばに座り、毛をなでてやった。ビンは砂の上に置いて、横目で眺めていた。ここには誰もおらず、音を立てるものもなく、とても静

かだった。水の上をゆっくりと流れる風がさざなみを起こしている。

私は服を着始めた。ロビンも身体を起こし、私を見つめていた。私はきよろきよろして、適当な石ころを探した。すぐに見つかった。ジャガイモのようにいびつな形をしているが、私の指でもしっかりとつかむことができる大きさだ。何度か握りなおし、使いやすさを確かめた。

ビンをしつかりと押さえ、首の部分を強くたたいた。二、三回たたくとヒビが入り、何回目かでパリンと割れ、首の部分が胴体からきれいに外れた。ビンを拾い上げ、私は逆さまにして振った。何か小さな物がスカートの上にコロんと転がり落ちた。太陽の光を反射して、明るく輝いて見えた。

完全な球形をしている。ガラスのように透き通っているが、水晶を削りだして作ったものなのだろう。すっきりしたとてもきれいなものだが、中心近くに傷か曇りのようなものがあることに気がついて、ため息がでた。これさえなければシャボン玉のように完全なのだが。ハンカチを取り出していねいに包み、私はポケットに入れたことにした。この石には一ヶ所、ドリルですみに小さな穴が開けてあった。修道院に帰ったらヒモを通して、ペンダントのように首にかけておこうと思った。

だが修道院へは、どうやって帰ればいいのかだろう。今ごろ伯母はカンカンだろう。しかし考えていても仕方がない。私をまたがせるとロビンは歩き始め、森の中を駆けていった。いくらもたたないうちに修道院が見える場所まで帰ってきていた。私はロビンの背から降りた。地面に足が触れるとき、ポケットの中である石が小さく飛び跳ねるのを感じた。ポケットの上からそっと押さえて、石がちやんとそこにあることを確かめた。

「お行き」私はロビンをぼんとたたいた。ロビンは身体の向きを変え、森の中へ消えていった。私は後ろ姿を見送ったが、それがロビンを見る最後となった。修道院が近づくと、門のわきに伯母が立って、こちらを見ていることに気がついた。

「まったくなんて子だろう」私のあごをつかみ、伯母はぐいと上を向かせた。伯母が怖くて、私はされるままになるしかなかった。抑えた低い声だったが、伯母は強い調子で続けた。「あのトナカイはどこへ行ったの？ 言いなさい」

「森へ帰ったわ。ハンターたちに知らせるの？」

意外なことに、伯母は首を横に振った。「ハンターたちにはもう帰ってもらいます。何の役にも立たなかったわ」

「どうして？」

「ふん、ポケットのこのふくらみはなんなの？」伯母は指さした。「それはステラが持っていた石だわ」

私は、伯母が母の名を口にすることを始めて聞いた。「お母さんの？」

「とにかく中へお入り。話はまた落ち着いてからにしよう」くるりと背中を向けて、伯母はすたすたとどこかへ歩いて行ってしまった。

自分の部屋に戻り、机の引き出しを開けて、私はヒモを取り出した。石の穴に通して、首にぶら下げた。伯母が私の部屋へ現れたのは、夕食後のことだった。ベッドに腰かけてぼんやりしているとノ

ツクが聞こえてドアが開き、顔を見せたのだ。びっくりしている私を見下ろしてニヤリと笑い、「入るよ」と言った。拒むことはできなかった。伯母は当たり前のような顔をして入ってきて、自分でドアを閉めた。

「そのいまいましたい石」伯母は私の髪をかき分け、首筋を探った。ヒモを見つけ出し、引っ張り上げようとした。石は引っ張られ、胸をくすぐりながら上へと滑っていき、えりのわきからコロンと転がり出た。守ろうとして私はとっさに手にとったが、必要のない行為だった。伯母にははじめから手を触れる気もないようだった。

「お母さんは、これをどこで手に入れたの？」

「どこか裏通りの古道具屋で偶然見つけて、安く手に入れたと言っていたわ。あんたと同じように、そうやっていつも首にかけているようになった。けどどしばらしくして、奇妙なことを口走るようになった」

「どんなこと？」

「何かに取り付かれたかのようなキンキン声で、『私は王子様のもとへ帰らねばならぬ。王子様は私を恋しがって、きつと泣いていらっしやる』というようなことだったね。見たことがないほど必死な口ぶりでき。何のことやら、誰にもサツパリ意味がわからなかった」

「それからどうなったの？」

「それが日に日にひどくなるものだから、私たちはその石を取り上げることに決めた。だがステラは嫌がって錯乱し、泣きわめいた。だから取り上げることはあきらめ、とにかく静養させようというこ

とになった。そのためにアイスがあそこに小屋を建ててくれた。あんたがまだ赤ん坊だったころだよ」

「お母さんはどうして死んだの？」

「ここへ来て一年と少したったある朝のことだった。小屋の中でみずから命を絶っているのを私が見つけた」

「それで？」

「それでも何も墓地に葬っておしまいさ。どこへ行ったのかロビンも姿を消していたし、石も見つからなかったしね。私たちは安心していたんだ。その石さえ出てこなければ、あんたの身にも危険は及ばないだろうとね。それをアイスが余計なことをしてさ。とにかくその石はお渡し」

伯母は手を伸ばしてきた。「いやよ」私は立ち上がって逃げようとした。

伯母の腕は長く、動きも早かった。私の肩を強くつかんだ。だが私は何とか振り切り、ベッドに駆け上がることができた。伯母はひどく怒った顔をし、再び腕を伸ばしてきたが、私はうまく逃れた。ベッドが邪魔になって、伯母は大きく迂回しなくてはならなかった。そのとき、ドアをノックする音が突然聞こえてきたのだ。伯母と私は同時に動きを止めた。二人とも立ち止まってしまった。それくらい強く、せわしない感じのノックだったのだ。「どうしたの？」伯母が言った。

ドアの向こうからハンナの声が聞こえてきた。「電報が来ています。ケイトあてです」

この時代には、電報というのはひどく不吉なものだった。あのときは戦時ではなかったが、戦時であれば、家族の元へ届けられる電報といえど二通りの意味しかなかった。戦場へおもむいている夫や息子が死んだか、重傷を負ったという知らせだ。だが戦時でなくても、よいニュースを運ぶために電報が使われることはほとんどなかった。飛びつくようにして、伯母はドアを開けた。ハンナが駆け込んできて、伯母に封筒を手渡した。伯母はすぐに差出人を確かめた。「ロックランド鉱山からだわ」

父が働いている鉱山だった。父は鉱山技師だった。封筒を開かなくても、もう内容はわかっていていた。

「あけますよ」伯母が私を見つめたが、返事をしたかどうかも覚えていない。ゆっくりとベッドから降りた。ハンナが駆け寄って、肩を抱いてくれた。この日、私は孤児になった。

6

翌日の夕暮れ、私はスリムタウンを出発する船の甲板にいた。見上げるとブリッジがあり、首都での船の乗り継ぎ方法について、伯母が船長と相談している姿が目に入った。手すりに寄りかかり、私は水の中をのぞき込んだ。船は棧橋を離れたばかりで、川の中央へ乗り出していったところだった。

「ああ、ありがとうよ」アイスの声が聞こえたので振り向くと、船員の一人が気をきかせて、折りたたみ式のイスを持ってきてくれたところだった。アイスはゆっくりと腰かけ、私は再び水に視線を戻した。船のへさきに押し分けられて、波立つ様子を眺め続けた。

「ケイト、何を考えているんだい？」

私はアイスを振り返った。再びちらりと目を上げると、伯母がまだブリッジにいるのが見えた。船長は分厚い冊子のようなものを広げ、外国航路の時刻を調べている様子だった。「お父さんのことを考えていたのかい？」またアイスが言った。

「ううん」私は首を横に振った。本当に私は、父のことなど考えてはいなかった。私はあの石のことを考えていたのだ。電報が来た直後から、修道院の中は大騒ぎになった。修道女たちは、私のために急いで荷造りをしてくれた。ハンナが買って出て、アイスの家へ知らせに行ってくれた。伯母も自分の荷物をまとめ始めた。石のことはとりあえず後回しにする気になったらしい。一夜明けて、アイスの馬車が私たちを迎えにやってきた。そしてスリムタウンへ向かい、船に乗り込んだところだった。棧橋にはアリシアも見送りにきてくれていた。

「その石のことかい？」アイスが言った。

「ええ」

「心配おしでないよ。私が見ている限り、伯母さんも取り上げることはできないだろう」

「そのあとはどうなるの？ お父さんのお葬式がすんでしまったら」

アイスは小さく声を立てて笑った。「昨夜のうちに電報を打っておいた。夜中にたたき起こしたから、アリシアの父親は不満そうな顔をしていたがね。十通近く打ったら、すぐにほくほく顔に変わったが」

「どこへ打つたの?」

「弁護士とかいろいろさ。まあいいや、いま話しておいてあげるよ。幸い伯母さんはブリッジで忙しそうにしているからね」

「何を話すの?」

アイスは、驚くほどあっさりと言った。「ケイト、ここが決心のしどころだよ。あんたは私の子供になる気はないかい?」

「えっ?」

「その石を持っていたいのなら、私の養子になるしかないという」とき。私は弁護士に言って、その準備を始めさせたのさ」

「私を引き取ってくれるの?」

アイスは顔を上げ、いたずらっ子のように笑った。「お嫌かい?」

私は首を横に振った。「わからないわ」

「修道院へ戻れば、間違いなくその石は取り上げられてしまうだろうね」

洋服の上から、私はそつと石を押さえた。アイスは調子を変え、うれしそうな声を出した。「さあて、伯母さんのご登場だよ」

振り向くと、甲板の上を歩いてくる姿が目に入った。スリムタウンの町は背後に遠く小さくなり、川は幅が広くなり、船はさらにス

ピードを上げ始めている。伯母はすたすたと近寄ってきて、私に話しかけた。「船の乗り継ぎはうまくいきそうですね。明後日の夜には鉾山へ着けるでしょう」

父が苦しまずに死んだのは幸いだった。大規模な落盤事故だったのだ。葬儀のあと父は、ビートル家が代々使っている墓所に葬られる。母も同じ場所にいる。

「それはよかったねえ」

アイスが口を開いたので、伯母は驚いたような顔で見つめた。「ええ」

「それはそうとき」またアイスが言った。「ケイトはあなたに何か言うことがあるみたいだよ」

「なんなのですか？」伯母は不思議そうな顔をした。「何のお話ですか？」

「伯母さん」思ったよりもしつかりした声を私は出すことができた。「私はもう修道院へは戻らないわ。アイス家の養子になるの」

「なんですか？」「伯母は、信じられないというふうに首を振った。「どういふことなの？」

伯母は腕を伸ばし、私の肩をつかもうとした。だが私は触らせなかった。アイスがうれしそうに笑った。「まあ、そういうことなのさ」

伯母は私をにらみつけた。「どういふことなのか、ちゃんと説明

しなさい」

「どうもこうもないわ」私は大きな声を出した。「私の人生だもの、私が決めるわ」

伯母は青くなり、すぐに真っ赤になった。「それが実の伯母に向かって言う言葉なの？」と大きな声で言い、さっと私たちに背中を向けた。昼間の余韻でまだむしむししているはずの船内へ、ぷりぷりした様子で伯母が入っていくのを、アイスと私は見送ることになった。

水の上を吹いてくる風は、冷たくて気持ちがよかった。このまま何もせずじっとしていたい気持ちがあった。上を向いて、煙突から吐き出される煙を私は眺めた。アイスもイスに座ったまま水面を眺めていた。身体力を抜き、私は手すりに寄りかかった。波をけたてながら、船は首都を目指して走り続けた。船の揺れに身を任せていても、胸にあの石がぶら下がっていることを私は強く感じないではいられなかった。

アイスと一緒に首都で暮らすようになって、何年かがすぎた。私はここで学校に通い始めたが、いつの間にか三年生になっていた。もうすぐ十六歳になる。

石はずっと、戸棚の引き出しにしまっておいた。体力が衰えたのか、アイスはほとんど一日中、屋敷の中に閉じこもってすごすようになっていた。学校から帰り、一日を終えてアイスと一緒に夕食を食べ、その後私は自分の部屋へ引き上げる。ベッドに入るまでの時間を静かに過ごすためだが、私はこの時間が一日のうちで最も好きだった。イスに腰かけてあの石を取り出し、その中をのぞき込むのだ。毎日毎日、もう何百回もそうしているのだが、そのたびに胸が高鳴るのを感じる。今日はどんなものを見ることができのだろうか。

のぞき込んでも最初は、ぼんやりとした半透明の傷が幾重にも重なっているのが見えているだけだ。だが私の瞳はそのうちに、そのどれか一つに焦点をあわせることに決めるのだ。すると他の傷はいっせいにあいまいになり、見えているのかわからないのかもわからないくらいにぼやけてしまう。そのぼやけた中に、私はある形を見つげることができるとだ。

私が石を手取るのは、いつも月が昇ってからだ。月が地平線の向こうに顔を見せるといそいそと手にし、イスに座るのだ。月とは、どこかの誰かが作った巨大な望遠鏡なのではないかという気がする。ことがある。あのクレーターのどこかに巨大なレンズが隠されているのだ。そして、この石がそれに接続されている。

どういう仕掛けなのか知らないが、石をのぞきこむと、私は地球の姿を眺めることができるのだ。まるで人工衛星に乗っているかのように、地球をとんでもない高度から見下ろしている映像だ。私は地表のどこにでも焦点を合わせることができる。かなりの大きさにまで拡大して眺めることもできる。そこまで拡大せずとも、海の中央に行く船や、砂漠を横切る長い貨物列車、中国の万里の長城などは簡単に見分けることができる。万里の長城はへびのようになくねと曲がりながら伸びているが、月の光を受けてとても美しく輝く瞬間がある。

対象に向かってどのくらいまで近寄ることができるのか、一度実験を試してみたことがある。地図で見慣れている海岸線を見つけ出し、自分の国の首都をめがけて私は近寄っていった。どんなに暗い夜でも街灯や建物の光があふれているから、簡単に見つけ出すことができた。海に向かって突き出している突堤の形にも見覚えがある。私は、自分の屋敷があるあたりをめがけて接近を続けた。

屋敷はすぐに見つけることができた。門のわきにあるイチジクの木に花が咲いているところも、昼間見ている光景とまったく同じだった。庭のすみでメイドが、野良猫にこっそりエサをやっている姿も見える。私は二階へ目を移し、自分の部屋の窓を探した。そして薄いレースのカーテンを引いた窓越しに、イスに座って石の中をのぞきこんでいる自分の姿を見ることができた。

こうやって夜の世界を散歩しながら、大洋の中央を漂流している小さなボートの姿に気がついたことがある。雲のない晴れた夜で、もしかしたら最後の一本だったのかもしれないが、ひげもじゃで疲れ切った顔の男が火をつけた煙草の光に気がついたのだ。なぜこんな海の真ん中にも思ったので、私は近づいていった。

制服から見て海軍の水兵で、どうやら難破した船から脱出してきたようだった。本当に小さなボートで、人の姿はその男一人しかなかった。月の光を受けて、ボートを取り巻いている海面はきらきらと美しく輝いているが、男の顔は疲れきっていた。きっともう日も漂流を続けているのだろう。

少し距離をとり、私はまわりの海を探した。だが船の姿はまったくなかった。さらに距離をとってもっと広い範囲を探したが、やはり一隻も見えなかった。何十キロか向こうに貨物船がいることはいたが、走っている方向がまったく逆だ。この船があつた男を見つけたことはありえない。私はあせりを感じ始めた。どうすればよいだろう。何分間も迷っていたが私は心を決め、着替えて一階へ降りていった。幸運なことに一週間ほど前、私の家からいくらかも離れていない通りの角に新しく公衆電話が設置されていたのだ。私はそこへ行き、受話器を上げてコインを入れ、交換手を呼び出した。海軍の警備室につないでもらった。

話を聞いても、海軍の担当者はまったくピンとこない様子だったが私は、できるだけいいに状況を説明した。首都から何百キロも離れた海上を水兵らしい男が漂流していること。航路からは離れているから、発見される可能性は今のままではとても低いこと。担当者はいかにも疑わしそくに聞いていたが、ボートに書かれていた船名を告げると、突然態度が変わった。名前をきかれる前に、私は受話器を置いた。誰にも見られることなく屋敷に帰ることができた。小さなボートで漂流していた水兵が一人、海軍の艦船に救助されたという記事が数日後の新聞に載ったので、私はほっとした。ただ、匿名の通報者があつたなどはまったく書かれていなかったから、私の通報がどれだけ役に立ったのかはわからない。

ロビンは二年前に死んでいた。死体がどこにあるのかも私は知っていた。石を使って、修道院近くの森の中を散歩して見て見つけたのだ。死期を悟っていたのか、ロビンは湖のそばのあの岩の上を死に場所を選んでいった。身体は骨と毛皮だけになっていたが、角はあのころと同じように巨大だった。湖に反射する月の光を受けて、今でも燃えるように輝くことがある。

この石を通して、私は様々なものを見てきた。月光を受けて鏡のように輝く南極の氷原や、そこで遊ぶ動物たち。真夜中に海峡を越えていく何億匹もの蝶たち。この世界には、人間の知らない光景が一体いくつあることか。だがこの石を通して見ることができるのは、楽しいことばかりではない。つい先日のことだが、先の世界大戦で大きな役割を演じ、敗戦国となって軍備を禁じられたある国が、鼻の下にひげを生やした男のもとで団結し、ひそかに再軍備に取り掛かっていくことに私は気づいてしまったのだ。彼らは『トラクター』という暗号名で呼んでいるが、国境へ向かう貨物列車に積まれているのは明らかに戦車だった。係員がドアをわずかに開けた瞬間に私は見てしまったのだ。国際社会がこの事実気づくのは、まだまだ先のことだろう。だがそのときには、あの国は戦争を始める準備を終えてしまっているに違いない。

でも私には、どうすることもできない。今回は、ボートで漂流している水兵とは話が違う。誰も私の話などまともに取り合ってはくれないだろう。

アイスが死んだのは二日前のことだ。葬儀は今日終わったばかりだ。正式の手続きはまだすんでいないが、弁護士の話では、残された財産はすべて私のものとなるそうだ。「これは、誰もが夢見る信じがたいほどの幸運ですよ」と弁護士は言ったので私はうなずき、同意を示したが、本気ではなかった。もちろん、アイスにもっと長

生きをしてほしかったというのではない。私はそんなことは思ってもいなかった。それはアイヌも百も承知だったろう。同じ屋敷の中においても、私たちはお互いほとんど干渉せずに暮らしてきたのだ。

葬儀を終えて夕方になり、夕食は一人ですませた。親戚や知人たちも、もうみんな帰ってしまった。ここ数日のばたばたでメイドたちも疲れきっているようだったから、今夜は早くベッドに入るようにと私は言った。そうやって一人になり、私も部屋へ引き上げたのだが、今夜は石の中をのぞきこんだものかどうか、ふと考え始めたのだ。私自身もひどく疲れているのではないかという気がした。ついさっきまでは屋敷の中に伯母までいたのだ。伯母は相変わらずで、力にあふれて押し付けがましく、ひどく疲れる相手だった。私は何回、庭師に命じて屋敷の外に放り出させようと思ったかもしれない。だがその伯母も、今ごろはスリムタウンへ向かう船の上だろう。

引き出しから取り出して、もう首にかけていたのだが、今夜は石の中をのぞき込まないことに決めた。暖かい夜だったので窓を開け、しばらく夜風にあたることにした。どこか身体がほてるような感じがして、ベッドに入ってもすぐには寝付けないような気がしたのだ。訪問者が姿を見せたのは、そのときのことだった。

最初は不意の突風が吹き込んできたのだと思った。窓枠が突然ガタガタと鳴り始め、カーテンは見たことのないほど強くはためいた。そのまま引きちぎられてしまうのではないかと思えたほどだ。ベッドのすそを飾るレースが揺れ、机の上に置かれていた手紙類がいくつも飛ばされ、そのまま床に落ちて散らばった。拾い上げようと駆け出しかけたが、すぐに私は立ち止まることになった。部屋の中に私は一人ではなかったのだ。背の高い人影がそこにおいて、薄暗くてわかりにくいのが、私に背中を向けていたのが、ゆっくりとこちらを振り返りつつあるようだった。

私が息をのんだのは、その人物の背の高さだった。アイスの屋敷だったのだから、この部屋も安っぽいものではなかった。床は分厚く頑丈で、毛足の長いじゅうたんが敷かれ、天井も高かった。だがその人物の頭の先が、その天井に簡単に届いてしまっていたのだ。長いコートかマントのようなもので全身を包んでいるので服装はわからないが、頭の上にカブトを乗せていることにはすぐに気がついた。そのカブトには二本のとがった角があり、まっすぐに上を向いているのだが、その先端が天井に接触しているのだ。だからガリガリという耳障りな音が聞こえてくるのだが、その人物がカブトを脱いでも、やはりこの天井では低すぎるに違いないと思えた。その人物は首を曲げ、カブトをそれ以上接触させないように努力しながら振り返り、私を見下ろした。

もちろん私は、これが普通の人間ではないと気がついていた。普通の人間に、風になって窓から飛び込んでくるというような芸当ができるわけがない。何か超自然の存在なのだろう。それが私の前に立ち、口を開こうとしていた。

「ふう」ため息としか聞こえない息をつき、面倒くさそうにもう一度首を曲げ、天井をさけたようだった。それが『彼女』と形容するほうがふさわしい存在であるということに、やっと私は気づくことができた。カブトの下に見えている顔は、どう見ても美しいとは言いがたいものだったが、それでもどこか女らしかったのだ。深い森の中へ分け入って、樹齡が何百年もありそうな木を切り出してきて、そのこぶだらけのゴツゴツした樹皮を使って女の顔を作ればきつとこう見えるだろうという顔だ。こげ茶色をして、輪郭もわからないほどデコボコしている。それでも目鼻と思えるものがあり、瞳だけはガラスのように透き通っていて、淡い水色で私を見つめている。

「あなたはだれ？」私の声は、ひどくかすれていただろう。

意外にも甲高いきんきんした声で、彼女は答えてくれた。「それはおまえには関係なかるう？」彼女の表情は穏やかだった。顔の表面にしわのようなものが走るのが見え、どうやらそれは微笑と解釈すべきものようだった。

ずりずりと再び音が聞こえ、天井板のカケラが少し落ちてきた。油断をして、彼女は再び頭を動かしてしまったようだった。「ふう」彼女がまたため息をつくのが聞こえた。「あんたの天井を傷だらけにしてしまう前に話をすませて、おいとまするとしようかね。あたしはその石のことで来たのさ」ボートのオールのように長い腕を伸ばし、針金のようにとがった細い指で、彼女は私の胸にある石を指さした。

「この石？」私は、手のひらで石をそっと包んだ。

「そつさ。それが返してもらいたくて来たのさ」

「どうして？」

「それは、あたしの息子の持ち物だからさ。ずっと大事にしていたのだが、そそつかしい子で、どこかでなくしてしまった。それ以来毎日泣くものだから、ずっと探していたのさ。やっと見つけることができた」

「なぜ？」

「なぜ？」彼女は、そんなバカな質問は耳にしたこともないというような顔をした。「それは、あたしが作ってやったおもちゃだから

た」

「これは望遠鏡だわ。月の上から地上を見ることが出来るもの」

「なんと」彼女は息を吐き出し、口を大きく開いた。きれいに並んだ真っ白な歯が見える。ひどく驚いている様子だったが、その驚きを隠そうともしないところがなんとなく好ましかった。

「そつでしよう?」首に下げたまま、私は彼女に向けて石を差し出すようにした。

「こりゃあたまげた。そこまで知られているとはね」

彼女は口がきけないほど驚いている様子だったので、私のほうから少し質問をすることにした。「だけど何年もたって、なぜ今ごろ取りに来たの?」

「ふん」彼女は鼻を鳴らした。「どこにあるのか知らなかったからさ。つい最近まで手がかりもなかった」

「ロビンはあんたの家来だったの?」

「あのトナカイかい? 違うね。スリムタウンでの出来事は、みんなその石がしでかしたことだろうよ」

「どつして?」

「石は石なりに意思を持って、元の持ち主のもとへ帰ろうとしたのだろうね。湖の底に沈んでるんじゃないか、どうしようもないからね。トナカイを操るぐらいのことなら、その石にだってできるさ。なん

たつて、あたしが作った石だからね」

「それで？」

「それでも何も、石は次に野良猫を操り、自分はここにいると私のところへ伝えてきたのさ。三年前のことだよ」

「それを、なぜ今ごろ？」

彼女は鼻の頭にしわを寄せ、いかにも気に食わないという顔をした。「あたしは、年を取った女の匂いが大嫌いなさ。カビだらけになった古本のような匂いだからね。だからアイスが墓の下に入るまで待たなくちゃならなかった」

「あんたも、それほどお若いようには見えないけど？」

「ふん」彼女は笑った。「口の減らない小娘だねえ。あたしは、その石を力ずくで取り返すこともできるのだよ」

自分でも意外だったが、私にはっこりと見つめ返すことができた。「そんなことをしたら、あんたのプライドに傷がつくんじゃないの？」

「ええい」本当に腹立たしそうに、彼女は鼻から息を吐き出した。「いちいち気に触る娘だね。何が望みなんだい？ 早くお言い」

私はしばらくの間考えた。心を決め、深呼吸をしてから口を開いた。「戦争が起こるのを防いで欲しいの」

「戦争？」

彼女は、この部屋にやってきてから意外そうな顔を何度もしていたが、その中でも最大級といえそうな顔をした。自分はそんなに馬鹿げたことを口にしたのだろうかという気がしたが、とりあえず私は続けた。「戦争が始まって、人がたくさん死ぬのは嫌だわ」

「おまえは、一体全体なんの話をしてるんだね。どうしてただの小娘が、人類の行く末など心配してやる？ おまえは神の代理人か？」

「あんたは神様とは知り合いなの？」

「は！」彼女があんまり大きく鼻を鳴らしたので、その息で私の前髪がなびくのが感じられるほどだった。「あんなやつのは口にしたくもないね。それで、誰の何の戦争のことを言ってるのさ？」

私は説明した。再軍備が禁じられているにもかかわらず、ひそかに戦車を大量生産し、各地に配備し続けているあの男のことだ。鼻の下にひげを生やした独裁者。思い当たることがあるらしく、彼女は首を縦に振った。「ははあ、あいつのことが。なかなか見所のあるやつだとあたしは思うがね」

「戦争は嫌だわ」

「どうして？」彼女は不思議でならないという顔をした。かがんで顔を近づけて私の表情をのぞき込んだ。やがてつぶやく声が耳に入った。「ふうむ。どうやら本気で言っておるようだな。わけがわからんが」

「どうしてわけがわからないの？」

うんざりしたという顔で、彼女はため息をついた。「面倒くさいねえ。人間が何万人死のうが、それがどうだというのかねえ。前世紀のなかばには二千万人。今世紀にいたっては、まだ三分の一もすぎではおらぬのにすでに九百万人も殺しているではないか。もう一回ぐらい戦争が起こっても、歴史の教科書がほんの一ページか二ページ分厚くなるというだけのことさ。それに地球は広い。墓石を並べる場所は、まだまだいくらでもあろうが？ 足りなければ、大西洋でもどこでも埋めたてるがよい。そのうちロンドンからニューヨークまで、墓石づたいに歩いていけるようになるかもしれない」

「なんの話をしてるの？」

「簡単なことだ」彼女の鼻息は再び荒くなった。「おまえたちがいくつ戦争を起こし、何人殺して、どれだけ墓場を増やそうが、あたしは知らんということさ。好きにおし！」

「じゃあ、この石は返さないわ」

「おまえはあたしを脅迫しようというのか？ なんてガキだ。それにだな」彼女は目をむいて、顔をうんと近づけて私をにらみつけた。息が直接かかったが、不思議なことにバラの匂いがした。「言つとくが、人間たちがおっぱじめようとする戦争は、これが最後ではないのだよ。うる覚えだが、大きいのはあと七回、小さいのは三十二回予定されているはず」

「なぜ知ってるの？」

「そりゃああんた、予定表を見たからさ。七回目がすんだときにおまえたちは絶滅する予定だから、そのあと静かで美しい完全な世界がついに訪れるというわけさ」彼女はいかにも楽しそうに、うつと

りとした表情で天井を見上げた。

私は、不意に両目から涙があふれ出してくるのを感じた。どうやっても止めることができず、まばたきをするたびに、もつとあふれ出してきた。「それでも何でも、この一回は止めて欲しいわ」

「あとの六回はどうするね？」意地悪そうな顔で笑いながら、彼女は私を見つめ返した。

「わからないわ」私の目から、もう一度涙があふれ出てきた。それを見て、少しは気の毒に思ってくれたのかもしれない。彼女の表情が変わった。

「小娘に過ぎないおまえが、なぜそんな心配をしてやる義理がある？ 人間たちが、おまえに何をしてくれた？ 言つとくが、この戦争でおまえは死ぬところか、ケガをすることだってないのだよ。財産を失うこともない。この国は戦いの最前線にはならないからね。それにその次に大きいのが勃発するのは、おまえが天寿を全うした後のことなのだよ」

「それでも、やっぱり止めて欲しいわ」ハンカチを取り出しながら、私は強い調子で言った。

「鼻水だらけの顔でそういわれても、あまり迫力はないねえ」

「この石が欲しいの？ 欲しくないの？」ハンカチをしまい、石を彼女の前に突き出し、私は大きな声を出した。「これは取引よ」

「は！」彼女はあきれたような顔をした。「おまえはこのあたしに指図しようというのかい？」

机の上にあつた花びんを私は手に取つた。昼間のうちにメイドが庭から切つてきてくれた花が飾つてある。石を机に置き、花びんをその上にかざしたのだ。大理石でできた大きく重たい花びんだ。力を込めて振り下ろせば、石は粉々になるだろう。

「待て」彼女はあわてて言った。「若いくせに気の早いやつだな。このあたしを脅迫するとはな。あのひげの独裁者のほうが、よっぽどかわいげがあるわい」

それでも私は花びんを石の上にかざしたままでいた。「さあ、そろそろ手が疲れてきたわよ」

「ええい」いかにもいらついた表情で、彼女は首を左右に振つた。
「あたしにどうしろというのだね？ ああ、戦争を止めるか？ あほらしゅうもない。わかつた、今回だけはおまえの言うことをきいてやる」

「いい子ね」私は花びんをゆつくりと机の上に戻した。

「ではその石をお寄越し」

「だめよ」私は手の中に隠した。

「どうしろと？」

「あんたが本当に戦争を止めてくれるのかどうか、ちゃんと確かめてからよ。明日の夜、同じ時間にごこから見ているわ。この石を通しても見えるように、わかりやすくやってくれたらうれしいわ」

彼女はもう一度私をにらみつけ、最大級の気に入らない表情を作ったが、それでも何も言わず、また風に乗って窓の外に姿を消してしまった。ほっと息をつき、私は石を胸にかけた。明日までの二十四時間、肌身離さずにいることにした。

翌日の同じ時間になって、彼女と約束したとおり、私はイスに座って待っていた。今夜もよく晴れていて、いかにも準備万端整ったという様子で、月は日暮れ前から顔を見せていた。月が高く上り、もうそろそろだろうと思えて私は石を取り出し、のぞき込んだ。今夜はどこを見ることが出来るのだろうかという期待はもちろんなあつたが、それ以上に、彼女は何をどうするつもりなのだろうと楽しみにする気持ちのほうはずっと大きかった。

瞳がピントを合わせると、すぐにどこかの町の姿が目に入った。大陸のどこかのようなのだが、高い山脈に囲まれた内陸の町だという気がする。かなり大きな町で、中心部には背の高い建物が立ち並び、企業や役所の本部、大きな銀行や高級ホテルなどが集まっている。私はその町を上空から鳥のように見下ろしていたのだが、視野の中心に大きな駅があることに気がついた。ちょうど長い列車がそこに到着しようとしているところで、四角く明るく何十も並んでいる客車の窓が、まるでハシゴのように見える。乗客はほぼ満員で、そのほとんどがこの駅で下車するつもりのもりのようで、棚から荷物やカバンを降ろし、両手で抱えて通路を歩き始める姿が窓越しに見えていた。いかにも遠くから旅してきたという人々だったが、みな裕福そうで、仕立てのよい服を着ているのが目についた。

その中の一人二人には見覚えがあり、誰だか気がついてあつと声を上げかけたのだが、新聞で顔写真を見たことのある各国の政治家たちだった。どうやらあの町では明日あたりから国際的な会議が開かれるようで、そのために集まってきたところなのだろう。新聞記

者たちも同行して、列車が停車し政治家たちが下車していくところを、まぶしくフラッシュをたきながら写真に撮り始めた。

彼女がこんなところで何をするつもりなのか、私にはまったく見当がつかなかった。私は石の中をのぞきこみ続けた。政治家たちはプラットホームの上を歩き始めたが、大人数ではあるし、中年太りしているものも多いし、記者たちもいるしで、なかなか歩みが進まない様子だった。まわりを何十人も警備員が取り囲んでいるが、彼らもいららし始めている様子だった。そこを貨物列車が通りかかったのだ。

もちろん、それはなんということのない姿に見えた。蒸気機関車が煙をはきながら、何十両かの貨車を引いているというだけのことだ。どこでも見慣れた光景だ。だが一瞬、この貨車の内部にも戦車が積まれていたりするのだろうかという気がした。プラットホームに書かれた文字からもうわかっていたのだが、ここはあの独裁者が支配している国の駅だったのだ。そういえば、あの国のある都市で国際会議が開かれる予定であると新聞で読んだような気がした。独裁者が戦争の準備を始めているのではないかと、各国の人々が心配を始めていたのだ。そうではないということを示すために独裁者自身の発案で開かれることになった会議だったのだが、兵器を積んだ貨物列車が、その会議のために集まってきた人々の目の前を通過しているのだとすれば、あの男はかなりの食わせ者だということになる。そして私の想像は正しかった。

貨物列車がプラットホームに差し掛かった瞬間、私の視野を彼女が横切ったのだ。黒く長いマントをまとい、カブトをかぶったあの姿で空を飛んでいた。まるでツバメのような飛び方だったが、プラットホームを歩いている者たちの目には姿が見えていないのだろうと思えた。石をのぞいている私にしか見えない姿なのだろう。プラ

ツトホームの男たちは、すぐ頭の上を彼女が横切っても、平気な顔で歩いたり、おしゃべりを続けている。だから彼女が線路の上に降り立っても、誰も気がつかない様子だった。そこへ貨物列車がやってきたのだ。

彼女が降り立った線路が、貨物列車がやってくる同じ線路だということに私はすぐに気がついた。機関車までの距離はあと百メートルもない。もちろん機関士にも、彼女の姿など見えていないに違いない。

貨物列車が近づいていることを、もちろん彼女は知っているようだった。月を見上げてニヤリと笑い、突然こぶしを振り上げたのだ。そして貨物列車がいざ彼女にぶつかろうとする瞬間、その腕がぶうんと動いて、機関車の鼻面を思い切り殴るのが見えたのだ。

一瞬後には機関車は転覆を始めていた。機関車は横倒しになり、そのままスケートでもするようにレールの上を滑っていったから、機関士も大きなケガは負わなかっただろう。私には聞こえなかったが、巨大な列車が横倒しになる音は相当なものだったらしく、プラットホームにいた人々がひどく驚いた表情をし、そちらに顔を向けた。そういう彼らの目の前を、機関車に引きずられて貨車たちも、そのほとんどが横倒しになりながら、ホコリを立てて滑っていったのだ。

ホコリがおさまったあと、私の目に入ったのは、横倒しになった貨物列車の姿だった。ほとんどの貨車は横腹を引き裂かれ、積荷がむき出しになっていた。それらがすべて戦車や装甲車であるということ、石を通して見ている私の目にもはっきりとわかった。各国から集まった代表者たちの前に、あの独裁者が再軍備を始めているという証拠が、これ以上はないほど突然に、はっきりと示されてし

まったのだ。男たちが口々に叫び始めるのが見え、記者たちがプラツトホームから飛び降り、むき出しの積荷を我先に撮影し始め…

だが駅の大混乱を私が眺めていることができたのは、ここまですた。私は我を忘れてのぞきこんでいたのだが、不意に手が伸びてきて、石を横からひったくってしまったのだ。見上げると、手の中を満足そうに眺めながら、彼女がニヤリと笑いかけるところだった。「いつ来たの？」ひどく驚いて、私はそう言うのが精一杯だった。

「いつだっていいじゃないか」彼女はうれしそうに答えた。「この石は、もうあたしのもものだからね」

いたずらっ子のような顔で私を見やり、彼女は付け足した。「だがお忘れでないよ。大きな戦争はあと六回予定されているのだからね」

「人間にはそれを避けるだけの知恵があると信じるわ」

「ほうほうほう。それはまた分の悪い賭けなこと」

甲高い声を上げて笑いながら、彼女の姿はゆっくりと溶けるように小さくなっていった。シュウツと空気が抜けていくときの風船の様子に似ていなくもない。ついには数センチの白く丸い塊になったが消滅してしまうことはなく、そのまま私から一メートルほど離れた空中にとどまり続けた。まるで白く光る小さなボールが、見えないう系で天井からつり下げられてでもいるような眺めだったが、いくら待ってもそれ以上は何も起こらなかった。白いボールのようなものは、じっと空中にとどまり続けた。

好奇心を抑えることができなくなり、とうとう私は手を伸ばした。

だが指を近づけても何も起こらなかった。白い球は動かず、そのままの場所にいる。ぴくりともしない。ついに指先が触れた。ほんの少し暖かさを感じるが、それ以外は本当に何もなかった。しかしつるつるとした手触りに覚えがあることに気づいて、思わずはっとした。静かな興奮のようなものが身体を走り、私は球を手を取った。

白い光がゆつくりと弱まりはじめていることに気がついた。電池が切れていくときの懐中電灯のような眺めだ。最後には光はまったくなくなり、私はその正体を見ることができた。何年も大切にしてきたあの石が、何の変化もなく、すました平気な顔をして、コロンといったものように手の中に横たわっていたのだ。じつと見つめていたが、なんとなく納得できたような気がして、ヒモを手にして、私は首にかけた。石はブラウスの胸を、肌をくすぐりながら機嫌よく下っていった。

翌日の新聞には、あの脱線事故のことが大きく掲載されていた。事故そのものよりも、再軍備計画が暴露されたというニュースのほうがもちろんよっぽど扱いが大きかった。各国から非難を受け、あの独裁者も辞任を表明せざるをえなくなった。これだけ恥をかかされては、もう政治の世界に帰ってくることはできないだろう。再軍備計画は破棄され、すべてが白紙に戻された。協力していた兵器メーカーが数社、あおりを受けて倒産したが、気の毒だとは思いが、同情する気にはならない。とにかく彼女は、荒っぽいやり方ではあったが、約束を果たしてくれたわけだった。

今でも私は、この石を胸に下げている。二十四時間、肌身離さずそうするようになった。あれ以来、とりあえず見かけの上では、世界は平和を保っているようだ。だがそろそろ、極東あたりがきな臭

くなりかけていると最近の新聞は伝えている。

彼女の息子とはどんな存在なのか、もちろん私は知らない。だがきつと今は彼女と一緒にこの石の中に住んで、願わくば楽しくやっ
てくれているのだろう。きつと石の内側からも、月を通して地球を
眺めることができるのだろう。彼らはこの石の中に住んでいるのだ。
私はその大家のようなものだ。大きな声を上げて泣く幼子に彼女が
手を焼き、必死になってあやそうとしているところなど、想像する
だけで愉快ではないか。どんな母親も、幼いわが子には勝てないと
いうことなのだろう。

私は考え続ける。世界戦争の一つは何とか回避することができた。
だがまだ六回予定されていると彼女は言っていたではないか。次の
世界戦争が勃発しようとするときには、どうすればよいのだろう。
どうやってこの石の中から魔王を呼び出し、仕事をさせたものか。
彼女が言うことが正しいのであれば、そのとき私はすでにこの世に
はいないのだが。

(終)

小屋の主

「人間の言葉を話す動物が九官鳥やオウム以外にも存在すると思うか」ときかれれば、ほとんどの人は「いいえ」と答えるかもしれませんが。でも私は違います。ある経験をしたことがあるのです。そのときのお話をしましょう。

当時私は山の中に一人で住んでいて、地質調査の仕事をしていました。鉄や銅、ニッケルなどを採掘できる鉱脈を探していたのです。私の雇い主はある大企業で、名前を聞けばあなたも聞いたことがあるだろうと思います。住む人もまばらな深い山奥に小さな小屋を建て、私はそこを住まいにしていました。大きな地図を持ち、いろいろと道具類をかついで山の中を歩き回る仕事です。この年の4月の初めから10月の終わりにかけて、半年間とどまって行う調査でした。

ちょうどその真ん中あたり、7月のある夜のことでした。私は物音で目を覚ましたのです。夏といっても山の中は寒いので、窓はすべて閉めてありました。それでも部屋の中に響いてきたのです。私は寝ぼけまなこでした。ガシンとかドカンという衝突音に聞こえたような気はしましたが、自信はありません。もしかしたら夢でも見ているのだろうかと思いました。

体を起こし、耳をすませたのですが、もう何も聞こえませんでした。気のせいだったのだろうと結論を出し、私は再び毛布をかぶることにしました。あつという間に眠り込んでしまい、そんな物音のことなど何日かたって事件が起こるまで心に浮かぶことだっただけありませんでした。

翌日からも、それまでとまったく同じ調査の日々が始まりました。山の中を歩き回って石のサンプルを集め、週に一度食料品や日用品を持ってきてくれる村人に頼んで、小包にして、都会にある研究所へむけて発送してもらっていたのです。

何事も起こらないまま、何日か過ぎました。私はこの暮らしにすっかりなじみ、秋になってこの場所を離れ、都会へ帰らなくてはならないことを残念に思い始めていたほどです。朝早く起き出し、私は川で顔を洗っていました。これから朝食のしたくをし、今日の調査に出発することになります。今朝のメニューは何にしようか、何の缶詰を開けようかと私は心をさまよわせていたのですが、突然気がつきました。いつの間にかやってきたのか、足元に一匹のサルがいるのです。それこそ2メートルもない近くです。背中を丸めて石の上に座り、赤い顔をして私を見上げているではありませんか。

ミルクを入れすぎたコーヒーのような薄茶色の毛をしていましたが、このあたりで珍しい種類のサルではありませんでした。むしろありふれていて、私も日に何度かは普通に見かけていたものです。20から30頭で群れを作り、木に登っていたり、岩がむき出しの斜面を歩きながら、木の実を拾っては口に入れる姿をよく目にしていました。ときどきはぬいぐるみのように小さな子ザルを母ザルが背中に乗せて運んでいることもありました。

そういうサルなのですが、なぜか今は一頭だけ、私の足元にいるのです。私を見上げ、視線を合わせようとしています。もちろん私は見つめ返しました。

サルが口を開こうとしていることに気がつきました。黄色い色をして、人間よりもはるかにとがった歯が顔を出します。でもサルは私を攻撃したり、かみついたりしようとしているわけではありません

でした。おなかをへこませ、しきりに口から息を吐こうとしているのです。こわれたフイゴのようなフューフューというおかしな音が聞こえました。

何をしようとしているのか、私には意味がわかりませんでした。

私は不思議そうな顔をしていたに違いありませんが、不意にわかったのです。「助けてくれ」とサルの口から突然声が聞こえたのです。

あまりのことで、私は口をぽかんと開けていたに違いありません。聞き間違いか気のせいだと耳をこすり、サルの顔をのぞきこんだほどです。同じ姿勢のままもう一度おなかを引っ込め、サルは再び口から息を吐き出そうとしました。

「助けてくれ」

同じ声が聞こえてきたのはいうまでもありません。もちろん正しくはつきりと聞き取ることができたわけではありません。音の一つ一つがあいまいで、イントネーションも奇妙です。でも私の耳にはたしかに聞き取ることができたのです。何日か前に聞いた真夜中の物音の記憶が稲妻のようによみがえってきたのは、この瞬間のことでした。

「そこで待っている」サルに声をかけ、次の瞬間には私は駆け出していました。小屋の中に飛び込み、出かける用意を始めたのです。朝食はまだ食べていませんが、そんなことは言っておれませんでした。小屋から出てきたときにも、サルはまだ同じ場所で待っていました。

山歩きに必要な装備を、私は一通り身につけていました。私の前に立ち、すぐにサルが歩き始めたのはいうまでもありません。小屋

を離れて数百メートルの場所までは道がありました。ある地点を過ぎるとわきへそれ、サルは私を山の中へと導いていきました。獣しか通ることのない道なのでしょう。とても狭く、ササの葉が私の両手をこすっていきます。すでに私は、今まで一度も足を踏み入れたことのないあたりにさしかかっています。

鉾脈の調査とは、ただあてずっぽうに山中を歩き回るではありません。「あのあたりならありそうだ」と事前に見当をつけておくのです。サルが私を連れていこうとしていたのは、地質学的に見て鉾脈などありそうもなく、人が立ち入ることもほとんどない地域なのに違いありませんでした。

それでもサルについていった私のことを、あなたは奇妙に感じるかもしれません。でも私はそうしたので、サルの歩き方は自信に満ち、自分が何をしようとしているか、きちんとわかっている感じでしたから。

こんな場所まで来て、私もクマが怖くなかったわけではありません。うっそうとした見通しの悪い場所です。不意に出くわしたりすれば大変なことになると思います。でもじきに私も、そういう不安は感じないですむようになりました。きつと群れの仲間たちなので、何頭かのサルが私たちの前を歩いていることに気がついたのです。木々や茂みのせいで姿は見えないのですが、キャツキャツとさかんに声を出し、木の枝をわざと揺らしながら歩いているのです。ああしてくれれば、不意にクマと出会うことはないでしょう。音を聞きつけ、クマのほうからよけてくれるに違いありません。

現場につくには2時間ほどかかってしまいました。私が連れていかれたのは岩山と岩山の隙間にある深い谷間で、まるでザク口の実の割れ目のように細長いけれど、垂直な壁が30メートル以上の高

さで切り立っています。サルたちは平気でしたが、ロープを使って、私は一步一步、慎重に降りてゆかなくてはなりませんでした。

飛行機の姿はすぐに見つけることができました。深い草の中にうずもれています。その前に木々をいくつかなぎ倒しているのです。幹の中央で折れてしまったり、根っこごと地面からほじくり返されている姿を見ることができました。そのときにはさぞかし大きな音がしたに違いなく、山中に響いたことでしょう。ひよこひよここと私の前に行くサルがその飛行機に向かって駆け出したときにも、私は驚きなど感じはしませんでした。

知識がないので、どういう型の飛行機なのか私にはよくわかりませんでした。あまり大型ではなく、乗っていたのはせいぜい一人か二人でしょう。だけど軍用機であることは間違いなく、昔の戦争映画で見かけたことがあるような気がしました。しかし戦闘機だかなんだか知りませんが、軍用機なんて、戦争が終わってもう20年もたっているのです。左右にある岩山のおかげで一日にほんの何時間かしか日のささないこの谷底に、そのころから横たわっているのに違いありません。

翼は左右とももぎ取られてしまっているけれど胴体はほぼ無傷で見た瞬間、これほどの墜落を起こしても乗務員は命を失わずにすんだのではないかという気持ちがあるほどでした。そして私が正しこととはすぐにわかりました。サルの姿を見て誰かがかける声が耳に届いたのです。

「よお帰ってきたな。仲間たちはどうした？」

明らかに人がしゃべっている言葉でした。サルがたどたどしくまねしているのではないことはすぐにわかります。

「やおおまえたちも来たか」

同じ声が再び聞こえました。そして気配がし、いくつかの足音や鳴き声が聞こえ、森の中で私を先導してクマを追い払ってくれたサルたちも姿を見せたらしいことがわかったのです。私は歩き続け、飛行機の残骸に近寄ることにしました。そしてその影にいる人の姿が目に入ったのです。サルたちにまわりを囲まれ、いかにも愛情を込めて一匹一匹の頭をなでてやっていますから、さっきの声の主に違いないでしょう。

この人が着ている服はどう表現すればいいのかわかりません。おそらくシユロに似た植物を見つけ、その幹から生えている繊維を編んで作ったものでしょう。ほとんど真っ黒とっていい色をしていますが髪は白く、長く伸びて肩に触れています。そりたくてもカミソリがないのか、ひげも長くぼうぼうに伸び放題です。でも顔や手は白く清潔で、あかじみているということはありませんでした。そういう人物が私の足音に気づき、振り返ったのです。

こういうときには、どうやって自己紹介をしたものなのでしょう。あれから何年もたつのに、私はいまだに答えを出せずにいます。あまり相手を刺激しないほうがいいだろうし、かといって、彼から見れば私は20年ぶりに出会う人間だったはずです。私の声だって、20年ぶりに耳にするものだったでしょう。

このあと起こったことをくどくど説明する必要はないでしょう。彼は空軍のパイロットで、戦争中に敵によって撃墜され、この山間の谷に墜落してしまったのです。それでも何とか死なずにすみましました。ただど大けがをし、つえなしでは歩くことができなくなってしまうのです。

飛行機の残骸が彼の家になりました。谷の中をくまなく探検して、きれいなわき水を見つけることができました。木の実を集め、小動物を捕まえ、たった一人での生活が始まったのです。飛行機は完全に壊れてしまい、無線機もだめになり、救助を求める通信を送ることはできませんでした。もし送ることができても、この谷間です。どこにも届くことはなかったでしょう。そしてここは人が足を踏み入れることもほとんどなく、そのまま20年という時間が過ぎてしまったのです。

彼の友人といえるのはサルたちだけでした。谷へやってきて1年もたないうちに仲良くなり、親しい付き合いが始まったのです。サルたちは、彼に木の実を分け与えてくれるまでになりました。もちろん彼だって人間の世界へ帰りたかったに違いありません。でも彼の足では、30メートルの岩壁を登ることができなかつたのです。

20年の間付き合い続けて、彼はサルについてかなりの知識を持つようになりました。雌ザルは次々に子供を生み、子ザルたちとも彼は仲良くなつていったのです。その中に一匹、特に変わった子ザルがいました。彼に付きまとい、他の子ザルたちとはあまり遊ぼうとせず、母ザルからミルクをもらうとき以外はつねに彼のそばにいたがるようになったのです。そして彼がすることをまねようとします。飛行機の部品から手作りしたカップで水を飲んでいたので自分も同じようにしようとし、木の実を煮込んで作った自家製スープに手を出して指にやけどをし、次は彼が使っている木製のスプーンに興味をしめし、彼が歌を歌い始めると声を出し、調子っぱずれなコーラスをしようとします。

この子ザルになら言葉を教えることができるかもしれないと彼が考えたのも当然のことかもしれません。そして彼は試してみることに

にしました。「5年かかった」と軽く言っていました。それは大変な仕事だったに違いありません。でも彼は投げ出さず、努力を続けたのです。生徒もその期待にこたえました。その成果を私の小屋の前で披露してくれたというわけです。

私のお話はこれでおしまいです。私は一度谷を離れ、町へ出向き、この発見を伝えました。すぐに救助隊が編成され、彼は二日後には救出されていました。体をタンカに乗せ、あの崖はロープを使って引き上げたのです。人間の世界へ帰ることができるということで、もちろん彼はうれしそうでした。でもサルたちとは別れなくてはなりません。そのことがひどくさびしそうだったし、サルたちも同じ気持ちだったことでしょう。特に彼の生徒だった一匹は、彼がタンカに乗せられて森の中へ姿を消してしまうまでじっと見送っていました。あの表情を私はいつまでも忘れることはないでしょう。

でも最後に不思議なことが一つだけ残ります。お気づきですか？私が飛行機の墜落音を聞いたのは、あのサルと出会うほんの何日前のことに過ぎません。でも墜落事故があったのは20年前のことだったのです。計算が合わないではありませんか。

彼が救助された後も山の中に残り、私は仕事を続けました。地質調査がすべて終わるのにはまだ何ヶ月かかかったからです。その間も毎日のように深い山中を歩き続けたのですが、そうしていてもあの真夜中の音の原因を無意識に探し求めていました。その疑問が、つねに私の心のすみを占領していたのです。あの音の正体は一体なんだったのだろう。この山中には何かの魔物が潜んでいて、私の注意を引き、墜落した飛行機を探しにいく気を起こさせるためにわざと聞かせたのでしょうか。あの物音を聞いていなければ、サルの口から言葉を聞いても、私も捜索に出かける気にならなかつたことは間違いないからです。

でも本当にそんなことがあるのでしょうか。人間の見たこともない魔物が森の中に潜んでいたりするものなのでしょうか。

実はそうではなかったのです。私が答えを見つけることができたのは調査期間が終わり、あと一日で小屋を閉じ、明日には山を降りて町へ帰るという日のことでした。荷物をまとめ、研究所へ送るべきものはすべて送り終え、私はとてもすっきりした気持ちでいました。あの物音の原因についてはまだ疑問に思っていました。それまで手がかり一つなかったのです。

でも私はとうとう発見することになりました。半年間そのふところの中で暮らした私への、山の神様からせんべつがわりの贈り物だったのかもしれない。ベッドに腰かけ、すっかりガランとしてしまった部屋の中を私は見回していました。そのときもう一度あの音が聞こえてきたのです。今度は昼間ですが、前回と同じ音に違いありませんでした。強い力の衝突を感じさせるガタンという音です。

私はキョロキョロしましたが、音がこの真下、どうやら床下から聞こえているらしいことに気がつきました。前は眠っていたので聞こえてくる方向にまで気がまわらなかったでしょう。すぐに立ち上がり、私が床板をはがしにかかったのはいうまでもありません。簡単なつくりの小屋ですから、作業に時間はかかりませんでした。

私が何を発見したと思います？ 真相に気がつき、私は思わず声を上げ、次に腹を抱えて笑い始めました。人が見ていたら、あの男はどうしてしまったのだらうと思ったかもしれません。いい気分で、私はそれほど大きな声で笑っていたのです。

小屋の隣には、うっそうとした竹やぶがありました。10メートル

ルほど離れていたと思いますが、そのくらいの距離であれば根を伸ばすことができるということなのかもしれません。自分のベッドの真下の床下に、私はタケノコを見つけたのです。少し前に地下から芽を出し、上へ向かって伸びようとしていたのでしょう。ところが小屋の床にぶつかり、邪魔をされ、そこで止まってしまいました。成長をあきらめ、タケノコはじつとしていることに決めたのかも知れませんが、それがなぜか今日になって気を変え、成長を再開したのですが、やはり頭上に小屋を乗せているのではどうしようもなく、頭の先を床に強く押し付けることしかできなかったのでしょう。

そのとき下からの強い力に押され、小屋の床がきしんだのです。私の耳はそれを聞きつけたわけでした。にっこりと微笑みながら、私はタケノコを見つめました。もう明日からは不要になってしまう小屋です。床板ははがしたままにし、タケノコに成長する機会を与えることにしました。翌朝小屋を最後に離れるときには窓をすべて開け、ドアも開いたままにしておいてやりました。そうやって山を離れ、私は都会へと帰ってきたのです。

それ以来私は一度も山へ足を踏み入れたことはありませんが、竹とは非常に生命力の強い植物です。今ではあの小屋はすっかり竹やぶにおおわれ、でも同じ場所に今でもしっかりと立っているのではないかという気がするのです。

(終)

湾の竜騎兵（上）

まず知っておいてほしいのは、海中の風景は美しくもなんともないということだ。多くの人はこの点を誤解している。水は太陽光線を吸収するから、ある深さを過ぎると真っ暗なばかりで何も見えず、自分の指先を見分けることさえできないほどののだ。

その暗闇の中でも、クジラは物の形を知ることができる。聴力がとてもよく発達していて、まわりの地形や仲間の群れ、敵の姿などを、音だけで的確に見分けることができるのだ。

だから海軍は、竜騎兵を出撃させるにあたって、昼間であるか夜であるかということに気を配る必要はまったくなかった。私はまだ訓練生にすぎず、実戦に参加したことは一度もなかった。だがあの海底ケーブルの警備には、私も駆り出されることになった。

海底ケーブルというのは、海の底を走っている電線のことだ。電線といっても直径は30センチもあり、海底をだらりとはっているヒトリ湾を横断する形で、何十キロにもわたって敷設ふせつされている。

用途はただの電話線でしかないが、国の東西を結ぶそれなりに重要なものであることは間違いない。だから、これが切断されてしまうという現象が半年間に2回も続けて起こってしまうと、政府も本気で対策を考えなくてはならなくなった。

切断されたケーブルはもちろん引き上げられ、調査がされたが、バーナーのような高熱を発するもので焼き切られた跡があり、どう見ても人間のしわざとしか思えなかった。

犯人がどこの誰であるにしろ、このまま放置して3回目の破壊工
作が行われてはかなわない。政府はケーブルの警備を海軍に命じ、
その役目が竜騎兵部隊にまわってきたのだ。だが海底ケーブルは長
く、そう簡単に見張れるものではない。正規の竜騎兵だけではもち
ろん足りず、訓練生まで投入されることになったのだ。

命令を受け、教官から海図を手渡されて、私はプールへ急いだ。
足音を聞きつけ、チビ介はもう待ちかまえていた。身体を斜めにし
て、片方の目を水面に出している。

チビ介は私に与えられたクジラで、身体ばかり大きいはまだ子供
のマッコウクジラだった。下級生に手伝わせて、私が潜水服を身に
つける様子を水の中から眺めていた。

潜水服の準備がすむと、チビ介は待ちかねたというように私のそ
ばへやってきて、ごろりと仰向けになって、おなかを見せた。手を
伸ばしてなでてやると、キキキと楽しそうに鳴いた。

潜水服から伸びている空気パイプを、私はチビ介の背中に取り付
けてある接続装置にカチンとつないだ。この装置は呼吸口を通して、
クジラの肺の奥へとつながっている。こうやってクジラから空気の
補給を受けて、竜騎兵は海中で活動するのだ。

水門が開くのを待ち、チビ介と私は出かけた。楽団や見送りの人
々がいるわけでもなく、出撃といっても静かなものだった。時刻は
午後8時過ぎで、ついさつき日が暮れたばかりだ。

ケーブルの切断が誰のしわざだとしても、真昼間から仕事をする
ほどバカな犯人ではないだろう。私とチビ介はこれから明日の朝ま
で、あてもなくケーブルにそって泳ぎ続けるのだ。犯人を捕まえな

いまでも、何かを目撃できることを期待しての作戦だったが、成果が得られると思っっているのは、海軍を上から下まで探しても一人もいなかったに違いない。

水門をぬけるとすぐに海だが、ライトをつけた警備艇がいて、私たちを先導してくれた。警備艇の明かりについていくようにとチビ介に指示を出し、私は一眠りすることにした。

やわらかな肌に触れ、潜水服の手袋ごしにクジラに合図を送るのだ。チビ介は私に触れることが好きで、何かの合図を送るたびに目を細めたが、指示にそむいたり、意味を取り違えて勝手な行動をとったりしたことは一度もなかった。そういう意味では、とても扱いやすいクジラだった。

目的の場所に着いたのは、1時間ほどたったときのことだった。胸ビレの前にわたされているベルトにつかまって眠っていたのだが、チビ介はそつと身体をゆすって起こしてくれた。目を開くと、アクセルを戻して、警備艇が減速を始めたところだった。

艇長が振り返り、こちらを眺めているのが見える。身体を伸ばして手を振り、私は合図を送った。それからチビ介に指示を出し、潜水が始まった。

マッコウクジラ独特のやり方だが、身体を垂直に立てて、石ころが沈むようにまっすぐ潜水してゆくのがチビ介は好きだった。いくらも行かないうちに、波の向こうの警備艇の明かりはゆらゆらと暗くなり、やがて何も見えなくなった。チビ介は自信のある様子で降下を続けている。

私たちのすぐそばにはブイがあり、波間にただよって浮かんでい

るものだが、その下部からは長いクサリがずっと伸びていて、海底ケーブルにまで達している。私たちはそれをたどっていたのだ。

懐中電灯をつけ、私は深度計を確かめた。130、150。すぐに300メートルを越えた。もう潜水艦ですらやってくることのできない深さだ。

350メートルをすぎたところで、チビ介が降下速度をゆるめるのが感じられた。もうすぐ海底なのだろう。深度計を眺めていると、400に少し足りないところで針が止まり、懐中電灯の光の中に海底の様子が浮かび上がり始めた。

このあたりの水はとてもよく透き通っていたが、それでもどこまでも見渡せるというわけではなかった。見えているのはせいぜい50メートル以内だけで、それをすぎるとぼんやりとした灰色の中へ溶け込んでしまい、その先はそれこそインクのような真っ暗闇になってしまう。

ヒレの動きを止め、チビ介は立ち止まった。目の前にはケーブルの姿が見えている。海底に無造作にドスンと置かれている。だらんと横たわっている長いヘビのような姿だ。世の中にこれほど退屈な存在はないのではないかという気がした。

それでも仕事は仕事だ。手を伸ばして胸ヒレに軽く触れ、私はチビ介の向きを変えさせた。ここからは、ずっと東に向かってケーブルをたどってゆくのだ。岩と砂と海藻と、ときどきは魚の姿を見かけるだけの退屈な仕事になるだろう。私はため息が出そうになった。指示を出すと、背筋をピンと伸ばし、チビ介はケーブルにそって進み始めた。

だがこれは、思うほど退屈な仕事にはならないのかもしれなかった。私はすぐに奇妙なものを目にしたのだ。

それが何なのか、最初はよくわからなかった。海底は平らで、まるで砂漠のようにどこまでも砂地が続いている。そこに突然、おかしなものが混じるようになったのだ。大きさは1メートル近くある中心にある小さな胴体から、5本の足が水道のホースのように長くクネクネと伸びている。懐中電灯を向けてしげしげと眺めて、やっとヒトデだと気がついた。

もちろん生きていて、足をさかんに動かしている。それが一匹や二匹ではなく何千匹もいて、砂原をいちめんにおおいつくしているのだ。それほど珍しい種類ではなかったが、こんなにたくさん集まっているのは見たことがなかったし、話に聞いたこともなかった。

私は鼓動が速くなっていったが、恐怖を感じていたのではないと思う。ヒトデたちから10メートルも離れていない場所を、チビ介は平気な顔で泳ぎ続けている。彼が危険を感じていないのであれば、あまり気にする必要のない出来事なのだろう。

それどころかチビ介は突然進路を変え、ヒトデの一匹を口にくわえたではないか。まずかったのか、すぐにペツとはき出したが、なんでもない顔でケーブルにそうコースに戻り、泳ぎ続けた。

予備の懐中電灯も取り出し、私はもう一度眺め渡した。光の届くかぎりヒトデの姿を見ることができた。足を動かし、すべてのヒトデが同じ方向へ進んでいることに気がついた。まるで巨大な軍隊が行進しているかのような眺めだ。

ヒトデたちは西へ向かっていた。何のためにどこへ行くのか、ど

ここからやってきたのかはわからなかった。だがとにかく、私たちとは逆の方向だ。

数キロ進むとヒトデたちは姿を消し、海底はまた砂漠のような砂だけの風景に戻った。ほつと息をついたが、不安ではなかったと言えバウソになる。もしあのヒトデたちが何かから集団で逃げ出してきたのだとすれば、チビ介と私はその何かに向かって進んでいくことになるのではないか？

わずかだが海底が斜めになり始めていることに気がついたのは、もう少し進んでからだだった。よく見ないとわからないほどだったが、たしかに上り坂になっている。懐中電灯を向けて再び眺め渡したが、たまたませまい一カ所がそうなっているというのではなく、本当に海底全体がゆるい登りの斜面になっている様子だ。

海図にはそんなことは描かれていないので少し混乱したが、事実そうなのだから仕方がない。その坂にそって、ケーブルもゆっくと登ってゆく。私たちはそのまま前進を続けるしかなかった。

海図を眺め直したが、やはり私には理解できなかった。何度見ても、このあたりの海底はずっと平らであるように描かれている。海図の製作者たちは、こんなに巨大な斜面を見落としたのだろうか。何世紀も前から数え切れないほどの船が行き来し、先端に重りをつけたロープをたらし深さを測ってきた海だ。そんな初歩的なミスがあるとは、とても信じることができなかった。

進み続けると海底はさらに持ち上がってゆき、思いついて深度計を見ると、すでに針は300メートルをさしていた。いつの間にか

100メートル近くも上昇していたのだ。居心地が悪そうに、チビ介が身じろぎをしたことに気がついた。身体全体をわずかにふるわせたのだ。

ほんのささいなしぐさだったが、なぜか気になり、私は足を止めさせた。胸ビレを広げ、チビ介はブレーキをかけた。私たちは海中に静止することになった。目の下には海底が広がっている。あたりは真っ暗で、私の懐中電灯以外には何の光もないはずだったのだが…

なにげなく下を向いて、私はやっと気がついた。よく見ないとわからないほどかすかなものではあるが、海底が光を発していたのだ。まるでクモの巣のような眺めだった。海底をいくつもの線が走り、いくつかは交差し、いくつかは交差することなく、あちこち好きな方向へ、いなづまのようにギザギザしながら伸びているのだ。それらの線が暗いオレンジ色に輝いているのだ。

もちろん非常にかすかな輝き、ごく弱い光でしかないのだろう。だがここは夜の海中なのだ。光など他にまつたくない場所だ。だから、あれほど弱い光でも目に入ってくるのだろう。

交差する線たちが何かに似ていると私は思った。そして、それがガラスの表面を走るヒビの形だと気づくには時間はかからなかった。つまり、海底に無数のヒビが入り始めているということなのだ。そのヒビがあを光を発し、オレンジ色に輝いているのだ。

あれは溶岩の色だと、やっと私は気がついた。地の底にあり、高温でどろどろに溶けている岩だ。そうやって液体のようになっていく。だからきつと、何千度という温度なのだろう。それがああやって光っているのだ。

海底にヒビが入り、そこから溶岩が露出しかかっているのだ。あたりの海水温は100度をはるかに超え、一部は沸騰ふっとうしているに違いない。溶岩の成分が溶け込んで、酸のようにもなっているかもしれない。

こうなると、ケーブルの切断はもうミステリーでも何でもなかった。溶岩にさらされれば、ケーブルであろうが何であろうが、簡単に焼き切れてしまうだろう。ヒトデたちだって、引越す気になるに違いない。

オレンジ色の絵具で子供がなぐりがきしたかのような風景を見下ろしながら、私たちは水中に浮かんでいた。眼下に広がるのは、美しいといえば美しい光景だった。

だが突然、私はもう一つのミステリーのことを思い出した。海底がいつの間にか盛り上がり、斜面になっている件だ。海図には、このあたりの海底はずっと平らであるように描かれている。

意味に気がついて、ヘルメットの中で私はあつと声を上げた。チビ介が私をちらりと振り返った。考えをまとめるため、私はツメをかもつとしたが、ガラスが邪魔で指が口に届かないことに気がついた。

海底は、ただ上り坂に変化したわけではないのだ。大きすぎて、私の目には一部分しか見えていないのに違いないが、実は全体が山のように盛り上がり始めているのだ。その斜面の一部だけを見て、私は海底が斜めになっていると思っていたのだ。

おそらく真実は、この湾の中心に山ができようとしているという

ことなのだろう。だから海底がヒビ割れ、上昇し、溶岩が顔を出しつつある。そうやってできつつあるのは、きっと火山だろう。

ヒトリ湾の中心に火山ができる？

私は、頭がくらくらしてくるような気持ちになった。ヒトリ湾は波が穏やかで航海しやすく、魚も多い豊かな海だ。それが酸と火の海に変化しようとしているのだ。

一秒でも早く、このことを通報しなくてはならないと思った。もし噴火が始まったら、大変なことになる。地震や津波が起こり、沿岸をおそうかもしれない。

胸ビレに触れて合図を送り、私はチビ介を浮上させようとした。波の上に出て、信号ピストルを使って警備艇を呼ぶのだ。警備艇にはもちろん無線機が積まれている。

だが私は、水中で長く考えことを続けすぎたようだった。その間に時間切れが迫っていたのだろう。私とチビ介の真下で、噴火が始まるうとしていた。

最初にやってきたのは音だった。まるで爆発する火薬のようで、誰が水の中で大砲を鳴らしているのだろうという気がした。キョロキョロして音源を探そうとしたが、よくわからなかった。私たちを取り囲むように、まわり中から聞こえてくるようだったのだ。

その音と調子を合わせるようにして、身体を締め付ける強い衝撃を感じる。海底のあちこちで白い小さな光がきらめくのを見ること

もできる。まるでいくつもの花火が仕かけてあり、間をおいて一つずつ点火しているかのような眺めだ。

ドンドンという砲撃のような音は、何秒かおきにまだ聞こえていた。あれは普通の音ではなく、水中を伝わってくる衝撃波だと、やっと気がつくことができた。だが次の瞬間、目の前に突然柱のような物が出現したので、私はとても驚き、息もできないほどだった。直径が十メートルほどもある巨大なもので、海底からまっすぐに立ち上がり、水面へ向けてずんずん伸び、暗闇の中へ消えている。

目を大きく開き、私は見つめた。それが本当は柱でも何でもなく、海底から噴き出してくる泥水にすぎないことに気づくには時間はかからなかった。溶岩の成分が溶け込んで、海水がどす黒く変色しているのだろう。高温でもあるから軽くなり、水面へむかって勢いよく立ち昇り、あのような柱に似た姿に見えるのだろう。

チビ介は明らかにおびえ、身体をふるわせ始めている。だがそれは私も同じだった。黒い熱水の柱は一本だけではなく、あっと気がついたときには何十本も立ち昇っており、まるで森のように私たちを取り囲んでいたのだ。それを下からオレンジ色の溶岩が照らし出している。

ドンドンという音は、さらに大きくなっていく。熱水の柱だけでなく、海底のあちこちから透明な泡までが立ち昇り始めている。何かの火山性ガスだろう。あせりを感じ、私は水面を見上げようとした。

遠すぎて、もちろん水面を見ることはできなかった。熱水の柱と泡はずっと立ち昇り、暗闇の中へと消えている。水面はあの先にあるのだろうか。

私たちは噴火のまつただ中に放り込まれているのだった。キヨロキヨロして脱出路を探したが、どっちを向いても見あたらなかった。熱水の柱はそれほど数が多く、たがいに近く、しかもからみ合いながら交差していて、すきまをチビ介が通り抜けるのは、とても不可能に思えた。私たちは、熱水とガスの牢獄ろうごくに閉じ込められてしまっているのだった。

オレンジ色の輝きは、急速に強さを増しているようだ。それに照らされて、海底が明らかに山の形に盛り上がっているのを見て取ることが出来る。山頂はとがり、地中にあつた岩が割れ、真新しい断面を見せている。

ひととき大きな爆発音が聞こえ、私の身体はズンとゆさぶられた。チビ介の身体ですら衝撃でふるえたほどだ。火山の頂上がくずれ、巨大な溶岩のかたまりが姿をあらわすのが見えた。もちろんすぐに水に触れ、大量の水蒸気が発生し、透明な泡になって水面へむかって立ち昇っていった。オレンジ色の光を受けて輝き、夢のように美しいが、手を触れることができないほどの高温であるのは間違いないだろう。

不意に思いついて、私は海図をのぞき込んだ。溶岩の輝きで、もはや懐中電灯すら必要なかった。海図に目を走らせ、目的のものを見つけ出そうとした。

ヒトリ湾は、竜騎兵部隊が日ごろから訓練に使っている場所だった。もちろん広すぎて、湾内の地形をすべて覚えることなどできない。だが特徴のある部分なら、ほっておいても自然に記憶してしまう。私は、一年ほど前に受けた訓練のことを思い出していた。目的のものを、海図の上ですぐに見つけ出すことができた。

作戦と呼ぶには、いささかお粗末そまつだったかもしれない。だが他にやりようがなかったのだ。方位磁石をにらみ、私は方向を確かめた。目をこらし、遠くを見透かそうとした。

しかしだめだった。熱水の柱が邪魔をしている。合図を送り、私はチビ介をゆつくりと前進させた。

それでもまだ見えない。だが少し潜ると、遠くに見つけることができた。たしかにあれだ。マストの形に見覚えがある。

竜騎兵たちの間では、『谷たにし知らせの沈没船』と呼ばれていた。私が生まれるよりもずっと以前に沈んだ船だったが、まだくちはててはおらず、今でも形を残していた。船体が大きく裂けているわけでもなく、そつと置かれたかのように海底に座り込んでいる。

それだけではただの沈没船だが、『谷知らせ』と呼ばれるのには理由があった。あの船のすぐ向こうから深い谷が始まり、海底を切り裂きながら南へむかって長く走っているのだ。

何千年も前の大地震のときにできた谷だろうと学者たちは推定していたが、私にはそんなことはどうでもよかった。火山は、その『谷知らせの沈没船』のすぐ隣に口を開けていたのだ。あの沈没船のところまで行くことができれば、背後は深い谷だ。谷底を突っ走れば、熱水に出会うことなく火山から離れることができるかもしれない。

しかし、どうやってあの船のところまで行く？

熱い水は軽くなる。ならば逆に、冷たい水は重く、海底付近に集

まるということではないか？

勘違いをすることがないようにゆっくりと指を動かし、私はチビ介に指示を出した。

『海底にそつて、できるだけ深く泳げ』

念のために同じ指示をもう一度繰り返した。最後にポンとほおをたたいてやった。おびえた表情を隠さないままだったが、チビ介は海底へ向けて降下を始めた。

垂直に降下を続け、最後に90度曲がり、本当に指示通り、チビ介は海底から2メートルもないところを泳ぎ始めた。気になって私も水温計をチラチラと見ていたが、もちろん溶岩からはできるだけ距離をとって進んだのだが、水温はほとんど正常といってよいレベルでしかなかった。

折れ曲がった溶岩の流れにそつて何度も方向を変えながら、私たちは沈没船へと近づいていった。オレンジ色の光を受けて、海中に四角く浮かび上がっている。

もともと四角い船ではあった。戦争中にヒトリ海軍が大量生産した貨物船の一隻だったのだ。特長も何もない安物の船だが、このときの私には、投げキスをしたいぐらいすばらしい相手に思えた。

船体は見る見る大きくなってくる。鉄板の表面はサビにおおわれ、デッキの上には驚くほど大きく育った海草が森を作っている。それほど長い間水中にあるということなのだろう。

私たちは船のそばを通りぬけることができた。とたんにその影から、今までは見えていなかった別のオレンジ色の割れ目が顔を出し

て驚いたのだが、十分離れているので危険はないとわかり、ほつとすることができた。海底の谷は、船をすぎて200メートルも行かないところから口を開けていた。

谷の入口を越え、谷底へ向けて降下を始めると、オレンジ色の光がさえぎられ、とたんに暗くなった。もう溶岩など気配も感じられなかった。

それほど深い谷ではなかった。せいぜい100か150メートルだろう。すぐに降下をやめ、チビ介は水平に泳ぎ始めた。全速力を出している。首を曲げて私は見上げたが、谷の両側の黒い崖以外は何も目に入らなかった。

私たちは、何とかぎりぎりで間に合うことができたようだった。谷に入ってまだいくらかもたつていないときだったが、突然強い衝撃におそわれたのだ。本当に大きな衝撃で、まるで耳のそばで大砲をぶつ放されたかのようなだった。私は振り落とされてしまい、チビ介もバランスを失い、海底に衝突しかけたほどだ。

もちろん、この瞬間に火山が爆発したのだ。溶岩を今までなんとか押さえつけていた岩盤が大きく口を開き、吹き飛ばされてしまったのだ。溶岩が広い面積で露出し、水蒸気が爆発し、さらに破壊を大きくした。

波と衝撃は水中を走り、私たちのまわりでもいくつか崖くずれが起こったほどだ。火山のすぐ近くではどのようなことが起こったのか、想像もつかない。

だが私たちは、すでに数キロメートル離れたところにいたのだ。クサリを引き寄せて私はベルトにつかまりなおし、チビ介も安定を

取り戻して、泳ぎ続けることができた。水面では波が荒れ狂っていたに違いないが、谷底は静かだった。私たちは距離をかせぎ、十分安全だと思えるところまできてから、浮上を始めた。

バシユツと大きな音を立てて息をはき出しながら水面に背中を出し、チビ介は深呼吸を始めた。ヒレをすべて止め、いかにもほつとしたという表情だ。

水温計を見たが、水には不自然な暖かさはほとんど感じられなかった。思わずニコニコして、私はチビ介の肌をなでてやった。だが反応はなく、チビ介はひたすら息を吸い続けている。私は、かなり無理をさせてしまったのだろう。

チビ介が再び目玉を動かして私を見たのは、もう少したってからだった。胸ビレを差し出すので、ぽんぽんとたたいてやった。

身体を動かす気にならず、しばらくの間水面をただよい続けた。振り返ると火山は水蒸気とガスを空高く噴き上げているが、本当は白い色をしているはずの水蒸気が、水中からの光を受けてわずかにオレンジ色がかって見える。シュウシュウという音がここまで聞こえてくる。さらに一、二度爆発があり、黒い岩のカケラが波の上に飛び散るのも目に入った。鮮やかな白い光が、フラッシュをたいているかのようにあちこちで光る。

ため息でもつくようにチビ介が大きく息をはいたので、私もつられて笑ってしまった。

この場を離れたがっているように見えたので、私はベルトにつかまることにした。さっそくヒレを動かして、チビ介は泳ぎ始めた。もちろん火山からは遠ざかっていくのだが、水面に行くように指示を

出し、私は振り返って、噴火の様子を眺め続けた。

信号ピストルを使って警備艇を呼ぶことも思いついたが、やめておいた。噴火している火山のそばでは、信号弾などいくら撃つても気づいてもらえないだろう。あわてなくても、噴火についてはすでに司令部に通報がされていることだろう。私たちは火山をさけて、ゆっくりと戻ればいい。

湾の竜騎兵（下）

しかし陸地へ戻るといつても、口でいうほど簡単な仕事ではなかった。火山に触れて熱くなった水が海流に流され、こちらへ押し寄せてくる可能性があったのだ。それをさけるために、私たちはかなりの遠回りを強いられることになった。

海図を眺め、海流の様子を調べたが、安全と思われるルートはとてつもない大まわりになり、帰りつくのに数時間かかってしまいそうだった。だが選択の余地はなかった。方位磁石をたしかめ、私はチビ介に方向を指示した。

あれだけ大変な目にあわせてしまったのだから、無理を言っつて、速く泳がせる気にはならなかった。水面の少し下をゆっくりと行かせ、私はときどき水温計に目を走らせたが、異常は感じられなかった。

とうとう夜が明けはじめた。休憩するために水面に浮上し、もう一度海図を眺めることにした。

私たちは、陸地から数十キロ離れた場所にいた。振り返ってももう火山の煙は遠く小さく、無害な入道雲のようにしか見えなかった。思わずため息が出たが、海図の上にある物を見つけて、あつと声が出た。知らない間に、私たちは『岩山の機雷船』のすぐそばにまできてしまっていたのだ。

機雷というのは戦争で用いる爆弾の一種で、ボールのように丸い形をして、風船のように海中をふわふわとただよっている。下部にはクサリがあり、これで海底からつながれているのだ。敵船が接触

するとドカンと爆発し、撃沈することができる。

機雷船とはこれを敷設^{ふせつ}する船のことで、あちこちの海域に設置してまわる作業に使われる。前の戦争のときにも用いられていたが、敷設作業の最中に一隻が敵潜水艦に発見され、魚雷を二発くらって沈没してしまった。そうやって横たわったのが岩だらけの海底の丘の上だったので、この沈没船にはそういう名がついたのだった。竜騎兵の間ではよく知られていて、まだ見たことはなかったが、私も噂で聞かされてはいた。

おもしろいのは、沈没したときにちょうど敷設中だった機雷が1個、まだクサリでつながれたままになっているということだった。クサリは、沈んだ船の甲板からまっすぐ上を向いて伸び、その先には機雷がくっついたままになっている。

もちろんこの機雷はまだ生きていた。戦争が終わって何年もたっているのに、船が接触すれば今でも爆発することだろう。だが深さ100メートルの海中なのだ。誰も気にしてはいなかった。商船はもちろん、味方の潜水艦航路からも遠く離れていた。

チビ介に合図を送り、私は機雷船へ向かって針路をとらせた。ここまで来てしまったのだ。ちょっと見物していこう。

機雷船はすぐに見つけることができた。朝日を受け、海底に影を落としている。だが、おかしなことに気がついた。船体が横倒しになっているのだ。

そつと置かれたかのように、機雷船はまっすぐに立っていると私は聞かされていた。それが今は右側を下に、なぜか横向きになっているのだ。サビにつつまれた船体はもろく、大きな裂け目がいくつ

もできている。

チビ介の足を止めて眺め、もう一つおかしなことに気がついた。機雷の姿がないのだ。クサリにつながれ、まるで風船のようにまっすぐ水面へむかって伸びているはずだった。だが影も形もない。

合図を送り、私はチビ介を船に接近させた。船腹に入っている裂け目はまだ新しく、できたばかりであるかのように見えることが気がついた。海草やサンゴの生え方でわかるのだ。目の前にある断面は鉄が露出し、海草などカケラもない。

甲板へ近寄り、私は機雷のクサリを探した。これはすぐに見つけることができた。半分ほどにちぎれ、海底にだらりと横たわっていた。クサリの断面を確かめると、これも真新しかった。

振り返ってチビ介の目を見つめ、私は考えをまとめようとした。だが、考えられる可能性は一つしかなかった。

戦争中から沈んでいるのだから、船はさび付き、もろくなつていに違いない。距離があるとはいえ、そこへ海底火山が爆発したのだ。強い衝撃が海中を走り、船体を押し倒したのだろう。同時に、機雷をつないでいたクサリも切れてしまったのだ。波に押されてふわふわと、機雷は海中をただよっていたことだろう。クサリを失って軽くなり、今は水面近くに浮いているに違いない。

はっとして時計を見た。火山の爆発から何時間たっているのだろう。海図には海流の速さも記入されていた。流されていた方向も見当がつく。チビ介に指示を出し、私は機雷を追いかけ始めた。

神経を使うが、変化のない仕事になった。私たちは海流に乗り、スピードを出した。

何分かおきに立ち止まり、海流の方向を確かめた。自分のいる場所を海図の上に記入していったのだが、だんだんと航路に近づきつつあることに気がついて、あせりを感じないではいられなかった。

この国の首都はヒトリ湾に面していて、大きな港もある。出入りする船舶も多い。一日に百隻は軽く越えているだろう。それらの船が利用する航路へむかって、機雷は流されていきつつあったのだ。私と同じように疲れ切っているに違いなかったが、チビ介をせかして、スピードを上げさせるしかなかった。

チビ介はよく言うことを聞き、たまたま見かけたイカをつかまえてほお張り、そのあと2時間ほど眠った以外は、ずっと泳ぎ続けた。私もくたくただったが、機雷をほっておくわけにはいかなかった。

機雷を見つけることができたのは、ほんの偶然からだ。水面に浮かび上がって何度目かの休憩を取っているときだったが、青い空に鳥の群れがいるのが目に入った。低い空にとどまり、ぐるぐる旋回しながら、しきりに水面を気にしている様子だ。チビ介に合図を送り、すぐにそこへ向かわせた。

するとそこにあつたのだ。直径数メートルある金属製の球で、まっかにさびた表面はデコボコになっているが、敵船に触れたときに点火するための棒状の装置が何本も突き出しているのが見える。ちぎれたクサリの残りが下部に数メートル、まだぶら下がっている。

そういう姿がきつと、大型のクラゲのように見えたのだろう。日影を求めて小魚がその下に集まり、群れを作っているのだ。海鳥たちはそれを目当てに集まっていたのだろう。

小魚たちは平気な顔をしているが、私は近寄りたいとは思わなかった。チビ介の足を止めさせ、眺めていた。波が穏やかなので、機雷はゆっくりと上下に揺れている。いかにも平和そうな風景だ。だがそうしながらも、海流に乗って運ばれているのだ。

水兵のはしくれだから、私も機雷の型は見分けることができた。これは装甲の分厚い戦艦を沈めるために作られた強力なもので、一般の客船や商船ではひとたまりもないだろう。

水平線のかなたにいつ船が姿を見せても不思議はない状態だったのだが、私は決心がつかず、だらだらと考え続けた。しかしとうとう心を決め、ヘルメットのネジをゆるめ始めた。

水中でヘルメットをはずすと、泡がぶくぶくと大きく立ち昇った。私は潜水服からぬけ出し、身軽になつてチビ介の背中に取り付いた。空気パイプを接続装置から引き抜いた。クサリをはずすと、まだ内部に残っていた泡を引きずりながら、潜水服は海底へ向かってゆっくりと沈んでいった。

クサリを手に取り、チビ介を水面まで行かせ、自分もときどき水上に顔を出して息を吸いながら、私は作業を続けた。予備のクサリも持ってきてつなぎ、長さを二倍にした。チビ介は離れたところで待たせておいて、クサリのはしを持ち、私はおそろおそろ機雷に近寄っていった。

機雷の下部にぶら下がっているクサリの先端に、私はチビ介のク

サリを結びつけた。私に気づいて、小魚たちはとつくに姿を消していた。チビ介のところへ戻り、その背中に乗り、私はゆっくりと機雷をけん引させはじめた。海流に逆らって、航路から少しでも離れたところへ移動させようとしたのだ。

そのあと機雷をどうするかなど、何か考えがあったわけではない。だがとにかく、航路を行く船を撃沈してしまうことだけはさげようと思った。

機雷は重く、なかなか動かなかった。だがチビ介が何回か水をけると、ゆっくりと移動を始めた。潜水服を捨てたのは、チビ介にかける負担を少しでも減らすためだった。おかげで私は水中で呼吸することができなくなってしまったが、やむをえなかった。私の緊張が伝染したのかもしれない。チビ介も神妙な顔で、機雷を引いていた。

そのまま一時間以上けん引を続けたが、正直に言うと、私は頭をかかえていた。これで航路から引き離すことはできたわけだが、このまま陸地まで引き続ける体力はチビ介にもないだろう。かといって、機雷を処理する方法もない。

チビ介をできるだけ浅く泳がせ、私は背中に乗り、空を見上げ続けた。太陽はすっかり高くなり、じりじりと照りつけてくる。手がかざして日差しをさえぎりながら、私は見回し続けた。そして、とうとう見つけることができた。

エンジンが一つしかない小型のものだったが、飛行機には違いなかった。私は身を乗り出し、両手を大きく振った。

はじめは遠く、小さくしか見えなかったので、気づいているのか

いないのかも、なかなか判断がつかなかった。だがついに高度を下
げ、旋回を始めたときにはうれしくて、思わずチビ介の背中をぼん
とたたいた。

近寄つてくると、空軍の飛行機だとわかった。小型の偵察機だ。
幸運だったのは、細長いバナナのような形をした浮きをつけた水上
飛行機だったことだ。水の上にも着陸することができる。

水上飛行機がいったん遠ざかったので、あれあれと思っていたの
だが、すぐにUターンして戻ってきて、着水態勢に入った。高度を
下げ、水しぶきを上げて浮きをぬらした。だいぶ通り過ぎていつて
しまったが、まるでアメンボのような格好で速度をうんと落とし、
こちらへむかって水の上を滑ってきた。

50メートルほどのところでエンジンを止めたので、チビ介の背
中から飛び降り、私は泳いでいった。そばへ行って浮きにつかま
ると、ドアが開いてパイロットが姿を見せた。

こんなに小さな飛行機にどうやって乗り込んだのだろうと思える
ような大男で、口のまわりにはタワシのように濃いヒゲが生えてい
る。半そでのシャツを着て、毛だらけの腕を見せている。そのかわ
り髪の毛は薄い。「おまえは誰だ？」と男は言った。

「海軍の竜騎兵よ」

私は事情を説明した。機雷という言葉聞いて男はぎょっとした
顔をしたが、円を描いてゆっくりと泳ぎ続けているチビ介の背後、
15メートルほどのところで波間にわずかに顔を見せているものを
目にして納得したのだろう。すぐに表情を変えた。「それで、オレ
にどうしてほしいんだ？」

「海軍の司令部に連絡してほしいの。あの機雷を何とか始末しないとけないわ」

ヒゲの先を指で引つ張りながら男は少しの間考えていたが、やがて答えた。「ああ、そうだな」

「この飛行機にも無線機はあるんでしょう？」

男はマイクロフォンを手にし、ヘッドフォンを耳にあてた。「竜騎兵、おまえの名はなんというんだ？」

「竜騎兵訓練校4年、ジャネット・スミス」

無線機のスイッチを入れ、男は司令部と話し始めた。だがやがてスイッチを切り、私のほうを向いた。「竜騎兵、おまえは死んだはずだと司令部は言ってたぞ」

「冗談じゃないわ。このとおりピンピンしてるわよ」

「そのようだな。それで機雷だが、司令部のお偉方は、オレとおまえで何とかしろとおおせだ。海底火山のことで手いっぱい、機雷なんぞにかかわる余裕はないとさ」

「噴火で大きな被害が出たの？」

「いいや」男は首を横に振った。「津波は起こらなかった。せいぜい火山灰が降って洗濯物が汚れたくらいだな。だが念のため、湾内全域に警戒警報が出ている。だからオレもパトロールに出されたんだ」

「そう」「私は少し安心した。」「でも、あの機雷はどうするの?。」

「でかいのか?。」

「大型よ。戦艦にだって穴を開けることができるわ」

「それはすごいな。クサリをはずして、おまえとクジラは離れていろ。安全な距離だけ離れたら、手を振って合図をくれ」

「どうするの?。」

「まあ見てろって」

男はドアを閉め、飛行機のエンジンを始動させた。黒い排気ガスが噴き出し、プロペラが回転を始めた。私は水に飛び込み、チビ介のところへ戻った。飛行機はすぐに離陸した。クサリを切り離し、ゆっくりと泳がせながら、チビ介の背中に乗って私は眺めていた。

このときになって、飛行機には小型の機関銃が装備されていることにやっと気がついた。ここから見るとミツバチの針のように細いものでしかないが、操縦席の下からぐいと突き出しているのだ。

やがて十分な距離をとることができたので、伸び上がって、私は手を振った。了解のしるしに飛行機は翼を少し振り、返事を送ってきた。

機体を斜めにしてゆっくりと旋回を始めながら、飛行機は機雷に近寄っていった。機首を下げ、ねらいを定めているようだ。

引き金が引かれても、タタタと意外なほど小さな音がしたただけだった。それでも水面にはいくつもしづきが上がり、一列になって機雷へ近寄っていくのが見えた。

命中したように見えたが、一瞬の間は何も起こらず、失敗だったかという気がした。だが爆発が起こったのは、そのときのことだった。

音やしづきよりももっと強烈だったのは、その閃光せんこうだった。水中で強力なフラッシュでもたいした感じだ。

音は少し遅れてやってきて、海全体がズンと揺れたような気がした。爆発音には慣れているはずのチビ介もビクリとふるえたほどだ。私はすぐに水に飛び込み、顔を見せて、目の下をなでて落ち着かせた。私の耳にも、水中ではじけ続ける泡の音はまだ聞こえていた。

しかしこれで機雷の処理はすんだわけだった。私は飛行機の姿を探した。もう一度ぐるりと旋回して、こちらへ戻ってくるのが見えた。

あの飛行機には拡声器も積まれていたらしい。割れてガラガラしていたが、パイロットの声が聞こえてきた。「竜騎兵、おまえはゆつくりと基地へ帰れ。あせることはない。司令部に連絡して、むかえの船を呼んでやるよ」

わかったというしるしに、私はもう一度手を大きく振った。進路を変え、飛行機は南の空へ姿を消した。ほっと息をつき、私はチビ介のベルトにつかまりなおした。西へまっすぐに進むように指示を出した。

(終)

学校の妖怪（妖怪禅師）

ススムのお姉さんは、ススムとは別の学校に通っていました。名前をミチコといいます。

弟の口からゼロ禅師のことをいろいろと聞かされ、ミチコは相談をする気になったようでした。ある日、寺を訪れたのです。

セーラー服姿の訪問に少し驚いたようでしたが、もちろんゼロ禅師は親切に対応しました。

「それでお嬢さん、いったい何の御用かな？」

「ええ、あの…」

最初は遠慮していましたが、いかにも人のよさそうな禅師の様子に安心したのでしょう。ミチコは話し始めました。

「別に妖怪を退治してほしいというわけじゃないんです。だけど奇妙なことだから、ぜひ調べてほしいんです」

「では何が奇妙なのかな？」

「今すぐ私の学校へ来てください。そのつもりでクラスのみんなも待っています」

さっそくゼロ禅師が発したのはいうまでもありません。路地を抜けてバス道に出て、ミチコと一緒にバスに乗ったのです。

下車したバス停は、校門のまん前にありました。

教室では、本当にクラス全員がゼロ禅師を待っていました。ゼロ禅師を招き入れ、さっそくミチコが口を開いたのです。

「来てもらったのは、実は『見えず猫』のことなんです」

「それは一体どんな猫のかな？」

「動物ではなくて、『見えず猫』は妖怪なんです」

ミチコたちが語り始めたのは、この学校にかかわる奇妙な物語でした。

『見えず猫』がいつからこの学校にいるのか、詳しいことは誰も知りませんでした。一番年寄りの先生にきいても、「とにかく何十年も昔からいる」という答えしか返ってこないのです。

この妖怪を生徒たちは代々、教室の中で飼ってきたのです。

ではどんな妖怪なのかというと、その姿は誰も見たことがないのです。

姿は見えず完全に透明なのですが、大きな猫ではなく、授業中でも休み時間でも、ずっと女の子たちのひざの上に乗っているのが好きなのです。

この妖怪の世話をするのは、難しい仕事ではありませんでした。

女の子たちは当番を決め、交代で毎日、ひざの上に座らせてやっ

ただけです。悪さなどしないし、ふんわりとした手触りを感じることはありましたが、いつもじっとして、勉強の邪魔になることだっ
てありませんでした。

クラスの中で、その日の当番の胸には、黄色いリボンをつけておくことが決まっているそうでした。

教室の中を見回し、ゼロ禅師が口を開きました。

「しかし見るところ、お嬢さん方の中にリボンをつけている人はいないようじゃが」

ため息をつき、ミチコはうなずきました。

「一昨日から、見え猫は突然いなくなってしまったんです」

「いなくなった？ 一昨日？」

ミチコは振り返り、ある女の子を指さしました。肌が白く小柄な生徒で、最初はおずおずとしましたが、立ち上がって口を開いたのです。名前は洋子といいました。

「一昨日は私が当番だったんです。お昼ごろまでは確かにひざの上にいました。でも昼休みになったころには、もういなかったんです」

「それ以後は何の手がかりもないのかな？」

「はい」

ゼロ禅師は、すでに何かを考えている様子です。この後ももう少

話し合いは続きましたが、会話の最後は、ミチコがこう締めくく
ることになりました。

「『見えず猫』がどこへ行ってしまったのか、私たちには見当もつ
きません。でもなんとか呼び戻したいんです。

もう何十年もこの学校にいる妖怪なんです。それを私たちの代で
サヨナラなんて、なんだか悲しいではありませんか」

学校から寺へ戻ると、さっそくゼロ禅師が調査を始めたのは、い
うまでもありません。まず書庫にこもり、古い書物を調べることに
したのです。

床の上にペタンと座り、何時間も過ごしましたが、成果は得られ
ませんでした。

その次は古い友人を何人が当たってみたのですが、それでも何も
わかりませんでした。そんな妖怪のことは誰も知らないというので
す。

しかしゼロ禅師は何かの予感を感じていたので。『見えず猫』
とその失踪が気にかかり、普段の仕事まで手につかなくなってくる
ほどでした。

それほどの不安をゼロ禅師は感じていたのです。

でも理由はわかりませんでした。そして数日後の午後、とうとう
腰を上げたのです。ミチコの学校へもう一度行ってみようと思いい立
ったのでした。

そうすれば、この言いようのない不安の原因をつかむことができるかもしれないと考えたのです。

バスの窓の外にやがてミチコの学校が見えてきたのですが、その光景がゼロ禅師をどれほどがっかりさせたことか。

校舎の窓からは、なんと黒い煙がもくもくと噴き出しているではありませんか。火事に違いありません。

バスを降りて、ゼロ禅師が校門を飛び込んでいったのはもちろんですが、すぐにほっと息をつくことができました。すでに避難は完了し、生徒たちは運動場に集まっていたのです。

きちんと整列するように先生たちは号令をかけ、驚きのあまり泣き出している女の子をなだめたりしています。

すぐにミチコが気づき、こちらへ駆け寄ってくるのが見えました。

「禅師さん、火事が起こったんです」

「そのようじゃな。わしも胸騒ぎがしたのじゃが遅かった」

「でもケガ人はなかったんですよ」

「あまり大きな火事でもなさそうだ。校舎全体に火がまわることはなからうよ」

その瞬間、サイレンの音を大きく響かせて、消防車が校庭へと飛び込んできたのです。

火がすぐに消し止められたのは、いうまでもありません。今日の授業はすべて中止され、生徒たちは下校することになりました。

学校が再開されたのは三日後のことでしたが、ミチコから伝言を受け、放課後には禅師も顔を出すことになったのです。

ミチコと同級生たちが校門の前で待っていて、すぐに禅師を校舎の中へ案内してくれました。連れていかれた先は階段をトントンと上がった3階、先日の火災現場でした。

火事の原因は、古くなって漏電した電気設備であることがすでにわかっていて、それは特別奇妙なことではありませんでした。

でもミチコたちが禅師に見せたがったのは、燃えてススまみれになった部屋の中の様子だったのです。

ただの物置なので、広い部屋ではありません。

ススのこげくさい匂いに、ゼロ禅師は思わず顔をしかめることになりました。女の子たちも同じ表情をしています。ミチコだけは別で、真剣な表情で壁の一ヶ所を指さすではありませんか。

燃える炎は大量のススを出します。このススが部屋の内側を真っ黒に染めているのです。

壁に顔を近づけ、ゼロ禅師が詳しく観察をはじめようとしたとき、ミチコが言いました。

「消防署の人の話では、もっと大きな火事になっても不思議はなかったそうです」

「この部屋だけでなく、校舎全体が焼け落ちたかもしれないというのだね。だがなぜか、これほど小さな火事ですんでしまった」

「そうなんです」

「消防署は、その理由をなんだと言っているのだね？」

「よくわからないそうです。まるで出火直後に、誰かが気をきかせて、大元の電源スイッチを切ってくれたとしか思えないそうです。」

でも不思議なのは、電源スイッチには誰も手を触れていないことです。それなのになぜか電気が切れているんです」

「その理由はこれじゃよ」

ゼロ禅師が指さすので女の子たちは近寄り、目をこらしました。フックで固定された太い電線が、壁の表面をへびのように走っています。

ミチコが声を上げました。

「あつ、そのところで電線が切断されているんですね」

「だから電気が止まり、火事は小さくすんだのじゃな」

「でも一体誰が切断したんですか？」

ゼロ禅師は別の場所を指さしました。

「それはこの足跡の主だろうね。少し消えかかっているが、見えるかな？ 壁にそって、ここをこう歩いて、電線に近寄ったことがわかるじゃろっ？」

女の子たちは息をのみました。本当にその通りだったからです。小さな猫の足跡が壁の表面を歩き、おかげでススが乱れ、点々とするしがついているのです。

ゼロ禅師は説明を続けました。

「その誰かさんが電線をかみ、電気を切ってくれたのだろう。よくごらん。これは猫の歯の跡ではないかな？」

目を丸くするどころか、女の子たちがあつと声を上げたのは、いうまでもありません。電線に残されていた歯の形は、まったくゼロ禅師が言うとおりだったからです。

「じゃあこれは、見えず猫がしてくれたことなんですか？」

「そうだろうね。妖怪の本能で火災を予知し、この部屋の中で待ちかまえていたのだろう。教室からいなくなったのは、それが理由さ。

そしてついに火事が起こったとき、電線をかじって電気を止め、被害を最小限にいくとめてくれた」

「では今、見えず猫はどこにいますか？ まさか焼け死んでしまったんじゃない？」

「ははは、妖怪がそう簡単に死ぬものですか。そのうちにひょっこりと戻ってくるじゃろっ。百年近く住んでいるのだから、この学校

はもうやつの家なのじゃよ」

ゼロ禅師の言うことは正しかったようです。数日後、寺へ、スラムの手で手紙が届けられました。手紙を託したのはもちろんミチコです。

前略、ゼロ禅師さま

おっしゃったとおり、昨日のお昼ごろ、『見えず猫』はひよっこりと教室へ帰ってきてくれました。ご記憶でしょうか。いなくなった日に当番だった洋子のひざの上へです。

数学の授業中、洋子が突然悲鳴を上げたのでみんな驚いたのですが、「見えず猫が戻ってきた」との彼女の一言ですべて決着がつかまりました。

火事を小さく防いでくれたお礼を込めて、みんなで背中をたくさんなでてあげました。

これからもずっと、『見えず猫』は私たちの学校で暮らし続けることでしょう。禅師のご尽力に感謝しています。

かしこ

不思議そうな顔でこちらを見ているので、ゼロ禅師はススムに事情を話すことにしました。

話を聞き終えたとき、ススムが興味深そうに目を丸くしたのは、
いつまでもありません。

転校生の怪異 (妖怪禅師)

きっかけは、ススムの何気ない言葉をゼロ禅師が耳にしたことでした。

「竜子さんと一緒に登校する日には、普段よりも5分早く学校へ着くことができるんだよ」

猫と遊んでいた手を休め、ゼロ禅師は顔を上げました。

「それはどうということなんだね？」

「朝、電車で駅に着くとするでしょう。駅から学校まで歩いて15分。ところが竜子さんと一緒だと、たった10分しかかからないんだ。何回も計ったから間違いないよ」

「竜子さんとは誰なんだね？」

「上級生の女の子。3年生だよ」

「その子がどうしたって？」

「とても美人だから、学校中で評判なんだ。転校生なんだけど、あんな美女は見たことがないって、最初のうちは休み時間のたびに教室の前が黒山の人だかりになった」

「他の女の子たちはおもしろくないじゃろうな」

「でもアイドルをいじめて男子の反感を買うのが怖いから、意地悪

はしていないみたいだよ。それでこの竜子さんはね…」

「うん」

「学校の行き帰りが、よく僕と一緒にいるんだ」

「ほっ」

「そのとき気がついたんだ。竜子さんと一緒に歩くと、いつもの道がとても短くなる」

「そんな美少女と一緒にでは、そうだろうな」

「そういう意味じゃなくて、本当に道中が短くなるんだよ。何回も計ったんだから。いつもは15分かかる道が、竜子さんと一緒の日はたったの10分しかかからない。」

駆け足をしたり、早足で歩いてるんじゃないんだよ。交差点の信号機がいつもすぐに青に変わるから、途中で立ち止まる必要がなくなるんだ」

「なんだって？」

「僕の学校のそばには大きな道路がいくつもあるでしょう？ 普段なら、その信号待ちにかなり手間取っちゃう。」

「だけど竜子さんと一緒だとそれが無い。赤でも黄色でも、竜子さんが近づくとすぐに信号が青に変わるんだ。自動車が驚いて、急ブレーキを踏むこともあるくらいだよ」

「それはなかなか面白い話じゃな」

「どうして？ 禅師は修行したお坊さんなんでしょう？ 美人にも女の人にも興味はないんじゃないの？」

「おやおや、わしが竜子さんに興味を感じてはいかんかね？」

「だってさ……」

「中学3年といえば15歳か。来年にはもう結婚できる年齢じゃな。どうだろう。この寺へ嫁に来てはくれんかな？」

「何をバカなこと言ってるのさ」

「ははは、冗談としても出来が悪かったかな」

この一言で二人は顔を見合わせてケタケタと笑い、この日の会話はこれで終わったのです。

だけど翌朝、学校近くの駅のホームで、ススムは口をあぐりと開けることになりました。なんとそこにはゼロ禅師が立っているではありませんか。

「やあススム君、おはよう」

「禅師、こんなところで何をしてるの？」

「いつか君は、毎朝8時ちょうどにこの駅に着くと言っていたじゃないか。竜子さんとはどんな美人なのか、お顔を拝ませてもらおうと思ってるね」

「スケベじじい！」

だけどゼロ禅師はかまわず笑っているのです。ススムに何ができるといふのでしよう。そのまま歩き始めるしかなかったのです。

いつもの通り、童子の姿はすぐに見つけることができました。ススムを見て少し微笑みましたが、ゼロ禅師の姿にも気づいたようです。

ゼロ禅師が口を開きました。

「お久しゅうございます。あの日のお社での出来事は、今でも昨日のことのように覚えております」

ススムは思わず目を丸くしたのですが、両手を胸の前で合わせ、童子にむかってゼロ禅師は深くお辞儀をするではありませんか。

そして童子はこう答えたのです。

「供え物のまんじゅうを盗みに忍び込んできたときのことか？」

「おっしゃってくださいますな。供え物を盗むなど、われながらなんとという悪さであることか。その罪深さには、今でも深く恥じ入っております」

「気にするな。あれは私が与えたも同じだ。おまえは気づかなかつたであろうが、私は笑って眺めていたのだぞ。腹をすかせた小さな子供に、誰が盗みをとがめだてしよう」

「恐れ入ります」

「それはそうと野良猫たちの話では、私の石像は先ほど例のトラックに積み込まれたそうだ」

「おお、それは本当によい知らせでございますな」

ここでやっと、ススムは口を開くことができたのです。

「何がどうなってるの?」

ゼロ禅師が説明してくれました。

「ススム君、恐れ多くも君はいま、この町を治めている竜神のお嬢様とお話ししているのだよ」

「お嬢様? 竜神? 竜子さんは神様なの?」

「いやそうではなく、むしろ妖怪に近いお方だ」

「えっ?」

次の瞬間、セーラー服を着た少女の姿はまるで風に吹き散らされる雲のように消え去り、まったく別のものが姿を現したではありませんか。

それはあまりにもまばゆく、ススムは心臓をグイと強くつかまれたような気がしたのです。

胸の動悸がおさまり、やっとススムが口を開くことができるよう

になったのは、何秒もたってからのことでした。竜神の娘は、いつの間にか元の童子の姿に戻っていました。

童子があれだけまばゆい光を放っていたというのに、まわりをゆく人々は何も気づいた様子ではないことが、ススムにはとても不思議に感じられました。

「ねえ禅師、その野良猫って、いったい何の話なの？」

「ススム君、わしがこの童子様と出会ったのは、君が生まれるよりもずっと前のことだ。わしの家の近所にお社があり、そこにまつられていた。

ところがあるとき、困ったことが起きた。泥棒が入り、なんと童子様をかたどった石像を盗み出していったのだよ」

「へえ」

「警察は捜査をしたが、犯人はようとして知れず、もちろん石像の行方もわからなかった」

「どこかへ売られたんじゃないの？」

次に口を開いたのは童子でした。

「石像を買い取ったのは、ある金持ちの男だった」

「へえ」

「身寄りのない孤独な老人であった。社で私の像を見かけたおり、

死んだ自分の娘の面影を見つけ、そばに置きたくなったらしい。それで賊に金をやり、盗み出させたというわけだ」

「悪い奴だね」

「私はそうは思わなかった。老い先短い者だ。ほんの数年、その老人の屋敷の中に飾られることになっても、どうということはないではないか。だが何週間か前、老人はとうとう死んだ」

「うん」

「すると賊たちが再び動き始めたではないか。屋敷から私の像を持ち出し、また誰かに売りつけようという魂胆らしい。だから私は、猫たちに屋敷の見張りを頼んだのだよ」

「それでとうとう、その返事があったということなの？」

「そのとおり。像を積んだトラックが、間もなくこの場所を通過するとうとうとね」

「どうやって像を取り戻すの？」

「これを」

童子は腕を差し出したのですが、その手の中には何もないので、ススムはきよとんとした表情で見つめ返すことになりました。

「何も見えないよ」

「人の目には見えぬほど細いが、鋼よりも強い糸を私はこの指につ

まんでいるのだよ。さあススム、手におとり。糸のはしを私は街路樹に結び付けておいた。あそこにある背の高い木が見えるだろう？」

「あの木？」

「そうさ。さあ糸をおとり」

吹き飛ばしてしまわないように気をつけながら、ススムはそつと指につまんだのです。

指と指の間に何も感じることはできませんが、引くと反発して引き戻される感じがありますから、見えなくとも、そこに糸が存在するのは事実のようでした。

「さあトラックが来るぞ」

その言葉どおり、黄色い車体が近づいてくるのが見えています。箱のように四角い形をして、あの中に像がおさめられているのです。よう。

「さあススム、糸を引くのだ」

ススムが言われたとおりにしたのは、いつまでもありません。

メキメキメキ。

大きな音を立てて、街路樹が突然倒れ始めたではありませんか。根元でポキリと折れようとしているのです。

力を込めたわけではなく、ススムはただ軽く手を引いただけです。

でも竜神が使う道具には、不思議な力が込められているのかもしれない。

トラックの運転手はひどく驚いたに違いありません。倒れる木に行く手をはばまれ、やむなく急ブレーキをかけたのです。

ただど間に合いませんでした。トラックは衝突し、幹の上に乗りに上げてしまったのです。

ススムが声を上げました。

「やったあ」

トラックを捨て、運転手はもう駆け出そうとしています。誰が連絡したのか、遠くからもうパトカーのサイレンが聞こえてくるではありませんか。

ススムは思わずため息をつきました。朝っぱらから経験する出来事としては、スリルがありすぎたかもしれせん。

「ねえ竜子さん…」

ただど彼女の姿はどこにもなかったのです。いくらキョロキョロしても、目に入るのはゼロ禅師の姿だけなのでした。あの不思議な糸も、いつの間にか彼の手を離れたようです。

ゼロ禅師が口を開きました。

「ススム君、急がないと学校に遅刻してしまうのではないかな？」

「ああ、そうだった」

カバンをかかえて、ススムが駆け出したのはいうまでもありません。

ススムの頭の中を、いろいろな考えが飛び回っていました。

竜子に会うことはもう二度とないだろうということは、なんとなく理解していました。あれは石像を取り返すために、ここ数日の間、竜神の娘が仮に取っていた姿にすぎないのですから。

だけどススムは、悲しいとは思いませんでした。確かに大変な美少女であり、道路の信号機までが敬意を表して進路を譲ったほどなのです。文字通り、ススムとは住む世界が違うのでしょうか。

学校に着いたススムを、もう一つの驚きが待っていました。

校内で誰に話しかけて『竜子』という名を出しても、「それは誰のことだい？」という答えしか、もはや返ってこなかったのです。

教室にある座席表にだって、竜子の名を見つけることはできませんでした。

人々の記憶からだけでなく、すべての書類からも、竜子の存在は完全に消し去られていたのです。

竜子が存在していたことを知っているのは、今ではススムとゼロ禅師だけなのに違いありませんでした。

不思議な眠り (妖怪禅師)

ミチコが突然、不思議な病気にかかって意識を失ってしまったのは、ある放課後のことでした。

何かの理由で、ミチコは同級生たちと一緒に学校の講堂へ集められていたのです。でも彼女たちを呼び集めたのが誰なのかは、奇妙なことに誰も知りませんでした。

しかしいくらたっても講堂から出てこないものだから不審に思い、先生たちは様子を見にゆきました。

そしてイスに腰かけたまま、全員がすやすやと眠っているのを発見したのです。

両目を閉じ、いかにも安らかな眠りでしたが、声をかけても肩を揺らしても、どうしても起こすことができませんでした。

本当に1時間たっても2時間たっても、彼女たちは目を覚まさなかつたのです。

ついに救急車が呼ばれ、病院へと運ばれましたが、お医者さんにも手の打ちようがなく、目覚めさせることも、不思議な眠りの原因を見つけることもできなかつたのです。

20人の女の子たちはひとまとめにされ、ベッドを並べて一つの病室へ移されました。だけどやはり、いくら待っても目を覚ます気配はなかつたのです。

知らせを聞いてススムが驚き、心配したのはいうまでもありません。家を飛び出し、ゼロ禅師の寺へと駆けていったのでした。

しかしゼロ禅師にとっても、何もかもがはじめて聞く話でした。だから野良猫たちを町に放し、情報を探らせることにしたのです。

猫たちは町のすみずみへと散らばり、ありとあらゆる場所に入り込んで、耳をそばだてることができます。

しかし残念なことに、手がかりはなかなかありませんでした。ススムは毎日、寺へ顔を出しましたが、ゼロ禅師は悲しそうに首を横に振るばかりだったのです。

そんなある日、ススムはおかしな話を聞きました。知らない人同士が話しているのが、電車の中で偶然耳に入ってきたのです。

「あなた、あの蝶の話を聞いたかい？」

「蝶って、昆虫の蝶のことかい？」

「そうさ」

思わず息を止め、ススムは耳をそばだてることになりました。

やがて電車が駅に着くと、ススムがゼロ禅師の寺へむかって駆け出したのは、いうまでもありません。

「ススム君、そんなに急いで何かニュースかな？」

電車の中で耳にした内容を、ススムは語り始めたのです。ゼロ禅

師も興味を持ったようでした。

「ススム君、美しい銀色の蝶だって？　大きさはどのくらいだと言ったかな？」

「人間の手のひらと同じくらいだったらしい。かなり大きいよね。羽根の表面がまるで鏡のようにキラキラ輝いてるんだってさ」

「その人は、そういう蝶が家の屋根にとまっているのを見たというんじゃない？　まるで集会でもしているかのようにな身を寄せ合って」

「うん」

「その人は蝶の数を数えてみなかったのかい？」

「それがちょうど20匹いたってさ」

「それからどうした？」

「その人が見ている目の前でサツと羽ばたき始め、蝶たちはあつという間にどこかへ飛んでいってしまったそうだよ。まるで行儀のいい小学生みたいに、きちんと一列に並んでたって」

普段から赤いゼロ禅師の顔が、興奮でさらに赤くなったのは、いうまでもありません。すぐに書庫へと急いだのです。

このあとの数日間、ゼロ禅師は書庫にこもりきりで、外へ出てくることがほとんどありませんでした。

学校がすむとススムは毎日、寺へ食べ物を届けていました。今も

ススムはインスタントラーメンを運んでいったところで、丼を手に取り、ゼロ禅師はもう食べ始めています。

「ねえ禅師、お姉ちゃんたちの目を覚まさせることができると思う？」

「できるわ」

「どうやって？」

「うーん、『どうやって』かはまだわからないが、『いつ』かはわかっているよ。明日の夜ね」

「どうして？」

「ススム君は、夜空の月のことを知っているね？」

「うん」

「明日の夜、夜空には満月が浮かぶことになるのだよ」

「満月って、あのボールのように丸いやつだね。白く輝いてる」

「そうさ。月光には実は、人や動物を深く眠らせる力があるのだよ。強い月光を受けるとどんな人だって、犬や猫だっていつしか眠くなってしまう」

「へえ」

「その月光が最も強くなるのが満月の夜なのさ。それがつまり、明

日の夜ということだよ」

「ふうん」

「鏡を使って月光を集めれば、どんなに強力な妖怪でも、どんなに巨大な怪物でも、あつという間に眠らせることができる。ただそのためには、光を完璧に反射する良質な鏡が何枚も必要になるがね」

「でもそれが、お姉ちゃんたちとどう関係あるの？」

「残念なことだが、それはまだ話せる段階ではないのだよ。野良猫たちからもまだ返事がない。」

しかしススム君、今日はもう遅いから家へお帰り。お父さんやお母さんが心配するといけないからね。何かわかったら一番に知らせるよ」

もちろんススムは言われたとおりにしたのです。

日の暮れかけた町を歩きながら、ときどき空を見上げ、ススムが月にむかって思いをはせたのは、いうまでもありません。

ゼロ禅師からとうとう連絡があったのは、真夜中があと数時間に近づき、日が暮れて暗くなりかかったときのことでした。

ススムの部屋の窓は少し開けてあり、使者はそこから入ってきたのです。寺で飼われている白い猫で、首輪には手紙がはさみ込んでありました。

ススム君

今夜、真夜中のかつきり2時間前になったら、この猫と一緒に外へ出たまえ。

道案内はこの猫がしてくれることだろう。

ススムの胸がドキドキし始めたのは、いうまでもありません。

ついに手紙に書かれていた時刻になりました。

しっぽをピンと立て、猫はさつきからススムの前を歩き続けています。真夜中の町はもちろん真つ暗ですが、猫の白い毛ははつきりと浮かび上がって見ることができました。

1時間近く歩き続け、自分がどこにいるのやら、ススムはもうさっぱりわからなくなっていたのですが、突然波の音が聞こえてきたときには、驚きを感じないではいられませんでした。

背伸びをして目をこらすと、キラキラ輝く水面を前方に見ることができました。

「海だ」

ゼロ禅師の姿はすぐに見つけることができました。海岸に立ち、海を眺めていたのです。

猫の鳴き声とススムの足音に気づき、ゼロ禅師は振り返りました。

「やあススム君、来てくれたね」

「お姉ちゃんはどこ？」

「それは今からさ。ここへ来てあそこをござらん。とうとう始まったようだよ」

ゼロ禅師と並んで、ススムも空を見上げることになりました。真夜中の真っ暗な空ですが、それでもはつきりと見ることができたのです。

高度はよくわかりませんでした。

けれど数百メートルはあるに違いなく、そんな遠くでもあれだけ光を反射して輝くことができるのです。あの蝶の羽根は一体どんな材質でできているのだろうか、ススムも不思議に感じないではいられませんでした。

とても美しい眺めなので、しばらくの間、二人とも見とれていました。輝く20個の点が空で踊っているのです。

「ねえ禅師、蝶たちはあそこで何をしているの？」

でも次の瞬間、ススムは驚いて後ろを振り返ることになりました。不意に背後から声をかけられたからです。

「蝶たちは羽根を鏡のように用いて、海底にいるロクに満月の光を送っているのさ」

目を丸くして、ススムは声の主を見つめることになりました。そ

れにしても、なんとという奇妙な人でしょう。

この人の顔は、一度見たら絶対に忘れないと表現したくなるものでした。

肌は浅黒く、ギョロリとした大きな目玉がなんだかくつつきあって、まるでフクロウそっくりではありませんか。もはや若くはない女の人ですが、ススムは思わず吹き出しそうになったのです。

だけどこの人は、怒った様子もなく微笑んでいます。服装から見て、どこかの教会の修道女のようにでした。

ゼロ禅師が口を開きました。

「やはりおまえさんのしわざだったか」

女も口を開きました。

「いずれあんたがしゃしゃり出てくるんじゃないか、と私も思っておったよ」

ススムはゼロ禅師を振り返りました。

「禅師はこの人を知ってるの？」

だけどその質問に答えてくれたのも、やはりこの女だったのです。

「知っているも何も、かつてゼロ禅師は私に恋文をよこしたことがあるのよ」

「本当に？」

ゼロ禅師は恥ずかしそうに頭をかきました。

「古い話はもうよいではないか。それよりも、もっと大事なことを話そう」

この修道女の名はシメジというのだと、ゼロ禅師は紹介してくれました。さっそくススムは口を開いたのです。

「シメジさんは、あの蝶とどういう関係があるの？ さっき言ったロクってなに？」

「ああ、ロクというのは古い伝説に登場する巨鳥で、翼を広げたその大きさをや、ジェット旅客機と同じくらいもある。そういうとてつもない怪物なのさ」

「そんなに大きな鳥が本当にいるの？」

「いるともさ。10000メートルもの上空をすみかとするから人々が知らないだけで、ロクは一生をその高さで過ごすのだよ。卵だつて空の上で産んでさ」

「へええ」

「それがあるときロクの子供が一羽、なぜか群れからはぐれてさ。このあたりの空をふらふらと飛んでいた。そしてなんと飛行機と衝突してしまつたじゃないか」

「飛行機は墜落したの？」

「もちろんさ。ロクと飛行機は共にこの海に落ち、大きな水しぶきが上がった」

「そんな事故の話、僕は聞いたこともないよ」

「第二次世界大戦の最中に起こったことだからさ。日本を攻撃に来たアメリカ軍の爆撃機と衝突したのだよ。ロクは気を失い、今でもこの海の底に眠っているのさ」

「死んだんじゃないの？」

「ロクとはとんでもなく強い妖怪なのだよ。水中で20年や30年息を止めていたって、死んだりするもんか。だが一つ困ったことがある」

「何なの？」

「爆撃機に積んであった爆弾が、今でもロクの体に引っかかっているのだよ。目を覚ましたロクがいつ海から飛び出し、空へ帰ろうとするかわかったものではない」

「それが困ったことなの？」

「ロクが飛び立つのはかわらない。しかしそのとき爆弾が外れて、万が一にも町の上に着るようなことがあったらどうするね？」

「ははあ」

「だからロクには、もう何十年か眠ったままでいてほしいのさ。海

水がしみこんでサビ付き、爆弾が完全に爆発力をなくしたと確信できる時までね」

「それはどうやって調べるの？」

「つい先日、潜水夫を雇って、もぐって見てきてもらったのさ。爆弾はまだしっかりしていたそうさ。」

それだけではないよ。潜水夫の報告では、ロクがもうすぐ目を覚ますきざしがあるということだった。これには私もあわてたよ。爆弾をかかえたまま飛び上がられては、かなわんからな。

だからもう一度ロクを深く眠らせる必要があった。そこであの蝶たちの出番ということさ」

「それって、お姉ちゃんたちのこと？」

「とてもよい娘たちだ。事情を話して協力を求めると、すぐに首を縦に振ってくれた。」

私はミチコたちの魂を借り受けたのだよ。肉体の外に出るとき、魂は蝶の形を取ることを知っているかい？

おや知らない？ ススム、あんたが見た蝶は本当の昆虫ではなく、ミチコと同級生たちの魂そのものなのさ。

魂の蝶はキラキラと輝く美しい羽を持ち、とても強く光を反射することができるんだ。海底で眠っているロクめがけて満月の光を送り込むのに、これほど役に立つものはない。

それはそうと…」

シメジの言葉は、ここで止まってしまいました。目の前の海に、突然大きな波が立ったからです。

激しい水音が聞こえ、白い泡が海面をおおい始めていることがわかります。もちろんそれが、蝶たちが舞っている場所の真下であるのは、いうまでもありません。

ススムは思わず声を上げました。

「あれは何なの？」

「しまった遅すぎたか。ロクが目を覚ましてしまったようだ」

次の瞬間、海面にはもっと大きな変化が起こりました。波が割れ、まるで巨大なドアのように左右に開いたのです。ロクが海底を離れ、水面へとやってこようとしているのに違いありません。

伝説の巨鳥の姿を、ススムは始めて目にするようになりました。

ロクの巨大さはシメジの言ったとおりで、それが月の光を受けて輝きながら、水面に姿を現したのです。ススムたちのもとへ水しぶきがかかるほどでした。

シメジが声を張り上げました。

「蝶たちはどうなった？」

「わからん。もう上空にはおらんぞ」

ゼロ禅師の声にススムも上を向くと、本当にその通りだったのです。どこへ消えてしまったのか、その姿はありませんでした。

「禅師ごらん。ロクはやはり爆弾を腹にぶら下げておるぞ」

「ええい、なんてことだ」

その光景には、ススムも思わずぞつとしないではいられませんでした。ソーセージのように細長い形をした爆弾を、ロクはおなかにくっつけているのです。金具のどこかが羽毛に引っかかっているのでしょうか。

しかしススムたちには、どうすることもできませんでした。あつという間にロクは空へと舞い上がってしまったのです。

聞いたこともない音を立てて、ロクは三人の頭上を通過してゆきました。

長く海中にある間に、金属にサビが進行していたのかもしれない。ロクが翼をはためかせる衝撃が大きすぎたということもあるでしょう。3人の見ている前で、爆弾がグラリと傾いたではありませんか。

次の瞬間、ススムは心臓が凍り付いてしまいそうな思いを味わったのです。爆弾が外れ、すうっと空中にただよい出るのが目に入りました。

一瞬は風に乗るかと思えたのですが、やはり重力には勝てません。爆弾はすぐに落下を始めました。

重い荷物から自由になり、ロクはせいせいしていたかもしれない。さらに力強く羽ばたき始め、さっと頭を東へ向けたかと思うと大きな鳴き声を一度だけ上げ、太平洋のかなたへと姿を消したのです。

爆弾はどうなったかですって？

もちろんまっすぐに海へと落ちていきました。ススムたちは思わず地面に伏せることになりましたが、幸い耳に届いたのは着水する音だけで、結局爆発はしなかったのです。

見かけによらずサビの進行が早く、内部の機器を完全に故障させていたのかもしれない。火薬も信管もすでに役立たずだったわけです。

ススムたちは、ほっと息をつくことができました。

すぐにシメジとは別れ、ゼロ禅師とススムは病院へ急ぎましたが、すでにミチコたちは目を覚ましていました。蝶の形をしていた魂が、体の中に戻ってきたからでした。

白い洋服の怪異（妖怪禅師）

ある日、一人の女の子がゼロ禅師の寺を訪ねてきました。

ススムもその場において話を聞くことになったのですが、名前を久美子といいました。

久美子は一週間後に、ススムが通っている学校へと転校することが決まっていたのですが、彼女の相談はそれに関わる内容だったのです。

「ススムさんと同じ学校へ通うようになって、私は制服を着ることができないんです」

意外な言葉だったので、ススムは思わずゼロ禅師と顔を見合わせました。

「どうしてなの？」

久美子は説明を始めたのですが、どうにも信じられない内容だったので、ススムもゼロ禅師ももう一度顔を見合わせないではいられませんでした。

ゼロ禅師が口を開きました。

「お嬢さん、疑うわけではないが、すぐには信じられない話なのじやが」

「そうおっしゃるだろうと思って、実験するために白い服を持って

きました。どこかに着替える場所はありませんか？」

いったん隣の小部屋に消えた久美子がまた戻ってくるには、2分もかかりませんでした。あっさりとした真つ白なワンピースに着替えています。

「本当に私は、5分間と白い服装をしていることができないんです」

ゴトンゴトンと天井裏から小さな音が聞こえてきたのは、このときのことでした。何かが勢いよく走り回っている足音です。

ゼロ禅師がつぶやきました。

「またネズミが天井裏で遊んでおるな」

そして、そのときそれが起こったのでした。

ボタンという音とともに板が外れ、なんと突然、天井に穴が開いてしまったのです。10センチほどの小さな穴ですが、ネズミが通り抜けるには十分ではありませんか。

3人の目の前で、天井からネズミが落ちてきたのです。

運悪く真下にいたのは久美子でした。キャツと飛びのこうとしたのですが一瞬遅く、ネズミは彼女の肩に着地してしまいました。

ススムも驚いて声を上げたのですが、ネズミはサツと床に飛び降り、気がついたときには、しっぽの先が物影に姿を消すところだったのです。

顔を上げて、ススムはもう一度声を上げることになりました。

なんと久美子の肩から背中にかけて、真っ黒な足跡が残されていたではありませんか。ネズミがつけたものに違いありません。小さなしるしが点々と続き、これでは真っ白な服が台無しです。

ため息をつきながら、久美子が口を開きました。

「だから私は、白い服を着ることができないんです。着て五分もすると必ず何かが起きて、シミや汚れをつけられてしまいます。」

ススムさんの学校では、女の子は真っ白な制服を着るのでしょうか。転入したその日から私がどんな目にあうか、想像するのは簡単でしょうか？」

ゼロ禅師が言いました。

「これまでも白い服を着たときに、お嬢さんの身にどんなことが起こったのか、よかつたら聞かせてくださらんか」

「走ってきた自動車のドロ水をかけられるなんて、まだいいほうです。なんでもない場所ですまずいて水たまりに落ちてしまったり、チヨウが卵を生みつけていったことだってありました。」

一番ひどかったのはカキの木の下を通ったときで、突然実が何十個も落ちてきて、体中が真っ赤に染まってしまったほどです」

「だから白い服を着ることができないというのかな？」

「はい」

話を終え、汚れていない服に着替えて久美子が帰っていったあと、ゼロ禅師はまたいつものように書庫にこもる気になったようです。ススムもついていきました。

「ねえ禅師、女の子の服を汚してしまう妖怪なんて存在するの？」

「わからん。わしも聞いたことがないよ」

この日、ゼロ禅師は書庫で長い時間を過ごしたのですが、残念ながら何の成果も得られませんでした。

そうやって日が過ぎていったのですが、いくら調べても、やはりゼロ禅師は何の手がかりもつかむことができませんでした。そしてとうとう、久美子が転入する日が来てしまいました。

久美子はススムの同級生になったのですが、その姿を見て、ススムは目を丸くしないではいられませんでした。

久美子はもちろん白い制服を身につけています。でもその指には、小さな指輪が光っているではありませんか。

ススムはすぐに思い出すことができました。あれは『魔よけの指輪』なのです。いつぞやゼロ禅師が見せて、使い方を説明してくれたことがあったのです。

あの指輪は、ゼロ禅師が久美子に与えたものなのでしょう。

魔よけの指輪は銀できていて、表面には呪文が刻み付けられています。かなり強力な呪文なのだそうで、「たいがいの妖怪なら追

い払うことができるのじゃよ」ということでした。

確かに強力な指輪なのかもしれません。久美子が転入してから数日すぎても、何も起こりませんでした。もちろん彼女の白い制服が汚されてしまうこともなかったのです。

しかしそれも、お調子者のクラスメイトが久美子の指輪に興味を持ちつまでのことでした。

ある退屈な授業中、その生徒は気がついたのです。

「あら？ 久美子の指に光っているあのきれいな指輪は何かしら」
運悪く久美子はよそ見をしていました。隣の席の生徒が手を伸ばし、サツと指輪を引き抜かれたことにも、まったく気がつかなかったのです。

指輪がないことに久美子が気づいたのは、数秒後のことでした。自分の手に何気なく視線を落とし、青くなったのです。

顔を近づけて、隣の席の生徒が指輪をしげしげと眺めているのが目に入りましたが、後の祭りでした。

もう何年も前から、悪霊は学校の地下に潜んでいました。そして地上へ現れるチャンスをとねらっていたのです。そのチャンスが、このとき訪れたわけでした。

突然、地震のように大きく教室が揺れ始め、先生も生徒も悲鳴を上げることになりました。

机やイスがガタガタと鳴り、教科書やノートも床にぶちまけられてしまったのです。

もちろん本当の地震ではありませんでした。隠れていた悪霊が姿を現そうとしていたのです。

やがて揺れは収まりましたが、まだ一つだけ震えているものがありました。

黒板です。黒板だけはまだカタカタと音を立てていました。

壁からはがれ、黒板がついに床に落ちてしまうのに時間はかかりませんでした。ボタンと大きな音が校舎中に響き渡ったのです。

黒板がなくなると、あとにはむき出しの壁が姿を現しました。そこになかば埋もれている者の姿を目にしたとき、教室から逃げ出さないでいられる人は一人もいなかったのです。

出口のドアへと向かって、全員が駆け出すことになりました。悲鳴を上げながら走ってゆきました。

しかし逃げ遅れた人もあったのです。

それがススムと久美子で、他の人たちについて駆け出したのですが、あと少しというところで長い腕がサッと伸びてきて、鼻先でドアを閉められてしまったのです。

ドアを閉めたのは、骨っぽいというよりも、もうほとんど骨しか残っていない腕でした。長い年月のうちに、皮膚や筋肉はなくなっていたのです。

崩れ落ちた壁の中から姿を現し、ススムと久美子の前に立ちはだかったのは、なんと全身が骨ばかりのガイコツ女だったではありませんか。

これが女だというのは、まだ体にまとわりついている衣服からわかったことでした。大変古びていて、江戸時代の着物に違いありません。

ガイコツ女の顔にも目や鼻はなく、ただの穴になってしまった目で、ススムたちを憎々しげににらみつけているのです。

ススムと久美子が身をひるがえして、教室の後ろにあるもう一つのドアへと向かったのは、いうまでもありません。

しかしおかしなことが起こったのです。まるで鍵でもかけてあるかのように、押しても引いてもドアはびくともしないではありませんか。

二人は閉じ込められてしまいました。久美子が声を上げたのは、このときのことでした。

「ススム君、あの妖怪は何なの？」

「そんなの僕も知らないよ」

まるで鬼ごっこのように、二人は教室の中を逃げ回るほかなくなっていました。

窓から逃げ出すことはできないかと、もちろん何度も試したので

すが、ドアと同じように不思議な力でロックされ、どの窓もまったく動かないのです。

そしてとうとう、久美子はガイコツ女に捕まってしまいました。手首をつかまれ、空中へ高く持ち上げられてしまったのです。

ガイコツ女は背が高く、十分な力もありました。いくら足をバタバタさせても、久美子は逃げ出すことができません。

恐ろしさと苦痛で、久美子は悲鳴を上げました。なんとかしなくてはなりません。

だけどススムにも、みずからガイコツ女に飛びかかってゆく勇氣はありませんでした。その姿はそれほど恐ろしく、腕力でかなうような気はともしなかつたのです。

でも何もしないわけにはいきません。ススムは掃除道具入れの中をあさり、長いホウキを剣の代わりにし、手近にあったイスを盾の代わりに手に取ることにしたのです。

その次の瞬間、とても奇妙なことが起こりました。

「やあやあ、なかなか勇ましい格好じゃないか。男の子はそうじゃなくちゃ」

突然、聞き覚えのない声が教室の中に響いたではありませんか。驚いて振り返ったのは、ススムだけではありません。

いつの間に入ってきたのか、机の上に腰かけて、楽しそうに足をぶらぶらさせている男の子と目が合うことになりました。

もちろん見たことのない顔で、目を輝かせながらススムたちを眺めているのです。

ススムの声は少し震えていました。

「君はだれ？」

「オイラかい？ オイラはザシキワラシといってね。この校舎に何十年も前から住み着いているのさ。」

いいことをするわけじゃないから守り神ではないが、悪いこともしないから疫病神でもないな」

ザシキワラシは6、7歳に見えますが、昔風の服装をしています。模様のある紺色の着物姿で、ワラのぞうりをはいているところなど、どう見ても江戸時代の感じではありませんか。

しばらくの間、ザシキワラシは機嫌よさそうに笑っていましたが、やがてガイコツ女を振り返り、口を開きました。

「なあハナよ。オイラは今までに何回も言ったじゃないか。昔のうらみなど忘れて、その女の子は放してやりなよ。もう十分怖がらせただろう？」

ガイコツ女は答えました。

「いや、まだだ。この娘を八つ裂きにするまで、私のうらみが晴れることはない」

ザシキワラシは苦笑いをしました。

「おまえもしつこいねえ。家宝の皿を割った罪でおまえが切り殺されたのは、もう300年も昔のことだろう？ 死体は屋敷の庭に埋められたのだったな」

「だから私は、300年間この場所で待っていたのだ。その300年間に屋敷はなくなり、その上には学校が建てられた。

そして今、憎いあの男の子孫が転入してきたのだ。この機会を逃すことなどできるものか」

「やれやれ。ススムよ、聞いてのとおりだ。ガイコツ女はうらみに凝り固まっているのだよ」

久美子が叫びました。

「300年前のことなんか私は知らないし、関係ないわ」

「ええい、うるさい」

腹を立てたらしく、ガイコツ女は久美子を激しく揺さぶり始めたではありませんか。それを見かねたのでしよう。ザシキワラシが知恵を出したのです。

「なあハナや、そんなに痛がっているのだから、とにかく久美子は一度放しておやり。そう、それでいい。」

ほら久美子も、そんな目でオイラを見るんじゃないよ。白い服を着ないようにと、あれだけ何回も警告してやったじゃないか。あれ

は、この学校の白い制服は絶対に着るなという意味だったんだ。気がつかないそっちが悪いんだよ。

さあさあ、とりあえず久美子は部屋のすみに下がっておいでよ」

ガイコツ女はしびれを切らしました。

「ザシキワラシ、言いたいことがあれば早く言わぬか」

「どうだねハナ、この勝負は別のやり方でつけようじゃないか。あんたは腕相撲に自信はあるかね？」

「ふん、腕力で私と競おうというのかい？ ああ、腕相撲で勝負するのなら、私も文句はない」

「では決まりだな。ススムと久美子もいいね。日時は今夜の真夜中、場所はゼロ禅師の寺としよう。あの寺はさびれているから、いつでも空いているさ」

「しかしザシキワラシ、久美子の命をかけて、いったい誰が私と腕相撲の勝負をするというのだ？」

「そのことかい？ それは行きがかり上、ススムということだろうねえ。ススムもそうは思わないかね？」

もちろんススムはイヤだったのですが、断ることのできる雰囲気ではありませんでした。話はそのまま決まってしまったのです。

ザシキワラシとガイコツ女が姿を消すと、授業も何もかも放り出して、すぐにススムはゼロ禅師の寺へと駆けてゆきました。

話を聞き、ゼロ禅師は表情をくもらせました。

「うーん、それは困ったことだねえ。ザシキワラシはいつたい何を考えているのだろうな」

「ねえ禅師、なんとかしてよ。もし負けたら僕はどうなるの?」

「いや、ススム君はどうもなるまいよ。久美子さんは殺されるじやろうが」

「じゃあ僕は負けるわけにはいかないじゃないか」

「ガイコツ女の体の大きさはどのくらいだと言ったかな?」

ススムはもう一度説明しました。ゼロ禅師はさらに表情をくもらせたのです。

「ススム君、そんなに大きな相手では、まず勝ち目はなさそうじやよ」

「だけどさあ…」

二人は相談を続けましたが、よい知恵はなかなか浮かびませんでした。

家に帰ってからススムは考え続けましたが、何のアイディアも出てきません。時間はあつという間にすぎ、気がつくとき真夜中が迫っていたのです。

ススムはそつと家を抜け出し、真つ暗な夜道を歩き始めました。真夜中までにゼロ禅師の寺へ着かなくてはならないのです。

ススムの足取りは重いものでした。

でもそのとき、不意にススムは何かの足音に気がついたのです。自分のすぐ後ろを誰かが歩いているようなのです。

驚いて振り返りましたが、ススムは口をぽかんと開けてしまいました。そこにいたのは巨大な妖怪ギツネだったので。

もちろん見覚えのない顔ではありません。ススムの家の柱の中に住んでいる妖怪です。

妖怪ギツネが話しかけてきました。

「どうしたススム？ おまえの足取りはなぜそんなに重いのだ？ 夕食のときからずっと元気がない様子だったので、気になっていたのだよ」

もちろんススムは、すぐに事情を説明しました。すると妖怪ギツネは笑い始めたではありませんか。

「なんだ、そんなことか。おまえはそんなことで悩んでいたのか」

「そんなことなんて簡単に言わないでよ」

「いや簡単なことさ。すべて私に任せておけばいい」

「どうするつもりなの？」

「おまえは何も心配することはないのさ」

「だけど…」

「寺に着いても、おまえは中へは入らず、ただ窓からのぞいていれ
ばいい。私がつまくやってやるよ。信用しろ」

その言葉を信用してよいのか自信がなかったのですが、それに従
う以外、ススムにはやりようがないのでした。言われるまま、寺の
中には入らず、そのまま外にいることにしたのです。

ゼロ禅師の寺へと着きました。

さっそく魔力を使って、妖怪ギツネはススムそっくりの姿に変身
してしまいました。

ススムは目を丸くしていますが、妖怪ギツネは意味ありげにウイ
ンクをし、ガラリと戸を開け、寺の中へ入っていったのです。

窓に近寄り、ススムはそっと中の様子をのぞき込みました。

偽者のススムはゼロ禅師となにやら言葉をかわしていますが、あ
まりにもそっくりな姿なので、疑われてはいないようです。

ザシキワラシや久美子の姿も見えています。不安のあまりでしょ
う。久美子はひどく青い顔をしています。

そしてもちろん、ガイコツ女もすでにやってきているのです。

部屋の中央にはテーブルが用意され、腕相撲の土俵として使われるようです。

ススムは息を殺していたのですが、ついに試合が始まるようです。テーブルに取り付き、偽ススムとガイコツ女とが向かい合ったではありませんか。

審判はゼロ禅師がつとめるようです。エイと号令をかけ、勝負が始まりました。

ところが意外にも、勝負はあっけなくついてしまいました。本当に1分もかからなかったのです。

なんと偽ススムは、あっという間にガイコツ女をねじ伏せてしまったではありませんか。まるでブルドーザー相手に腕相撲をしているかのように、ガイコツ女は手も足も出なかったのです。

これはとんでもない番狂わせでしたが、約束は約束です。屈辱に満ちた表情で負けを認め、ガイコツ女は寺を去ってゆくほかありませんでした。

ガイコツ女の後ろ姿を、ススムはほっと見送るようになりました。

やがてザシキワラシが口を開くのが見えました。

「なあゼロ禅師、久美子の命が助かったのは結構だが、今の試合には何か仕掛けがあったのではないかね？ ススムが勝つとはどうにも信じられん」

同じような表情で、久美子もうなずきました。

今こそ行動を起こすときでしょう。ガラリと戸を開け、ススムは部屋の中へ入ってゆきました。

ゼロ禅師たちがひどく驚いたのは、いうまでもありません。部屋の中に同じ顔の人間が二人いるのですから、無理もないことでしょう。

しかし次の瞬間、偽ススムは元の姿に戻ったのでした。長い体を猫のようにしなやかに動かし、妖怪ギツネは部屋の中を見回しました。

目を大きく丸くしていましたが、ゼロ禅師がとうとう口を開きました。

「おやキツネさん、あんたの仕業だったか。どうりで…。しかし助かったよ」

久美子も口を開きました。

「ええ、ありがとう。おかげで私は殺されずにすみました」

ザシキワラシが言いました。

「おやおや、これはあきれたね」

ゼロ禅師は妖怪ギツネを振り返りました。

「しかしキツネさんや、何かお礼をせねばならんな。何がいいかな？」

ところが妖怪ギツネは、なんだかそっけなかったのです。

「大したことじゃないさ。礼などいらぬ。」

さて、腹が減ったから私は家に帰るぞ。ススム、おまえも一緒に来い。私の背中に乗せてやるぞ」

「えっ？」

「遠慮などするやつがあるか。こい」

「あっ」

そでをくわえられ、気がついたときには、ススムはキツネの背の中の上にいたのです。

「よしススム、ちゃんとつかまれ」

あっという間にキツネは走り出していたではありませんか。開いたままだった窓を通り抜け、気がついたときには中庭にいたのです。

この夜はじめて、ススムは妖怪の背に乗って地を駆ける経験をしたのでした。

はじめは少し怖かったけれど、妖怪ギツネの足取りはしっかりと、地面の上をしなやかに飛んでゆくのです。

すぐに慣れ、風のように後ろへ走ってゆく景色をススムも楽しむことができるようになりました。

それは本当にすばらしい経験でしたが、これが妖怪ギツネのただの気まぐれではなく、いずれ彼を訪れることになる長い冒険の始まりであるとは、ススムは夢にも知らなかったのです。

地図の怪異（妖怪禅師）

いつものように寺の門をくぐって、ちょうど姿を見せたススムにゼロ禅師が話しかけたところから、事件は始まったのです。

「やあススム君、いいところに来たね。この人から大事な相談があるそうだから、君も加わらないかい？」

「うん」

部屋の中へと入っていきながら、ススムはその男を眺めることになりました。

まだ若く、30歳にはなっていないでしょう。髪は短く刈られて快活そうな感じですが、目の光がいやに鋭いところが気になります。

ゼロ禅師が口を開きました。

「それで田中さん、あなたは自動車に乗り、アメリカの砂漠地帯を走っていたのでしたな」

「そうです。一人旅の気ままなドライブというところでしょうか。ところがいつの間にか、私は道に迷っていたのです。

気がつくと、家も町もない岩ばかりの砂漠の真ん中にいたではありませんか。本当に何も無い場所で、どこかで曲がることを間違えたのに違いありません。

引き返そうと、私はアクセルをゆるめたのです。廃墟が目に入っ

たのは、そのときのことでした」

「廃墟ですと？」

「かなり大規模なもので、家の一軒や二軒ではなく、町一つがすっかり捨てられていたのです。道路や歩道もちゃんとあり、ポストや電信柱まで立っているのです。」

しかし車を止めても人っ子ひとりおらず、ただ風と砂ぼこりが吹き抜けてゆくだけでした。まったく、町が丸ごと廃墟になっているとしかいいようのない不気味な眺めだったのです。

でも驚きはそれだけではありませんでした。なんとこの廃墟は、建物の形といい配置といい、日本の町にそっくりだったではありませんか」

「アメリカでの出来事なのでしょう？」

「アリゾナ州の砂漠で経験したことです。だから意味がわからなくて、私も困っているのです」

「本当に日本の町だったのですか？」

「黒い瀬戸物の屋根瓦があり、白い土壁があり、一軒の例外もなく日本式の建築でした。私も日本人ですから、見間違うわけがありません」

「それからどうしました？」

「車を離れ、私は少し歩いてみたのです。あちこちにある看板の文

字に気がつきました。

それもすべて日本語で書かれていたのですよ。看板の文字を頼りに、食料品店や銀行、警察署まで見つけることができたほどです」

「それは不思議なことですな。写真は撮らなかつたのですか？」

「それが運悪くフィルムを切らしてしましてね。一枚も撮影できなかったのです」

「では写真は無理としても、他に何か手がかりはありませんか？」

するとポケットに手を入れ、田中は何かを取り出そうとするではありませんか。

ススムは思わず目をこらしたのですが、それは一枚の手書きの地図で、田中は机の上に広げたのです。

「雑なもので申し訳ないが、その町にいた間に、私がざっと描いたものです。おわかりですか？ここにこう道路があつて、両側に家々が並んでいます。ここが交差点ですね。警察署はここ。銀行はここ」

「ははあ、なるほど」

首を伸ばしてススムものぞき込みました。

地図は詳しく作られており、個人の住宅や店の名も、看板や表札から知ることができるかぎり書き込んでありました。

そのほかにパン屋や豆腐屋、自転車修理店やラーメン屋という文字まで見えているではありませんか。

奇妙なことに気がついて、ススムは声を上げました。

「地図のここに赤で書いてあるX印は何なの？」

田中は答えました。

「それが私にもわからないのだよ。現地で見たとおりを書いたのさ。

ある屋敷の中庭だったが、地面はコンクリートで分厚く固められ、その中央に赤ペンキで大きくX印が書いてあった。近寄ってみたが、何も変わったところはなかった。普通のコンクリートと赤ペンキにしか見えなかったな」

ゼロ禅師が顔を上げました。

「赤いペンキですと？」

「はい禅師、長い年月で風化しかかかっていましたが、色ははつきりと残っていました。見間違いなどではありません」

「ふうむ。手がかりはそれだけですか？」

「いいえ、もう一つあるのです。この地図にもあるラーメン屋ですが、その看板は特に文字がよく残っていますね。電話番号を読み取ることができたのです」

「ほほう」

「それが不思議なのですよ。局番は7055と書かれていたのです」
「するとつまり？」

「禅師、局番7055とは、あなたやススム君が住んでいるこの猫坂市のことではありませんか」

ゼロ禅師は目を丸くしました。

「するとその廃墟は、この猫坂市をまねて作られたものだとおっしゃるのですか？」

「そうとしか考えられないでしょう？」

「それはそうじゃが……。それで田中さん、この話を聞かせて、わたしにどうしろとおっしゃるのかな？」

「禅師は猫坂市に長く住んでおいでです。猫たちの協力を得るすべも心得ておられる。だからなんとか、あの廃墟が猫坂市内のどの場所をまねて作られたのか、調べていただきたいのです。」

あんなものが砂漠に作られた理由ももちろんですが、屋敷の庭の赤いX印が、私は気になって仕方がありません。何か重大な意味が隠されているような気がするのです」

話が終わり、地図を残して田中が帰っていったあとで、ススムはゼロ禅師に話しかけました。

「何がどうなってるの？ 僕にはさっぱりわからないや」

「そうかい？」

「田中さんが見た砂漠の中の廃墟って、蜃気楼だったの？ それとも妖怪の作った幻だと思う？」

「アメリカの砂漠にも妖怪がいるのかな？」

大きな音を立てて、ススムは突然手をたたきました。

「わかったぞ。きっと映画のセットだったんだ。撮影に使って、映画が完成した後は捨てられてしまったんだ」

ススムにはもつともらしい答えに思えたのですが、ゼロ禅師は疑わしそうに首を横に振るではありませんか。

「映画のセットなら、なにもそんな人里離れた場所でなくても、町に近いところに作るほうがいろいろと便利じゃないか。撮影の間は、スタッフや俳優たちが何日間も通い続けるわけだからね」

「じゃあ、どういうことなの？」

「それを考えてみようというのさ。そうだススム君、猫たちを呼び集めてくれるかい？ とにかく猫坂のどの街角をモデルにしたのか、それがわかれば謎が解明できるかもしれないよ」

猫たちを集め、ゼロ禅師は町中に放ったのです。

しかし何日すぎても、なかなか成果は得られませんでした。何の進展もないまま、あっという間に1週間が過ぎてしまったのです。

しかし我慢はむくわれるものかもしれません。ついに猫たちから知らせがあったのです。

猫たちが二人を連れていったのは、なんということのない町の中でした。

立ち止まってススムは見回したのですが、町並みに特徴があるとも思えず、意外な感じがしたものでした。同じようにキョロキョロしていますが、ゼロ禅師の視線には、どこか断固とした鋭さがあります。

「ねえ禅師、本当にここなの？」

「ここで間違いないようじゃよ。年月のうちに建物が多少建てかわることはあっても、郵便ポストの位置など、そうそう変わるものじゃない。交差点から少しずれたあの配置には見覚えがある。」

その真向かいがパン屋であることも地図と同じじゃないか。ほらごらん。看板が見えるだろう？」

ゼロ禅師の言うとおりだったので、ススムは表情を輝かせることになりました。

「じゃあここで間違いないんだね」

「そつらしいね」

ポケットから地図を取り出し、二人は町の探検を始めました。

「ねえ禅師、田中さんに連絡しなくていいの？」

「まだいいじやろう。まず例の屋敷を確認することじゃな」

二人は通りを歩き続けました。

店の名や家の表札は、地図と一致しているものもありましたが、年月の間に変わっているものもあります。

数軒の家が一度につぶされ、大きなアパートに建てかわっている場所もありました。

目的の屋敷がとうとう見えてきたときには、ススムは胸がドキドキするのをどうすることもできませんでした。

ここまで一致している以上、これが地図に描かれた場所であることは間違いありません。あの屋敷の中庭に何か重大な秘密が隠されているのです。

建てられて何十年も立っている古めかしい屋敷です。雨に打たれ風に吹かれ、屋根も壁もほとんど真っ黒になっています。

門は開かれたままだったので、敷地に足を踏み入れるのは簡単なことでした。だけと思わぬ光景に、二人とも立ち止まってしまったのです。

屋敷の庭には男たちの姿があり、その話し声だけでなく、エンジンの響きがこの場所を満たしているのです。

見回すとブルドーザーやパワーショベル、ダンプカーの姿を見る

ことができます。みな黄色く塗られ、工事用車両のようでした。

二人の姿を見て、作業員の一人が話しかけてきました。

「あんたらは誰だね？」

ゼロ禅師は見つめ返しましたが、服装から見てこれが作業責任者だと見当をつけたのでしよう。

「いやいや、なんでもないので。ただの散歩の途中ですな。

それはそうと大将、今からその井戸を壊してしまうおつもりかな？」

なんと庭の中央には井戸があつたのです。頑丈なフタをされ、もう何年間も使われた様子はありませんが、その場所が地図で赤いX印をつけられていた地点であると気づき、ススムはもう少しで声を上げてしまうところでした。

作業責任者は答えました。

「井戸だけじゃないぜ。今からこの古い屋敷を取り壊して、大きなビルを建てるのさ。さあ、仕事の邪魔だからあっちへ行つてくれ」

ススムとゼロ禅師は思わず顔を見合わせたのですが、次の瞬間には背後から突然大きな声が聞こえ、驚きのあまり二人とも飛び上がることになりました。

「そうはさせないぜ」

それは田中の声だったので。いつの間にススムたちのあとをつけていたのでしよう。

だけどススムとゼ口禅師の驚きは、まわりの作業員たちにもすぐに伝染することになりました。なんと田中は、手の中に小さなピストルを握っていたのです。

すぐにハシゴをかけ、田中の命令で作業員たちが井戸の底へと降ろされ、土を掘る作業が始まったのは、いうまでもありません。ゼ口禅師は田中のすぐ隣へ呼ばれ、わき腹に銃を突きつけて、人質にされてしまいました。

ススムにはどうすることもできませんでした。もう手遅れですが、年齢のわりに厳しく冷たいものだった田中の眼光の理由が、やっとわかったような気がしたのです。

何年も前に水はすっかり枯れていたもので、井戸の底を掘り進める作業は順調に進み、目的の物を見つけるには10分もかかりませんでした。

「あつたぞ」という作業員たちの声が、ススムの耳に届いたのです。

もう一度ハシゴを使い、作業員たちは地上に姿を見せたのですが、その手の中にある物を見て、ススムは口をポカンと開けないではいられませんでした。

泥まみれではありませんでしたが、見たこともない大きさの金塊だったのです。ずっしりどころか、片手ではなかなか支えることができないほどの重さがあるに違いありません。

弁当箱のように四角い形をし、表面には銀行の名を示すマークが刻まれています。とんでもなく高価なものでしょう。

もちろん田中は、作業員の手からすぐに金塊をもち取りました。汚れるのもかまわず、服で泥をぬぐいとります。太陽の光を受けたキラキラとした輝きが、ススムたちの目にもどれほどまぶしかったことか。

「おお」と田中は満足そうですが、ゼロ禅師が口を開いたのは、そのときだったのです。

「やあ田中さん、いい物を手に入れましたな。わしたちへのおすそ分けは、ないのでしょうかな？」

ゼロ禅師は笑っているようです。

われに返り、田中は顔を上げました。

「何がそんなにおかしいんだ、じじい？」

「いやいや田中さん、あなたにちょっと運動をさせてあげようと思っ
つてな」

「なんだと？」

「ほれ、こころ」

ゼロ禅師の手がすばやく動いたのは、この瞬間のことだったので
す。田中の注意が離れた一瞬を逃さず、ゼロ禅師はうまく金塊を取
り上げたではありませんか。

「何しやがる！」

次に起こった出来事は、さらに意外なものでした。なんとゼロ禅師は、金塊をぽんと放り投げたのです。庭の奥の茂みへと向かって飛び、草の中に落ちて、金塊は見えなくなってしまうました。

金塊が地面にぶつかる音だけが、ドスンとかすかに聞こえてきました。

金塊めがけて田中が駆け出したのは、いうまでもありません。田中の姿は、草むらの中へと姿を消すことになりました。

でもこの庭には、ゼロ禅師しか気づいていないあることがあったのです。まったくススムも、ゼロ禅師の目は何物も見逃すことはいのではないか、という気がしてくるほどでした。

金塊を投げ込んだ先に、大きな八手の巣があることにゼロ禅師は気づいていたのです。せつかくたくわえた大切な蜜を泥棒されないように、巣のまわりは常に数匹の八手が警戒しています。

ゼロ禅師の耳は、そのかすかな羽音を聞き逃さなかったのです。

ある種の八手は、黒っぽい物体に対してより興奮する性質があるようです。ススムたちのあとをつけるのに少しでも目立たないためでしょうが、この日の田中は、真っ黒なシャツとズボンを身につけていたのです。

外からは見えないだけで、巣の中にはそれこそ何百匹と八手がいます。興奮した見張りに呼び出され、八手たちはあとからあとから姿を見せることになりました。その羽音が、ススムの耳にもはっきりと聞こえるほどだったのです。

引き金を引き、ピストルをすべて撃ちつくしても、どうにもできるものではありません。ハチは田中のまわりに集まり、黄色い雲の中に体をすっぽりと包むかのような恐ろしい眺めになったのです。

田中の悲鳴は大きく、ススムは本当に飛び上がってしまいました。作業員たちもおびえた顔をしています。だけどゼロ禅師は違いました。

してやったりという表情で、なんとゼロ禅師はニヤリと笑っていただけではありませんか。

救急車に乗せられ、田中が病院へと運ばれていった後で、ゼロ禅師が説明してくれました。

「ススム君、さっきの金塊だがね。表面に刻まれていたしるしを見て、わしは思い出したことがあるのだよ。

ススム君が生まれる何年も前のことだが、杉村という男が銀行から金塊を強奪するという事件が起こった。だが警察に逮捕され、杉村は刑務所に入れられてしまった。

数ヶ月前、この杉村が刑務所内で獄死したというニュースは、わしも記憶していた。田中はそれと関連があつたのだね」

「どうして？」

「きつと田中も杉村と同じ刑務所にいたことがあり、何かのきっかけであの地図を手に入れたのだらう。杉村がひそかに隠していたのを、すきを見て盗んだのだと思うがね」

「それが、強奪した金塊の隠し場所を示す地図だったんだね」

「田中にとって困ったことに、商店の名や家々の表札のほかは、地名も町名もまったく記入されていない不完全な地図だったがね。」

しかし杉村が猫坂市の出身だということは、すでにわかっていた。金塊の隠し場所は、猫坂のどこかに違いない。だが町は広く、地図を頼りに田中が一人でいくらがんばっても、すべて調べるのに何年かかるかわかったものではない」

「だから僕たちにウソをついたの？」

「そうさ。アリゾナの砂漠がどうこうというのは、すべて作り話だった」

「僕も禅師も、まんまとだまされたわけだね」

「まったくその通りさ。情けないことじゃな。今から思えば、やつらの話にはおかしなところがあった。最初に聞いたときにすぐ気がつくべきだったよ」

「なぜ？」

「中庭のコンクリートに赤ペンキでX印が描かれていたというところさ。赤ペンキというのは、白色や黒色のペンキよりもはるかに色あせやすいのだよ。」

町に出て、古い看板を観察してごらん。白や黒はまだはつきりしているのに、赤い文字だけ消えてしまっている看板はいくらでも見

つかるよ。

砂漠の強い太陽の下で、赤ペンキが何年も持ちこたえることができたはずないじゃないか」

しかしススムたちにはケガもなく、とにかく事件は終わったのです。金塊は無事に銀行へ返されました。しかもこの金塊には賞金がかけられており、二人はそれを手にすることができたのです。

賞金はもちろん二人の間で二分され、ゼロ禅師はそれを、雨漏りのする寺の屋根修理に使いました。

「僕はこれを何に使おう」とススムは胸をふくらませたのですが、世の中はうまくいきません。『将来の学費の足しにする』ということで、あっという間にお母さんに取り上げられてしまったのでした。

地底の妖怪（妖怪禅師）

電車に乗って座席に座ると、ススムはつい眠くなってしまいました。だからしばらくの間まぶたを閉じ、やがて目を覚ましたのですが、奇妙なことに気がついたのです。

朝のこんな時間なのに、いつの間にか車内が空っぽではありませんか。いくら見回しても、他の乗客の姿などひとつもないのです。

車内は不気味に広く感じられ、ただイスだけがずっと並んでいます。隣の車両ものぞき込んでみましたが、そこも同じだとすぐにわかりました。

「いったいこの電車はどうなってしまったんだろう？」

不安になって、ススムは窓の外を眺めました。でも地下鉄なので、コンクリートの黒い壁以外は何も見ることができません。

突然ドアが突然ガラリと開き、隣の車両から誰かがやってくる気配を感じたのは、このときのことでした。

その人物の正体に気がついて、ススムはさらに驚いたのです。

「禅師！」

それは本当にゼロ禅師でした。ゼロ禅師も目を丸くし、びっくりしている様子です。

「ススム君、こんなところで何をしているのかな？」

「僕は学校へ行くところだよ」

「やれやれ。今日は大切な試験でもなければいいのだがね」

「どうして？」

ゼロ禅師はクスリと笑いました。

「君は今日、学校を欠席してしまうことになるからさ」

「この電車はどうなってるの？ どこ行きなの？」

「ははは、この電車は地底へ向かっているのだよ」

「えっ？」

「いやいや、何も心配することはないよ。地底といっても、地獄とは違うのだから」

「本当に？」

「ちょっとした用事があつて、この電車は特別に走らせてもらっているものなのさ。途中下車できる駅はもうすぎってしまったから、スム君もわたしと一緒に終点まで来るほかないようだね」

その言葉にどう答えたらいいのか、スムは見当もつきませんでした。

明かり一つない中をゴウゴウと走り続け、やがて電車はゆるゆる

とスピードを落としてゆきました。とうとう停車したのです。音を立ててドアが開きます。

ゼロ禅師の後をついて、ススムはおそろおそろ地底への第一歩を踏み出すことになりました。

そこは真つ暗な場所でした。目をこらしても、自分の手さえ見ることができません。ススムは思わずキョロキョロしましたが、かな光の点さえ目に入ることはないのです。

ゼロ禅師の声が聞こえました。

「心配することはないさ。わしは懐中電灯を持っているよ。さあスイッチを入れよう。おや、これは何かな？」

カチリと音がして、暗闇の中にやっと光が差したかと思うと手を伸ばし、ゼロ禅師は何かを拾い上げたのです。

「どうしたの？」

「ススム君、なんとこんな地底にテントウムシがいたよ」

本当にその通りでした。ゼロ禅師が手のひらに乗せてくれたのは、口紅のように明るい赤色をして、きれいな黒い点々を背中に飾った小さな虫だったのです。懐中電灯の光を反射して、宝石のようにキラキラ輝いて見えるではありませんか。

「テントウムシって地底にもいるの？」

「いや、きつとススム君の体にくっついて、地上からまぎれ込んで

きたのだろう。あとで地上まで連れ帰ってやってはどうか？」

「うん」

テントウムシをポケットに入れ、ゼロ禅師と並んで、ススムは歩き始めたのです。

しばらくはトンネルが続いたのですが、広い場所が見えてきたのは数分後のことでした。野球場のように丸い形をし、大きさも同じほです。

「ああいたいた。ススム君、わしはあの人に会いにきたのだよ」

ゼロ禅師が指さす方向を目で追い、ススムは思わず悲鳴を上げそうになりました。ゼロ禅師のいう「あの人」とは人間ではなく、なんとヘビだったのです。

しかもその巨大さときたら、ススムの目には一瞬、大理石でできた石像かと思えたほどでした。紙のように白い色をして、とぐろを巻いているのです。

もちろんヘビも二人の姿に気づいているようです。口の中へ舌を2、3回出し入れするのが見えました。

それだけでも十分ススムを驚かせたのですが、そのヘビの体の下に下敷きにされて、誰かが押さえつけられていると気がついたときには、心臓まで止まってしまいそうになったほです。

それは本当に遠慮のないやり方でした。うつ伏せになった人の背中の上に、とぐろを巻いた巨体が重石のように乗っかっているので

す。

でもススムの驚きが、ここで終わるわけではありませんでした。下敷きにされている者の姿が、これまた問題だったのです。

この日までススムは、本物の鬼を一度も見ることがなかったのです。

鬼といっても、体の大きさは普通の人と変わりありません。

だけど頭には2本の角があります。ヒゲもじゃの口の中には長いキバがあり、毛深い手足にはデコボコした筋肉が浮き出しています。指だってペンチのように太く、ツメは動物のようにとがっているではありませんか。

そういう鬼が、巨大な白へびのとぐろに下敷きにされているのです。あの様子では、腕一本動かすこともできないに違いありません。

あまりの光景にススムは呆然としていたのですが、へびが口を開いたのは、このときのことでした。

「おや、これはゼロ禅師ではありませんか。ずいぶんお久しぶりですな」

へびの口から出てきたのは、意外にもやわらかな女らしい声でした。ゼロ禅師も気軽に言葉を返します。

「あんたも変わりはないかな」

「ええ禅師。その男の子は誰です？」

「これはススム君と違って、わしの友人じゃよ。先ほど電車の中で偶然出会って、一緒にやってきたのさ」

勇気を奮い起こし、やっとススムは口を開くことができました。

「ねえ禅師、この鬼はどんな悪いことをしたの？ だから罰としてこのへびに押さえつけられているんでしょう？」

この質問には、へびが答えてくれました。

「この鬼は本当に悪いやつで、人間の子をさらってきては、殺して食べてしまうのです。これまでに何十人もが犠牲になりました。だからこらしめのため、ここで押さえつけているのですよ」

「それはいつまで続くの？」

「この鬼が反省するまでですから、1000年や2000年ではすみそつにありませんね」

その言葉に、ススムは目を丸くしないではいられませんでした。

「あんたは、それまでずっと座っているつもりなの？」

へびはクスリと笑いました。

「他にやり方がないではありませんか。この鬼を殺す方法はありません。世の子供たちを守りたければ、誰かが押さえつけていなければならぬのですよ」

「どうして殺すことができないの？」

「子供の肉を食べると、妖怪は寿命がうんと延びるからです。あまりにもたくさんの子供を食べたものだから、この鬼は寿命が無限に伸び、殺すことが不可能になってしまいました」

「だからあなたが貧乏くじを引いたの？」

「ええ、貧乏くじといえば、そうかもしれませぬね。

でも私はここに座り、地上から聞こえてくる子供たちのはしゃぐ声や足音、笑い声を耳にしているだけで幸せなのですよ。子供たちの幸福を守るために、私はここにいます」

「ふうん」

ふと思いついたふうに、へびがまばたきをしたのは、このときのことでした。

「それはそうと禪師、今日は何の御用でこられたのです？」

「あなたに少し伝言があつてね。ある人から頼まれたのじゃが、はて、これはちと困つたぞ」

「どうなさつたのです？」

「それがその…、ススム君の耳に入つては都合の悪い内容だつた。いま気がついたよ。どうしたものか」

ススムは口を開きました。

「じゃあちよつとの間、僕は離れていようか？」

ところがゼロ禅師の表情は、くもったままだったので。

「いや、それがね…、よく考えると、その鬼の耳に入っても困る内容だったよ。だからススム君、少し相談なのじゃが…」

「どうするの？」

頭をかきながら、ゼロ禅師は説明を始めました。

「ええっ？」

だけど本当の話、ゼロ禅師のいうとおりにするしかないようでした。ススムはしぶしぶ首を縦に振ったのです。

この鬼にはある呪文がかけてあり、押さえつけておくのに、何も何十トンもの重さが必要なわけではありませんでした。

どんなに体重の軽い人であっても、鬼の背中の上に乗りさえすれば、呪文の助けを借りてしっかりと押さえつけ、身動きを封じることができるとでした。

それは本当に誰でもよく、つまりススムであってもかまわないわけです。鬼の背中に乗りさえすれば、呪文の力が鬼を押さえつけてくれます。

だからススムは、この役を引き受けることにしたのです。他にやれる人はいません。

へビは体を脇に寄せ、ススムが乗ることのできるスペースを空けました。そして呼吸を合わせ、ススムとへビはさっと交替したのです。

交替はうまくゆき、鬼は身じろぎさえできませんでした。まるで岩の上の灯台のように、ススムは鬼の背にまつすぐ立つことができました。

「ただど暗い地底で、ススムの声は少し心細そうに響いたかもしれません。」

「ねえ禅師、できるだけ早く戻ってきてよね」

「ああ、わかってるよ。3分もかからないさ」

軽く手を振り、へビと一緒にゼロ禅師は暗がりへ消えてしまったのです。

懐中電灯はススムの手の中に残されていました。

スイッチを切る気などもちろんありません。かといって、床や天井を照らしていても仕方がありません。自然とススムは、鬼に光を向けることになりました。

鬼はおとなしくしています。呪文のせいでそうしているしかないのです。何度かそつと足を踏み変え、ススムは立ち続けました。

「ただど次の瞬間、思いがけないことが起こったのです。なんと鬼が口をきいたではありませんか。」

「おい、ススムとかいったな。へびとゼロ禅師がいま何を話しているか、おまえは気にならないのか？」

鬼の声は太く低く、どこかサビついた車輪を思わせませす。ツバを飲み込み、ススムは口を開きました。

「どうして？」

「のんきな奴だなあ。もしもこのまま、あの二人がいつまでも戻ってこなかったらどうする？ おまえはそこに永久に立っているつもりか？」

「禅師が帰ってこないなんて、ありえないよ」

「なぜわかる？」

「だってさ…」

「おまえには、あれが本物のゼロ禅師だという自信があるのか？」

「えっ？」

「電車の中で偶然出会ったのだろうか？ 妖怪が化けた偽者でないとなぜわかる？」

「まさか」

「妖怪の中にはな、変身して化けるのが得意な者もいるのだよ」

「本当に？」

「疑うんなら証拠を見せてやるさ。さあススム君、わしの姿をよくごらんよ」

次の瞬間、ススムが思わず口をぽかんと開けてしまうような出来事が起こったのです。

何かの呪文を口の中でつぶやいたかと思うと、鬼はあつという間に姿を変えてしまったではありませんか。

それは本当に思いがけない変化だったのです。気がつくと、ススムの足の下にいるのは鬼ではありませんでした。なんとゼロ禪師だったのです。

黒い石でできた床の上に、ゼロ禪師が横たわっているのです。その体つきといい服装といい、見間違いではありません。

鬼と同じようにうつぶせになっていますが、ススムはその背中の上に立っているのです。

ススムが声を上げてしまったのも無理はないかもしれません。

「禪師！」

「やあススム君」

「なぜこんなところにいるの？へびと一緒にあっちへ行ったんじゃないかったの？」

「あれは本物のわしではない。わしそっくりの姿に化けた妖怪だったのさ」

「どうして？」

「昨日わしは、ここへあのへびを退治しに来たのじゃよ。だが逆にやられ、呪文をかけて鬼の姿にされてしまった。あとはススム君も知ってのとおりさ」

「あのへびが言ったことも、すべてでたらめなの？」

「もちろんそうさ。ああススム君、頼むからわしの背中から降りてくれないかね。痛くてたまらんよ」

ススムがすぐに言う通りにしたのは、もちろんです。それだけではなく、かがんで手を貸し、ゼロ禅師を助け起こそうとしたのです。

ところが何かがおかしいでした。起き上がるどころか、汚い言葉を口から吐き、ゼロ禅師は突然わめき始めたではありませんか。

「くそ、どうしてオレは立ち上がることができないんだ？ 立ち上がるどころか、頭を起こすことだってできねえ。くそ、何がどうなってるんだ？」

「禅師、どうしちゃったの？」

本当にゼロ禅師は、ほんの5センチ頭を持ち上げることさえできない様子です。

「ああ、何がどうなってるんだ。子供がすぐそばにいるのに、食う

こともできねえ。せつかく手の届くところにいやがるというのに」

なんということでしょう。ゼロ禪師はジタバタと苦しそうに暴れ続け、でも起き上がることができないのです。そしてあつという間に再び姿を変え、元の鬼の姿へと戻ってしまいました。

悲鳴に似た声を、ススムは思わず上げてしまうことになりました。

「あんたは禪師じゃなかったの？」

だけど鬼は答えません。苦しそうにわめきながら、のた打ち回るだけなのです。かけられている呪文とは、相当強力なものであるに違いありません。

その光景をススムは呆然と眺めていたのですが、突然意味がわかったのです。

いつの間にポケットからこぼれ落ちたのか、さっきのテントウムシが鬼の背の上にいるではありませんか。

6本の小さな足を伸ばし、黒い毛にしっかりとしがみついているのです。

この虫がいたから、ススムが降りてしまっても呪文は働き続け、鬼は起き上がることができないのでした。

こんなテントウムシのことなど、ススムはすっかり忘れていました。ただ偶然にも、彼を助けてくれることになったわけです。

テントウムシがいなければ、いまごろ大変なことになっていたに

違いありません。鬼の言葉にあざむかれ、ススムの命も危険にさらされていたでしょう。

ススムがあわてて鬼の背に飛び乗ったのは、いうまでもありません。テントウムシはそつと拾い上げ、ポケットの中に戻しました。

へびと共にゼロ禅師が戻ってきたのは、このときのことだったのです。

「ススム君待たせたね。大丈夫だったかい？」

「ごくりとツバを飲み込み、ススムは答えました。

「うん大丈夫。何も起こらなかったよ。禅師のお話はすんだの？」

「すんだよ。ご苦労だったね」

へびもススムに言葉をかけました。

「ええススム君、本当に助かりました。ありがとうございます」

すぐにススムに代わり、再びへびが鬼の背中に体に乗せたのは、いうまでもありません。本当のことを言おうと何度か口を開きかけたのですが、結局ススムは勇気を出すことができませんでした。

「ではススム君、地上へ戻ろうか？」

「うん」

ときどきうなり声を上げるばかりで、もう鬼は何の言葉も発する

ことはありませんでした。くやしきのあまり、物を考えることさえできないのかもしれない。

歩き出しかけたススムたちの背中に、へびが声をかけました。

「禅師はご苦労様でした。ススム君も、気が向いたら、いつでもここへいらっしゃい。私は歓迎しますよ」

「はい」

そう答えて手を振り、ススムはゼロ禅師と共にトンネルを後戻りしていったのです。

さっきの駅で、電車はまだススムたちを待っていました。二人が乗り込み、ドアが閉まるとすぐに走り始めたのは、いうまでもありません。

やがて電車は駅へとさしかかり、停車してドアを開くたびに車内にお客さんの姿が増えてゆきました。もう今では、普段の車内とまったく変わったところはありません。

いつもの駅で、ススムとゼロ禅師は電車を降りることになりました。手を振ってゼロ禅師とは別れ、ススムは家へ向かって歩き始めたのです。

ポケットの中にあるテントウムシのことを思い出したのは、もうそろそろ家の門が見えてくるころでした。

安っぽいものではないけれど、誰にでも自慢できるといった大きな家ではありません。

小さな庭があり、お母さんが趣味で花壇を作っています。この庭で昨日、お母さんとちょっとした言い合いをしたことを、このときススムは突然思い出したのでした。

昨日はお母さんが花壇の世話をしているところに、ススムが通りかかったのです。

「お母さん、何してるの？」

「私の花にまたテントウムシがついたのよ。いやねえ」

「テントウムシ？」

「ああ枝に触ってはだめよ。今から殺虫剤をまくから、手につくわ」

「どうしてテントウムシを殺すのさ？　こんなにきれいなのに」

「テントウムシであろうが何であろうが、私は花に虫がつくのが嫌いなのよ」

お母さんはもう殺虫剤の容器を手にしていました。すんでのところで手を伸ばし、ススムは葉の上からテントウムシを救い出すことに成功したのです。

この出来事を思い出して、ススムは立ち止まってしまったのでした。ポケットから取り出したテントウムシを、ススムはもう一度しみじみと眺めることになりました。

「これが昨日のテントウムシなのかなあ」

殺虫剤の魔の手から救い出したあと、テントウムシをどうしたのだったか、ススムは記憶がありませんでした。きっと空へでも飛び立たせてやったのでしよう。

もしそうなら、カーブを描いてぐるりと飛んで、知らないうちにススムの背中にくっつくなど、小さな虫には難しいことではないに違いありません。

「ただどよくわかりません。ススムはこの虫を放してやることにしました。」

指先にとまらせると、紙よりも薄い羽をさつと広げ、テントウムシは飛び立ってゆきました。

そしてあつという間に見えなくなったのですが、今日経験したことがあの小さな昆虫の恩返しであったのか、それともただの偶然だったのか、結局ススムには結論を出すことができなかったのです。

花嫁の怪異（妖怪禪師）

ススムにはお姉さんがいて、名前をミチコとっていました。

ある日、ススムの家の隣に若い女が引越してきました。この人は和子という名でした。

学校の行き帰りやバスの車内などで、ミチコはときどきこの和子と顔を合わせるようになったのです。

どういう職業のどういう人なのかは知りませんが、次第にミチコは、和子に興味を持ちはじめました。和子には奇妙なことが一つあったからです。

日ざしの照りつける暑い日であろうが、傘を持つ手がびっしょりぬれる大雨の日であろうが、和子は左手の白い手袋を外すことが絶対になかったのです。

日焼けを防ぐためだろうか、などと最初は考えたのですが、それにしても度がすぎているではありませんか。和子は、とにかくどんなときでも左手の手袋を外さなかったのです。

それをミチコは不思議に感じたのでした。『あの手袋の下には何か秘密が隠されているに違いない』と思うようになりました。

だけどもさか面と向かって、「その手袋の下には何があるんですか？」などと質問はできません。でも好奇心は、すでにはちきれそうなほど大きくなっていました。

そこで、ミチコは計画を立てました。

そんなある日のことです。いつものようにゼロ禅師の寺を訪ねたのですが、部屋の中をのぞき込むなり、ススムは小さく声を上げることになりました。

お客さんが来ていたのです。ゼロ禅師と何か話をしていた様子です。

それはベールをかけ、顔を隠した女性でした。体の輪郭から、まだ娘といってよい年頃だとわかります。

地味な色だけれど、しつかりとした清潔な洋服を身につけています。ススムは見つめつけましたが、やはり顔は見えません。

ゼロ禅師とはちょうど話がすんだところだったようです。娘は立ち上がり、軽く会釈をしながらススムの前を横切り、部屋の外へと消えていきました。

だけどその瞬間、ススムははっと息をのまないではいられなかったのです。ちょっとした風のイタズラでベールが動き、一瞬ですが彼女の顔を見ることができました。

とても美しい顔でした。でもその肌の色が人間とは違っていたのです。彼女の肌は、まるでキャベツのようにみずみずしい緑色をしていたではありませんか。

驚きが大きかったせいでしょう。会釈を返すどころか、ススムは体を動かすことさえできませんでした。部屋を出てゆく彼女をただ見送ったのです。

そしてススムは、もう一つ気づいたことがありました。

ゼロ禅師と話しながら、あの娘は泣いていたに違いありません。彼女の頬には、涙の流れたあとがあつたのです。

娘の姿が見えなくなると、ススムは口を開きました。

「ねえ禅師、今の青い女の子は誰なの？」

「ああススム君、あの女の子は青鬼族の一人だね。わしに頼みごとをしにきたのだが、さてさて、お役に立てるかどうか」

「そんなに難しい仕事なの？ 僕にも話してよ。何かの役に立てるかもしれないよ」

興味を感じているのか、ススムは頬を赤くしています。ゼロ禅師は微笑み、説明を始めました。

娘の名はサクラといました。

かつてサクラの家は青鬼族の中でも知られる名家だったので、それも昔のことにすぎず、今ではすっかり没落していたのです。

身寄りもなく、深い山奥の小さな家でサクラは貧しい一人暮らしをしていたのですが、ある夜遅く、家の戸をたたく者がありました。ドンドンドンと、何か切迫した感じのするたたき方だったそうです。

もちろんサクラは戸を開けました。そして戸の前に、飢えた旅人の姿を見つけたのです。慣れぬ山中で道に迷い、すっかり弱って助

けを求めていたのです。

優しい娘ですから、もちろんサクラは助けてやりました。食べ物を与え、一夜の宿を貸したのです。旅人が女であったということも、サクラの同情を誘ったのかもしれない。

「ところがススム君、翌朝になって、大変なことがわかったのさ。貧しいサクラの家にも、ただひとつ高価な品物があつた。先祖代々に伝わる指輪なのだがね」

「まさか、その旅の女が盗んでいったというの？」

「そうさ。サクラの信用を得たのをよいことに真夜中こっそりと盗み出し、そのまま姿を消してしまった」

「それはどんな指輪だったの？」

「金色に輝く美しい指輪だが、鬼の持ち物だから、もちろん魔力を秘めているのだよ。青鬼一族の最後の生き残りとして、サクラが大切に守ってきたものなんだ」

「それは大変な事件だね。その後はどうなったの？」

「泥棒女の足取りは知れず、指輪もとうとう見つからなかった。失意のうちに何年かがすぎたが、サクラも最近、ついに良いニュースを聞くことができたのだよ」

「指輪が見つかったの？」

「そうではないよ。縁談が持ち上がったのさ」

「お嫁入り？ 誰と結婚するの？」

「赤鬼一族の青年とさ。赤鬼一族も、かつての青鬼一族と同じように名門だ。その青年との縁談であれば、サクラには願ってもないことだね」

「そうだろうね」

「ところがここで問題が持ち上がった。青年も一族の者もみな乗り気なのだが、ただひとり一族の当主がね……」

「結婚に反対なの？」

「うん。これがうるさい男で、『当家に嫁入りするのなら、それ相応の格式のある娘でないと困る』と言い出したんだ」

「サクラも、ちゃんとした一族の末裔なんでしょう？」

「ところが、『それを証明しろ』と赤鬼の当主は言うのさ。一族の中で最高の権力を持つ男だから、サクラの血筋を正しく証明できないと、この結婚はおそらく破談になってしまうだろうね」

「証明が難しいの？ そうか、肝心の指輪がないんだね」

「だからサクラは、『指輪をなんとか探し出してくれ』とわしに頼みに来たのだよ」

「泥棒女が指輪をどこへ持っていったのか、本当にわからないの？ 女の正体もわからないの？」

「そのどちらも手がかりすらない。どこをどう探せばいいのか、わしにも見当がつかなくて困っているのさ」

「へえ」

この日以降、学校帰りにススムは毎日、寺へ顔を見せるようになりました。そして調査の進み具合を質問するのですが、残念なことに、ゼロ禅師は首を横に振るばかりだったのです。

指輪の行方など、まったく知れませんでした。

同じころ、ミチコはミチコで頭を悩ませていました。

『和子の手袋の下に隠されている物をなんとしても見たい』と思い、考え続けたのです。そしてついに計画が固まりました。

ポケットの中にある物をしのばせ、ミチコはチャンスを待つことにしたのでした。

チャンスは意外と簡単にやってきました。ある日並んで歩きながら、ミチコは和子と二人きりになることができました。場所も夕イミングも、あつらえたように計画通りなのでした。

和子がちょっとよそ見をしたすきに、ミチコはポケットから取り出しました。

ガラスの小ビンで、中にはインクが詰められています。さっとフタを開け、真っ白な手袋にほんの1滴か2滴振りかけるのは、難しいことではありませんでした。

そして何食わぬ顔で言葉をかけたのです。

「あら和子さん、手袋が汚れていますよ」

すぐに和子は顔をくもらせました。

「あら困ったわね。どうしましょう」

「困ることなんかありませんよ。予備の手袋をお持ちなんですよ？
私はあっちを向いていますから、さっと交換してはいかがですか
？」

「ええ、ありがとうございます」

安心して、和子はうれしそうに微笑んだのです。

だけど、もちろんミチコには下心がありました。

このとき二人は、ある家具店の前を歩いていたのです。この家具店にはショーウィンドウがあり、いくつかの家具と並んで、大きな鏡が展示されていました。

手袋の交換は無事にすんだのですが、顔を上げてミチコの表情を見たとき、和子は真実に気づいたのです。ミチコの計略にまんまとはまったとわかったのです。

ミチコといえば、鏡の中に目にしたものの意外さに呆然としていました。

和子の白い手袋の下には、もちろん女らしいきれいな手がありました。でもその色が問題でした。和子の白い顔とはまったく異なり、なんと新鮮なキャベツのような緑色だったのです。

その手の色を、和子は常に手袋で隠していたのです。

和子の表情は、みるみる怒りに満ちてゆきました。そして次の瞬間、緑色の手よりもっと恐ろしいものをミチコは目にする事になったのです。

和子の女らしい姿は、水に溶けた絵の具のように形を失い、あっという間に恐ろしい妖怪へと変化してしまっただけではありませんか。

ミチコにできることは、ただ一つしかありませんでした。何もかも放り出して、とにかく逃げ出したのです。

ミチコは道路を走りました。運動会の徒競走のときでさえ、これほど必死に走ったことはなかったに違いありません。

妖怪があとを追ってきたのはもちろんです。パタパタという足音を背後に聞くことができました。首の後ろに息がかかるのまで感じたほのです。

でもなんとかミチコは逃げ延びることができました。ゼロ禅師の寺へと向かって、ミチコは走り続けたのです。

そのころゼロ禅師の寺では、ちょっとした話し合いが行われていました。指輪の行方はわからないまでも、サクラの血筋について可能な限り調査した成果を、ゼロ禅師は説明しようとしていたのです。

これを聞かせるために、ゼロ禅師は赤鬼一族の当主を寺に招いたのです。

『赤鬼』という名のとおりの赤い肌、ススムは少し感心して見入ることになりました。背はあまり高くないけれど、手足は力二のようにつしりしています。角のある頭はボウボウの髪で長くおおわれ、腰に刺した長い剣は先が床に触れています。

前置きを抜きにして、ゼロ禅師はすぐに説明を始めました。古文書を何冊も駆使用する長い説明でしたが、赤鬼はおとなしく耳を傾けたのです。

ゼロ禅師の声が部屋の中に響きます。

「…以上のような古文書からもわかるとおり、サクラの血筋が本物であることは、まず間違いないとわしは考える。」

証拠品の指輪をお見せできないのは残念だが、指輪が失われた事情はすでにお話したゆえ、ご納得いただけたことであろう。わしの口から言えるのは、これだけじゃな」

ゼロ禅師が口を閉じると息をつき、赤鬼は腕を組み替えました。

「ゼロ禅師、この調査ではいろいろと苦労されたらうが、正直に言って、オレはまだ不満だな。サクラは美人だし、よい妻になるうこともわかる。だが結婚には血筋が何よりも重要だ」

ゼロ禅師だけでなく、ススムも一緒になって、思わずため息をつかないではいられませんでした。これでは、やはり結婚は破談になってしまうのでしょうか。

ところが事態が急変したのは、次の瞬間のことでした。

バタバタという足音に続いて、入口の戸が乱暴に開き、突然誰かが部屋の中に飛び込んできたのです。

「禅師助けて。私は追われているの」

ススムは目を丸くしました。もちろんそれはミチコだったのです。

「お姉ちゃん、どうしたの?」

「私は妖怪に追われているよ。和子さんの手袋の下には…」

だけどミチコは、最後まで言葉を続けることができませんでした。彼女のあとをついて、その和子が姿を見せたからです。

その姿には、ススムだけでなくゼロ禅師も驚きを隠すことができませんでした。

鬼のように角があるわけではありません。でも歯はキバのように長く伸び、顔は険しく、まるで肉食獣のような表情ではありませんか。

手足は長く、クモに似ていますが、なによりも目立つのが首の長さでしょう。ゾウの鼻のようにクネクネして、もう少しで天井に届いてしまいそうです。

赤鬼が声を上げました。

「ゼロ禅師、これは何なのだね？」

ここでやっと、ミチコは早口で事情を説明することができました。ススムたち3人にとっても、それは驚くべき内容だったのです。

しかしその顔をゆがめ、妖怪がニヤリと笑ったのは、説明を終えてミチコが口を閉じた瞬間のことでした。何を思ったのか、妖怪は突然左手をグイと前に突き出したのです。

なんとその指には、金色の指輪が光っているではありませんか。そしてその色と形には、ススムもゼロ禅師も覚えがあったのです。サクラから聞かされている行方不明の指輪そのままではありませんか。

とつさに赤鬼が口を開きました。

「おい禅師、この妖怪は魔力を使う気ではないぞ」

本当にそのとおりだったのです。言葉は聞こえませんが、妖怪がなにやらつぶやき、口を動かしているのがはつきりとわかります。

それがどういう呪文なのか、これから何が起るのか、ススムには見当もつかなくて、ただ身構えているしかありませんでした。

ただど何かがおかしかったのです。思わず止めていた息を、ススムはそっと吐き出すことになりました。妖怪は呪文をとえ終わつたのに、何秒たっても何も起きないではありませんか。

不思議そうな表情を見せたのは、妖怪も同じようでした。だけどススムたちには、ゆっくり考えている余裕などなかったのです。

あつと気がついたときにはジャリジャリと音を立てて剣を抜き、赤鬼が妖怪へと切りかかっていたのです。

だけど妖怪だって、黙って切られてはいません。切り込んでくる剣をいったんかわし、バランスを崩した赤鬼の背中を強くなぐったのです。

赤鬼はつんのめって転び、息もつけない様子でしたが、すぐに立ち上がって反撃にうつりました。

この反撃がなかなか見事なものだったのです。とっさに剣を持ち替えてナイフのように用い、妖怪の手から一瞬のうちに指を切り落としてしまったではありませんか。

もちろんそれは、指輪をはめている指だったのです。

床に落ちて指と指輪がゴトンと音を立てたときには、ススムとミチコはもう少して悲鳴を上げてしまつところでした。

どういう仕掛けになっているのか、傷口からはあまり血が流れていません。だけど痛みは感じているのでしょうか。

悲鳴を上げたかと思うとサツと身をひるがえらせ、妖怪は逃げ出していました。窓をたたきこわし、あつという間に姿を消してしまつたのです。

ゼロ禅師がため息をつきました。

「赤鬼殿、なんとまあ荒っぽいことをなさる」

「ふん、妖怪相手に遠慮は不要だろうが」

ゼロ禅師がかがんで床から指を拾い上げるのが、ススムの目に入りました。女らしく細い指ですが、ツメはとがり、全体の長さは20センチほどもあるのです。

好奇心にかられて近寄り、ミチコと並んでススムも妖怪の指に目をこらしました。力を込め、ゼロ禅師は指輪を引き抜こうとしていくところでした。

赤鬼が言いました。

「ゼロ禅師、まさかそれが、行方不明だった青鬼一族の指輪だというのかね？」

「ああ間違いない。色も形も、サクラから聞いたのとそっくりじゃないよ」

「しかしまた、どうして妖怪がそんなものを持っていたのだろうな」

「サクラの家へやってきた旅の女というのが、実は今の妖怪が化けた姿だったのだろう」

「なるほど。指輪を手に入れ、その魔力を自分のものにしようとしたのだな」

「そしてサクラが指輪の搜索をわしに依頼したと聞いて、偵察に来ていたのだろう。また女の姿に化けて、何食わぬ顔でこの寺のそばに家を借りた。」

ところがその家が、なんとミチコさんの家の隣だったとはね。いやはや、世間は広いようで狭いものだね」

その言葉に、ススムや赤鬼はしきりにうなずいています。だけどミチコは少し違いました。首をかしげ、ミチコは何やら考えている様子ではありませんか。

しかし、これもハッピーエンディングではあるのでしょうか。指輪が見つかったことを、さっそくサクラに知らせることになりました。

サクラの居場所はわかっていたので、ススムが使いの役を買って出て、すぐに連れてくることができたのです。

指輪を目にして、サクラがどれほど目を輝かせたことが。

「まあうれしい。とうとう見つけてくださったんですね。禅師、本当に感謝します。そこにいるのがミチコさんですか？ あなたもずいぶん助けになってくださったんですね」

自分の指に戻った指輪を、サクラはほれぼれと眺めています。少し恥ずかしそうな表情でミチコは答えました。

「ううん、私はちょっとイタズラをしただけなのよ」

「それでも大したものですよ。ああそうそう、妖怪が魔力を使おうとしたとき、なぜか呪文がまったく働かなかったのだとススムさんから聞きました。」

そのすきに赤鬼殿が指を切り落とした。でも呪文がきかないなん

て、とても不思議な現象だとお思いになりませんか？

この指輪はかなり強い魔力を秘めたものなのですよ。一体どうしてだったのでしょうかね」

表情をくずし、赤鬼がうれしそうに笑い始めたのは、このときのことでした。

「ああサクラ、それはこういうことだよ。わが一族の嫁として迎えることが決まったのだから、見せてやってもよかるう。

われわれ赤鬼一族には、何世紀も昔からこのような道具が代々伝わっていてね」

そういいながら、赤鬼は何か小さな物をポケットから取り出したではありませんか。全員の視線が集まったのはもちろんです。

赤鬼は、透き通った小さなビンを手握っていたのです。ガラスの小ビンです。

ゼロ禅師が目を丸くしました。

「それは一体なんですかな？」

「魔力ビンといいましてな。魔力や呪文を吸い取る不思議な力があるのです。だから、妖怪が呪文をとえたとときにも何も起こらなかつたわけですよ。この小ビンが魔力をすべて吸い取ってしまった」

「ほう、それは珍しいものですな」

「魔力や呪文だけでなく、うまく使えば、妖怪を一匹丸ごと吸い込んでしまうことだってできるほど強力なのですぞ」

「ほほう」

背伸びをして、ミチコがついと手を伸ばしたのは、このときのことでした。

「赤鬼さん、私にも見せてくださいな」

「ああ、いいとも」

手に取り、ススムと一緒にになって、ミチコはしげしげと眺めたのです。魔力ビンとは、ゆで卵ほどのサイズで、あまり大きなものではありません。手の中にだってすっぽりと隠すことができるでしょう。

ミチコはサクラを振り返りました。

「サクラさん、あなたもごらんになりたいでしょう？」

「ええ、ありがとう」

ミチコは、サクラに小ビンをひょいと手渡したのです。

ところが次の瞬間、ススムたちはひどく驚かされることになりました。甲高く大きな笑い声が、突然部屋の中に響いたからです。

いかにも恐ろしく、しかもずるがしこさを感じさせる声ではありませんか。ススムは、鳥肌が立つような気味の悪さを感じたもので

した。

全員がぎょつとして見回したのですが、声の主はすぐにわかりました。なんとサクラだったのです。

みんなの視線がすぐさまサクラに向けられたのは、いうまでもありません。魔力ビンを手には、サクラは笑い続けているのです。

そして再び、あの妖怪が姿を見せたのでした。ついさっき指を切られ、指輪を取り返されたはずの怪物です。もちろんサクラが姿を変えたのです。

全員が呆然と見つめるしかありませんでした。

「サクラさん？」

ところが赤鬼は、すぐに大変なことに気がついたのです。

「禅師、あの妖怪は魔力ビンを手に行っているのじゃぞ」

「しまった。あの小ビンの魔力はどのくらい強いじゃ？」

「強いなんてものではない。オレたち全員を吸い込み、永久に閉じ込めてしまうぞ」

小ビンをかざし、妖怪はニヤリと笑うのでした。

そして一人一人に向けて、まるでじらすように妖怪はビンの口を振ってみせたのです。ビンが自分のほうへ向けられたときには、恐ろしさのあまり、ススムは悲鳴を上げてしまいそうになりました。

「ただミチコの声が大きく響いたのは、このときのことだったのです。ミチコの声は冷静で、自信に満ちていました。」

「赤鬼さん、もしいま魔力ビンがあなたの手の中にあつたら、あの妖怪を退治できるかしら？」

「それは簡単さ。だが魔力ビンはやつの手の中にあるのだよ。どうやって…」

赤鬼の言葉は途中で切れてしまいましたが、無理もないかもしれせん。ポケットに手を入れ、ミチコが突然、ガラスの小ビンを取り出したのが目に入ったからです。

ポケットから取り出した小ビンを、赤鬼にむけて、ミチコはサッと投げました。

赤鬼はうまく受け取ることができました。そして、なじんだ感触を手の中を感じるや、表情を変えたのです。

「これは一体どうしたのだ？」

ミチコが言いました。

「赤鬼さん、それが本物の魔力ビンよ。早く妖怪をやっつけてよ。さつき私は、サクラには偽物の小ビンを渡したの。彼女の手袋を汚すためにインクをつめていたやつだわ」

「おお」

使い慣れている赤鬼の手の中に戻ってきさえすれば、魔力ビンの威力とは大変なものだったのです。

妖怪は憎々しげにミチコをにらみつけていましたが、それも一瞬のことにすぎず、すぐに小ビンの中に吸い込まれ、消えてしまったのです。

それは本当に稲妻のようであつという間の出来事でした。ほつとして、全員が息をつきました。ススムはとうとう座り込んでしまいました。

でもやがて気分が落ち着いたのでしょう。ススムは口を開きました。

「ねえ禅師、この事件は結局どういうことだったの？ 僕にはよくわからないや」

「うん ススム君…」

ゼロ禅師は説明を始めましたが、この場のヒーローはやはりミチコだったのです。

サクラと和子は、あの妖怪が変身した一人二役だったわけですから考えてみれば、サクラと和子を二人同時に見たことのある人はいないのです。

妖怪は、青鬼族のサクラという孤独な娘をでっち上げて魔力ビンを手に入れ、よからぬ目的にでも使うつもりだったのでしようが、ミチコの機転で防ぐことができたわけです。

ではミチコは、妖怪のたくらみにどうして気づくことができたのでしょうか。なんとそれは、切り落とされたあの指だったのです。

床に落ちていたものを拾い上げ、ミチコは説明しました。

「この指は本物そっくりにできているけれど、よく見ればただの作り物だわ。ほらね。切られたとき、あまりにも血が出なかったのよ、私はおかしいと感じたのよ」

その言葉に、ススムたちはただ感心するしかありませんでした。ミチコの鼻は、普段よりも少なくとも5ミリは高くなっていたに違いありません。

階段の怪異（妖怪禅師）

すべてはある日の学校帰り、ススムが立ち止まって、ほっと息をついた瞬間に始まったことでした。

家の近所にちょっとした階段があり、山を切り開いた見晴らしのいい場所なのですが、なんとなく歩き疲れて、ススムはその真ん中あたりに腰かけてしまったのです。

それが目に入ったのは、この瞬間のことでした。

どうということなのか、はじめはよくわかりませんでした。でもとうとう意味に気がつき、ススムはバネのように立ち上がって、ゼロ禅師の寺へむかって駆け出すことになったのです。

「どうしたんだね？ ススム君」

ススムのただならぬ様子に、ゼロ禅師はすぐに話しかけてきました。

もちろんススムは説明を始めました。

話を聞き終えるやいなや、ゼロ禅師も現場へ行く気になったのです。

ススムが道案内をしたのですが、歩きながらゼロ禅師は質問を続けました。

「ススム君、念のためにもう一度きくのだが、その岩山は、階段の

途中のある一段からだけしか見ることができないのだね?」

「そうだよ。歩き疲れて、僕はたまたま腰かけたんだ。そして気がついた。ものすごくびっくりしたよ」

「びっくりというのは、そうじゃろうな。本当にただその一段からだけ見えるのだね?」

「ひとつ上やひとつ下の段でも試してみたけど、だめだった。見えるのはその場所だけで、視線がほんの少し上や下にずれるだけで、もう見えなくなるんだよ」

「最近作られた階段なのかい?」

「2、3年前からあるかな? 学校へ行くのに僕は毎日通っているよ」

「それなのに、これまで誰も気がつかなかったのは不思議な気がするが」

「僕みたいに腰かけた人は、きっと一人もいなかったんだと思う」

「しかも階段のその一段だけだとはね。そこに腰かけると何が見えるのか、もう一度説明してくれるかい?」

「普通に歩くだけなら、右側にガスタンクが見えるだけだよ。古く使われてなくて、さびて真っ赤になってる」

「ああ、あのガスタンクならわしも知っているよ。この町に何年も前からあるね。だが階段の途中に腰かけると、どうなるって?」

「そのガスタンクが、突然まったく別の物体に姿を変えるんだ」

「つまり岩山へと変わるといふのだね。どんな岩山だと言ったかな？」

「ねえ禅師、そんな質問ばかりしないで、自分の目で見ればいいんじゃない？ ほら、もうそこに階段が見えてきたよ」

途中までは、本当になんでもないただの階段でしかありませんでした。

ゼロ禅師はすぐに登り始めましたが、不意にススムを振り返ったのです。

「下から何段目じゃったかな？」

「22段目だよ」

「ではあと3つだな。3、2、1。ここかい？」

「うん」

立ち止まり、二人がそろって顔を右に向けたのは、いうまでもありません。

そこにはたしかにガスタンクがありました。鉄でできていて、ボールのように丸い形をした巨大な物体です。

「それでススム君、この段に腰かけると、その不思議な現象が起こ

るといっただね」

次の瞬間、その場所に腰かけて、ゼロ禅師は「おお」と声を上げないではいられませんでした。風景の変化は、それほど劇的だったのです。

ゼロ禅師の目に映っているのはもはやガスタンクではなく、ススムの言葉どおり岩山だったのです。

黒っぽい石でできていて、頂上はナイフのようにとがっています。幻のように突然姿を現したわけですが、いくら目をこらしても本物の山としか思えません。

ススムが口を開きました。

「ねえ禅師、どうしてこんなことになるんだろうね」

「いやはや、わしにもさっぱりわからんよ」

「あの岩山は本当に存在しているの？ それとも幻なのかな」

「いやススム君、あの岩山よりも、むしろガスタンクのほうに重大な秘密が隠されているような気が、わしはするのじゃよ」

「どうして？」

「いや、よくわからん。とにかく寺へ帰って、さっそく調べてみることにしよう」

翌日、学校がすむとススムはさっそくガスタンクの前へとやって

きました。そして見上げたのです。

でもあの階段とは違い、何もおかしなところはありませんでした。ただの古びた使われていないガスタンクです。

敷地の入口には小さな門がありました。これも古びて壊れていることに気がつきました。ちょうつがいを外れて、大きく隙間が開いているのです。中に入り込むのは簡単なことでした。

すぐそばまで行き、ススムはもう一度タンクを見上げたのですが、奇妙なことが起こったのは、その瞬間のことでした。

風も吹いていないのに白い紙切れが一枚、不意にどこから飛んできて、彼の顔に触れたのです。よくわからないまま、ススムは手に取りました。

あまり見たことのない種類の紙で、長い間に風化したらしく、はしがボロボロに千切れています。でも奇妙なのは、その表面に書き付けられている文字でした。

墨で書かれているのですが、漢字でも外国語でもなく、なんだか不思議な感じがするではありませんか。象形文字に似ているといえはいいかもしれません。

しばらく眺めていたのですが、誰が書いたのか、どこから落ちてきたのか、さっぱりわかりませんでした。だからゼロ禅師に見せるつもりで、ススムはカバンの中に入れたのです。

どうやらこのとき、魔力は破れかかっていたようです。ガスタンクの姿は、やはりただの幻だったに違いありません。

目の前で突然始まった異変に、ススムは口をぼかんと開けて見入ることになりました。その変化はそれほど思いがけず、かつ奇妙だったのです。

なんとススムの目の前で、ガスタンクの色がゆっくりと薄くなっ
ていったではありませんか。

自分の目で見ていることなのに、信じられないような気持ちがススムはしたものでした。ガスタンクは、まるで幽霊のように透き通り、消えていこうとしていたのです。

そしてついに、ガスタンクの姿は完全に消えてしまいました。気がつくとその場所に立っているのがあの岩山だったのは、いうまでもありません。

岩山は黒々と、階段から見たときと寸分変わらない姿でそびえていました。ススムはもう、何がどうなっているのやら見当もつかなくなっただけです。

だけど、その黒い姿に何かひかれるものがあつたのかもしれないせん。岩山へと向かって、ススムはふらふらと歩き始めました。

ガスタンクと同じように岩山は大きく、斜面はきつく、ススムはすぐに汗をかき始めました。それでも登り続けたのです。

振り返ると、よく知っている町の風景が目に入ります。だけど今も町の人々の目には、この岩山はただのガスタンクとしか見えていないのです。

岩山を登り続け、やがて頂上までやっていくことができました。そしてその意外なありさまに驚き、怖くなって、ススムはとっさに物陰に隠れたのです。

頂上には誰かがいました。

しかし人間ではありません。身長が30メートルもありそんな巨人だったのです。

でもこの巨人は動くことができませんでした。頭だけを残して、その体がすっぽりと岩の中にうずまわっているのです。まるで誰かの手で罰を与えられ、岩の内部に閉じ込められているかのような眺めではありませんか。

しかし巨人は死んでいるわけではありません。再び目覚め、活動を始めていたのです。

かろうじて自由になる肩を動かし、自分を押さえつけている岩を巨人はなんとか壊そうとしていました。巨大な筋肉が動くたびに、ゴトンゴトンと岩同士のぶつかる音がススムの耳に届きます。

息を殺したまま、そつと体の向きを変え、足音をおさえてススムが山を降りていったのは、いうまでもありません。

ススムは、巨人のことをもちろんすぐにゼロ禅師に知らせました。ゼロ禅師は顔色を変え、ススムを残して、一人で岩山を偵察に出かけました。そして深刻そうな顔で帰ってきたのです。

「ススム君、巨人の右肩はもう岩の外に出ていたよ。岩から抜け出そうとやつは躍起になっておる。あの巨体では、あと数日しかかか

るまいよ」

「どうするの？ あいつが岩山から出てきたら、どうなるの？」

「きつと大変な悪さをする事だろうね。だから誰かがあの岩山に封じ込めたのさ。そして呪文をかけ、ガスタンクとしか見えないように幻で取り囲んでおいた」

「でもそれが、どうしてあの階段からだけは岩山に見えたの？」

「さすがの呪文を完全ではなかったということだろうね。360度ぐるりと取り囲んだつもりが、ただ一ヶ所だけ隙間があったのさ」

「だけど、なぜそんな幻を作っておく必要があったの？」

「好奇心を起こして、誰かが岩山に登ったりしないようにだろうね。頂上近くには呪文が書き付けてあったに違いないが、誰かがそれを消してしまわないとも限らないじゃないか。だがサビ付いたガスタンクでは、誰も近寄ろうとはしないよ」

「ふうん。でも禅師、あの巨人が岩山から出てきたら、本当に大変なことになるんでしょう？」

「それが一番心配じゃよ。だが巨人を封じ込めるときに用いた元の呪文がわからないことには、わしにはどうしようもない。無駄かもしれないが、とにかく古文書を調べることにしよう」

そういつてゼロ禅師は、書庫へと向かったのです。

「禅師、禅師」

ススムの声が大きく聞こえてゼロ禪師が古文書から顔を上げたのは、書庫にこもって、1時間近くたったときのことでした。

「ススム君、どうしたんだね？」

書庫の中へ、ススムはドタドタとかけこんできました。興奮のせいで顔を赤くしています。

「禪師、僕は思い出したんだ」

「何をだい？」

「ほら、これを見てよ」

ススムは、自分のカバンをゼロ禪師の前に差し出したのです。フタを開け、教科書やノートの間から、一枚の古ぼけた紙を取り出したではありませんか。

それを見るなりゼロ禪師の顔色が変わったのは、いうまでもありません。若いころから古文書に親しみ、妖怪学の訓練を積んできた人の目には、その意味するところは明らかだったのです。

このかすれた紙は古い時代の『おふだ』で、表面に書かれているのは『封じ込めの呪文』に違いありませんでした。

このおふだがかつて巨人の額に貼り付けられ、その魔力が岩山の中へ封じ込めていたのです。

しかし長い年月が流れ、おふだは風に飛ばされてしまいました。

そして今、目覚めた巨人が活動を始めたのです。

ゼロ禅師が声を上げました。

「おおススム君、この呪文さえわかれば、巨人をもう一度岩の中へ封じ込めることができるかもしれないよ」

「じゃあ僕は禅師の役に立つたんだね」

「役に立つどころか、相当な大でがらさ。さあススム君、作戦を立てようじゃないか。どうやってやつを再び封じ込めるか、これは少し知恵を使わなくてはならないよ」

この夜は遅くまでかけて、計画が練られたのです。

「あれは何だろう?」

岩を割る手を巨人が休め、目を丸くしたのは翌朝のことでした。突然、岩山のふもとにおかしな人物が姿を見せたのです。

旅の商人のように見えました。でも現代風ではなく、何世紀か昔の時代がかった服を身につけているではありませんか。

商人が馬を連れていることに気づき、巨人はさらに目を丸くすることになりました。馬の背には、なにやら重そうな荷物が乗せられているのです。

そればかりか、馬と商人はなんと岩山を登り始めたのです。こちらへやってくるに違いありません。

岩山は足元が悪く、石のカケラがゴロゴロして、馬のひづめの下で音を立てています。商人も息を切らせていますが、馬の苦勞はそれどころではなかったでしょう。

歯を食いしばりながら、馬は思わずこんな言葉をもらしてしまいました。

「なんて重い荷物なのかしら。ねえ、そんなにたづなを引っ張るんじゃないわよ。鼻が痛いじゃないの。私をこんな目に合わせて。ススム、あんたあとで覚えてなさいよ」

商人の衣装を着て足元を見つめたまま、顔を上げずにススムは返事をしました。

「お姉ちゃん、馬が口をきくもんじゃないよ。巨人の耳に聞こえたらどうするのかしら」

「ゼロ禅師の姿が見えないわ。どこへ行ったのかしら？」

「巨人の背後へ出るために、禅師は岩山の裏側をグルリと遠回りしてるんだよ。だから僕たちはもう少しゆっくり登って、時間をかせがないと」

「あーあ、こんなに重い荷物はうんざりだわ。早く降ろしてしまいたい」

「しいつ。お姉ちゃん、巨人に聞かれるよ」

そうやってススムとミチコは、とうとう巨人の目の前までやってきたのでした。

町の衣装店に頼んで大急ぎで作ってもらった服をススムは着て、呪文家に頼んで呪文をかけてもらい、ミチコは馬に姿を変えていたのです。

巨人を見上げて大げさに身振りをし、ススムは口を開きました。

「これはこれは巨人様、おなつかしいことで」

巨人はわけがわからず、ポカンとした顔をしています。ススムは続けました。

「私をご記憶ではございませんか？ 今より数百年の昔、花の都の長安にて、ぞうりのヒモを一本お買い上げいただいたことがございます」

とうとうミチコは我慢できなくなってしまいました。弟の言葉づかいがとてつもなくおもしろく感じられ、笑い声を上げてしまったのです。

だけどそれも、巨人の耳にはブルブルという馬の鳴き声にしか聞こえませんでした。

ススムは言葉を続けました。

「しかし巨人様、今はまた難儀をしておられるご様子。岩山を破って脱出するなど、さぞかし大変なことでございましょう。」

お助けできればよろしいが、なにぶん私はこのように小さな身。何もお役に立てず、申しわけございません。

ん？ おやそうだ…」

ここでススムは、ポンと両手を打ち鳴らしたではありませんか。そして馬を振り返り、準備を始めたのです。

「巨人様、岩の中に長くいたのなら、のどがかわいておいででしょう。ちょうど良い物を持っておりますので、ぜひ一杯差し上げましょう」

馬の背中の中をほどこき、ススムは荷物の中から大きなカップを取り出したのです。水なら何リットルも入りそうな本当に大きなものです。

次にこれも馬の背にあつたタルの栓を抜き、ススムが中身をカップに注ぎ始めたときの巨人の顔といったら、今にも舌なめずりを始めそうだったではありませんか。

岩の中に閉じ込められている間、水さえ口にしていなかったのですから、のどはカラカラだったに違いありません。お酒の匂いがどれほど巨人の鼻をくすぐったことか。

そうやってススムは巨人にお酒を飲ませたのです。巨人はお代わりを求めましたが、もちろんススムはこぼさず、カップは何回も往復し、そのたびにタルは軽くなってゆきました。

ゼ口禅師の指示で、とびきり強いお酒がタルにつめてあったのです。次第に酔いがまわり、巨人の顔は赤くなってゆきました。

ゼ口禅師がついに姿を見せたのは、巨人の目がトロンとし始めた

時のことでした。いつの間によじ登ったのか、巨人の乱れた髪の中にいるのです。だけど巨人は、もうそんなことにも気づかないほど酔っていました。

ススムとミチコはハラハラしながら見ていたのですが、のりをしつかりとつけ、あのおふだを巨人の額に貼り付けるのは、難しい仕事ではありませんでした。額に冷たい感触を感じるまで、巨人は気づく気配さえ見せなかったのです。

とりあえずの成功にススムとミチコはほっとすることができたのですが、それも長くは続きませんでした。

突然、バンという爆発に似た大きな音が周囲に響いたのです。二人とも思わず飛び上がってしまいました。

おふだが元に戻り、魔力が再び働き始めるには、それほど時間はかかりませんでした。

巨人が押し崩した岩はカケラとなって、まわりに散らばっていました。魔力を受け、あるカケラは地面を転がり、あるカケラは空を飛ぶようにして、巨人の元へ殺到することになったのです。

まるでエサに飛びかかるオオカミの群れのような眺めでしたが、岩同士がぶつかるゴチンゴチンという音と共にすさまじい砂ぼこりが立ち、ススムたちは何も見ることができなくなってしまいました。

しかしその砂ぼこりも、やがて消えたのです。

目の前の光景に、ススムとミチコは思わず顔を見合わせるようになりました。

巨人の姿などもうなく、ただとがった岩山の頂上があるばかりだったのです。何百トンもある岩の下に、巨人は再び閉じ込められてしまったのでした。

「ただススムとミチコには、まだ気がかりなことがありました。」

「お姉ちゃん、禅師はどうしただろう？」

「さあ？ 砂ぼこりのせいで私も見失ってしまったわ。」

「まさか巨人と一緒に岩の中に閉じ込められたんじゃないだろうね。」

「それはないと思うわ。すばしっこい人だもの。ほらススム、あそこを見なさい。禅師はあそこにいるわ。」

長い鼻を使ってミチコが指す方向へ、ススムは目をこらしたので、確かにゼロ禅師はそこにいました。砂ぼこりにまみれて体中が真っ白になっていますが、二人のほうへ歩いてくるのです。

「思わずススムは声を上げました。」

「禅師、大丈夫だったの？ ケガはしてない？」

「ありがとうススム君、おふだを貼ったあと、魔力が再び動き始めるまでのわずかな時間を使って、なんとか岩を駆け下りてきたのさ。われながらまるで軽業師のようだったよ。」

「それはよかった。」

ススムは本当にうれしそうですが、ミチコはまだ不満そうな顔をしています。だけどそれも無理はないかもしれません。

「ねえ二人とも、早く私を元の姿に戻してよ。馬の役なんて、もううんざりだわ」

呪文を用いて、すぐにミチコを元の姿に戻すことができました。疲れてはいたけれど満足を感じながら、3人はその場をあとにしたのです。

門を出たところで振り返っても、見えているのは岩山ではなく、もちろん古びたガスタンクの姿だけだったのは、いうまでもありません。

猫坂の人々は誰一人として、巨人の復活という危機がおとずれかけたことも、その危機が事前に解決されたことだって、夢にも知らなかったに違いありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3400e/>

作品集 2

2011年9月30日13時06分発行